

沢ノ黒遺跡

－ふるさと農道緊急整備事業に伴う遺跡発掘調査報告－

2007年3月

青森県教育委員会

序

風間浦村に所在する沢ノ黒遺跡は、ふるさと農道緊急整備事業に先立って、平成17年度に当センターが発掘調査を行いました。

その結果、縄文時代前期末葉～中期初頭と後期初頭の集落が確認されました。遺跡は、津軽海峡を望む段丘上に立地しており、段丘の南北縁辺部には前期末葉～中期初頭を主体とした捨て場が形成されていました。北側の捨て場からは、個体土器や剥片石器を主体とする膨大な遺物が出土しており、わずかですが土偶や石製品なども出土しています。この捨て場の前段階・形成過程においては、墓と思われる土坑や埋設土器が確認されており、廃棄・祭祀・葬送に相関性があることを示唆しています。また北海道を産出地とする黒曜石、北海道の影響を色濃く反映する土器などが出土しており、海峡を越えた交流を物語っています。

この調査成果が、今後の遺跡の調査や、風間浦村をはじめとする周辺地域の歴史研究や文化財保護に活用して頂ければ幸いです。

最後になりましたが、調査の実施から報告書の刊行にあたり、御指導・御協力を賜りました関係各位に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成19年3月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 白鳥 隆昭

例言・凡例

1. 本報告書は、ふるさと農道緊急整備事業に伴い、平成17年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した風間浦村沢ノ黒遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書の編集・執筆は野村信生・田中珠美・斎藤慶吏が分担し、執筆者名は各節・項末に記した。また依頼原稿については、執筆者名を文頭に記した。
3. 遺物の鑑定・原稿執筆・分析などについては、以下の方々と機関に依頼した。

石質鑑定は元青森県立八戸北高等学校教諭の七崎 修氏・青森県立浪岡高等学校教諭の山口 義伸氏、地形と地質は青森県立郷土館の島口 天氏、放射性炭素年代測定は株式会社加速器分析研究所、テフラ分析は株式会社大和地質研究所、火山灰分析は財団法人北海道埋蔵文化財センターの花岡 正光氏、黒曜石の原材产地分析は有限会社遺物材料研究所、炭化材の樹種同定・炭化種実の同定は株式会社パレオ・ラボ、焼骨片の分析は聖マリアンナ医科大学医学部解剖学教室の澤田 純明氏、リン・腐植・カルシウム分析はパリノ・サーヴェイ株式会社

4. 写真撮影・遺物実測の一部については、以下の機関に依頼した。

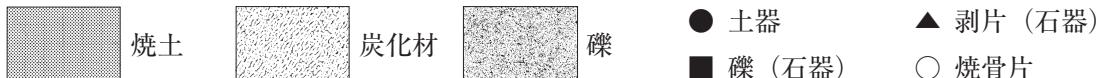
遺跡の空中写真撮影は株式会社シン技術コンサル、遺物写真撮影はシルバーフォトとスタジオ・エイト、土器実測はアイシン精機株式会社、石器実測はアイシン精機株式会社・株式会社アルカ・国際航業株式会社

5. 図1として掲載した地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「大間」・「佐井」・「大畠」を複製し、縮尺を変更して使用した。
6. 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付けたが、原則として遺構は1/20~60、遺物は1/2~4の縮尺で掲載した。遺物写真の縮尺は不同であるが、一部の遺物のみ縮尺を提示した。
7. 遺構・遺物の本文・図中の表現は、原則として以下の様式・基準によった。

- (1) 調査において、住居跡はS I・土坑はS K・埋設土器はS R・配石はS X・焼土はS N・ピット（柱穴を含む）はP・捨て場はS Tと略号を用いたが、報告書においては、住居跡・土坑・埋設土器・配石・焼土・ピット（柱穴）・捨て場と記載した。
- (2) 遺構内外の堆積土の注記には、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1994）を用いた。
- (3) 遺構図版のピットはPと記載し、横の数字は深さを示したもので、単位はcmである。
- (4) 土器の断面実測における（貼付）隆帯・沈線・刺突・穿孔などの表現については、実測部分とした断面を基本に重要と考えられる特徴を加味したのみであり、全ての情報を含む図ではない。また、隆帯にみられる貼り付けの表現は、明瞭な貼付隆帯のみとした。
- (5) 遺物には観察表を掲載したが、計測値における（ ）表記は現存値である。

8. 引用・参考文献については、各節・項末に記載した。

9. 図中で用いたスクリントーン・記号は、以下のとおりである。



10. 発掘調査における出土遺物・実測図・写真などは、現在当センターで保管している。
11. 発掘調査および本報告書作成にあたって、下記の諸氏から御協力・御助言を得た（敬称略）。
石井 淳・川口 潤・菊地英徳・木元 豊・工藤敏久・小林謙一・駒田 透・齋藤 正・佐藤智生・鈴木琢也・瀬川 滋・袖岡淳子・高木 晃・田中寿明・福田友之・福田裕二・村本周三

目 次

序

例言・凡例

目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	1
第3節 調査の方法	2
第4節 調査の経過	3
第2章 環境	4
第1節 地形と地質	4
第3章 遺構と遺構内出土遺物	8
第1節 住居跡	8
第2節 土坑	10
第3節 埋設土器	19
第4節 配石	21
第5節 焼土	22
第6節 第1号捨て場	24
第7節 第2号捨て場	175
第4章 遺構外出土遺物	211
第1節 遺構外出土遺物1	211
第2節 遺構外出土遺物2	214
遺物観察表	223
第5章 理化学的分析	239
第1節 放射性炭素年代測定(AMS測定)	239
第2節 テフラ分析	243
第3節 火山灰について	248
第4節 黒曜石製石器、剥片の原材料产地分析	251
第5節 炭化材の樹種同定1	262
第6節 炭化材の樹種同定2	264
第7節 炭化種実同定	268
第8節 焼骨片について	271
第9節 動物遺存体(魚類・貝類)について	274
第10節 リン・腐植・カルシウム分析	278
第6章 考察とまとめ	282
第1節 北側台地縁辺部の利用 - 第1号捨て場を主体に -	282
第2節 第2号捨て場について	285
第3節 打製石斧について	287
第4節 まとめ	290
写真図版	293
報告書抄録	336
奥付	



図1　遺跡位置図

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

この遺跡は、ふるさと農道緊急整備事業の実施に先立ち、青森県教育庁文化財保護課が平成16年10月5日～10月15日にトレンチによる試掘調査を行ったところ、遺構・遺物が確認され、発掘調査が必要であると判断された。青森県農林水産部農村整備課・風間浦村地域振興課・青森県教育庁文化財保護課・青森県埋蔵文化財調査センターの4者により協議され、当センターに調査の実施が依頼された。

第2節 調査要項

1 調査目的

ふるさと農道緊急整備事業の実施に先立ち、当該地区に所在する沢ノ黒遺跡の埋蔵文化財発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成17年4月19日～同年9月30日まで

3 遺跡名及び所在地 沢ノ黒遺跡（青森県遺跡番号55019）
下北郡風間浦村大字蛇浦字沢ノ黒

4 調査面積 4,600m²

5 調査委託者 青森県農林水産部農村整備課

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

調査指導員 市川 金丸 元青森県考古学会会長（考古学）

調査員 島口 天 青森県立郷土館学芸主査（地質学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 白鳥 隆昭

次長 三浦 圭介

総務G.L 櫻庭 孝雄

文化財保護主事	野村 信生（現 文化財保護主査）
〃	齋藤 正（現 文化財保護課）
調査補助員	佐藤 勝之
〃	柳沢 あゆみ
〃	春里 めぐみ
〃	福井 真

第3節 調査の方法

調査はグリッド法を基本とし、国土交通省公示の平面直角座標X = 166330とY = 11490の交点を本遺跡調査における原点A A - 0と定め、4 m四方を1グリッドとして調査を実施した。南方向に4 mごとに算用数字1・2・3・・・と設定し、東方向にアルファベットを組み合わせA B・A C・A D・・・B A・B B・B C・・・と設定し、グリッド名の呼称は全てX軸とY軸の交点を算用数字とアルファベットの組み合わせにより、「A P - 25」のように呼称した。

調査区の基本層序は、ローマ数字を用い表土をI層とし、現地表から下位に順次Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・・・と表記した。またⅡ層においては、部分的ではあるが初期堆積土にアルファベットの小文字を用いⅡa層と表記した。

遺構の調査は、遺構の形態・地形・検出状況などを考慮し、セクションベルトを設定して行った。堆積土には算用数字を用い、基本的に最終堆積土から1・2・3・・・と表記した。土層観察は『新版標準土色帖』を用い、土色とマンセル記号を併記し、混入物などの特徴を記録した。実測は簡易遺り方測量と、光波トランシットによる三次元座標測量データを用いたアイシン精機株式会社の遺構実測支援システム「遺構くん」により図化した。縮尺は1/20を基本とし、遺構・遺物の規模により1/10など隨時変更した。写真撮影は、土層断面・遺物出土状況・完掘を基本とし、調査の状況により臨機応変に行った。出土遺物の取り上げについては、層単位を基本とするが、重要性がある場合は、「遺構くん」により出土地点を記録した。

遺構外から出土した遺物は、グリッドごとに層単位で取り上げたが、遺物や出土状況に重要性がある場合は、遺構の調査同様に写真撮影や図面を作成し、「遺構くん」により出土地点を記録した。

写真撮影は、35mmモノクロネガ（ISO400）とカラーリバーサル（ISO400）の2種類のフィルムを使用し、またデジタルカメラでの撮影も行った。

遺構の呼称については、調査時に青森県埋蔵文化財調査センターで使用する遺構性格を表すアルファベットの組み合わせの略号を基本とし、検出順に1・2・3・・・と呼称した。本報告書においては、S Iを住居跡、S Kを土坑、S Rを埋設土器、S Xを配石、S Nを焼土、Pはピット（柱穴を含む）、S Tを捨て場とした。

第4節 調査の経過

平成17年4月19日に当センター（青森市）から風間浦村沢ノ黒遺跡に機材を搬入し、発掘調査を開始した。

調査当初、調査区内には大量の枝木や伐採木の一部が散乱した状態であり、直ちに調査を行うことは困難な状況であった。そのため枝木や伐採木の除去作業を優先し、調査環境を整える作業に従事した。また調査区内には、戦後の植林により杉が密に生育しており、遺物包含層の掘削は容易ではなく、根の除去作業と並行して行った。環境整備や根の伐採による廃材・調査に伴う排土は、調査区北側斜面と調査区南側に借り置きし、後日搬出することとした。しかし、調査区外南側に通じる搬出路は、農道工事のため通行禁止の状況にあり、工事終了後の7月初旬に廃材と排土の搬出を行うこととなった。

環境整備に伴い5月初旬頃までは、調査区の東西両側に平行する4m幅のトレーナーを設定し、遺構・遺物の分布状況を把握することに努めた。その結果、北側台地縁辺部に個体土器・剥片石器を主体とした遺物が集中しており、捨て場（第1号捨て場）を形成することを確認した。また南側においても、破片土器を主体とした遺物が集中しており、北側と比較し小規模ではあるが、捨て場（第2号捨て場）を形成していることを確認した。調査区北側には大規模な捨て場が形成されるため、調査区中央部付近から北側の調査を先行し、調査区南側を排土置き場とすることにした。

廃材・排土の搬出を行った7月中旬頃からは、調査区南側の調査を本格的に開始した。南側台地縁辺部付近の平坦面からは5軒の住居跡を検出し、捨て場は小規模ながら斜面に及ぶ状況であった。

7月19日には蛇浦小学校、7月20日には易国間・下風呂小学校による遺跡見学が行われた。

8月初旬頃には、第1号捨て場の遺物取り上げ作業が終了し、下位層となるⅢ層から土坑などを検出した。

9月30日には、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、沢ノ黒遺跡の調査を全て終了した。

（野村 信生）



易国間小学校による遺跡見学

第2章 環 境

第1節 地形と地質

青森県立郷土館 島 口 天

1. 遺跡周辺の地形

沢ノ黒遺跡は、下北半島最北端の大間崎から南東へ約7km、津軽海峡に面した標高30m前後の海成段丘面上に位置する。

この地域には、北から南に山地が連なることで分水界が形成されており、この分水界から西方や東方へ向かって短小な河谷が延びている。山地を取り巻くように海成段丘が発達し、東側の海成段丘面は易国間から大間に向かって見られ、海に向かって緩く傾斜している。蛇浦では、沢ノ黒沢や根戸内沢といった小河川が段丘を侵食して小谷を形成し、谷の壁面は標高差20m前後の急な傾斜地となっている。本遺跡は、両小河川に挟まれた段丘面の北西端に位置する。

本地域における海成段丘の研究には、宮内（1988）や水野・堀田（1999）、小池・町田編（2001）がある。これらによると、本遺跡の位置する海成段丘面は酸素同位体ステージ5eに形成され、本地域で最もよく発達している段丘面である。この段丘面の構成層は厚さ3～5mの砂礫よりなり、それを覆う斜面堆積物中あるいはテフラ群の最下部に厚さ12～20cmの黄色火山灰層として洞爺火山灰が認められる。蛇浦付近のこの面の構成層は、径80cm大の巨礫をも含む淘汰の悪い亜円礫の堆積物で、厚さは2～4mである。図1に段丘面分布図を示す。

2. 遺跡周辺の地質

鎌田・根本（1999）によると本地域の基盤をなすのは中新統の火碎岩であり、海岸付近ではこれが浸食されて海成段丘が形成され、その構成層に覆われている。中新統は中部の大間層とそれに貫入している玄武岩、上部の易国間安山岩類からなる。大間層は易国間安山岩類に整合に覆われるが、一部は易国間安山岩類の下部と指交する。本地域には、平野は殆ど認められないが、大間や佐井付近の小規模な平野や主要な河川沿いには沖積層が分布する。

大間層は、主に厚さ数～30cmで成層した黒～暗灰色の珪質シルト岩から構成される。上部に淡緑灰色の粗粒凝灰岩、細粒凝灰岩、軽石凝灰岩等が頻繁に挟まれる。

玄武岩は、主に緑灰～黒色を呈するカンラン石普通輝石玄武岩よりなる。大間層上部堆積時に貫入したと考えられる。

易国間安山岩類は安山岩質凝灰角礫岩を主とし、安山岩溶岩を含み、デイサイト溶岩やデイサイト質凝灰角礫岩、珪藻質シルト岩及び泥岩を挟む。安山岩の火山岩塊には、輝石及び斜長石の斑晶が認められる。デイサイトの火山岩塊には斜長石、石英、角閃石、普通輝石、紫蘇輝石、黒雲母の斑晶が認められる。デイサイト溶岩は主に緑灰色、暗灰色、灰白色等を呈し、柱状節理の発達が著しく材木石と呼ばれている。

3. 遺跡内の基本層序

本遺跡は沢ノ黒沢右岸の海成段丘面上に位置し、遺跡の範囲の標高は28～35mである。沢ノ黒沢とその南東側の小谷に挟まれた、北東－南西方向に長い舌状地形のやや起伏のある尾根部に遺構が分布する。調査開始時には植林された杉林であったが、それ以前は畑や雑木林だったようである。

本遺跡内で見られる土層を色相や締り具合、含有物等によってⅠ～Ⅳ層に細分し、それを基本層序として詳細について述べる。ただし、段丘面上ではⅠ・Ⅱ・Ⅲ層が見られたのに対し、段丘崖ではⅠ・Ⅳ層が見られたが、層位の順番を検討し上位から順に番号を付けた。図2に本遺跡における地層の模式断面図を示す。

Ⅰ層：層厚5cm以下。耕作土。締りがない。暗褐色で炭化物を含む。

Ⅱ層：層厚30～40cm。暗褐色土。やや締りがあり、下部にはⅢ層が小塊となって混じり、細礫や焼土粒、土器片などがみられる。Ⅲ層から漸移する。

Ⅲ層：層厚80cm以上。風成火山灰質粘土。黄褐色で締りがあり、粘性が高い。上から60cmほどの層準に灰白色粘土質火山灰が不連続なレンズ状に挟まるが、周囲との境界は不鮮明である。

灰白色粘土質火山灰は、株式会社大和地質研究所に分析を依頼した結果、斜長石、角閃石、斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物、火山ガラスを含み、火山ガラスはバブルウォール型、不規則型、軽石型が混在するという結果を得た。また、ガラスの屈折率は1.501～1.508のものが主で幅広い分布を示し、今のところ対比できるテフラは存在しない。

Ⅳ層：層厚不明。軽石を含む風成火山灰。段丘面上では見られず、縁から下の方で見られる。長径6cmほどで亜角礫状のやや粘土化した淡緑灰色軽石を多く含み、基質となる火山灰には黒褐色粒が見られる。Ⅰ層に覆われ、下部ほど軽石の含有率が高い。株式会社大和地質研究所に分析を依頼した結果、大部分が粘土鉱物からなり、少量の斜長石と風化が進んだ鉄鉱物および斜方輝石・単斜輝石を含む。火山ガラスは著しい風化・変質により屈折率の測定は困難で、比較的近くに給源をもつテフラであると思われるが対比できない。

遺構の埋積層には淡灰色の白頭山火山灰が塊状に挟まれ、遺構がⅡ層中とⅢ層から構築されているため、それはⅠ層とⅡ層の間の層準か、Ⅱ層上部に相当することが考えられる。

4. 古環境

遺跡の北側を流れて津軽海峡に流れ込む沢ノ黒沢の河口には、現在、段差があってサケなどの魚が遡上するのは難しい。そこで、遺跡の主体となる縄文時代前期後葉～中期前葉にはどのような環境だったのか考察した。

小池・町田編（2001）によると、本地域は「短波長で隆起速度0.5～1m/1000年の曲動地域」に該当する。このことから、単純に計算して縄文海進期の約6000年前は、現在より3～6m土地が低かったことになる。仮に当時の海面が現在と同じ高さであれば、現在の標高3～6mまでが海底下であることになるが、少なくとも現在、宅地・畑地・道路に利用されている平坦化された浜堤部は海面下であったと考えられる。よって、当時の沢ノ黒沢の河口に段差はなく、サケの遡上が可能だったと思われる。

引用文献

鎌田耕太郎・根本直樹（1999）5万分の1表層地質図「大間・佐井」。土地分類基本調査「大間・佐井」、青森県、p.22-38。

小池一之・町田洋編（2001）「日本の海成段丘アトラス」東京大学出版会、105p. + CD-ROM 3枚。

宮内崇裕（1988）東北日本北部における後期更新世海成面の対比と編年。地理学評論、61、p.404-422。

水野裕・堀田報誠（1999）5万分の1地形分類図「大間・佐井」。土地分類基本調査「大間・佐井」、青森県、p.17-21。

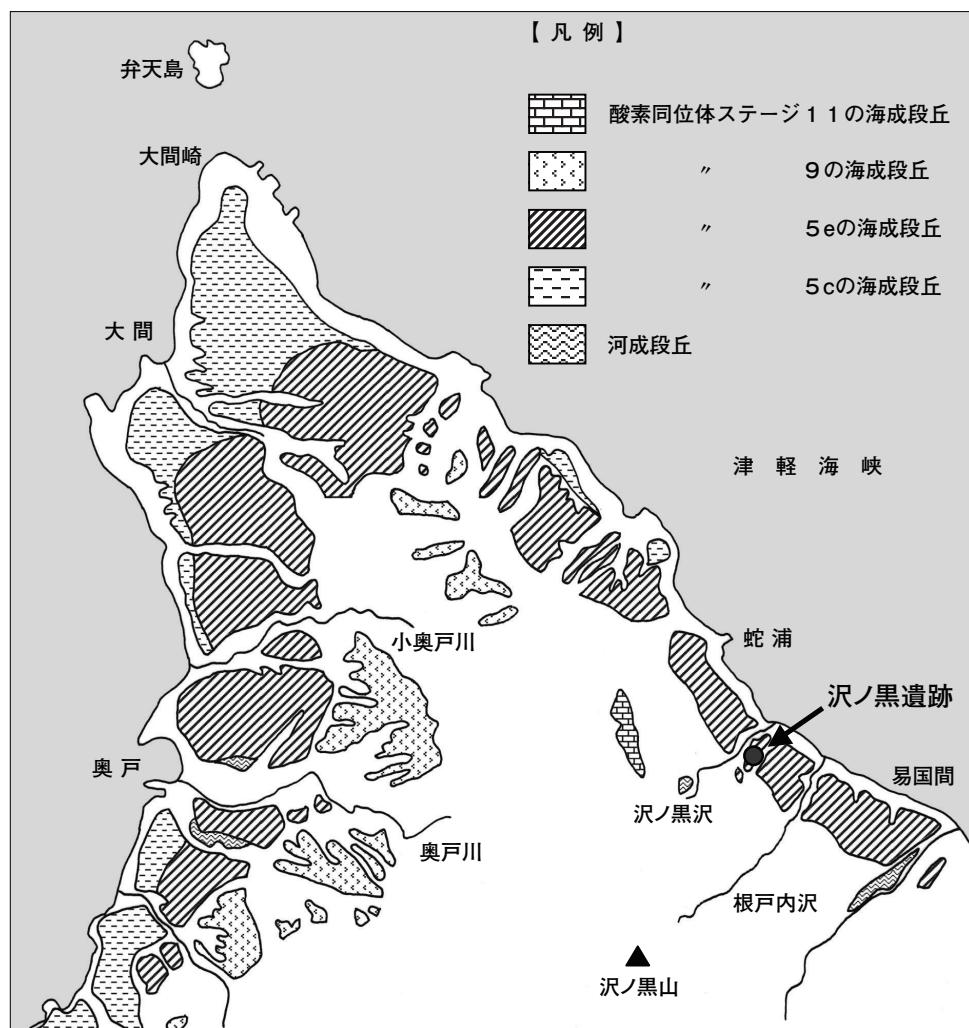


図1 沢ノ黒遺跡周辺の段丘面分布図〔小池・町田編（2001）を元に作成〕

海 成 段 丘 面 (酸素同位体ステージ5 e)

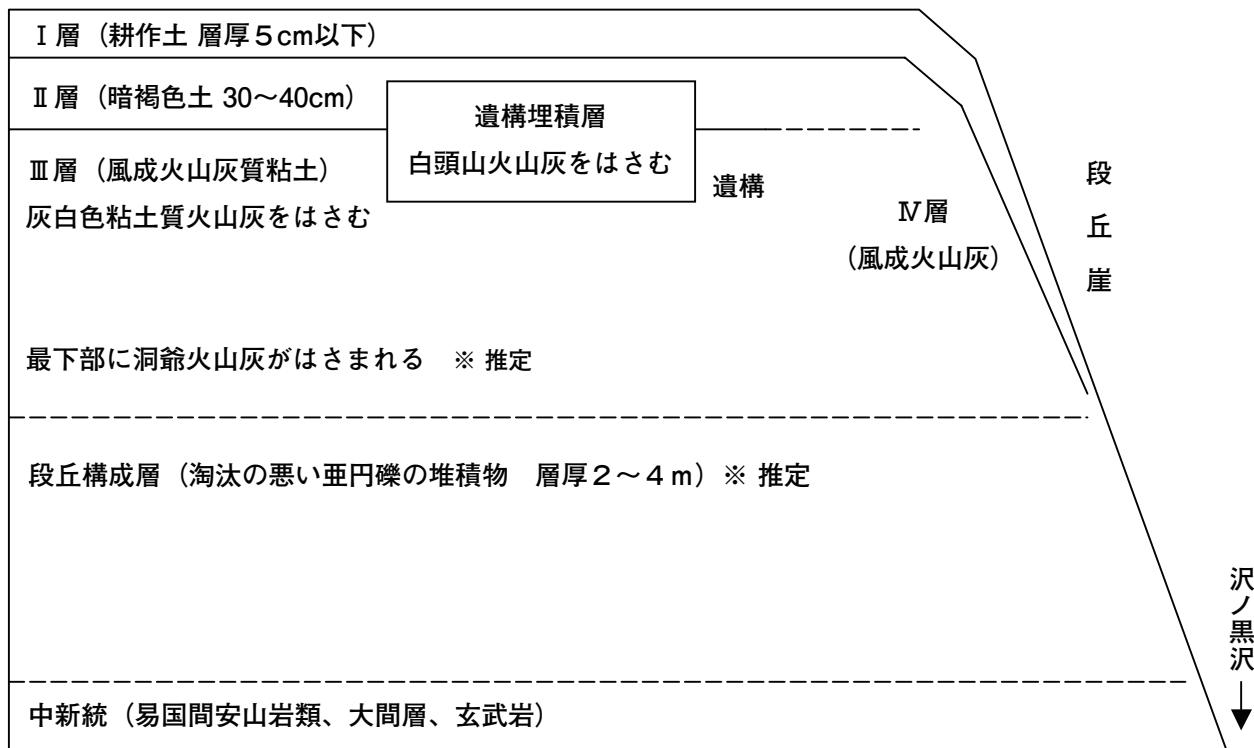
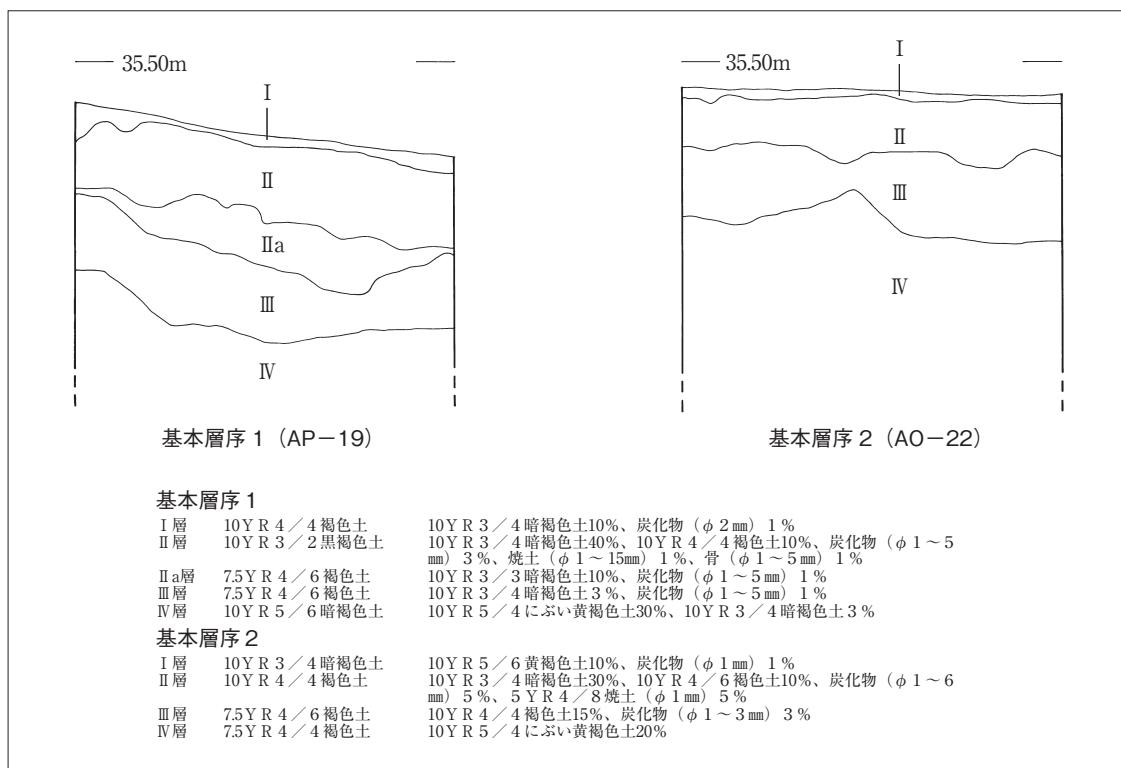


図2 黒ノ沢遺跡における地層の模式断面図



第1号捨て場土層柱状図 (1:40)

第3章 遺構と遺構内出土遺物

遺跡は津軽海峡を望む段丘上に位置しており、北側に発達する沢地には小河川が流れ、海峡へと注いでいる。遺跡には、縄文時代前期末葉～中期初頭・後期初頭の集落が営まれており、調査区からは住居跡5軒・土坑46基・埋設土器7基・配石7基・焼土9基・捨て場2ヵ所が確認された。

第1節 住居跡

調査区からは、5軒の住居跡を検出した。住居跡は、南側台地縁辺部に北東～南西方向に列を成して構築されており、北東側の1軒は縄文時代前期末葉・3軒は縄文時代中期初頭、南西側の1軒は縄文時代後期初頭に位置付けられる。前期末葉～中期初頭の住居跡は、調査区外北東の台地縁辺部沿いに展開すると考えられるが、詳細は不明である。また、後期初頭の住居跡も調査区外西の台地・台地縁辺部沿いに展開すると考えられるが、詳細は不明である。

第1号住居跡（図3～8）

【位置・確認】調査区南側の台地縁辺部であるAW-29に位置し、Ⅲ層から暗褐色土の広がりとして確認した。
【重複】調査区外と接する北壁を、第29号土坑と重複しており、本遺構が古い。【構造】調査区外に及ぶため、全容は不明である。平面形状は円形に近い隅丸五角形と推測され、Ⅲ層をほぼ平坦にして床面を構築しているが、深さは27cm程と浅い構造である。柱穴は中央部に1基、南壁から西壁際に7基を検出した。特に南壁際は、32～39cmと深い構造である。北側の床面下からは、大小の礫が散在した状況で出土し、円板状と柱状の礫を組み合わせた配石と考えられる状況もみられたが、下位からは土坑などを確認することはできなかった。これらの礫群は住居構築時の掘方から出土しており、床面形成段階に廃棄、あるいは配置した可能性も考えられるが、前段階の配石遺構である可能性も捨てきれない。なお検出した床面から、炉を確認することはできなかった。【堆積土】褐色土を主体とした自然堆積と考えられる。【出土遺物】掘方と堆積土から円筒上層a式に相当する土器が出土しており、前者には個体土器がみられる。石器は、石鏃6点・石槍（未製品を含む）5点・石匙1点・削器2点・搔器1点・石錐1点・打製石斧（石籠）1点・石核1点・敲磨器2点・擦切具（石製品）1点・磨製石斧（石製品）1点・石棒1点である。39は全体に被熱しており、一面を磨り面としている。形状的特徴から石棒と捉えたが、石皿的用途も考慮すべきであろう。掘方からは、個体土器を主体に遺物が出土しており、一括性が強いといえるであろう。【小結】出土遺物から、構築・廃絶時期は中期初頭（円筒上層a式期）に位置付けられよう。

第2号住居跡（図9～12）

【位置・確認】調査区南側の台地縁辺部であるAV-30に位置し、Ⅲ層から褐色土の広がりとして確認した。【構造】平面形状は、北東～南西方向を主軸とする楕円形であり、Ⅲ層をほぼ平坦にして床面を構築している。規模は、長軸540×短軸420×深さ60cm程・床面積11.6m²であり、近接する第1・3号住居跡と比較して深い構造である。柱穴は炉を中心として、方形に4基を検出した。これらは主柱穴と考えられるが、南東側に配置するP2・3は10cmをわずかに越えるのみで、P1・4と比較してやや浅い構造となる。また、P4のみ東に傾斜する。炉は地床炉であり、中心部から1基を検出した。炉の焼土からは炭化材が確認され、分析の結果、針葉樹・クリ・ミズキ属と判明した（詳細は、第5章・第6節参照）。無論、これらの炭化材は、薪材として使用されたと考えられるであろう。【堆積土】明褐色～暗褐色土を主体とした自然堆積と考えられる。1層には白頭山火山灰が確認されたが、

根などの影響により、後世に混入したと考えられる。[出土遺物] 堆積土から後期初頭に位置付けられる土器片が出土しており、床面・床面直上からは円筒上層a式に相当する破片・略完形土器が出土している。石器は、石鏃2点・石槍1点・削器1点・石皿(台石)1点である。[小結] 出土遺物から、中期初頭(円筒上層a式期)に位置付けられよう。北側の堆積土からは、後期初頭に位置付けられる土器片がまとめて出土しており、埋没過程において窪地を捨て場として利用した可能性が考えられるであろう。

第3号住居跡(図13～18)

[位置・確認] 調査区南側の台地縁辺部であるAW-30に位置し、Ⅲ層から褐色～暗褐色土の広がりとして確認した。[構造] 平面形状は、北東～南西方向を主軸とし北側が張り出す楕円形であり、Ⅲ層をほぼ平坦にして床面を構築している。規模は、長軸552×短軸360×深さ15cm程・床面積14.5m²である。柱穴は南側の東西壁際から7基が列を成して配置しており、北東壁際の中央から1基を検出した。なお、炉などの施設を確認することはできなかった。[堆積土] 褐色～暗褐色土を主体とした自然堆積と考えられる。3層から白頭山火山灰を確認したが、根などの影響により、後世に混入したと考えられる。[出土遺物] 床面から円筒下層d式に相当する個体土器が出土しているが、細片化が著しく復元は不可能であった。石器は、削器1点・搔器1点・両面加工石器1点・石核4点・半円状扁平打製石器1点・敲磨器2点である。これらの石器は、堆積土がわずかであることから、床面及び床面付近からの出土と捉えてよいであろう。[小結] 出土遺物から、前期末葉(円筒下層d式期)に位置付けられよう。本住居跡の北東側は、柱穴の配置がみられない空白地を形成しており、遺物の集中地点と一致する。柱穴の検出状況については、同一土壤の堆積に起因する未検出とも思われるが、柱穴未確認地点と遺物の出土地点の重なりは、この空間が作業場として間取りされたと考えることもできよう。出土遺物には石核が多く、また敲磨器もみられることから、石器製作に関連した作業場であった可能性が強いと思われる。

第4号住居跡(図19～20)

[位置・確認] 調査区南側の台地縁辺部であるAS-41に位置する。Ⅲ層から床面のみを確認したが、本来はⅡ層中から構築されたと考えられる。[構造] 床面のみを確認したため、詳細は不明である。平面形状は、柱穴の配置状況から、円形を呈すると推測される。柱穴は、炉を中心に14基検出した。P11・12、P13・14はそれぞれに接しており、2基が一対として用いられたか、拡張や建て替えなどによる痕跡と考えられる。また、炉に近接して配置することから、主柱穴と考えられるであろう。炉は1基確認しており、扁平な角礫を方形に配置した石囲炉である。南東側の開口は、本来の構造と思われるが、抜き取りなども考慮しなければならないであろう。炉の東側には、完形の石皿と欠損する石皿を組み合わせた配石があり、北側からは鉢の底部が倒立した状態で出土した。配石の下位からは、土坑が確認されたため、墓であることを考慮し堆積土の土壤分析を行ったが、墓とする根拠は得られなかった(詳細は、第5章・第10節参照)。[出土遺物] 配石1として、土器底部1点・石皿2点が出土した。これらの遺物は、配石1の確認面であることから、床面と捉えてよいであろう。[小結] 配石1にみられる土器、円形に配置する柱穴や石囲炉などの住居跡にみられる構造的特徴から、縄文時代後期初頭に位置付けられよう。

第5号住居跡(図21～27)

[位置・確認] 調査区南側の台地縁辺部であるAV-34に位置する。Ⅲ層から黄褐色～暗褐色土の広がりとして確認した。[構造] 東側は林道により削平されており、全容は不明である。平面形状は、北西側が突出する不正な円形と推測され、Ⅲ層をほぼ平坦として床面を構築している。北西側の突出部は、住居中心部方向に緩やかな斜面となっており、部分的には1段の階段状とも捉えることができる。検出面から床面最深部の深さは87cm程であり、これはやや傾斜した地形に構築されたことに起因するのであろう。柱穴は2基検出されたが、残存する床

面から炉を確認することはできなかった。[堆積土] 黄褐色～暗褐色土を主体とした自然堆積であり、土器・石器などの遺物が大量に出土した。[出土遺物] 床面及び埋没過程において、円筒上層a式に相当する土器片が大量に出土した。石器も削器・搔器を主体に同様な出土状況である。40は堆積土から出土した柱状節理の石英安山岩であるが、被熱し煤が付着する。[小結] 出土遺物から、中期初頭（円筒上層a式期）に位置付けられよう。しかし土器にみられる特徴は、下層d2式的とも捉えることができ、上層a式初段階と思われる。また堆積土からは、土器・石器などの遺物が大量に出土しており、住居廃絶後に捨て場として利用されたと考えられる。

(野村 信生)

第2節 土坑

土坑は調査区北側を主体に46基検出した。これらの土坑には、構築土壤と同一土壤が堆積した状況や風倒木・植林などの影響により明確な形状を把握することが困難な土坑も多く、土坑とする根拠に明瞭さを欠くものも含まれる。

第1号土坑（図28）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AP-26に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、北西～南東方向を主軸とする橢円形であり、底面から壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸72×短軸48×深さ12cm程度である。[堆積土] 褐色～暗褐色土を主体とした自然堆積である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第2号土坑（図28）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AP-27に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、東西方向を主軸とする不整形であり、若干起伏する底面から壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸108×短軸84×最深部24cm程度である。[堆積土] 褐色～暗褐色土を主体とした自然堆積である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第3号土坑（図28）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AU-26に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、北東～南西方向を主軸とする橢円形であり、平坦な底面から壁はやや外傾する。規模は、長軸108×短軸60×深さ12cm程度である。[堆積土] 黄褐色粘質土～褐色土を主体とした自然堆積である。[出土遺物] 堆積土から、円筒下層d式に相当する土器片が1点出土した。[小結] 出土した遺物は1点のみであり、詳細は不明であるが、前期末葉（円筒下層d式期）に位置付けられる可能性が考えられよう。

第4号土坑（図28）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AT-25に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、北西～南東方向を主軸とする方形であり、平坦な底面から壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸96×短軸72×深さ12cmほどである。[堆積土] 黄褐色土～褐色粘土を主体とした自然堆積である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第5号土坑（図28）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AS-25に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、北東～南西方向を主軸とする橢円形であり、平坦な底面から壁はやや外傾する。規模は、長軸96×短軸66×深さ18cm

程である。[堆積土] 褐色土を主体とした自然堆積である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第6号土坑（図28・40）

[位置・確認] 調査区南側の台地縁辺部、A R - 42に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、北東－南西方向を主軸とする楕円形であり、平坦な底面から壁はやや外傾する。規模は、長軸234×短軸90×深さ18cm程である。[堆積土] 黄褐色土を主体とした自然堆積である。[出土遺物] 堆積土から、側縁部の一辺を使用した敲磨器が1点出土した。使用面には、若干の敲き痕がみられるが、磨りを主体としている。[小結] 詳細は不明であるが、出土遺物から前期末葉～中期初頭（円筒下層d～上層a式期）に位置付けられよう。

第7号土坑（図29）

[位置・確認] 調査区南側の台地縁辺部、A R - 42に位置するⅢ層から検出した。[重複] 第4号住居跡と重複しており、本土坑が新しい。[構造] 平面形状は、北西－南東方向を主軸とする不整な楕円形であり、平坦な底面から壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸324×短軸150×深さ30cm程である。[堆積土] 黄褐色～暗褐色土を主体とした自然堆積である。[出土遺物] 堆積土から、円筒下層d式に相当する土器片が2点出土した。[小結] 第4号住居跡の年代観から、後期初頭以降であるが、詳細は不明である。

第8号土坑（図29・40）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、A M - 23に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、北東－南西方向を主軸とする楕円形であり、やや起伏する底面から壁はやや外傾する。[堆積土] 褐色～暗褐色土を主体とした自然堆積である。[出土遺物] 小規模な土坑であるが、堆積土から円筒下層d式に相当する土器片が複数出土した。[小結] 出土遺物から、前期末葉（円筒下層d式期）に位置付けられよう。

第9号土坑（図29）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、A U - 24に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、東西方向を主軸とする楕円形であり、ほぼ平坦な底面から壁はやや外傾する。規模は長軸252×短軸132×深さ24cm程である。[堆積土] 黄褐色～褐色土を主体とした自然堆積である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第10号土坑（図29）

[位置・確認] 調査区中央、北東方向への緩やかな傾斜地であるA T - 24に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、南北方向を主軸とする楕円形であり、平坦な底面から壁はやや外傾する。規模は、長軸120×短軸69×深さ15cm程である。[堆積土] 黄褐色～褐色土を主体とした自然堆積である。[出土遺物] 堆積土から、円筒下層d～上層a式に相当する土器の細片が数点出土した。また2層から炭化材が出土しており、分析の結果、ヒノキ科アスナロ属アスナロであることが判明した（詳細は、第5章・第5節参照）。[小結] 詳細は不明であるが、出土遺物から前期末葉～中期初頭（円筒下層d～上層a式期）に位置付けられる可能性が考えられよう。

第11号土坑（図29・40）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、A N - 22に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、南北方向を主軸とするやや不整な方形であり、平坦な底面から壁はやや外傾する。規模は、長軸135×短軸124×深さ45cm程である。[堆積土] 褐色～にぶい黄褐色土を主体とする。1層には火山灰が混入しており、北海道起源の

可能性を考慮し、分析を行ったが、分析の結果、白頭山火山灰であることが判明した（詳細は第5章・第3節参照）。堆積状況は人為的様相と考えられ、火山灰の混入は土壌の陥没に起因すると考えられる。[出土遺物] 円筒下層d～上層a式に相当する土器片が複数出土した。6は底面直上からの出土である。また、土坑上部の西壁からは欠損した石槍が1点（8）、南壁からは欠損した石皿が1点出土した（9）。[小結] 底面出土土器から本土坑の時期は、前期末葉（円筒下層d式期）に位置付けられよう。また土壌の堆積状況・遺物の出土状況から、土坑墓の可能性を考慮し、土壌分析を行った。その結果、動物遺体が埋納された可能性が高いと推定された（詳細は、第5章・第10節参照）。

第12号土坑（図30・40・41）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AN-23に位置するⅡ層から検出した。[構造] 平面形状は、南北方向を主軸とするやや不整な方形であり、ほぼ平坦な底面から壁はやや外傾する。規模は長軸222×短軸177×深さ45cm程である。[堆積土] 褐色～にぶい暗褐色土を主体とする。1・2層には火山灰が混入しており、分析の結果、白頭山火山灰であることが判明した（詳細は第5章・第3節参照）。堆積状況は人為的様相と考えられ、火山灰の混入は、土壌の陥没に起因すると考えられる。[出土遺物] 堆積土から、円筒下層d式に相当する土器片、剥片が大量に出土した。石器は、大量に剥片が出土したにも関わらず、石錐1点・石核1点のみであった。また北西壁際の1層からは、平坦面にわずかな磨り痕がみられる礫（14）が出土しており、石製品として使用された可能性が考えられる。[小結] 出土遺物から、前期末葉（円筒下層d式期）に位置付けられよう。また土壌の堆積状況・遺物の出土状況は、前述した第11号土坑に類似しており、関連性が考慮されよう。

第13号土坑（図30・42・43）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AQ-26に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、東西方向を主軸とするやや不整な方形であり、起伏する底面から壁は外傾するが、南側は緩やかとなる。Ⅲ層から検出しが、遺物はⅡ層からも出土しており、本来の構築面はⅡ層中と考えられる。規模は、長軸240×短軸201×深さ45cm程である。[堆積土] 黄褐色～暗褐色土を主体とする人為堆積と考えられる。2層からは白頭山火山灰が確認されたが、根などの影響により混入したと考えられる。[出土遺物] 土坑の北東側に、土器片を主体とした遺物が集中して出土している。土器は後期初頭に位置付けられ、同一個体の破片である。石器は、削器1点・石皿（台石）4点が出土した。これらの遺物は、土坑の底面～上部にまで分布しており、東から西側にかけて希薄となる。[小結] 出土遺物から、本土坑の時期は後期初頭に位置付けられよう。遺物の出土状況から、墓の可能性を考慮し土壌分析を行ったが、遺体埋納の可能性は低いとのことであった（詳細は第5章・第10節参照）。この結果から、遺物廃棄土坑の可能性も考慮しなければならないが、同一個体となる土器を破片とし散布する行為は、葬送儀礼への関連性を否定するものではないであろう。

第14号土坑（図31）

[位置・確認] 調査区中央、北東方向への緩やかな傾斜地であるAR-20に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、北西～南東方向を主軸とする楕円形であり、ほぼ平坦な底面から壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸120×短軸93×深さ18cm程である。[堆積土] 褐色土を主体とする自然堆積である。[出土遺物] 堆積土から、円筒下層d式に相当する土器片が数点出土した。[小結] 詳細は不明であるが、出土遺物から前期末葉（円筒下層d式期）に位置付けられる可能性が考えられよう。

第15号土坑（図31）

[位置・確認] 調査区中央の平坦面、AR-23に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、北西～南東

方向を主軸とする楕円形であり、平坦な底面から壁は外やや外傾する。規模は、長軸192×短軸126×深さ18cm程である。[堆積土] 褐色土を主体とする自然堆積である。[出土遺物] 堆積土から、円筒下層d～上層a式に相当する土器片が数点出土した。[小結] 詳細は不明であるが、出土遺物から前期末葉～中期初頭（円筒下層d～上層a式期）に位置付けられる可能性が考えられよう。

第16号土坑（図31・43）

[位置・確認] 調査区南側の台地縁辺部、AT-40に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、南北方向を主軸とする楕円形であり、平坦な底面から壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸129×短軸96×深さ15cm程である。[堆積土] 褐色土を主体とする自然堆積である。[出土遺物] 堆積土から、円筒下層d式に相当する土器片が数点出土した。[小結] 詳細は不明であるが、出土遺物から前期末葉（円筒下層d式期）に位置付けられる可能性が考えられよう。

第17号土坑（図31・43）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AM-22に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、北西～南東方向を主軸とする不整な楕円形であり、やや突出する東端には立石が配置する。断面形状は、ほぼ平坦な底面から外傾する壁であり、東側は緩やかとなる。規模は、長軸126×短軸90×深さ94cm程である。[堆積土] 褐色～暗褐色土を主体としており、人為的様相と思われる。2層には白頭山火山灰が混入するが、根などの影響と考えられる。[出土遺物] 円筒下層d式に相当する個体土器1点と複数の破片が出土しており、石器は石錐1点・石核1点が出土した。なお遺物の出土状況は、堆積土上層を主体とする。[小結] 出土遺物から、前期末葉（円筒下層d式期）の位置付けが考えられよう。本土坑の性格については、立石が配置されることから、墓であった可能性も考慮しなければならないであろう。遺物は土坑上部に集中しており、墓とするならば埋葬過程の最終段階に土器片を主体とする副葬品を納めたと捉えることができよう。また土器片は数個体に及ぶ破片であるが、復元是不可能であった。本土坑の墓としての可能性を示唆したが、骨の出土はみられず、また土壤分析も行ってはおらず、決定的な要因は得られてはいない。

第18号土坑（図31・44）

[位置・確認] 調査区南側の台地縁辺部、AS-37に位置するⅢ層から検出した。[構造] 調査区外に及ぶため、全容は不明である。平面形状は、北西～南東方向を主軸とする楕円形と推測され、平坦な底面から壁はやや外傾するが、南東側は緩やかとなる。[堆積土] 明黄褐色～褐色土を主体とする自然堆積である。[出土遺物] 円筒下層d式に相当する土器片が数点出土しており、石器は石核1点のみである。[小結] 詳細は不明であるが、出土遺物から前期末葉（円筒下層d式期）に位置付けられる可能性が考えられよう。

第19号土坑（図31）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AS-31に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、南北方向を主軸とする円形であり、起伏する底面から壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸141×短軸132×深さ30cm程である。[堆積土] 褐色粘質土～暗褐色土を主体とする自然堆積である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第20号土坑（図32・44）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AQ-28に位置するⅢ層から検出した。[構造] 調査区外に及ぶため、全容は不明である。平面形状は、北東～南西方向を主軸とする楕円形と推測され、やや起伏する底面から壁は緩

やかに外傾する。[堆積土] 褐色～黒褐色（粘質）土を主体とする自然堆積である。[出土遺物] 円筒上層a式に相当する土器片が複数出土した。また、石製品の可能性が考えられる礫が2点出土している。32は口縁部片であり、鋸歯状の貼付隆帯が横位に展開することから、上層b・c式に相当する可能性も考えられるが、隆帯下に繩文原体が鋸歯状に押厚されることから上層a式と捉えた。34は加工された痕跡はみられないが、二等辺三角形であることから、石製品の可能性が考えられるであろう。35は明瞭ではないが、部分的に磨り痕がみられ、形状が北海道式石冠に類似することから、石製品として捉えた。[小結] 出土遺物から、中期初頭（円筒上層a式期）の位置付けが考えられよう。

第21号土坑（図32）

[位置・確認] 調査区中央、北東方向への緩やかな傾斜地であるAS-24に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、南北方向を主軸とする橢円形であり、ほぼ平坦な底面から壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸342×短軸84×深さ21cm程である。[堆積土] 褐色～暗褐色土を主体とする自然堆積である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第22号土坑（図32・45）

[位置・確認] 調査区北側の台地縁辺部、AO-20に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、東西方向を主軸とするやや不整な方形である。底面は、西側がやや深く階段状となるが、ほぼ平坦であり壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸162×短軸96×最深部24cm程である。[堆積土] 褐色～黒褐色土を主体とする。焼骨片が混入することから、人為的様相と捉えることもできよう。[出土遺物] 円筒下層d式に相当する土器片が複数出土しており、石器は石鏃が4点出土した。これらの遺物は、焼骨片の分布と重複する状況である。[小結] 出土遺物から、前期末葉（円筒下層d式期）の位置付けが考えられよう。また焼骨片は分析の結果、動物・魚類であることが判明しており（詳細は、第5章・第8・9節参照）、廃棄・混入などの可能性が考えられよう。しかし、4点の石鏃が一括して出土した状況は、特殊な様相ともいえるであろう。

第23号土坑（図33・45）

[位置・確認] 調査区中央、北東方向への緩やかな傾斜地であるAS-22に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、北西～南東方向を主軸とする不整形であり、短軸での断面形状はY字状である。規模は、長軸327×短軸177×最深部68cm程である。[堆積土] 暗褐色～黒褐色土を主体とする自然堆積である。[出土遺物] 円筒下層d～上層a式と思われる土器片が数点出土しており、石器は使用痕剥片が1点出土した。[小結] 詳細は不明であるが、出土遺物から前期末葉～中期初頭（円筒下層d～上層a式期）に位置付けられる可能性が考えられよう。

第24号土坑（図33・45・46）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AQ-22に位置するⅢ層から検出した。[重複] 第37号土坑と重複しており、本遺構が新しい。[構造] 平面形状は、南北方向を主軸とする不整形であり、ほぼ平坦な底面から壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸399×短軸318×深さ45cm程である。不整形を呈する平面形状は、風倒木や根などによる影響に起因すると考えられる。[堆積土] 明褐色～黒褐色土を主体とする自然堆積である。3層は火山灰層であり、分析の結果、白頭山火山灰であることが判明した（詳細は、第5章・第3節参照）。分析結果から、火山灰は風倒木や根などの影響により、混入した可能性が考えられるが、調査段階において明瞭な堆積状況を把握することはできなかった。しかし、1層に数種の土壤が混在することから、風倒木などの影響と捉えることもでき、Ⅱ層には同一土壤が再堆積したと考えることができよう。[出土遺物] 円筒下層d～上層a式に相当する土

器片が複数出土した。45は底面直上からの出土である。石器は、石匙1点・半円状扁平打製石器1点・石棒と思われる破片が1点出土している。50は全身に光沢感がみられる片岩であり、石製品として用いられた可能性を考慮し図示した。[小結] 出土遺物から、中期初頭（円筒上層a式期）の位置付けが考えられよう。

第25号土坑（図33・46）

[位置・確認] 調査区北側の台地縁辺部、AN-19に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、東西方向を主軸とする円形であり、ほぼ平坦な底面から壁はやや外傾する。規模は、長軸138×短軸129×深さ36cm程である。[堆積土] 褐色～暗褐色土を主体とする自然堆積と思われるが、根などの影響により堆積土は攪乱した状況である。[出土遺物] 円筒下層d式に相当する土器片が複数出土しており、石器は石鏃が1点出土したのみである。[小結] 出土遺物から、前期末葉（円筒下層d式期）の位置付けが考えられよう。

第26号土坑（図33・46）

[位置・確認] 調査区北側の台地縁辺部、AM-20に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、北東～南西方向を主軸とする楕円形であり、ほぼ平坦な底面から壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸282×短軸120×深さ33cm程である。[堆積土] 褐色～暗褐色土を主体とした自然堆積である。[出土遺物] 円筒下層d式に相当する土器片が複数出土しており、石器は石錐が1点出土したのみである。[小結] 出土遺物から、前期末葉（円筒下層d式期）の位置付けが考えられよう。

第27号土坑（図34・47・48）

[位置・確認] 調査区北側の台地縁辺部、AP-21に位置するⅢ層から、配石を中心とした暗褐色土の広がりとして確認した。[構造] 平面形状は、南北方向を主軸とする楕円形であり、やや起伏する底面から壁は緩やかに外傾する。検出面での土坑中心部には、2点の角礫が配置しており、配石の様相を呈する。規模は、長軸168×短軸93×深さ27cm程である。[堆積土] 暗褐色土を主体とする。焼骨片や遺物出土状況から、人為的様相と考えられる。[出土遺物] 検出面で確認された2点の角礫に接し、両面加工石器（67）・半円状扁平打製石器（68）が出土しており、検出面の東壁際からは欠損した敲磨器（69）が出土した。土坑東側の中位層からは、数個体に及ぶ土器が横転あるいは、敷き詰めた状態で出土しており、3個体が復元可能であった。これらの土器は、円筒下層d式に相当する土器である。この土器群に共伴して、黒曜石製石鏃が1点出土しており、分析の結果、北海道赤石を産出地とすることが判明した（詳細は第5章・第4節参照）。[小結] 出土遺物から、前期末葉（円筒下層d式期）に位置付けられよう。また焼骨片は分析の結果、哺乳類（四肢骨）・アイナメ属（第一椎骨）・ウミタナゴ（角骨）・タイ科の一種（遊離歯）・マダラ（尾椎）などであることが判明しており（詳細は、第5章・第8・9節参照）、廃棄・混入などの可能性が考えられよう。しかし、検出面にみられる配石や個体土器と黒曜石製石鏃の共伴は、特殊な様相といえるであろう。

第28号土坑（図34）

[位置・確認] 調査区南側の斜面、AY-42に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、北東～南西方向を主軸とする楕円形であり、ほぼ平坦な底面から壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸228×短軸138×深さ39cm程である。[堆積土] 褐色～黒褐色土を主体とした自然堆積である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第29号土坑（図34）

[位置・確認] 調査区南側の台地縁辺部、AW-28に位置するⅢ層から検出した。[重複] 南側を第1号住居跡

と重複しており、本遺構が新しい。[構造] 調査区外に及ぶため詳細は不明であるが、平面形状は、北東－南西方向を主軸とする楕円形と推測され、傾斜する底面から壁はやや外傾する。[堆積土] 褐色～暗褐色土を主体とした自然堆積である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 第1号住居跡の年代観から、中期初頭（円筒上層a式期）以降であるが、詳細は不明である。

第30号土坑（図34・48・49）

[位置・確認] 調査区南側の斜面、AW-37に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、南北方向を主軸とする楕円形であり、壁は起伏する底面からやや外傾する。規模は、長軸159×短軸126×深さ48cm程である。[堆積土] 褐色～黒褐色土を主体とした自然堆積である。[出土遺物] 円筒下層d式に相当する土器片が複数出土しており、石器は削器3点・石核2点・使用痕剥片1点が出土した。[小結] 出土遺物から、前期末葉（円筒下層d式期）の位置付けが考えられよう。

第31号土坑（図35・50・51）

[位置・確認] 調査区北側の台地縁辺部、AQ-18に位置するⅢ層から検出した。[構造] 調査区外に及ぶため、全容は不明である。平面形状は、北東－南西方向を主軸とする楕円形あるいは円形と推測され、ほぼ平坦な底面から壁はやや外傾する。[堆積土] 橙色～黒褐色土を主体とした自然堆積とも思われるが、遺物出土状況から人為的様相とも捉えることができよう。[出土遺物] 円筒上層a式に相当する土器片が複数出土しており、石器は石鏃4点・石錐1点・削器1点・石核1点・磨製石斧1点・石皿1点が出土した。90は全身に光沢感がみられる片岩であり、石製品として用いられた可能性を考慮し図示した。[小結] 出土遺物から、中期初頭（円筒上層a式期）に埋没過程であったと考えられよう。また焼骨片が確認されており、分析の結果、中型哺乳類（四肢骨）などであることが判明した（詳細は、第5章・第8節参照）。

第32号土坑（図35）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AS-30に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、南北方向を主軸とするやや不整な楕円形であり、起伏する底面から壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸381×短軸129×深さ36cm程である。[堆積土] 褐色粘質土～暗褐色土を主体とした自然堆積である。[出土遺物] 出土遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第33号土坑（図36）

[位置・確認] 調査区南側の台地縁辺部、AV-32に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、南北方向を主軸とする隅丸三角形であり、平坦な底面から壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸168×短軸165×深さ30cm程である。[堆積土] にぶい黄褐色火山灰～暗褐色土を主体とした自然堆積であり、1層は白頭山火山灰層である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第34号土坑（図36・51）

[位置・確認] 調査区中央付近の台地平坦面、AL-22に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、北西－南東方向を主軸とするやや不整な楕円形であり、平坦な底面から壁はやや外傾する。また底面の中心部は、ピット状となる。規模は、長軸228×短軸138×深さ39cm程である。[堆積土] 黄褐色～暗褐色土を主体とする。焼土や炭化物が混入しており、人為的様相と捉えることもできよう。[出土遺物] 円筒下層d式に相当する土器片が数点出土している。また堆積土から炭化材が出土しており、分析の結果、ヒノキ科アスナロ属アスナロであ

ることが判明した（詳細は、第5章・第5節参照）。[小結] 詳細は不明であるが、出土遺物から前期末葉（円筒下層d式期）に位置付けられる可能性が考えられよう。

第35号土坑（図36・51・52）

[位置・確認] 調査区北側の斜面、AL-16に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、南北方向を主軸とする楕円形である。壁は平坦な底面からやや外傾するが、斜面下位となる北壁は確認することができた。規模は長軸258×短軸216cm程であり、斜面上位からの深さは96cm程である。[堆積土] 褐色～暗褐色土を主体とした自然堆積と思われるが、炭化物が混入する。[出土遺物] 円筒下層d式に相当する土器片が複数出土しており、石器は両面加工石器1点・使用痕剥片2点が出土した。101は磨製石斧の未製品の可能性が考えられ、側面には擦り切り痕がみられる。[小結] 出土遺物から、前期末葉（円筒下層d式期）の位置付けが考えられよう。また焼骨片が確認されており、分析の結果、中型哺乳類（四肢骨）などであることが判明した（詳細は、第5章・第8節参照）。

第36号土坑（図36）

[位置・確認] 調査区北側の斜面、AM-16に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、北西～南東方向を主軸とする楕円形である。壁は平坦な底面からやや外傾するが、斜面下位となる北壁は確認することができなかった。また底面の南東壁際からは、2基のピットを検出した。規模は、長軸240×短軸168cm程であり、斜面上位からの深さは102cm程である。[堆積土] 褐色～黒褐色土を主体とした自然堆積と思われるが、炭化物が混入する。2層からは炭化材が出土しており、分析の結果、針葉樹であるヒノキ科アスナロ属アスナロと判明した（詳細は第5章・第5節参照）。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明であるが、西側に位置する第35号土坑と構造的に類似しており、関連性が考慮される。

第37号土坑（図37・52～57）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AQ-21に位置するⅢ層から検出した。[重複] 第24号土坑と重複しており、本遺構が古い。[構造] 平面形状は、南北方向を主軸とする不整な円形であり、ほぼ平坦な底面から壁は外傾しており、西側は緩やかとなる。規模は、長軸336×短軸324×深さ42cm程である。[堆積土] 褐色～暗褐色土を主体とする自然堆積と思われるが、焼骨片・焼土・炭化物が混入することから、人為的様相とも捉えることができよう。[出土遺物] 底面を主体に円筒下層d式に相当する個体土器が大量に出土した。これらの土器は、横転した状態や押し潰され敷かれた状態であり、混在して円礫や板状礫も出土している。石器は、石鏃1点・石匙6点・削器5点・搔器2点・石錐2点・両面加工石器2点・使用痕剥片2点・半円状扁平打製石器1点・磨石1点・凹石1点・石皿（台石）2点が出土した。[小結] 出土遺物から、前期末葉（円筒下層d式期）に位置付けられよう。土坑の規模から、住居跡の可能性も考えられるが、柱穴や炉は確認されなかった。また焼骨片は分析の結果、中型哺乳類（四肢骨・椎骨）・タイ科の一種（遊離歯）・フグ科の一種（上擬鎖骨）などであることが判明した（詳細は、第5章・第8・9節参照）。

第38号土坑（図37・57）

[位置・確認] 調査区北側の台地縁辺部、AP-21に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、南北方向を主軸とする楕円形であり、ほぼ平坦な底面から壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸135×短軸75×深さ18cm程である。[堆積土] 暗褐色土を主体とする。焼骨片・焼土・炭化物が混入することから、人為的様相と捉えることもできよう。[出土遺物] 南側底面付近から、円筒下層d式に相当する土器片が複数出土した。[小結] 出土遺物から、前期末葉（円筒下層d式期）の位置付けが考えられよう。

第39号土坑（図37）

【位置・確認】調査区北側の台地縁辺部、A P - 20に位置するⅢ層から検出した。【構造】平面形状は、南北方向を主軸とする橿円形であり、平坦な底面から壁はやや外傾する。規模は、長軸99×短軸60×深さ21cm程である。【堆積土】暗褐色土を主体とし、焼土・炭化物が混入する。これらの混入物は人為的影響とも考えられるが、判断し難い。また上層であるⅡ層には、焼骨片が混入する。【出土遺物】遺物は確認されなかった。【小結】詳細は不明である。

第40号土坑（図38）

【位置・確認】調査区南側の台地縁辺部、A W - 31に位置するⅢ層から検出した。【構造】平面形状は、北西－南東方向を主軸とする円形であり、起伏する底面から壁はやや外傾する。規模は、長軸81×短軸76×深さ24cm程である。【堆積土】褐色～暗褐色土を主体とした自然堆積である。【出土遺物】遺物は確認されなかった。【小結】詳細は不明であるが、第3号住居跡の南西に隣接しており、関連性も考慮すべきであろう。

第41号土坑（図38・58）

【位置・確認】調査区南側の斜面、A V - 39に位置するⅢ層から検出した。【構造】平面形状は、北東－南西方向を主軸とする橿円形であり、底面から壁はやや外傾し、西側は階段状となる。規模は、長軸219×短軸180×深さ48cm程である。【堆積土】黄褐色～暗褐色土を主体とした自然堆積であり、1・2層には白頭山火山灰が混入する。火山灰は、根や斜面に構築されたことを要因とし混入したと思われる。【出土遺物】円筒下層d式に相当する土器片が複数出土しており、石器は石槍1点・石匙1点・削器3点・使用痕剥片1点が出土している。【小結】出土遺物から、前期末葉（円筒下層d式期）の位置付けが考えられよう。

第42号土坑（図38・58）

【位置・確認】調査区南側の台地縁辺部、A U - 36に位置するⅢ層から検出した。【構造】平面形状は、東西方向を主軸とする橿円形であり、平坦な底面から壁は緩やかに外傾する。規模は、長軸189×短軸126×深さ36cm程である。【堆積土】褐色土を主体とした自然堆積であり、1層には白頭山火山灰が混入する。【出土遺物】円筒下層d式に相当する土器片が1点、削器が1点出土した。【小結】詳細は不明であるが、出土遺物から前期末葉（円筒下層d式期）に位置付けられる可能性が考えられよう。

第43号土坑（図38・58）

【位置・確認】調査区南側の斜面、A U - 36に位置するⅢ層から検出した。【構造】平面形状は、北東－南西方向を主軸とする不整形であり、底面から壁はやや外傾し、西側は階段状となる。規模は、長軸180×短軸165×深さ30cm程である。【堆積土】褐色～暗褐色土を主体とした自然堆積であり、1層には白頭山火山灰が混入する。【出土遺物】円筒上層a式に相当する土器片が数点出土した。【小結】詳細は不明であるが、出土遺物から中期初頭（円筒上層a式期）に位置付けらえる可能性が考えられよう。

第44号土坑（図39・59）

【位置・確認】調査区中央の平坦面、A U - 31に位置するⅢ層から検出した。【構造】平面形状は、北西－南東方向を主軸とする橿円形であり、若干起伏した底面から、壁はやや外傾する。規模は、長軸291×短軸108×深さ36cm程である。【堆積土】暗褐色土を主体とした自然堆積である。【出土遺物】土坑の北側底面から、分割された石皿が使用面を東方向とした状態で出土した。置かれた状態とも捉えることができようが、廃棄による可能性も考えられるであろう。【小結】詳細は不明であるが、出土遺物から前期末葉～中期初頭（円筒下層d～上層

a式期)に位置付けられる可能性が高いと思われる。

第45号土坑 (図39・59・60)

[位置・確認] 調査区北側の台地縁辺部、AQ-20に位置するⅢ層から検出した。[重複] 第4号配石が本遺構の検出面西端に位置しており、本遺構が古いと思われるが、同時期の遺構であり関連性も考えられる。[構造] 平面形状は、北西-南東方向を主軸とする円形であり、平坦な底面から、壁はやや外傾する。規模は、長軸150×短軸141×深さ24cm程である。[堆積土] 褐色～暗褐色土を主体とする。焼骨片・焼土・炭化物が混入することから、人為的様相と捉えることもできよう。[出土遺物] 円筒上層a式に相当する土器片が複数出土しており、162は略完形個体である。石器は、削器1点・石錐1点・使用痕剥片1点・石皿1点が出土した。169は石皿であり、使用面を南方向とし土坑中央から出土しており、立石と捉えることもできよう。[小結] 出土遺物から、中期初頭(円筒上層a式期)に位置付けられよう。また焼骨片は分析の結果、中型哺乳類であることが判明しており(詳細は、第5章・第8節参照)、廃棄・混入などの可能性が考えられよう。しかし本遺構にみられる遺物出土状況は、特殊な様相ともいわうであろう。

第46号土坑 (図39・60)

[位置・確認] 調査区中央、北東方向への緩やかな傾斜地であるAT-23に位置するⅢ層から検出した。[構造] 平面形状は、南北方向を主軸とする楕円形であり、断面形状は不整なフラスコ状である。開口部においての規模は、長軸90×短軸60×深さ51cm程である。底面の規模は、長軸108×短軸63cm程である。[堆積土] にぶい赤褐色焼土～暗褐色土を主体とする人為堆積と思われ、1層は焼土層となる。[出土遺物] 円筒下層d式に相当する土器片が数点出土しており、石器は使用痕剥片1点・石棒1点が出土した。石棒は底面からの出土であり、両端に敲き痕がみられる。また土坑の上部からは、15kg・25kgの角礫が出土しており、土坑をふさぐ石蓋を彷彿させる。[小結] 出土遺物から、前期末葉(円筒下層d式期)に位置付けられよう。また遺物の出土状況から、墓であることを考慮し土壌分析を行った。その結果、動物遺体が埋納されていた可能性が高いと推定された(詳細は、第5章・第9節参照)。

(野村 信生)

第3節 埋設土器

第1号埋設土器 (図61・63)

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AO-23に位置するⅡ層から検出した。[構造] 底部を欠損した土器が倒立した状態で出土した。[堆積土] 土器の内部には、褐色～暗褐色土が堆積する。[出土遺物] 埋設された2は円筒上層a式に相当し、1は円筒下層d～上層a式に相当するが、被熱が著しく捨て場に廃棄された土器と考えられる。[小結] 本土器から、中期前葉(円筒上層a式期)に位置付けられよう。また本埋設土器が墓であることを考慮し、土壌分析を行った。その結果、動物遺体が埋納されていた可能性が高いと推定された(詳細は、第5章・第10節参照)。なお本来ならば、土坑に埋設されたと考えられるが、その痕跡を確認することができなかつた。

第2号埋設土器 (図61・64)

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AN-23に位置するⅢ層から検出した。[構造] 土坑に正立した状態で、完形である個体土器が埋設される。土坑は南北方向を主軸とする円形であり、平坦な底面から壁はやや外傾する。土坑の規模は、長軸33×短軸30×深さ30cm程である。[堆積土] 土坑には褐色土が堆積し、土器の内部には褐色～暗褐色土が堆積する。[出土遺物] 埋設された3は円筒下層d式に相当する。個体土器であったが、細片化し

ており復元不可能であった。[小結] 本土器から、前期末葉（円筒下層 d 式期）に位置付けられよう。また本埋設土器が墓であることを考慮し、土壤分析を行った。その結果、動物遺体が埋納されていた可能性が高いと推定された（詳細は、第5章・第10節参照）。

第3号埋設土器（図61・64）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、A T - 23に位置するⅢ層から検出した。[構造] 土坑に正立した状態で、欠損する個体土器が埋設される。土坑は東西方向を主軸とする楕円形であり、平坦な底面から壁はやや外傾する。土坑の規模は、長軸52×短軸38×深さ26cm程である。[堆積土] 褐色土を主体とする堆積である。[出土遺物] 埋設された6は円筒下層 d～上層 a 式に相当し、被熱が著しい。検出面から石槍1点、堆積土からわずかな磨り痕がみられる楕円状の扁平礫が出土した。[小結] 本土器から、前期末葉～中期初頭（円筒下層 d～上層 a 式期）に位置付けられよう。また本埋設土器が墓であることを考慮し、土壤分析を行った。その結果、動物遺体が埋納されていた可能性が高いと推定された（詳細は、第5章・第10節参照）。

第4号埋設土器（図62・65）

[位置・確認] 調査区北側の台地縁辺部、A O - 19に位置するⅡ層から検出した。[構造] 土坑に正立した状態で、完形である個体土器が埋設される。土坑は南北方向を主軸とする楕円形であり、ほぼ平坦な底面から壁はやや外傾する。土坑の規模は、長軸40×短軸30×深さ54cm程である。[堆積土] 土坑には褐色土が堆積し、土器の内部には暗褐色土が堆積する。[出土遺物] 埋設土器の口縁部内外には、同一個体の土器片が配されており、土器の口縁部は二重口縁状、内部口縁部付近は蓋状を呈するといえるであろう。これらの土器は、円筒下層 d 式期に相当する。[小結] 本土器から、前期末葉（円筒下層 d 式期）に位置付けられよう。また本埋設土器が墓であることを考慮し、土壤分析を行った。その結果、動物遺体が埋納されていた可能性が高いと推定された（詳細は、第5章・第10節参照）。なお埋設土器内からは焼骨片が確認されており、分析の結果、動物・タイ科の一種（遊離歯）であることが判明した（詳細は、第5章 第8・9節参照）。これらの焼骨片は、埋設時などに混入した可能性が考えられるであろう。

第5号埋設土器（図62・65）

[位置・確認] 調査区南側の台地縁辺部、A V - 38に位置するⅡ層から出土した。[構造] 土器は横転した状態であり、底部などを欠く欠損品であった。[出土遺物] 本土器は、円筒下層 d 式に相当する。[小結] 本土器の周辺からは、廃棄されたと考えられる土器片などが出土しており、本土器も埋設土器ではなく廃棄された可能性が考えられるが、土器の内部から焼骨が出土したため、埋設土器として報告する。しかし、焼骨は分析の結果、ウサギの右大腿骨と判明した（詳細は、第5章・第8節参照）。時期は、本土器から前期末葉（円筒下層 d 式期）に位置付けられよう。

第6号埋設土器（図62・66）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、A Q - 26に位置するⅢ層から検出した。[構造] 土坑に正立した状態で、体部下半のみが埋設される。土坑は北西～南東方向を主軸とする楕円形であり、平坦な底面から壁はやや外傾する。土坑の規模は、長軸34×短軸30×深さ18cm程である。[堆積土] 土坑には褐色土が堆積し、土器の内部には暗褐色土が堆積する。[出土遺物] 本土器は円筒上層 a 式に相当する。[小結] 本土器から、中期初頭（上層 a 式期）に位置付けられよう。また本埋設土器が墓であることを考慮し、土壤分析を行った。その結果、動物遺体が埋納されていた可能性が高いと推定された（詳細は、第5章・第10節参照）。

第7号埋設土器（図63・66）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AM-23に位置するⅢ層から検出した。[構造] 土坑に横転した状態で、口縁部を欠損する個体土器が埋設される（12）。埋設された土器の内部には、底部を欠損する土器（11）が、口縁部から差し込まれた状態であった。[堆積土] 土坑と土器の内部には褐色土が堆積する。[出土遺物] 本土器は円筒上層a式に相当し、11は被熱が著しい。[小結] 本土器から、中期初頭（円筒上層a式期）に位置付けられよう。

（野村 信生）

第4節 配石

第1号配石（図67・69）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、AP-22に位置するⅢ層から検出した。[構造] 板状礫を配石とし、南側に土器片が散布された状態である。下位には、南北方向を主軸とする土坑が確認された。土坑の平面形状は橢円形であり、平坦な底面から壁はやや外傾する。土坑の規模は、長軸60×短軸31×深さ13cm程である。[堆積土] 土坑には褐色土が堆積し、配石がみられることから、人為堆積と考えられるであろう。[出土遺物] 円筒下層d式に相当する同一個体の破片が出土したが、復元不可能であった。[小結] 出土遺物から、前期末葉（円筒下層d式期）に位置付けられよう。

第2号配石（図67・69）

[位置・確認] 調査区中央、北東方向への緩やかな傾斜地であるAR-22に位置するⅢ層から検出した。[構造] 北西－南東方向を主軸とし、3点の板状礫が2段に重なる状態で配置する。[出土遺物] 下位に配置する2は石皿であり、使用面を下にした状態であった。また、西側から石核が1点出土している。[小結] 詳細は不明であるが、出土遺物から前期末葉～中期初頭（円筒下層d～上層a式期）に位置付けられる可能性が高いと思われる。

第3号配石（図67・70）

[位置・確認] 調査区中央、北東方向への緩やかな傾斜地であるAQ-20に位置するⅢ層から検出した。[構造] 北西－南東方向を主軸とし、板状礫などが配置する。[出土遺物] 配石として、半円状扁平打製石器1点・石皿（台石）3点が出土した。[小結] 配石にみられる半円状扁平打製石器は、円筒下層式期を主体に円筒土器文化に特徴的な石器である。この点と遺跡の様相を考慮すれば、本配石は前期末葉～中期初頭（円筒下層d～上層a式期）に位置付けられる可能性が高いといえよう。

第4号配石（図68・71）

[位置・確認] 調査区北側の台地縁辺部、AP-20に位置するⅡ層から検出した。[重複] 第45号土坑検出面西端に位置しており、本遺構が新しいと思われるが、同時期の遺構であり関連性があった可能性も考えられる。[構造] 円形の板状礫に個体土器が押し潰された状態で出土した。[出土遺物] 配石とされた板状礫は、石皿である。土器は円筒上層a式に相当する個体土器であったが、細片化が著しく復元不可能であった。[小結] 出土遺物から、中期初頭（円筒上層a式期）に位置付けられよう。

第5号配石（図68・72）

[位置・確認] 調査区北側の台地縁辺部、AP-20に位置するⅡ層から検出した。[構造] 半損した板状礫に、個体土器が押し潰された状態で出土した。[出土遺物] 13は配石とした石皿であり、使用面を下にした状態であつ

た。11は配石下の土器であり、円筒上層a式に相当する個体土器である。10はⅡ層中に混在した土器片であり、円筒下層d式に相当する。12は石鏃であるが、10・11の何れに共伴するかは、明瞭でない。[小結] 出土遺物から、中期初頭（円筒上層a式期）に位置付けられよう。

第6号配石（図68・73）

[位置・確認] 調査区南側の台地縁辺部、AT-40に位置するⅡ層下位から検出した。南西側には、第7号配石が隣接する。[構造] 円形の板状礫の南西側に、北西-南東方向を主軸とし、2点の板状礫が配置する。円形の板状礫の下位と北東側には、ピットが確認された。[堆積土] 配石下の1層には褐色土、北東側のピットには暗褐色土が堆積する。1層は配石下であることから、人為的な様相とも思われる。2層は柱痕や礫の抜き取り痕とも思われるが、詳細は不明である。[出土遺物] 14は両側縁に磨り痕がみられるが、恒久的に磨石として使用されてはいないようである。[小結] 本遺構の性格について、墓の可能性を考慮し、土壤分析を行ったが、動物遺体を埋納した可能性は低いとのことであった（詳細は、第5章・第10節参照）。本遺構の形態、南西に第4号住居跡が確認されることから、後期初頭に位置付けられる可能性が高いと思われる。

第7号配石（図68・73）

[位置・確認] 調査区南側の台地縁辺部、AT-40に位置するⅡ層下位から検出した。北東側には、第6号配石が隣接する。[構造] 2点の楕円形の板状礫が北側を接点とし、北東・北西に配置する。配石は土坑に伴っており、土坑の平面形状は北東-南西方向を主軸とする方形であり、ピット状となる底面から壁は緩やかに外傾する。土坑の規模は、長軸42×短軸36×深さ18cm程である。[堆積土] 土坑堆積土は、褐色～暗褐色土を主体とする。配石に伴うことから、人為堆積の可能性が考えられよう。[出土遺物] 15は石皿であり、欠損部を北西、使用面を南西として配置していた。16は配石の南東に位置しており、わずかな磨り痕がみられることから、石皿（台石）であろう。[小結] 本遺構の性格について、墓の可能性を考慮し、土坑の土壤分析を行ったが、動物遺体を埋納した可能性は低いとのことであった（詳細は、第5章・第10節参照）。本遺構の形態、南西に第4号住居跡が確認されることから、後期初頭に位置付けられる可能性が高いと思われる。

（野村 信生）

第5節 焼土

第1号焼土（図74・75）

[位置・確認] 調査区北側の台地縁辺部、AM-19に位置するⅡ層から検出した。[構造] 南北方向を主軸とする不定形の広がりである。規模は、長軸123×短軸66×深さ12cm程である。[出土遺物] 円筒下層d～上層a式に相当するとと思われる土器片が数点出土した。1は口縁部片であり、外面には条痕が施され、内面はミガキ調整となる。石器は石鏃・石槍の未製品と考えられる剥片が1点のみ出土した。[小結] 詳細は不明であるが、出土遺物から前期末葉～中期初頭（円筒下層d～上層a式期）に位置付けられる可能性が考えられよう。

第2号焼土（図74）

[位置・確認] 調査区中央、北東方向への緩やかな傾斜地であるAT-22に位置するⅢ層から検出した。[構造] 北東-南西方向を主軸とする方形の広がりである。規模は、長軸96×短軸78×深さ24cm程である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第3号焼土（図74）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、A P - 25に位置するⅢ層から検出した。[構造] 南北方向を主軸とする円形の広がりである。規模は、長軸78×短軸75×深さ18cm程である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第4号焼土（図74）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、A Q - 25に位置するⅢ層から検出した。[構造] 北西－南東方向を主軸とする楕円形の広がりである。規模は、長軸108×短軸63×深さ12cm程である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第5号焼土（図74）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、A Q - 25に位置するⅢ層から検出した。[構造] 南北方向を主軸とする楕円形の広がりである。規模は、長軸180×短軸72×深さ15cm程である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第6号焼土（図74）

[位置・確認] 調査区中央の台地平坦面、A Q - 25に位置するⅢ層から検出した。[構造] 南北方向を主軸とする楕円形の広がりである。規模は、長軸75×短軸39×深さ12cm程である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第7号焼土（図75）

[位置・確認] 調査区中央、北東方向への緩やかな傾斜地である、A U - 25に位置するⅢ層から検出した。[構造] 南北方向を主軸とする楕円形の広がりである。規模は、長軸117×短軸99×深さ15cm程である。検出面である中央部西側からは、同一個体と考えられる土器片が集中して出土した。[出土遺物] 円筒上層a式に相当する同一個体の破片が出土したが、復元不可能であった。口縁部文様帶には、上層b式のメルクマールとされる馬蹄形状の繩文原体押圧がみられるが、一条の横位隆帶による口縁部文様帶区画や植物纖維の混入から、上層a式と捉えた。[小結] 出土遺物から、中期初頭（円筒上層a式期）に位置付けられよう。

第8号焼土（図75）

[位置・確認] 調査区中央、北東方向への緩やかな傾斜地である、A U - 25に位置するⅢ層から検出した。[構造] 北西－南東方向を主軸とする楕円形の広がりである。規模は、長軸87×短軸66×深さ21cm程である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

第9号焼土（図75）

[位置・確認] 調査区南側の台地縁辺部、A U - 32に位置するⅢ層から検出した。[構造] 南北方向を主軸とする円形の広がりである。規模は、長軸102×短軸99×深さ36cm程である。[出土遺物] 遺物は確認されなかった。[小結] 詳細は不明である。

*上記した石器の数量は、遺構内における出土総数量である。

*上記した遺構の一部には、墓であることを考慮し、土壤分析（リン・腐植・カルシウム分析）を行った。しかし、多くの遺構は第1号捨て場と重複しており、捨て場から確認された焼骨片などが分析結果に影響を及ぼした可能性も考えられる。

(野村 信生)

第6節 第1号捨て場

1 第1号捨て場（図76～143）

[位置・確認] 調査区北側の台地縁辺部に形成されており、表土（I層）に遺物が散乱した状況であった。遺物の出土状況は、河川へ下る北側斜面・台地中央方向へ希薄となる。範囲については、個体土器の分布状況と土器の重量比から、便宜的にAM-24・AQ-24・AQ-22・AR-22・AR-20・AT-20グリッドの基点を結ぶラインより北側と設定した。

[構造] 捨て場はⅢ層上に形成されており、Ⅱ層を遺物包含層とし発達する。Ⅲ層からは遺構が検出されており、焼骨片・焼土・炭化物などが混入する土坑がみられる。土坑から確認された焼骨片は、中型哺乳類や魚類・貝類などであり、ヒトに比定される骨は確認されなかった（詳細は、第5章・第8・9節参照）。また、Ⅱ層中に遺物と混在してみられる焼骨片も同様な結果であった。この結果から、これらの土坑が廃棄場として利用されたことも考えられるが、焼骨片は高温で長時間の焼成を受けており、また焼骨片と共に伴する遺物には、出土状況に特殊な様相がうかがわれる、その性格は一様ではないようである。しかし、これらの土坑が捨て場形成以前、あるいは形成初段階に構築されたことは間違いない、捨て場の形成を考えるうえで重要な要因といえよう。また捨て場からは、廃棄された遺物に混在して埋設土器が確認されている。土器や石器などの日常遺物のみでなく、土製品（土偶など）や石製品（玦状耳飾・石棒など）などの非日常遺物が出土しており、廃棄・祭祀・葬送の相関性を示唆した状況といえるであろう。

[堆積土] Ⅱ層を遺物包含層と捉えた。褐色～黒褐色土を主体とし暗褐色土・褐色土・炭化物・焼土・焼骨片などが混入する。捨て場の遺物包含土壤は、本来、基本層序とは区別すべきであるが、部分的な確認であったため同一層位とした（基本層序については、第2章・第1節に柱状図を提示した）。

[出土遺物] 円筒下層d～上層a式に相当する土器・剥片石器・礫石器・土製品・石製品と出土遺物は膨大であり、多種に及ぶ。これらの遺物について、点数や重量を提示し捨て場における各遺物の傾向を明確に捉えることは、該期の人々の空間利用や深層心理を把握するために重要と考えられるが、本報告では一部の遺物について提示するのみである。土器のグリッド単位による重量分布の比較から、AP-19においては145310.8gと土器の出土重量が突出し、本グリッドの周辺に土器が集中しており、またAN-21を結ぶ北東～南西ラインに集中する傾向といえよう。この傾向は土器出土状況において、個体土器が出土した地点とも一致する。個体土器の出土状況は、飛散し散在した状況もみられるが、横転した状態・押し潰した状態・押し潰し敷き詰めた状態と個体ごとにまとまりを有する状況が多い。これらの土器に混在し、石器・土製品・石製品などが出土しており、原石・柱状節理がみられる礫・玉髓などの自然礫も散見される状況である。これらの出土遺物については、次項で概要的な所見を述べることにする。

なお本捨て場から確認された焼骨片は、分析により以下の結果が得られた。ネズミ科・小型哺乳類・中型哺乳類・アイナメ属・ウミタナゴ・コイ科・サケ科・サメ（エイ）類・タイ科・ニシン（科）・フグ科などが確認された。中型哺乳類については、種の特定は困難であるが、骨片の大きさはタヌキ・イヌ・ウサギに相当する大きさが多いとのことである。また小片であるが、鹿角製の骨角器が1点出土しており、製作途中で廃棄された残欠類の可能性が指摘される（詳細は、第5章・第8・9節参照）。

[小結] 出土遺物から、円筒下層d～上層a式期に位置付けられ、廃棄・祭祀・葬送に相関性があったことが示唆される。

2 繩文土器（図80～110）

円筒下層d～上層a式土器が出土しており、下層d式はd1・d2・上層a式はa1・a2段階と細分が可能で

あるが、上述した遺構内出土土器を含め第1号捨て場においては、一部の土器以外は各型式内における細分は行っていない。下層d式・上層a式の分類については、本遺跡内の遺構内一括出土資料を基準とし、他の遺跡の様相を加味して行ったが、判断し難い土器については円筒下層d～上層a式とした。本遺跡における円筒下層d式の一括出土資料は、第27・37号土坑・第4号埋設土器、円筒上層a式においては第1・2・5号住居跡・第31・45号土坑・第7号埋設土器などに良好な出土事例をみることができる。また第1号埋設土器・第5号配石からは上層a式の個体土器が出土している。上層a式の一括出土土器については、胴部に絡条体の回転施文がみられないことから、胴部における絡条体の回転施文は下層d式的要素が強いと捉えた。第1号住居跡・第45号土坑では、縄文施文のみの土器が上層a式に共存することから、縄文施文のみの土器は上層a式的要素が強いと捉えた。無論これは、本遺跡内における分類の一要因である。以下に、本捨て場における円筒下層d・上層a式の様相について、特徴を端的に表現されるものについて外観的に述べることとする。なお詳細については、観察表に記載する。

第1号捨て場における円筒下層d式土器については、図80～83・図85～28・図87～35・図88～37・38・図89などに良好な個体土器をみることができる。器形的特徴は、胴部から口縁部がほぼ直上するもの・口縁部がやや外反するもの・肩部がやや張り出し、口縁部がやや外反するもの・肩部の張り出しが強く、口縁部が外反するもの（台付）がみられ、後者は後出的要因が強いと考えられる。文様構成は、口縁部文様帶に重層的に縄文原体を横位方向に直線的に押圧するもの・斜位方向（三角形状）に押圧するものがあり、前者が多くみられる。胴部には絡条体の縦回転が多くみられ、図87～35は後出的段階であるd2式に相当するが、胴部に木目状となる単軸絡条体第1A類を施文しており、本遺跡では稀少な類例である。口縁部文様帶の区画においては、隆帶の有無がみられる。隆帶については貼り付けの有無もあり、口縁部文様帶の幅が拡張し文様が発達するものは、貼付隆帶が太く明確となる。

図110～120は、深鉢の底部から胴部上半にかけての破片である。横位方向に条痕を施し、多軸絡条体を施文する。条痕は数条が平行することから、貝殻の可能性が考えられよう。内面にはナデ調整が施され、底面はミガキ上底となる。このような条痕と縄文を重ねる文様構成は北海道にみられ、津軽海峡を越えた交流を示唆する土器といえよう。

円筒上層a式土器については、図84～17・図86～30・31・図88～40・図90・図91～46・48・図103～92・図105～108～104に良好な土器をみることができる。器形的特徴は、胴部から口縁部が直線的にやや外傾するもの・口縁部が直線的に外傾するもの・口縁部が外反するもの・肩部が張り出し、口縁部が外傾（外反）するものがみられる。文様構成は、口縁部文様帶が拡張し、絡条体を押圧するものが多くみられるようになる。d式にみられた重層的に縄文原体を横位（斜位）方向に直線的に押圧するものは踏襲され、条間に直交する短線状・矢羽根状・鋸歯状・馬蹄形状の縄文原体押圧や刺突（爪形状主体）がなされるものがみられる。下層d～上層a式の変遷を考えれば、横位（斜位）方向への直線的押圧は、初現的段階と考えられよう。口縁部文様帶の区画においては、貼付隆帶の有無があり、部分的な貼付がなされるものもある。また、口縁部（主に波状口縁）から垂下する貼付により、文様帶を区画するものもみられる。

図106～99は、波状口縁の頂部下に貼り付けにより文様が構成されており、一見して人体を表現したようにも思われる。口縁部には横位方向の直線的な文様が構成されることから、初現的段階と思われる。

3 剥片石器（図111～図128）

膨大な出土総数に対して、報告書には一部を掲載したのみであり、出土数量などを把握することはできなかつた。石材は頁岩を主体とし、玉髓・黒曜石・安山岩・凝灰岩・チャート・珪質頁岩などがみられる。概観的であるが、石鏃・石槍が器種組成の主体と思われる。石鏃と石槍の分類基準は、5cm未満を石鏃・5cm以上を石槍として捉えた。以下に器種ごとの概観的所見を述べることとし、詳細は観察表に記載する。

石鏃（図111～112～46）

形状に相違がみられ、茎部の有無により、無茎鏃・有茎鏃に大別できる。無茎鏃は、基部に抉りを有する凹基と基部が加工され突出した凸基に細分される。有茎鏃は肩部が直線的である平基と肩部が張り出さず茎部となる凸基に細分される。

石槍（図112-47～115-91）

形状に相違がみられ、有茎となる類・無茎であるが、基部が突出する類・基部の両側縁に抉りを有し、摘みを形成する類に大別できる。摘みを有する類は、形状的に縦型石匙に類似するが、両面に施された加工は、切断や搔き取る作業より、刺突に適した形態と捉えた。また茎の有無により分類した類もさらに細分可能であるが、本項では示唆するにとどめる。図114-82～115-91は、製品と判断し難く、未製品などの可能性が考えられる一群である。

石匙（図116-92～117-109）

形状に相違がみられ、縦型・横型・その他に大別できる。92は黒曜石を石材とするが、全長30mmであることから、ミニチュア（石製品）として使用された可能性も考えられよう。108はその他とした類であり、刃部が二股状を呈する。109は石槍あるいは両面加工石器であったと考えられ、破損後、縦型石匙として加工途上であったと考えられる。

削器・搔器類（図117-110～118-128）

連続的な調整加工で直線的な刃部が形成される類を削器とし、連続的な調整加工で外湾した刃部が形成される類を搔器とした。概観的ではあるが、削器が主体を占めると思われる。126は調整加工が粗雑であることから、石槍未製品の可能性も考えられよう。127は縦長剥片を素材としており、粗雑な調整加工で刃部を整形する。頁岩を石材とし全長178・最大幅57・最大厚29mm・重量288.49gであり、遺構外から出土した打製石斧（図181-1）との関連性も考慮しなければならない石器である。

石籠（図119-129～132）

撥形に成形された石器である。132は打製石斧の可能性も考えられる。

打製石斧（図119-133・134）

本来は礫石器として捉えるべきとも思われるが、石材が頁岩である類を剥片石器の一群とした。133は刃部を欠損するが、長軸の断面形状は図181-1に類似しており、中心部付近が盛り上がる形状である。134は自然面が多分に残存しており、ほぼ刃部のみに調整加工が施される。

石錐（図119-135～142）

摘みが明瞭な類と不明瞭な類があり、錐部も棒状を呈する類と短い類がある。また錐部の短軸断面形状にも相違がみられ、対象物による形状の相違とも考えられるであろう。

両面加工石器（図120-143～123-163）

剥片生産のための素材と考えられるが、掲載した資料には製品と区別し難く、石槍の可能性を考慮しなければならない類もある。また外観的ではあるが、欠損品（半損的）が多いように思われる。図122-158～123-163は、両面加工石器・未製品・石槍の判断がし難い一群である。

石核（図123-164～128-178）

素材剥片作出後の原石素材であり、頁岩を主体に大量に出土している。また原石も多数出土しており（写真4）、本遺跡が石器製作に深く関わっていたことが示唆される。

集石1出土石器（図77・128-179・180・写真4・24）

泥岩を主体とした剥片が集中しておりしており、179は凝灰岩を石材とする使用痕剥片、180は珪質頁岩を石材とする両面加工石器である。

4 磯石器（図129～140）

報告書には一部を掲載したのみであり、出土数量などを把握することはできなかった。以下に器種ごとの概観的所見を述べることとし、詳細は観察表に記載する。

磨製石斧（図129－1～131－22）

片岩・頁岩・砂岩・安山岩・花崗閃緑岩・粘板岩などを石材とし、片岩が主体となるようである。全体的に基部から刃部にかけて幅広となるが、16・19は細身であり基部と同等か狭い刃部を形成する。1～4は台地縁辺部からまとまって出土しており、一括廃棄された可能性などが考えられる。21は擦り切り痕がみられ、再加工・未製品の可能性が考えられる。22は片岩であり、側縁に途上的な加工が施されることから、未製品の可能性が考えられよう。

打製石斧（図131－23～25）

23は花崗閃緑岩・24は泥岩・25は砂岩である。23は側縁に粗雑な加工を施しており、突出する刃部にはわずかな剥離がみられる。24・25は粗雑な加工が施され、基部に抉りがみられる。

半円状扁平打製石器（図132－26～135－48）

安山岩・花崗閃緑岩・閃緑岩・石英安山岩・玢岩などを石材とする。直線的な側縁に、剥離のみでなく、磨り痕や敲きによる潰れ痕が確認される。38・44は側縁に潰れ痕がみられることから、本器種と捉えたが、形状的に打製石斧の可能性も考えられよう。48は欠損部に剥離がみられる。剥離による鋭利な側縁、磨り痕・潰れ痕が確認されることから、多元的な用途を意図した石器と思われる。

磨石（図135－49・50）

磨り痕のみがみられる一元的な石器である。49・50は安山岩を石材とする。50は形状的特徴から石剣・石刀など石製品の可能性も考えられるが、磨り面が平滑な一辺のみであったため本器種とした。

凹石（図135－55～136－58）

敲き痕のみがみられる一元的な石器である。55～58は安山岩を石材とする。敲きによる使用痕は数カ所に及び、対象物を反映した痕跡が、窪みとして残存している。

敲石（図136－59～64）

凹石と同様に敲き痕のみがみられる一元的な石器である。安山岩・花崗閃緑岩などを石材とする。礫の長軸先端部に潰れ・剥離による使用痕がみられる。後者は、形状的特徴から石錘の可能性も考えられるであろう。

敲磨器（図136－65～138－82）

磨り・敲き痕がみられる多元的な石器である。安山岩・石英安山岩・花崗閃緑岩・玄武岩・閃緑岩・玢岩などを石材とする。

石皿・台石類（図138－83～139－91）

使用痕が明瞭である類を石皿とし、不明瞭である類を台石とした。安山岩・砂岩などを石材とする。

擦切具（図140－92～98）

扁平で、磨り痕がみられる側縁の断面形状は、三角状となる。磨製石斧にみられた擦り切り痕に対応する石器である。頁岩・花崗閃緑岩・斑鷺岩などを石材とする。

石錘（図140－99・100）

溝状の痕跡がみられる類を石錘と捉えたが、明瞭ではない。99は安山岩・100は泥岩を石材とする。先にも述べたが、敲石とした両端に剥離がみられる類を石錘と捉えるべきかも知れない。

その他の礫（図135－51～54・140－101）

51～54は、わずかな磨り痕や光沢がみられる類である。101は石鉄鉱であり、遺物に付着する赤色物質との関連性が考慮されるが、未分析であり、詳細は不明である。

5 土製品（図141-1～4）

土偶が2点出土しており、1は完形であり、2は体部のみの破損品である。1の形状は、扁平な逆三角形といえよう。頭部が突出し、肩部がやや張り出す形状である。頭頂部は押圧されており、体部中心部にも押圧が施され凹状となる。また、窪みの下位にも刻み状の刺突らしき痕跡が確認される。外面には、R Lが施文される。2は体部の破片であり、形状は1と類似すると思われる。体部には、表面を主体に爪の圧痕が施される。爪形は3mm程であり、外側を下方に向いている。文様構成は、爪形が左下がりの斜位に重層的に施され、単発的に直交する爪形が施される。また、胎土には植物纖維が混入する。3は土器の装飾帶とも考えたが、接合痕などがみられないことから土製品とした。全体的な形状は三角状であり、窪んだ部分には赤色の付着物がみられる。突出した部分が足ともみられ、熊や猪などの動物を模倣した可能性も考えられるが、詳細は不明である。4は板状の塊であり、胎土には植物纖維が混入しており、非常に脆い。用途などの詳細は不明である。これらの土製品は、第1号捨て場の年代観から、円筒下層d～上層a式に位置付けられよう。

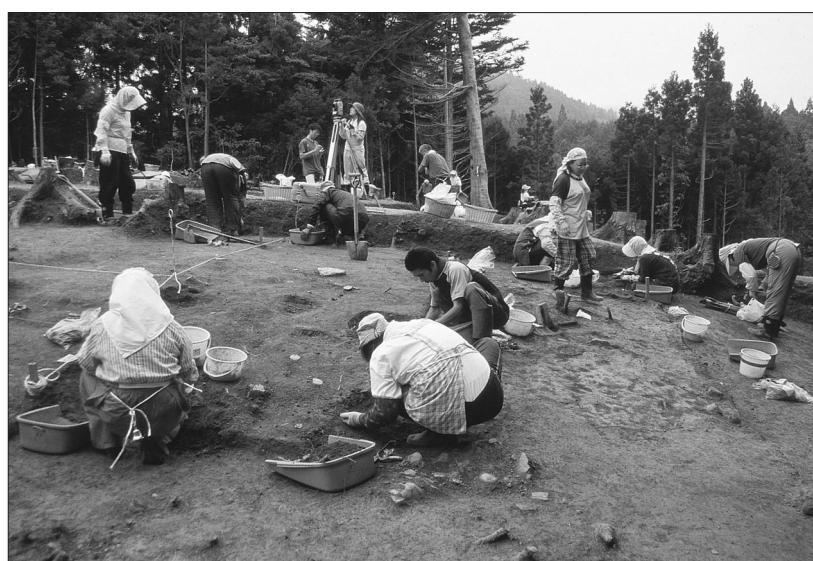
6 石製品（図141-1～143-16）

片岩を石材とする玦状耳飾が2点出土している。1は欠損しており、穿孔が2ヵ所確認される。欠損品の再利用、加工途上の可能性が考えられよう。2は頂部の欠損を再加工したと考えられよう。欠損部と想定される部分は磨かれているが、やや不整であることから、再加工と考えることが妥当であろう。玦状耳飾は前期を代表する装身具であり、むつ市瀬野遺跡（脇野沢村1998）に良好な類例をみることができる。4・5は自然礫と思われるが、石製品として使用された可能性が考えられるため図示した。5は所謂、雨垂石であるが装身具として用いられた可能性が考えられよう。4は形状的には耳栓に類似する。3・6も自然礫の可能性が考えられるが、形状から石製品として使用された可能性が考えられよう。7は北海道式石冠、8は青竜刀形石器の可能性が考えられるが、頂部にみられる磨り痕から擦切具の可能性も考慮しなければならないであろう。9～16は石棒と考えられ、安山岩を石材とし全て欠損する。10・13・16は敲打により成形されており、16は部分的に磨りにより整形される。13・15は端部に敲き痕があり（成形段階の敲打の可能性も考えられる）、13は被熱する。14には抉りがみられる。

（野村 信生）

引用文献

脇野沢村農林畜産家1998『青森県脇野沢村瀬野遺跡』



北側台地縁辺部作業風景

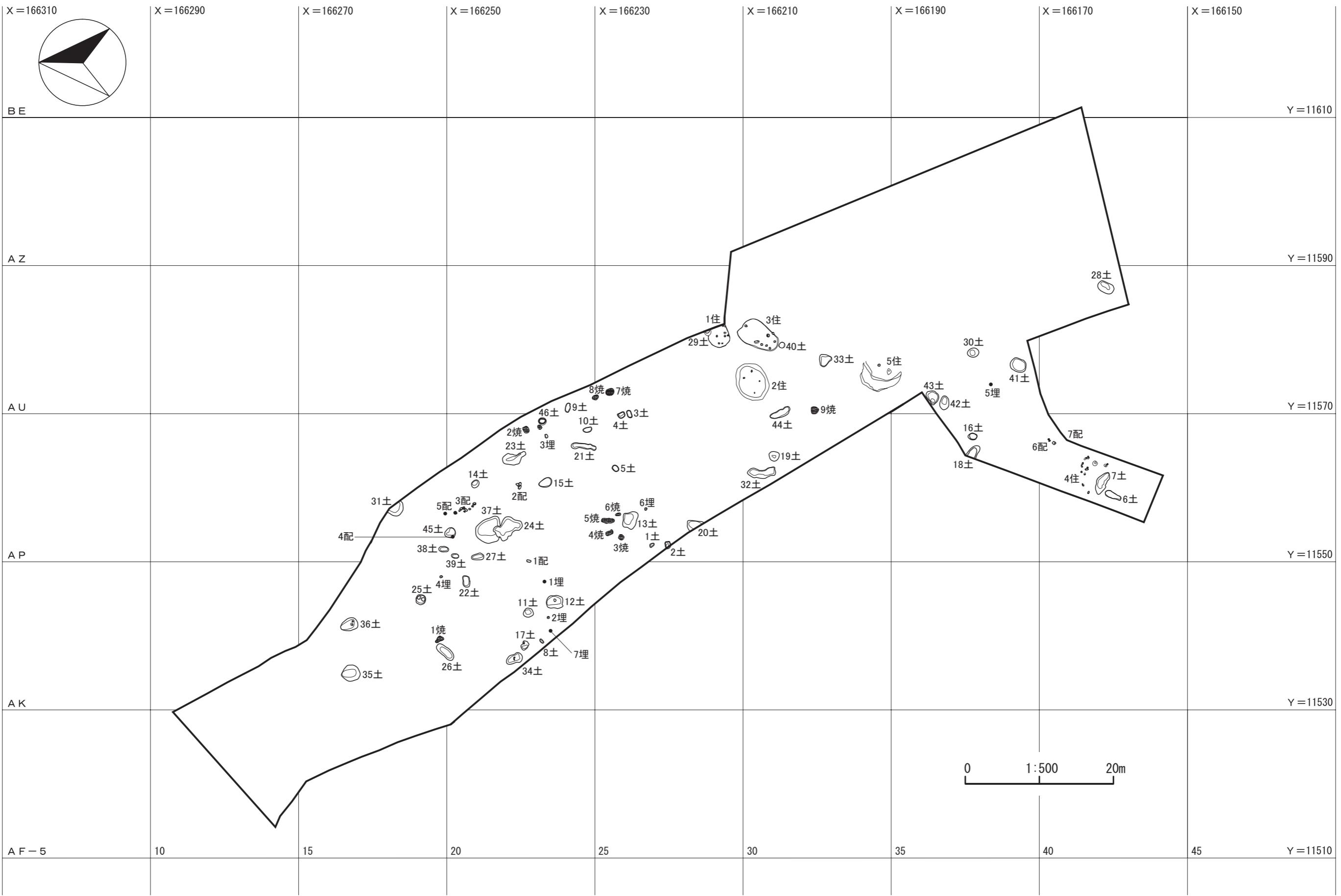
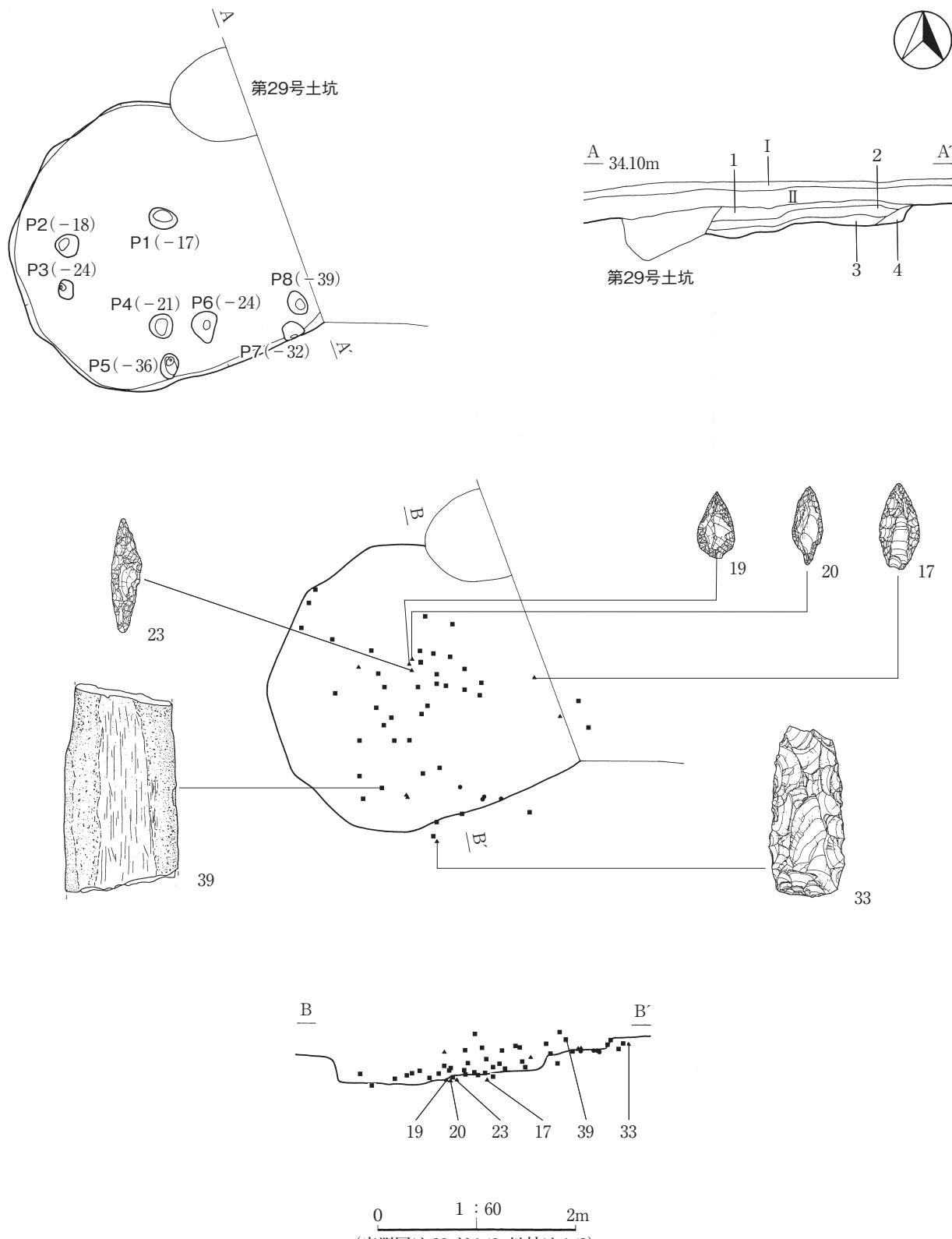


図2 遺構配置図

**第1号住居跡**

I層	10Y R 3 / 4 暗褐色土	10Y R 4 / 6 褐色土10%
II層	10Y R 4 / 6 褐色土	10Y R 5 / 6 黄褐色土5%、炭化物（ ϕ 1 mm）1%
1層	10Y R 3 / 4 暗褐色土	炭化物（ ϕ 1 ~ 2 mm）1%
2層	10Y R 4 / 4 褐色土	7.5Y R 5 / 6 明褐色土1%
3層	10Y R 4 / 6 褐色土	7.5Y R 4 / 6 褐色土30%、10Y R 5 / 6 黄褐色砾（ ϕ 2 ~ 5 mm）3%、10Y R 8 / 6 黄橙色土（ ϕ 2 ~ 5 mm）1%
4層	7.5Y R 4 / 4 褐色土	10Y R 4 / 4 褐色土40%、炭化物（ ϕ 1 mm）1%

図3 第1号住居跡1

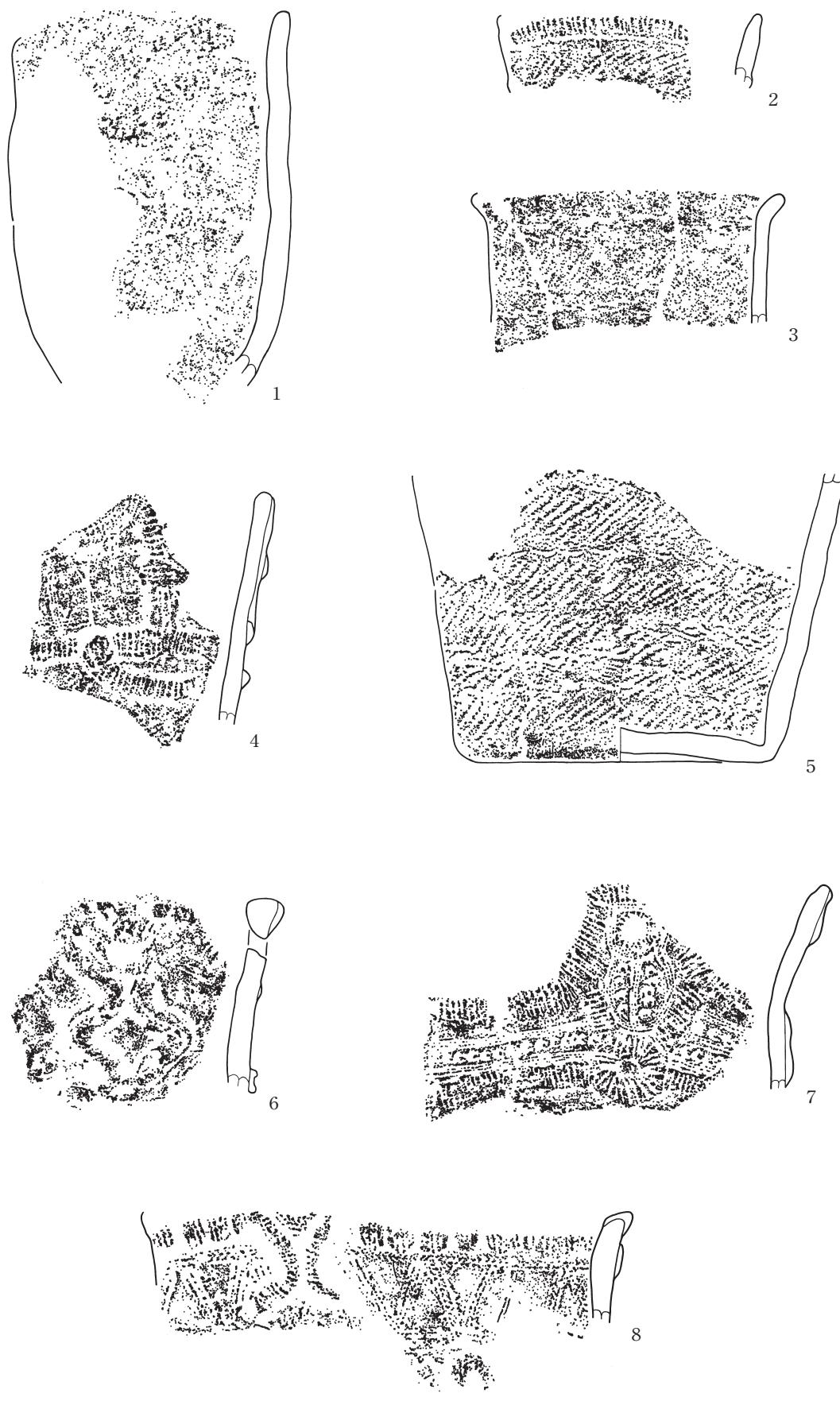


図4 第1号住居跡2

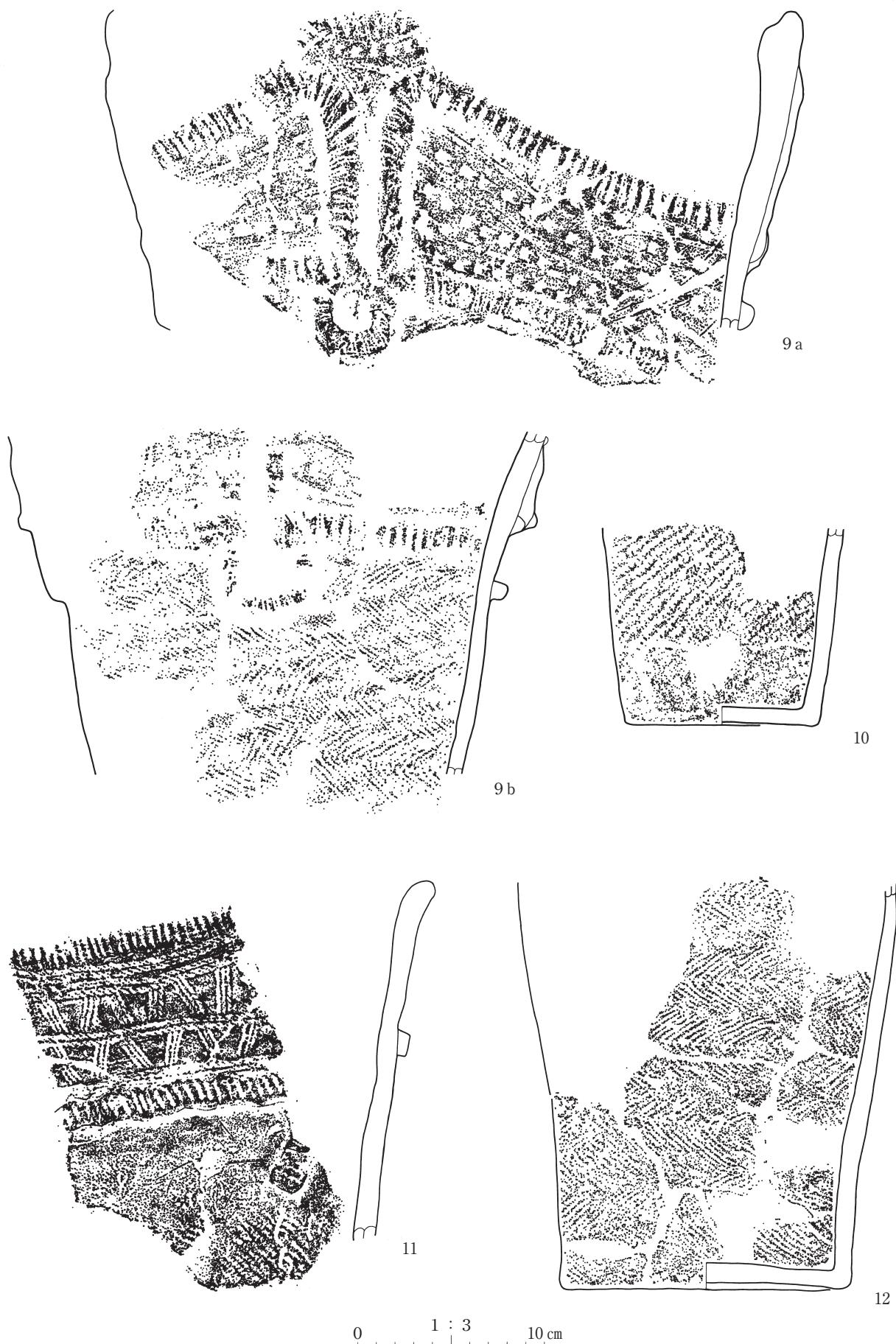


図5 第1号住居跡3



図6 第1号住居跡4

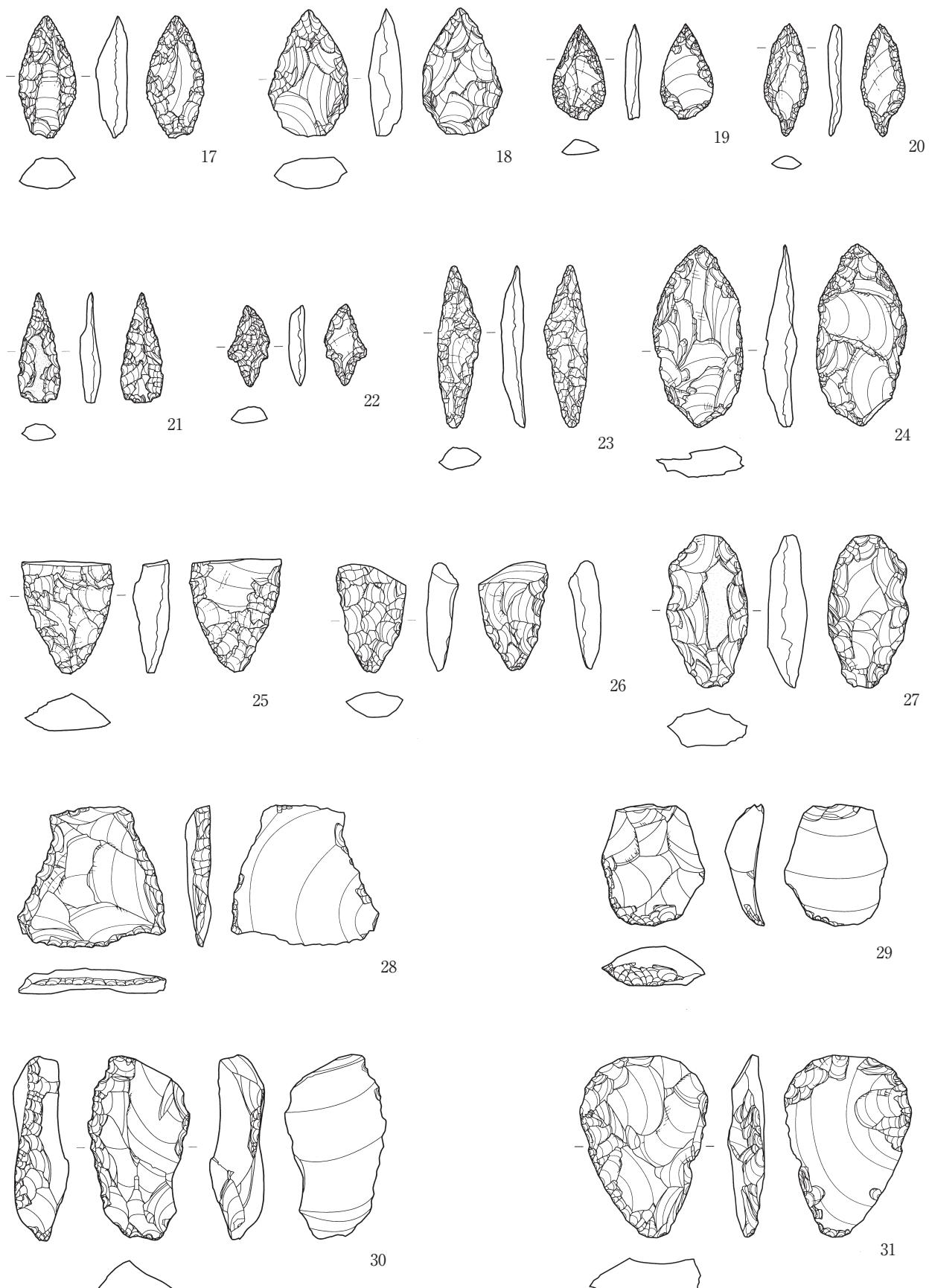
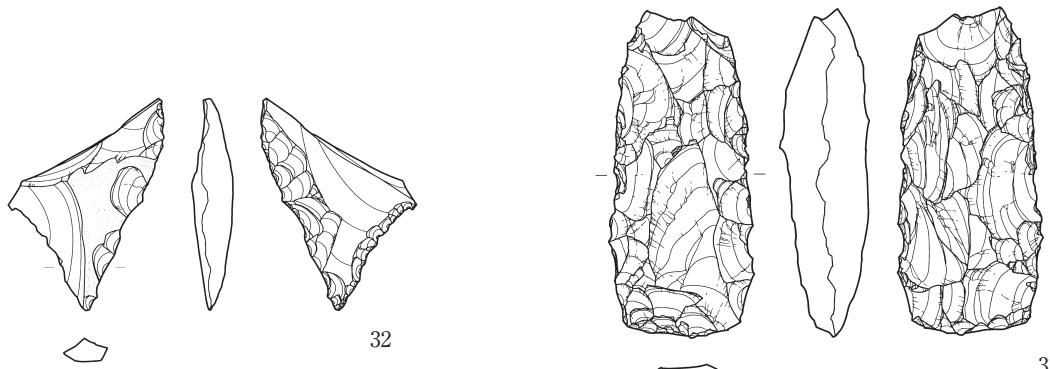


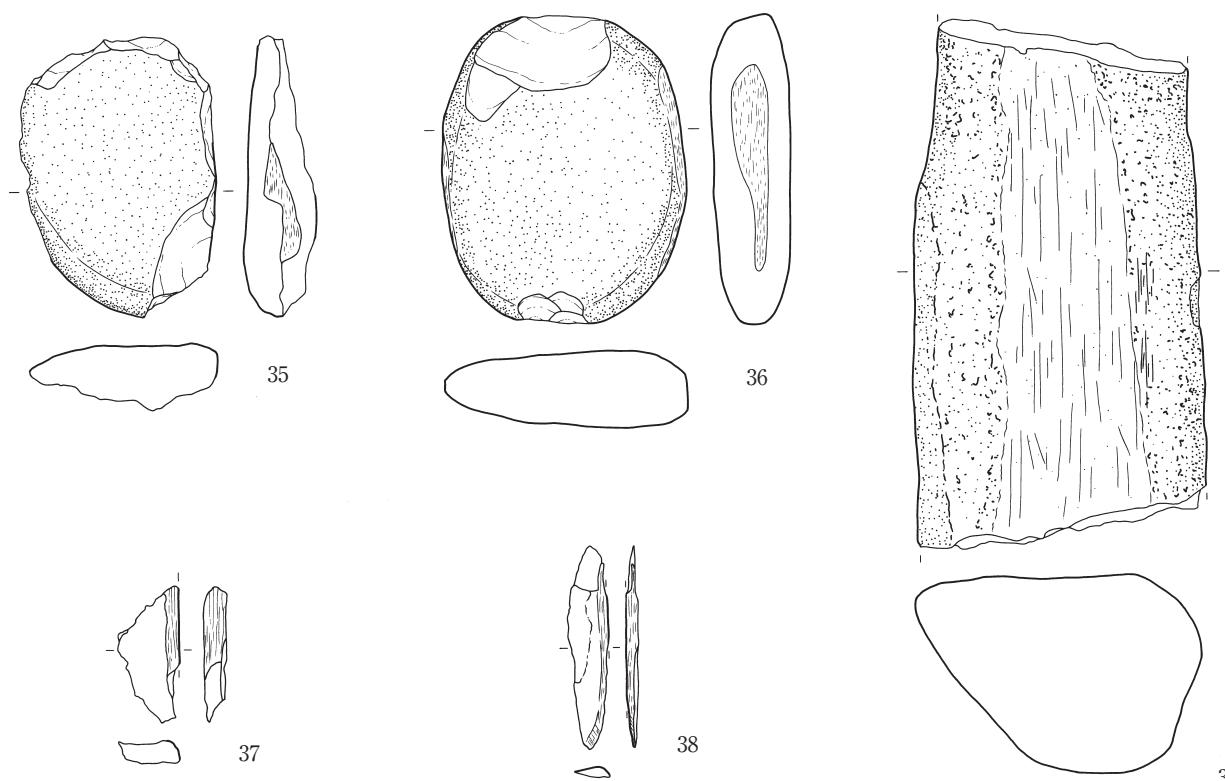
図7 第1号住居跡5



33

32

34



39

36

35

37

38

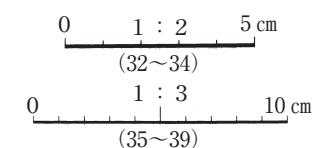
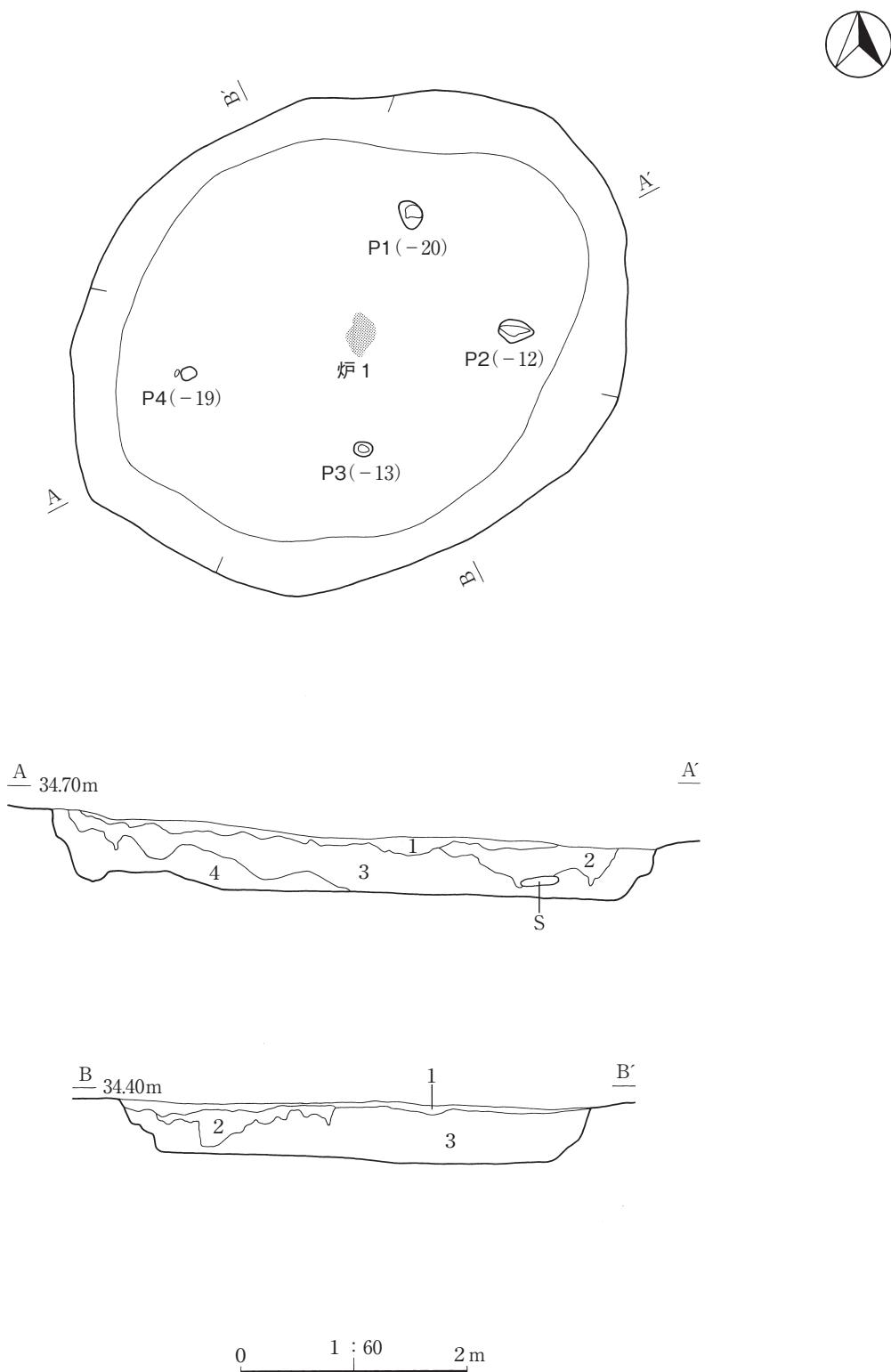


図8 第1号住居跡6



第2号住居跡

- 1層 10Y R 4 / 4 褐色土
2層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
3層 7.5Y R 4 / 6 褐色土
4層 7.5Y R 5 / 6 明褐色土
- 10Y R 4 / 6 褐色土20%、10Y R 5 / 4 にぶい黄褐色粘土10%、10Y R 6 / 6 明黄褐色火山灰（B-Tm）5%、10Y R 5 / 2 灰黄褐色火山灰（B-Tm）5%、炭化物（ ϕ 1 ~ 10mm）1%
10Y R 4 / 6 褐色土30%、炭化物（ ϕ 1 ~ 5mm）3%、
10Y R 4 / 4 褐色土20%、10Y R 3 / 4 暗褐色土15%、炭化物（ ϕ 1 ~ 10mm）5%
10Y R 4 / 6 褐色土15%、10Y R 3 / 4 暗褐色土10%、炭化物（ ϕ 1 ~ 5mm）10%

図9 第2号住居跡1

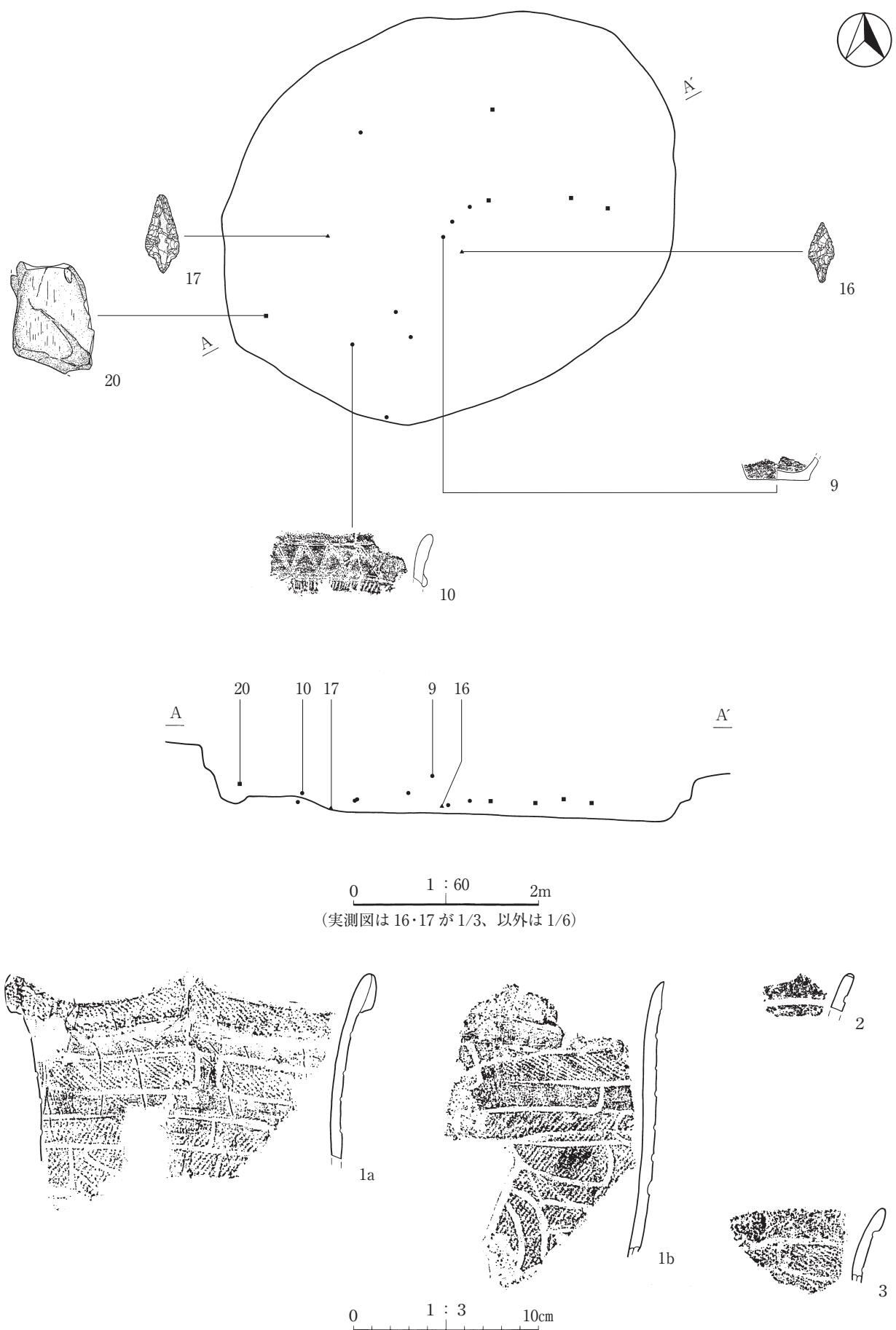


図10 第2号住居跡2

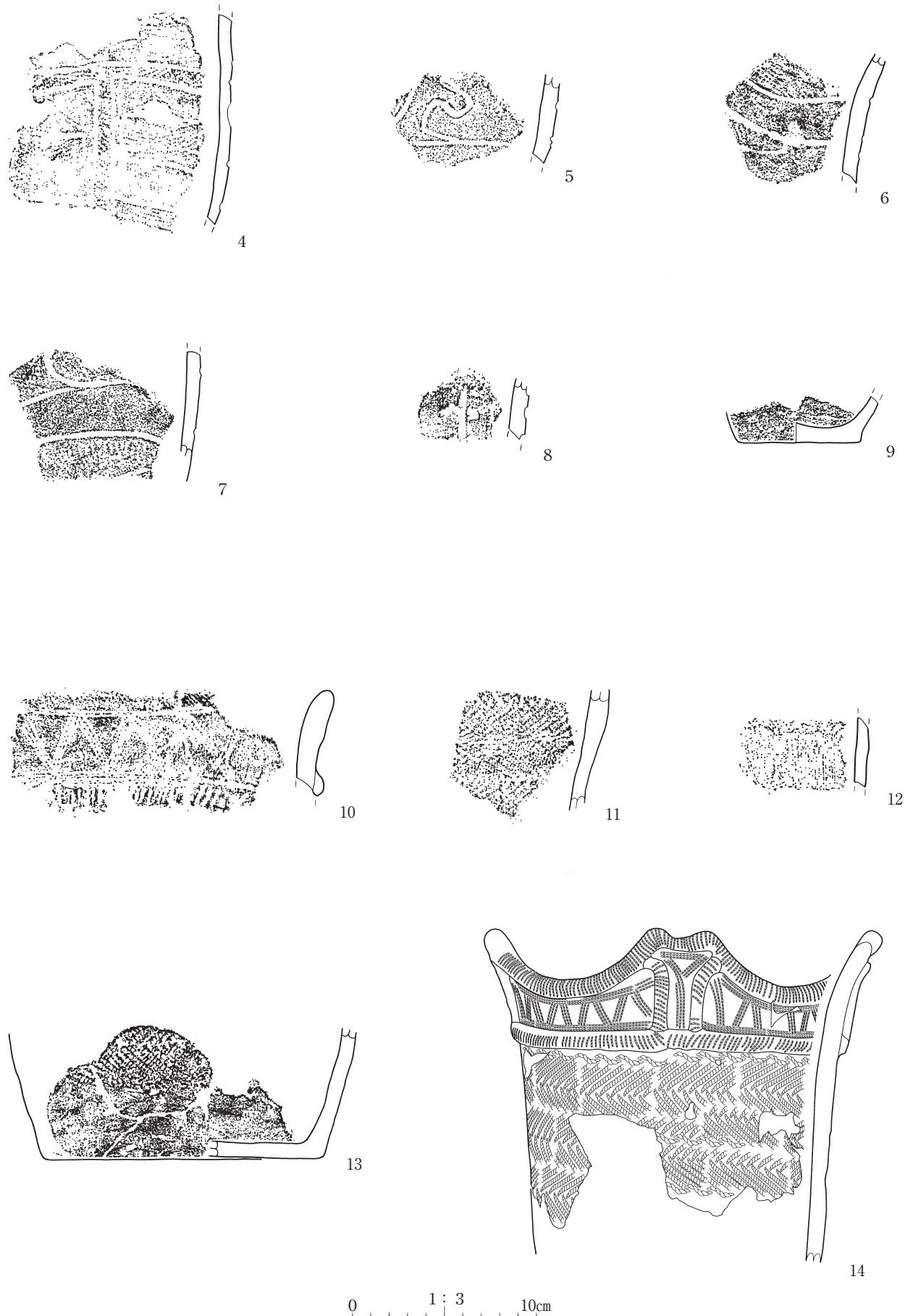
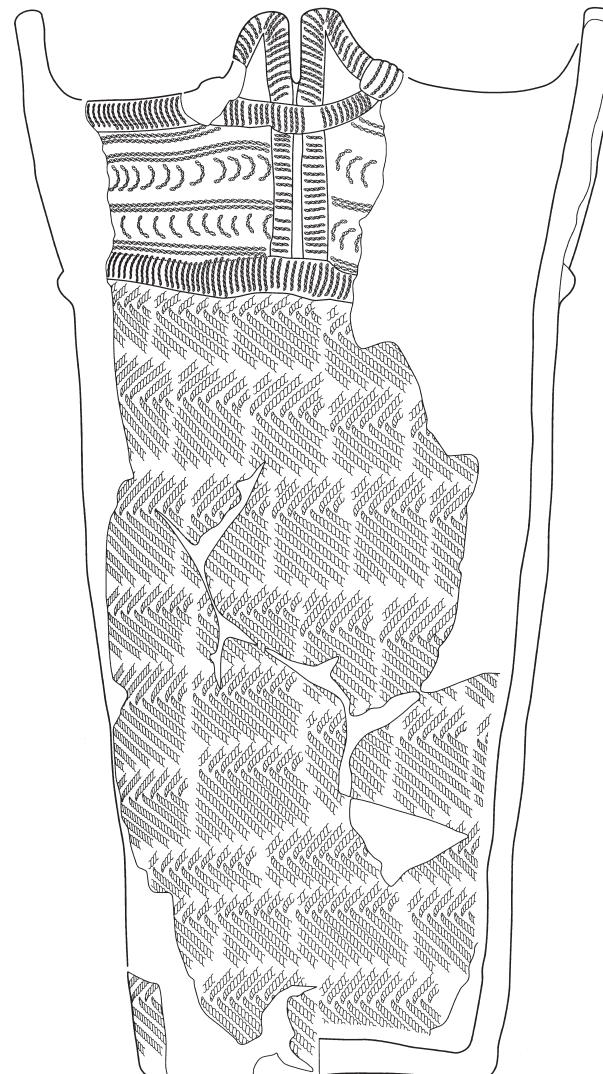
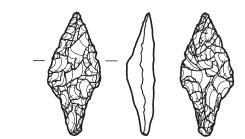


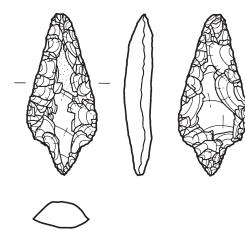
図11 第2号住居跡3



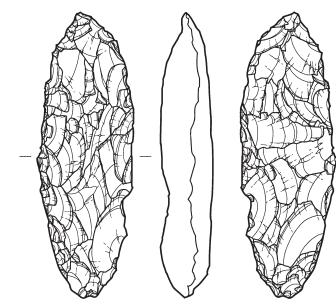
15



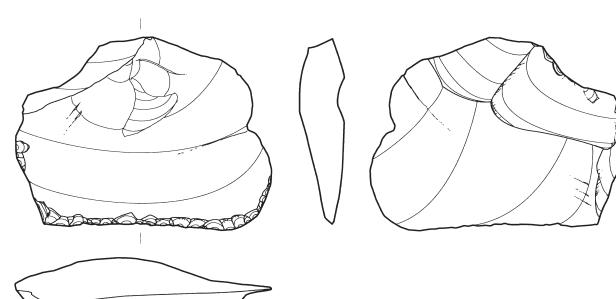
16



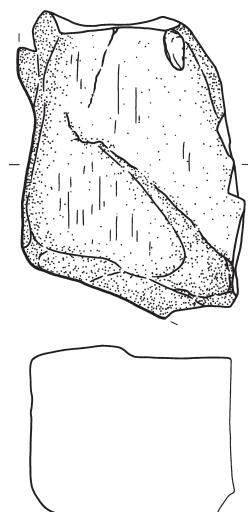
17



18



19



20

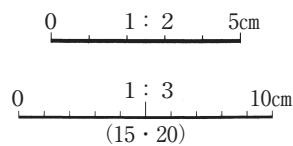
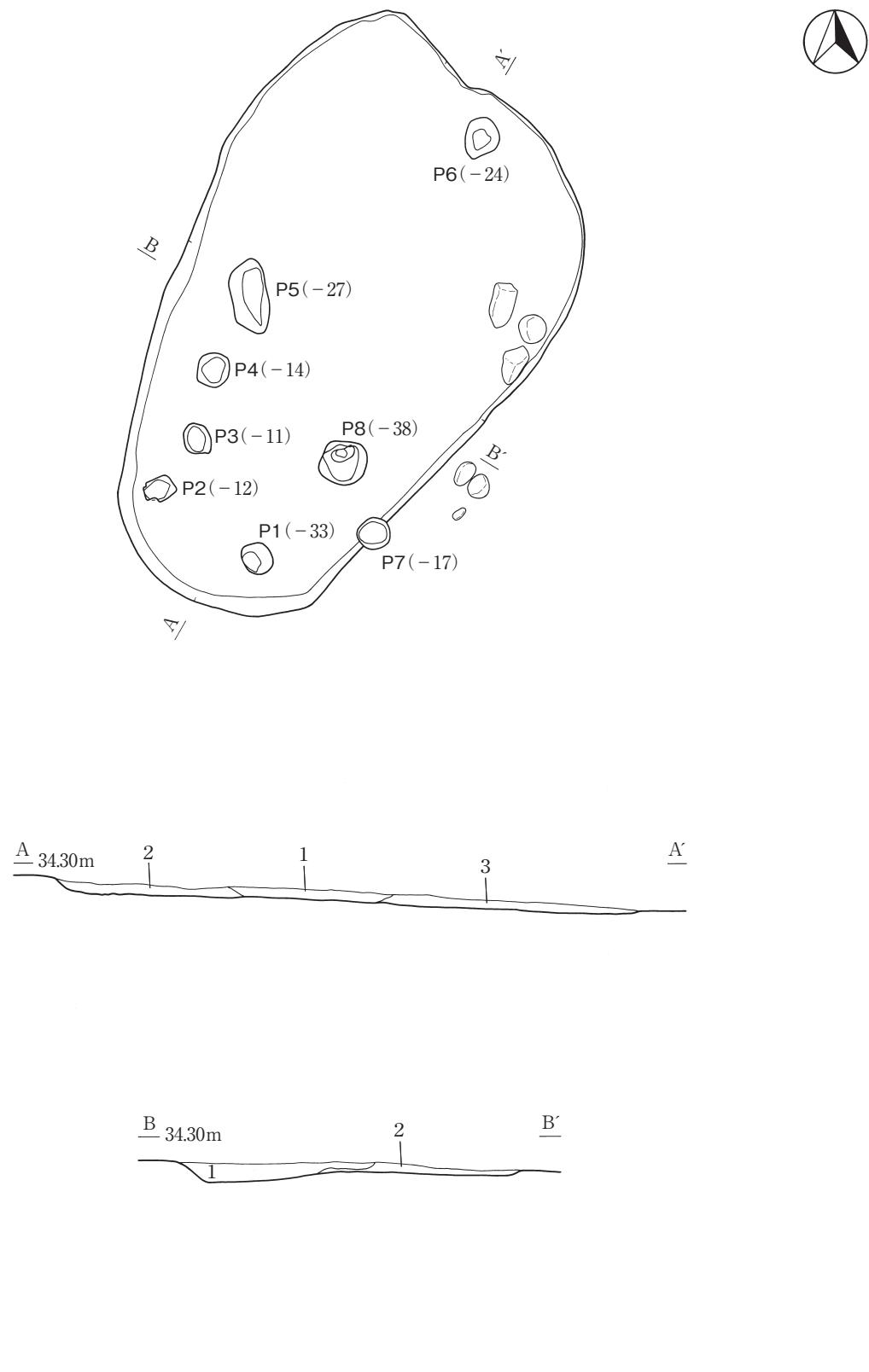


図12 第2号住居跡4



第3号住居跡

1層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
 2層 10Y R 4 / 6 褐色土
 3層 7.5Y R 4 / 6 褐色土

7.5Y R 4 / 6 褐色土10%、炭化物（ ϕ 1 ~ 3 mm）10%
 10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色土20%、炭化物（ ϕ 1 ~ 2 mm）5%
 10Y R 5 / 6 黄褐色土20%、10Y R 8 / 2 灰白色火山灰（B-Tm）5%

図13 第3号住居跡1

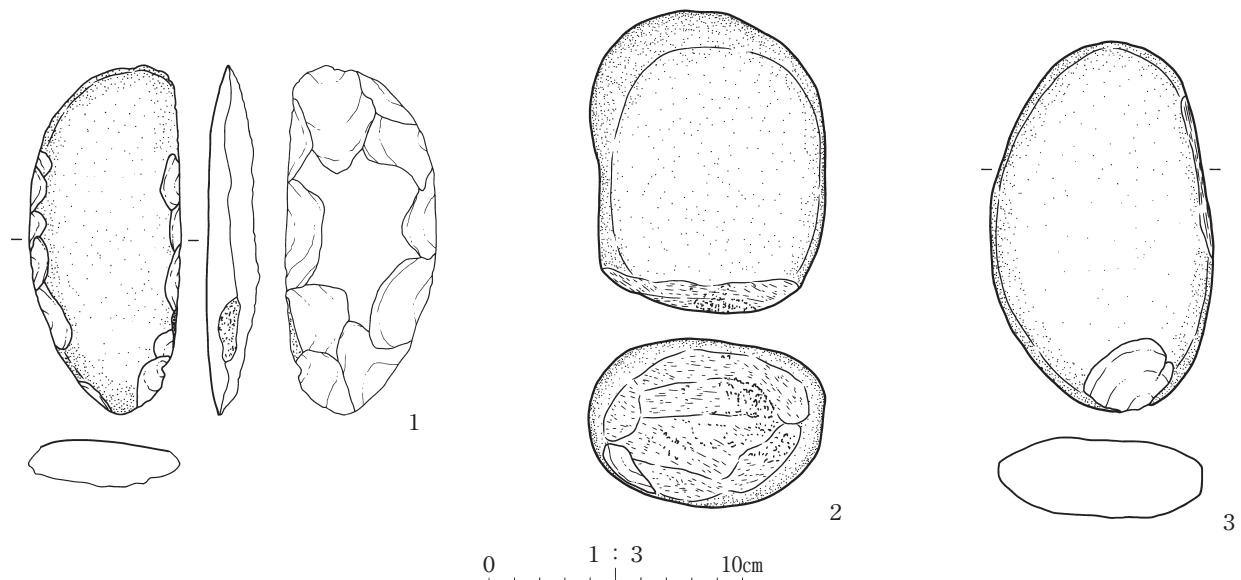
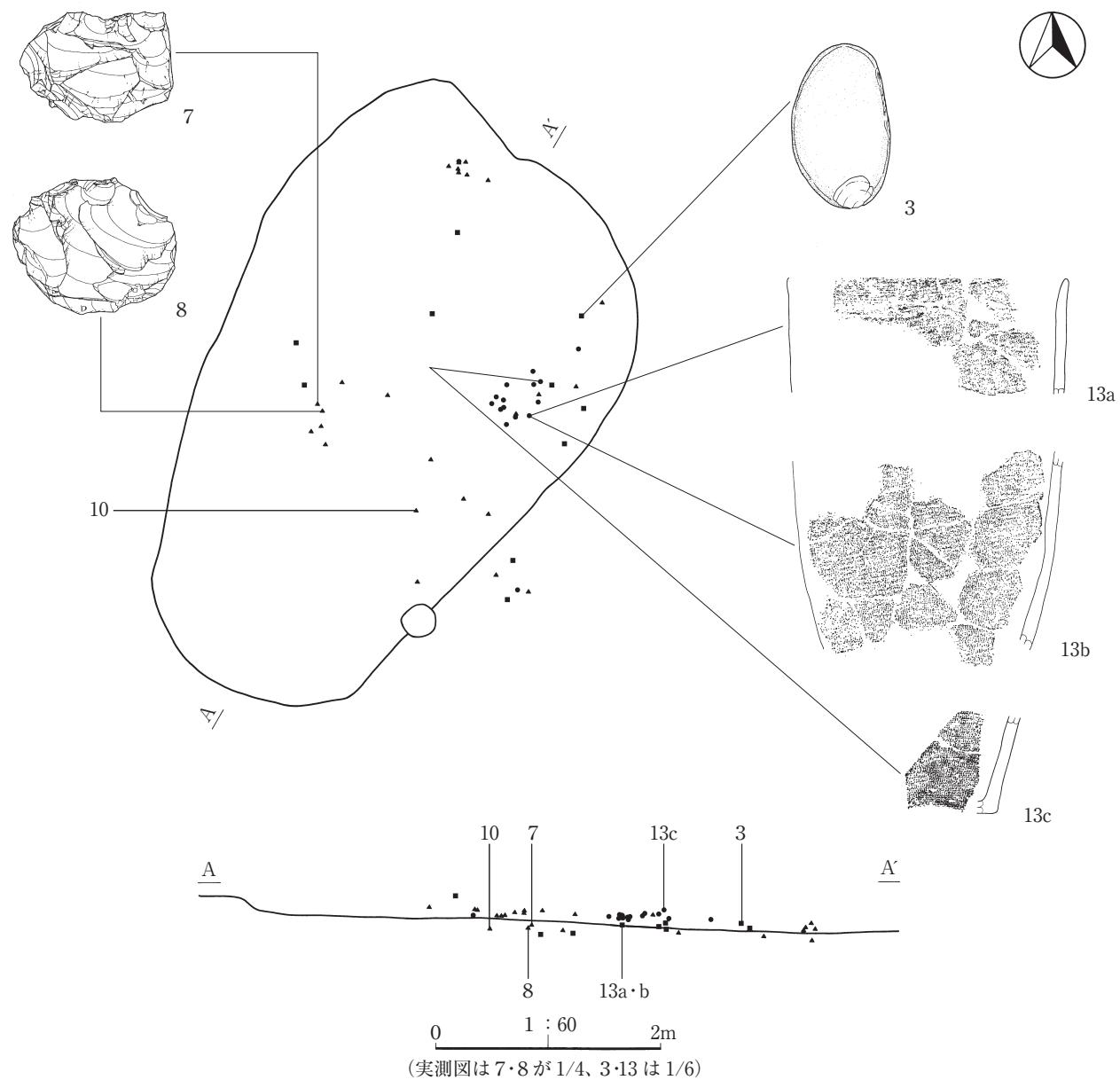


図14 第3号住居跡2

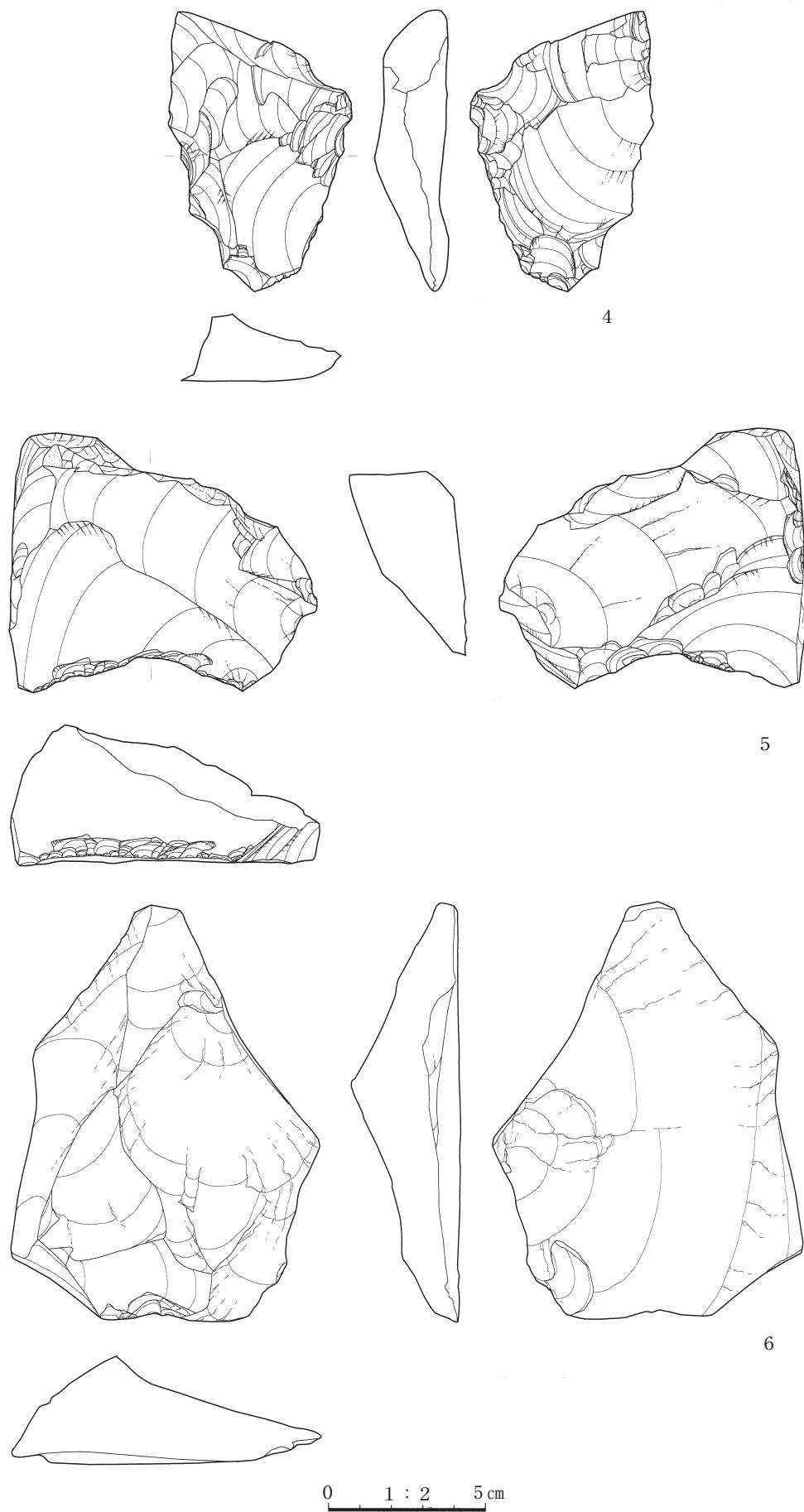
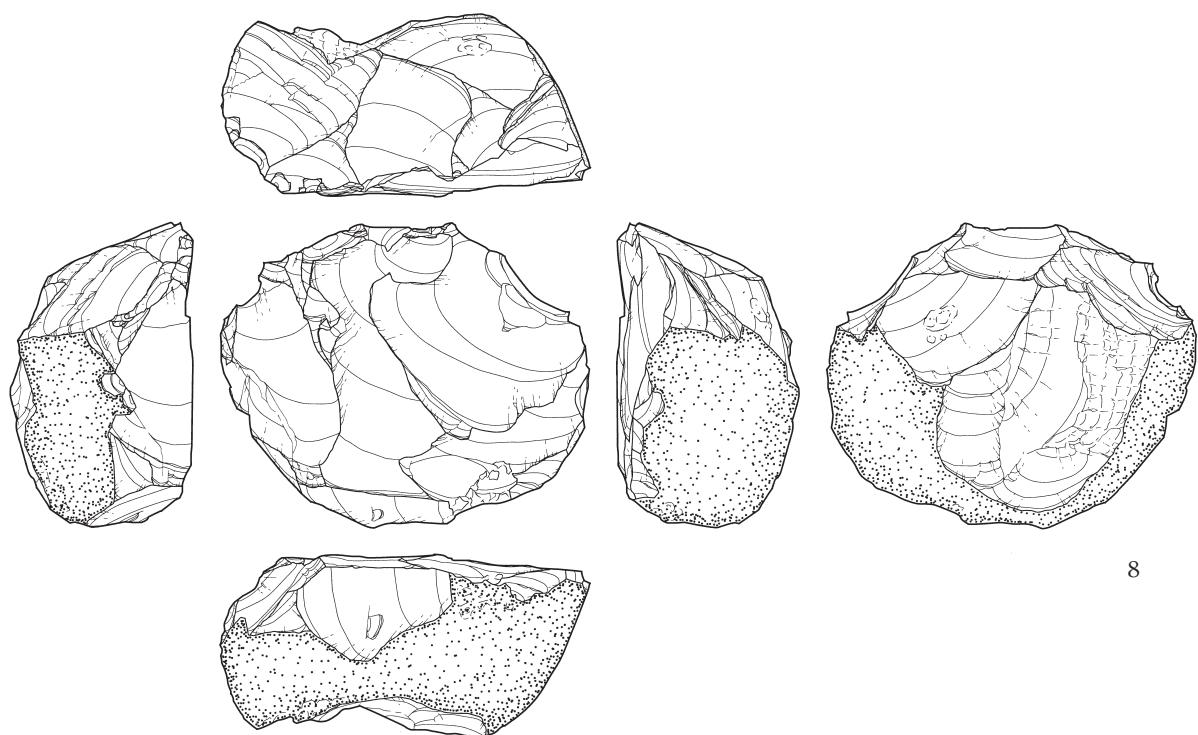
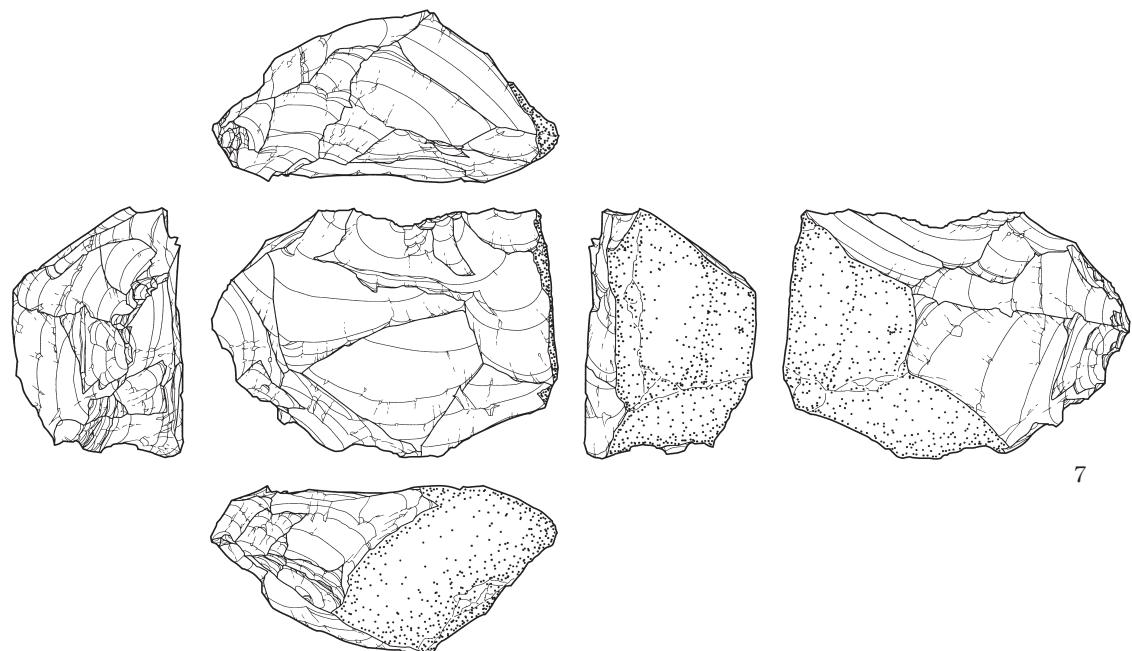
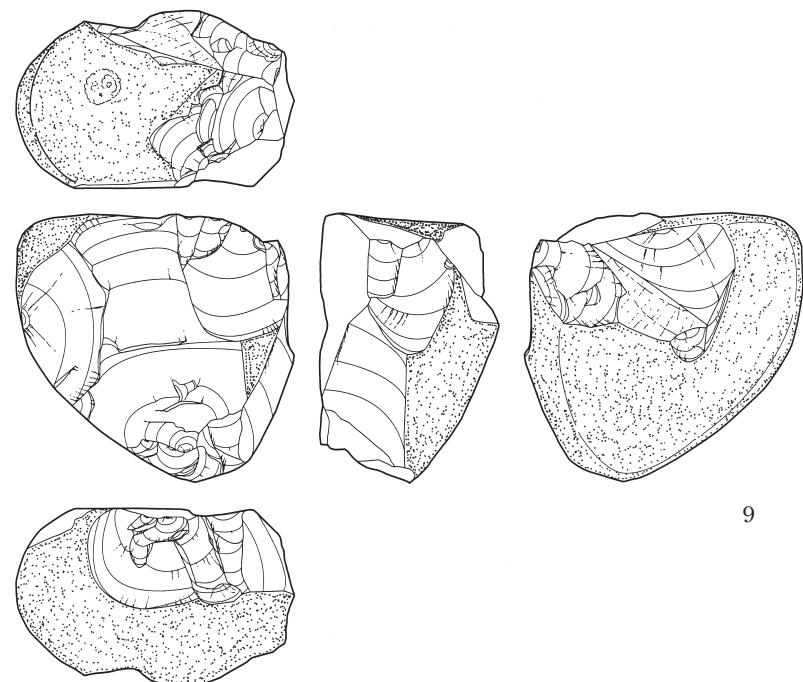


図15 第3号住居跡3

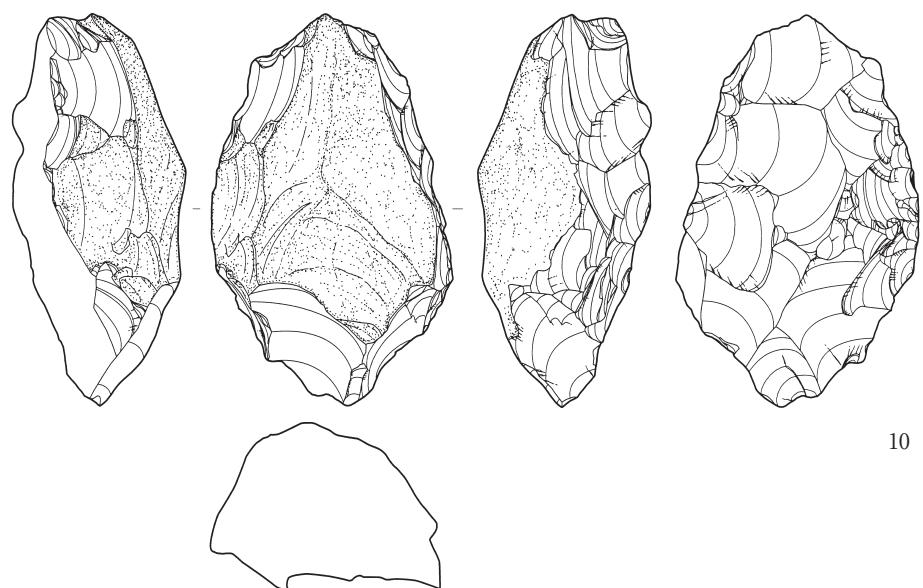


0 1 : 2 5 cm

図16 第3号住居跡4



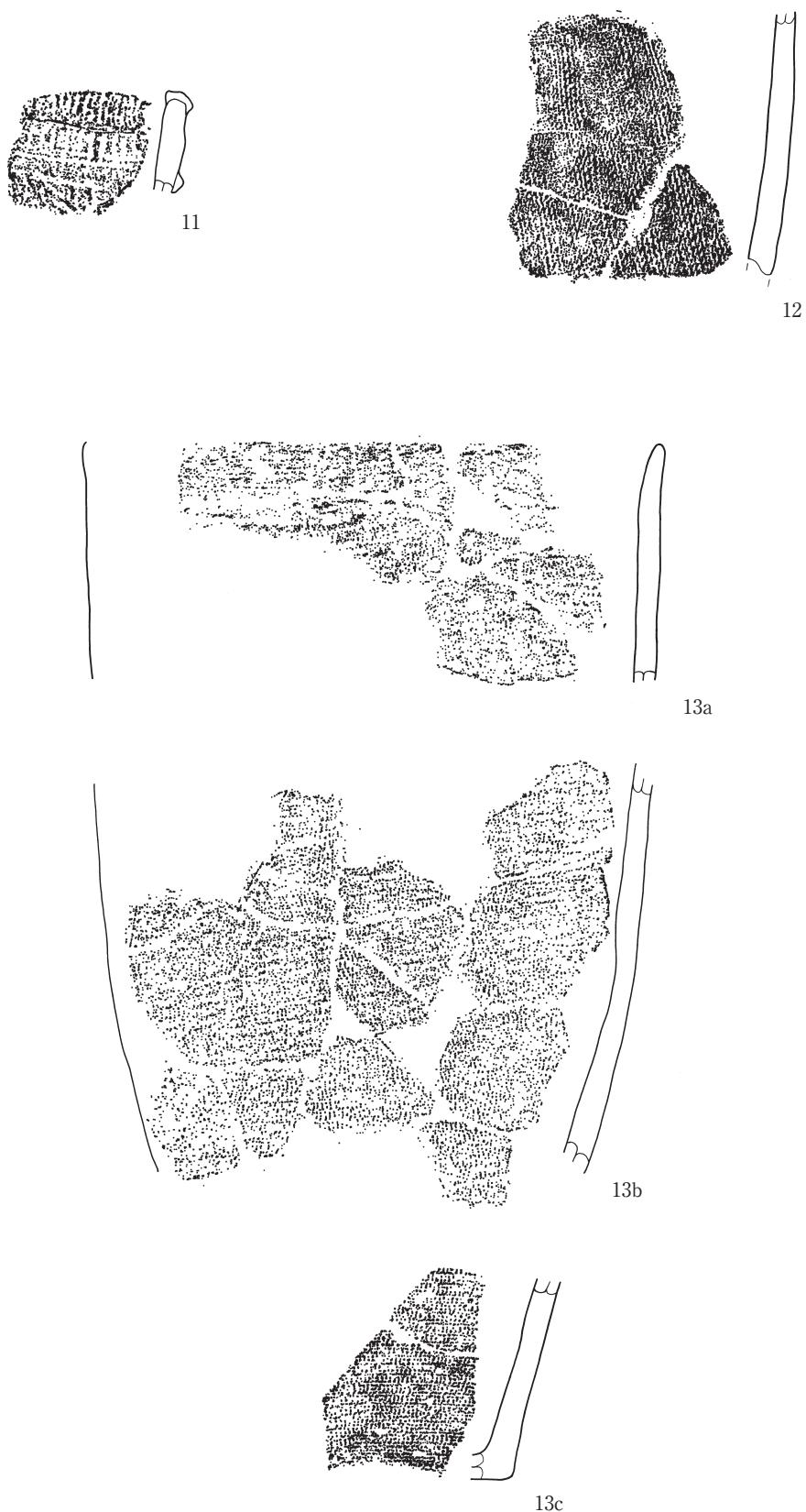
9



10

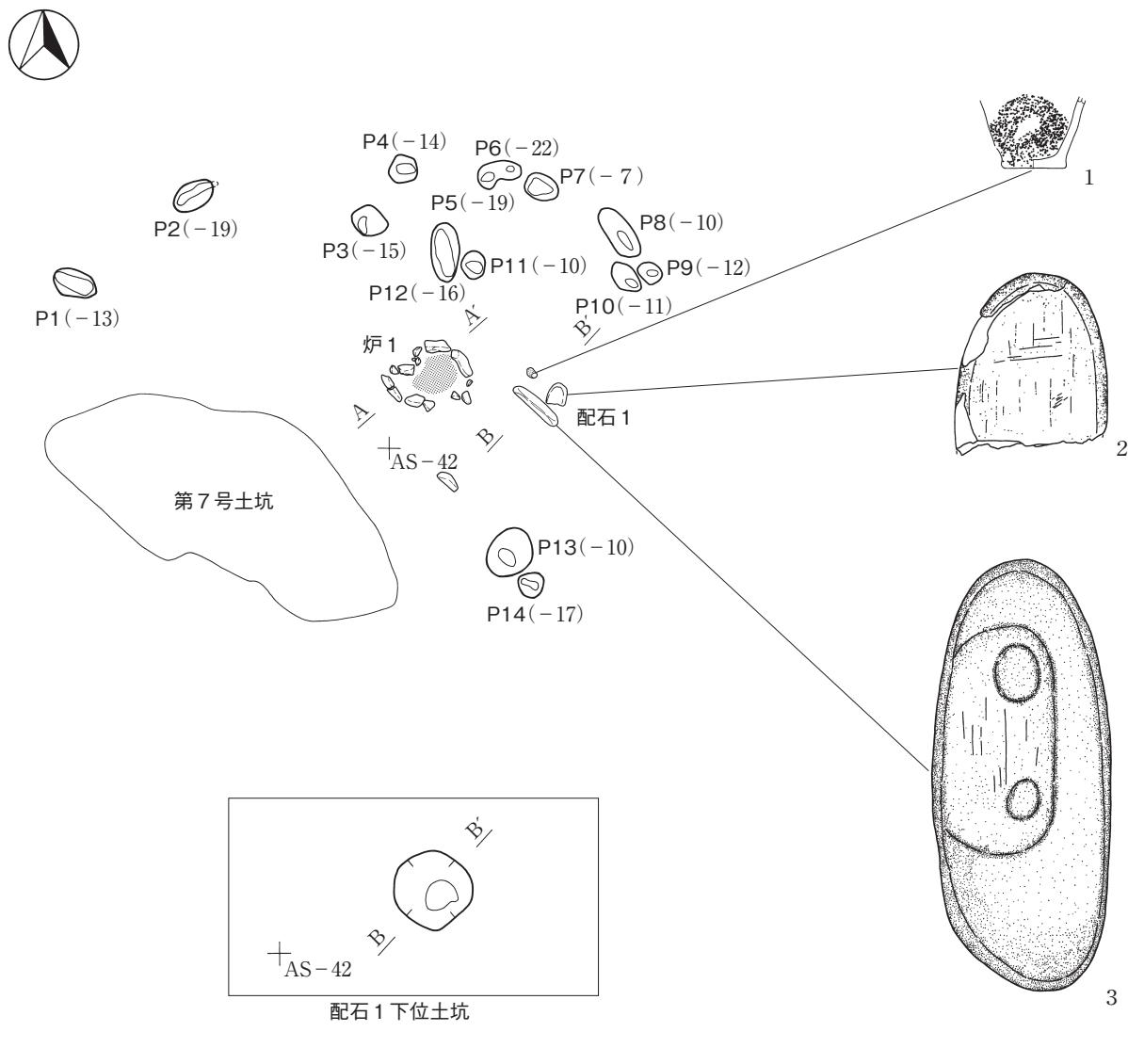
0 1 : 3 10cm

図17 第3号住居跡5



0 1 : 3 10cm

図18 第3号住居跡6



0 1 : 60 2m
(実測図は1が $\frac{1}{6}$ 、2・3は $\frac{1}{8}$)

第4号住居跡

炉1 (A-A')

1層 10Y R 4/4 暗褐色土
2層 5Y R 3/6 暗赤褐色燒土 7.5Y R 4/6 暗褐色土20%
3層 7.5Y R 3/4 暗褐色土 炭化物 ($\phi 1 \sim 2\text{ mm}$) 10%

配石1 (B-B')

1層 10Y R 3/4 暗褐色土 炭化物 ($\phi 1\text{ mm}$) 1%
2層 10Y R 3/3 暗褐色土 10Y R 4/4 暗褐色土10%
3層 10Y R 4/6 暗褐色土 10Y R 3/4 暗褐色土10%、炭化物 ($\phi 1\text{ mm}$) 5%
4層 7.5Y R 4/4 暗褐色土 10Y R 4/6 暗褐色土20%、炭化物 ($\phi 1 \sim 2\text{ mm}$) 10%

図19 第4号住居跡1

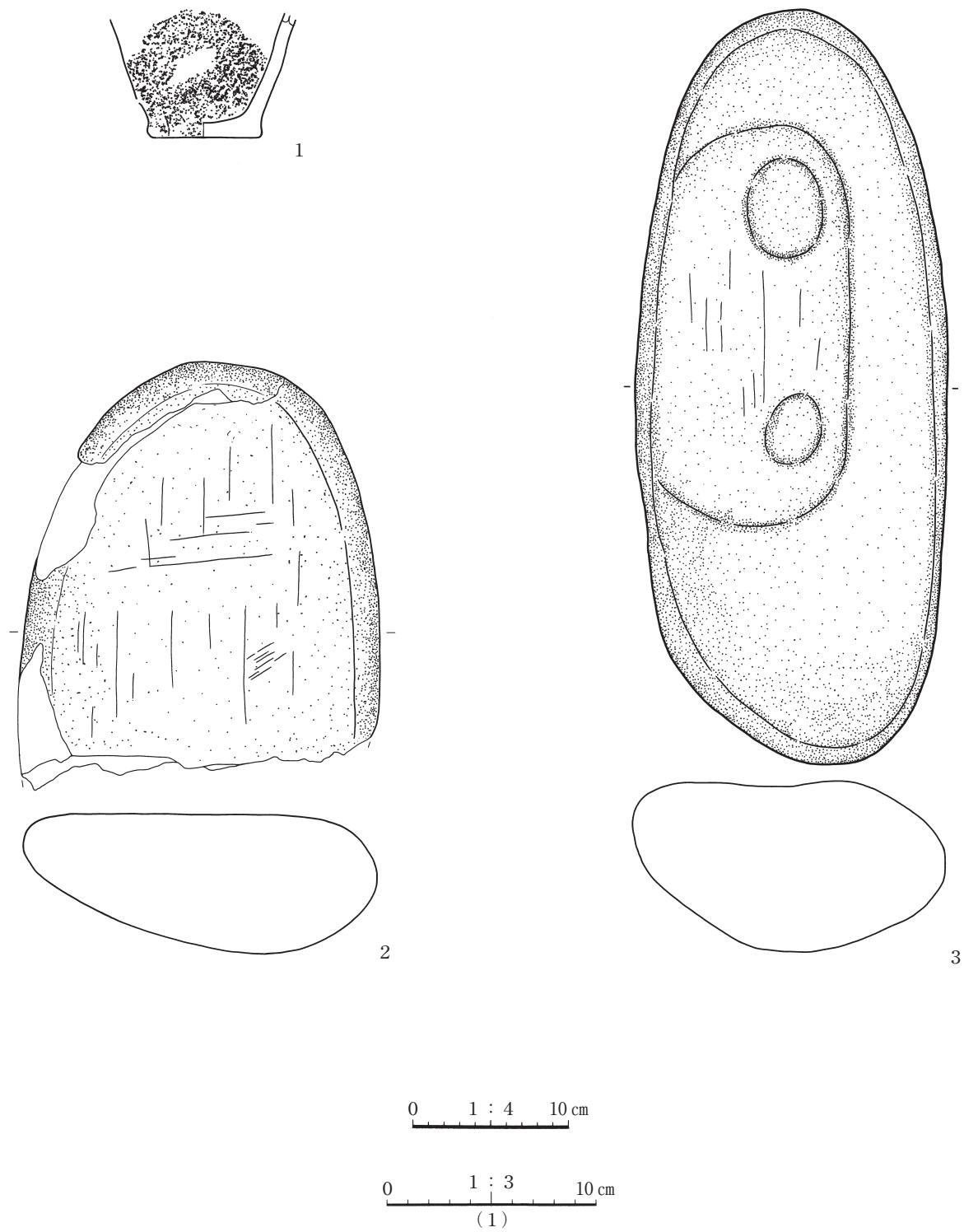


図20 第4号住居跡2

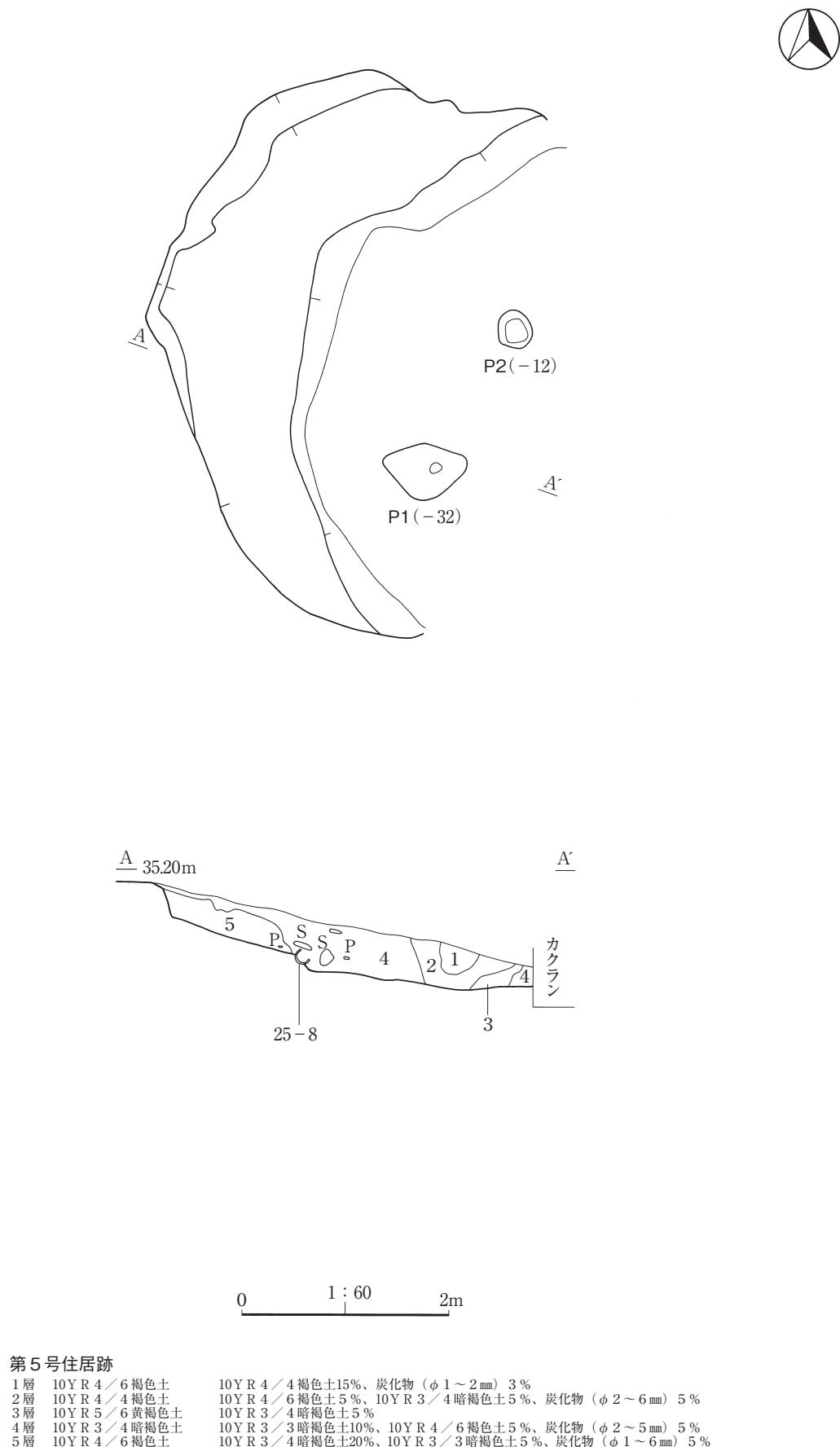


図21 第5号住居跡1

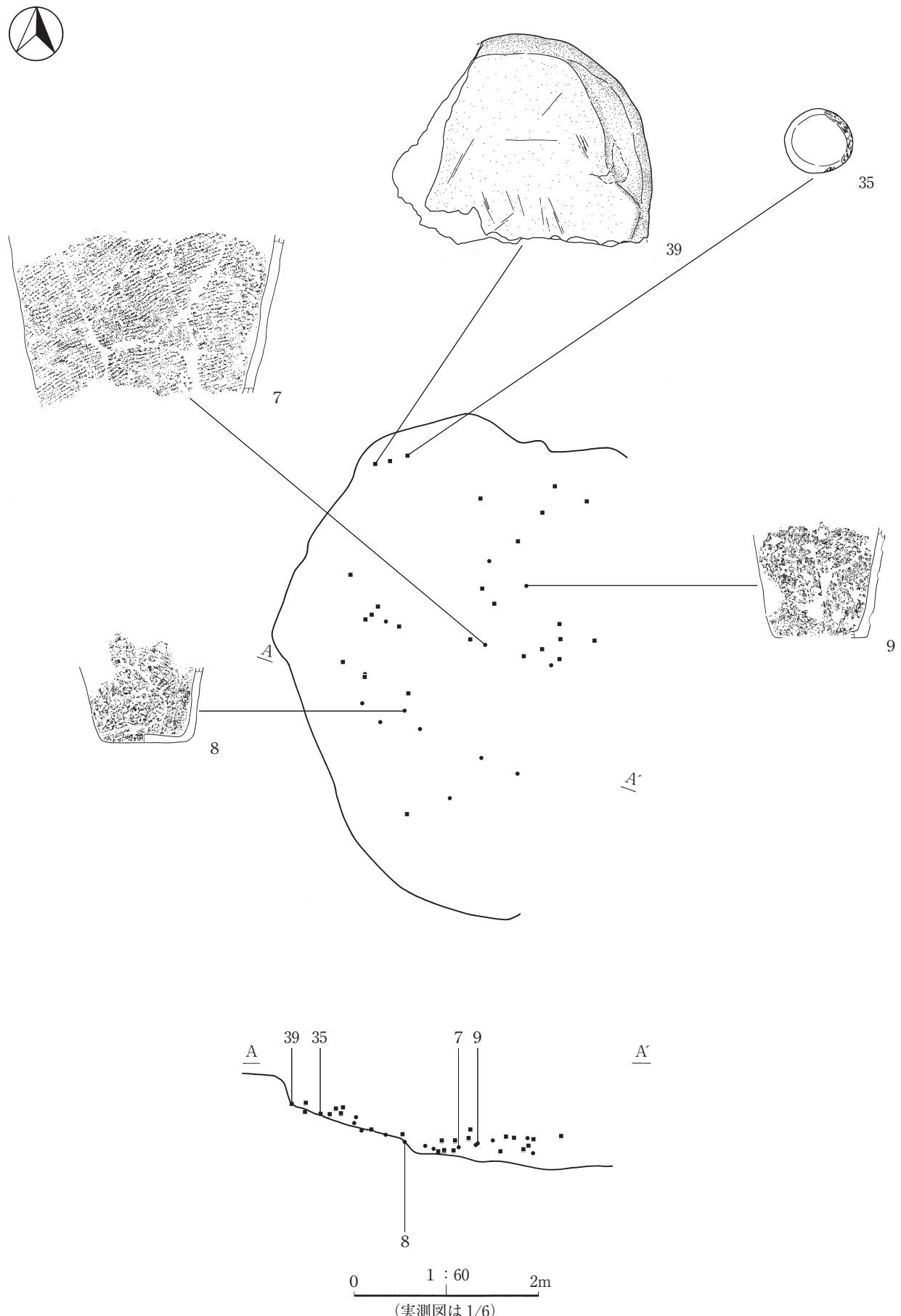


図22 第5号住居跡2

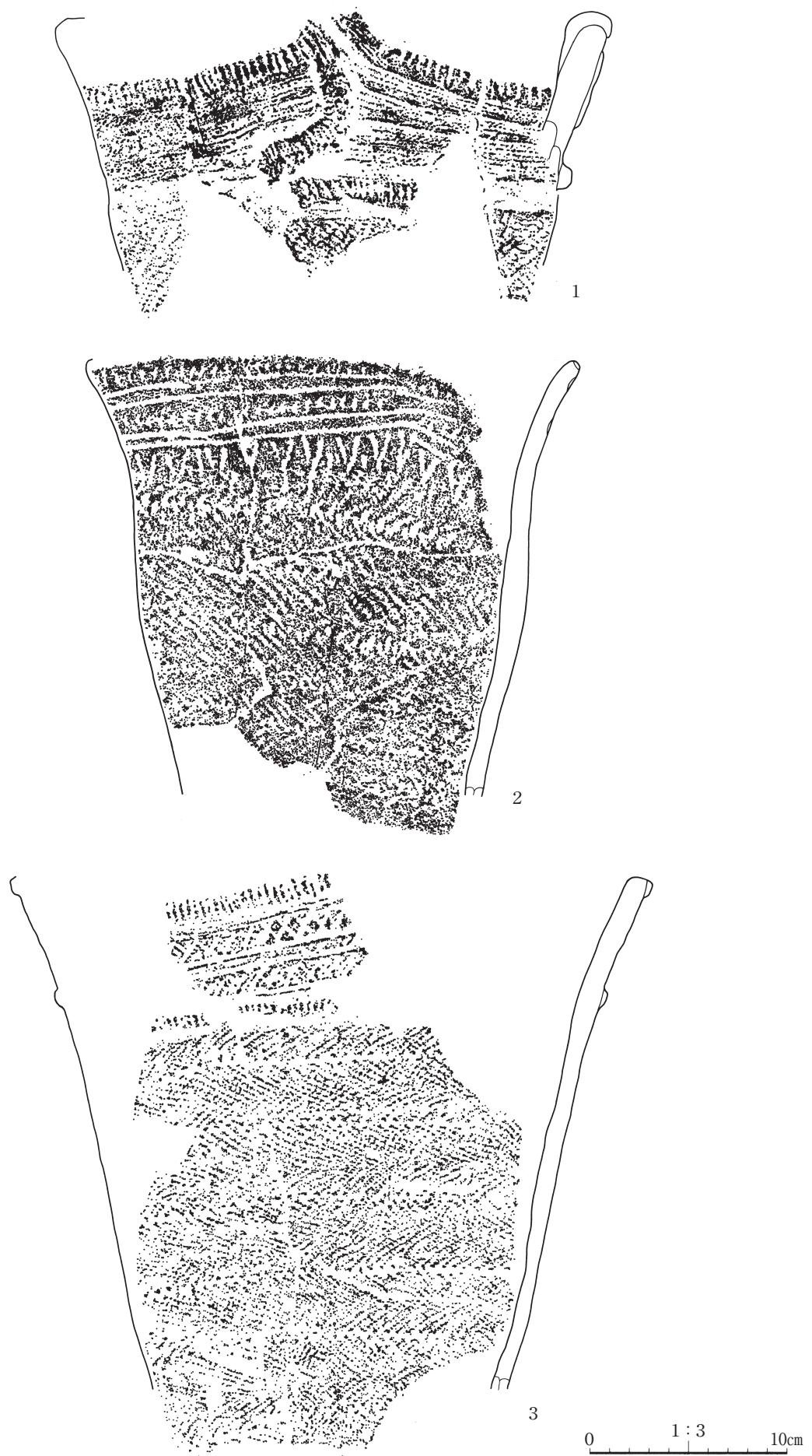


図23 第5号住居跡3

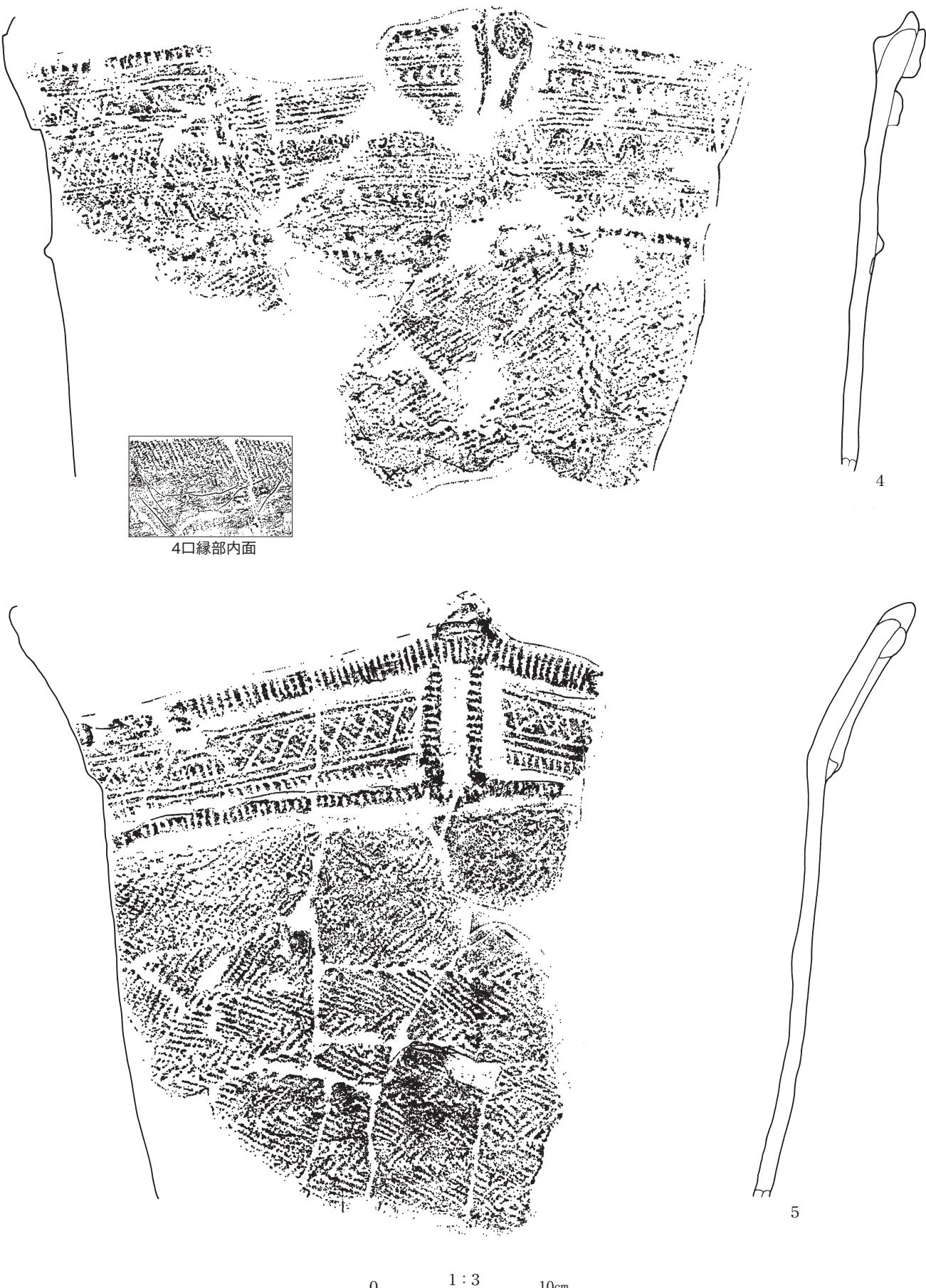
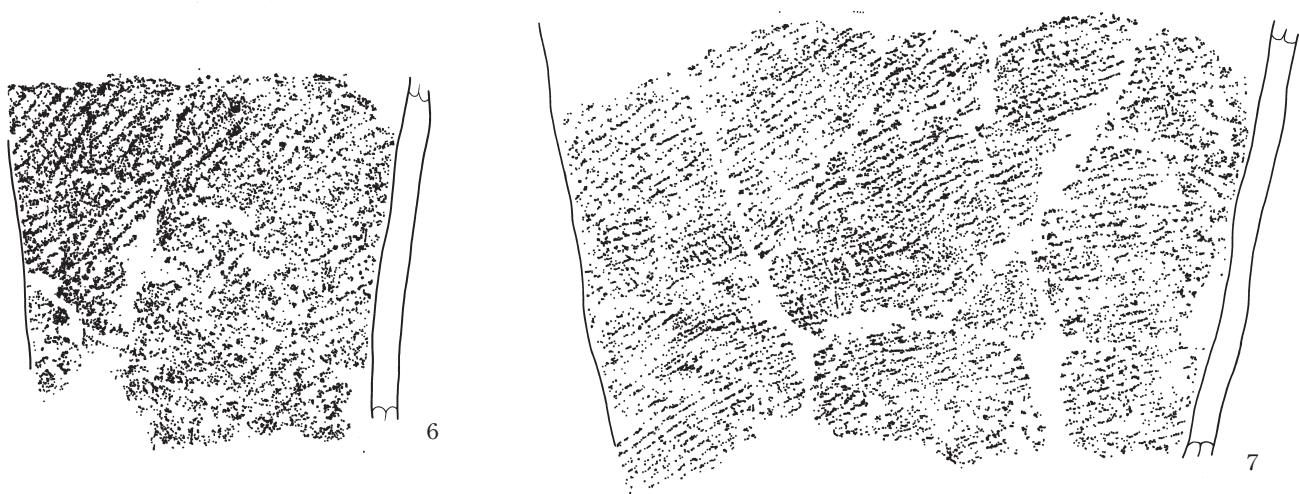
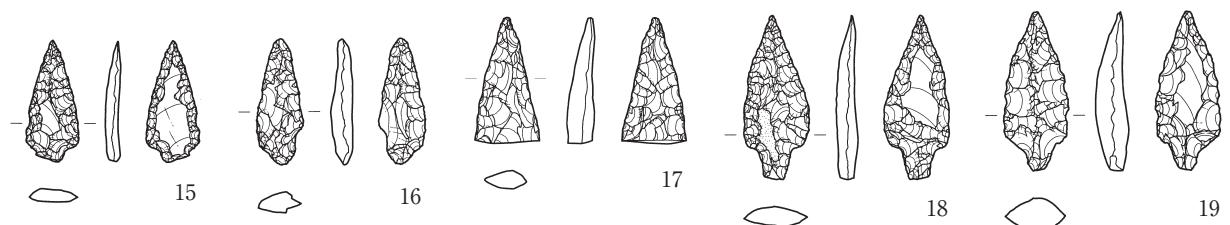
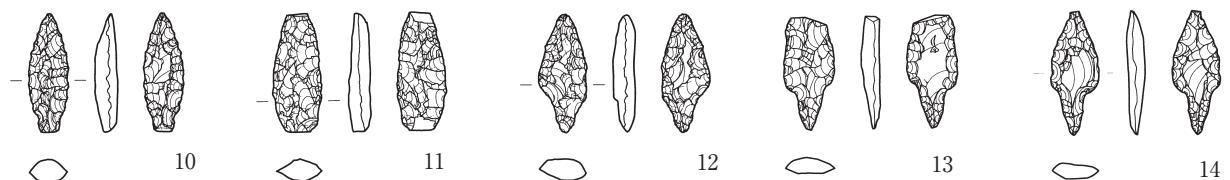


図24 第5号住居跡4



0 1 : 3 10 cm



0 1 : 2 5 cm

図25 第5号住居跡5

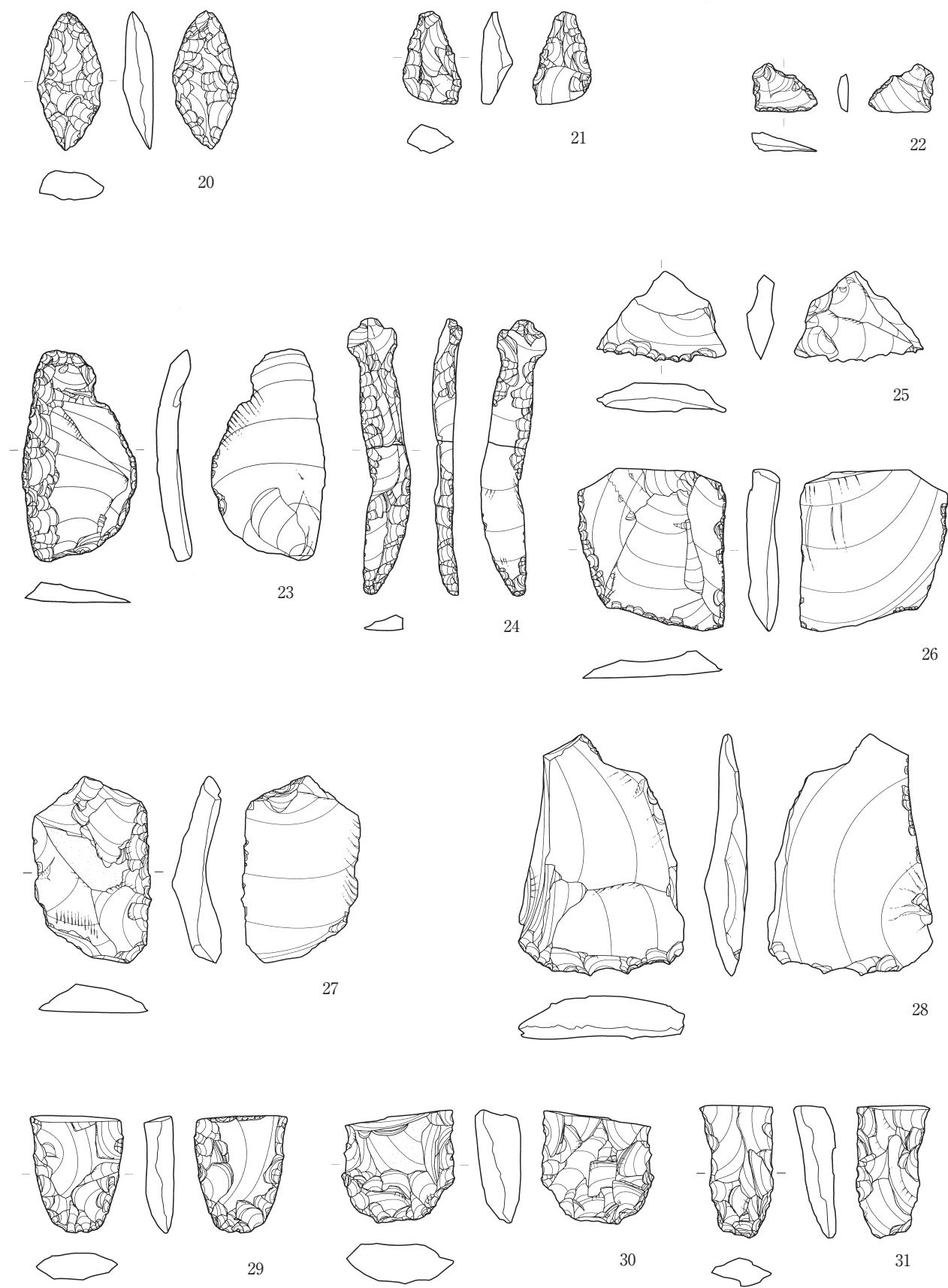


図26 第5号住居跡6

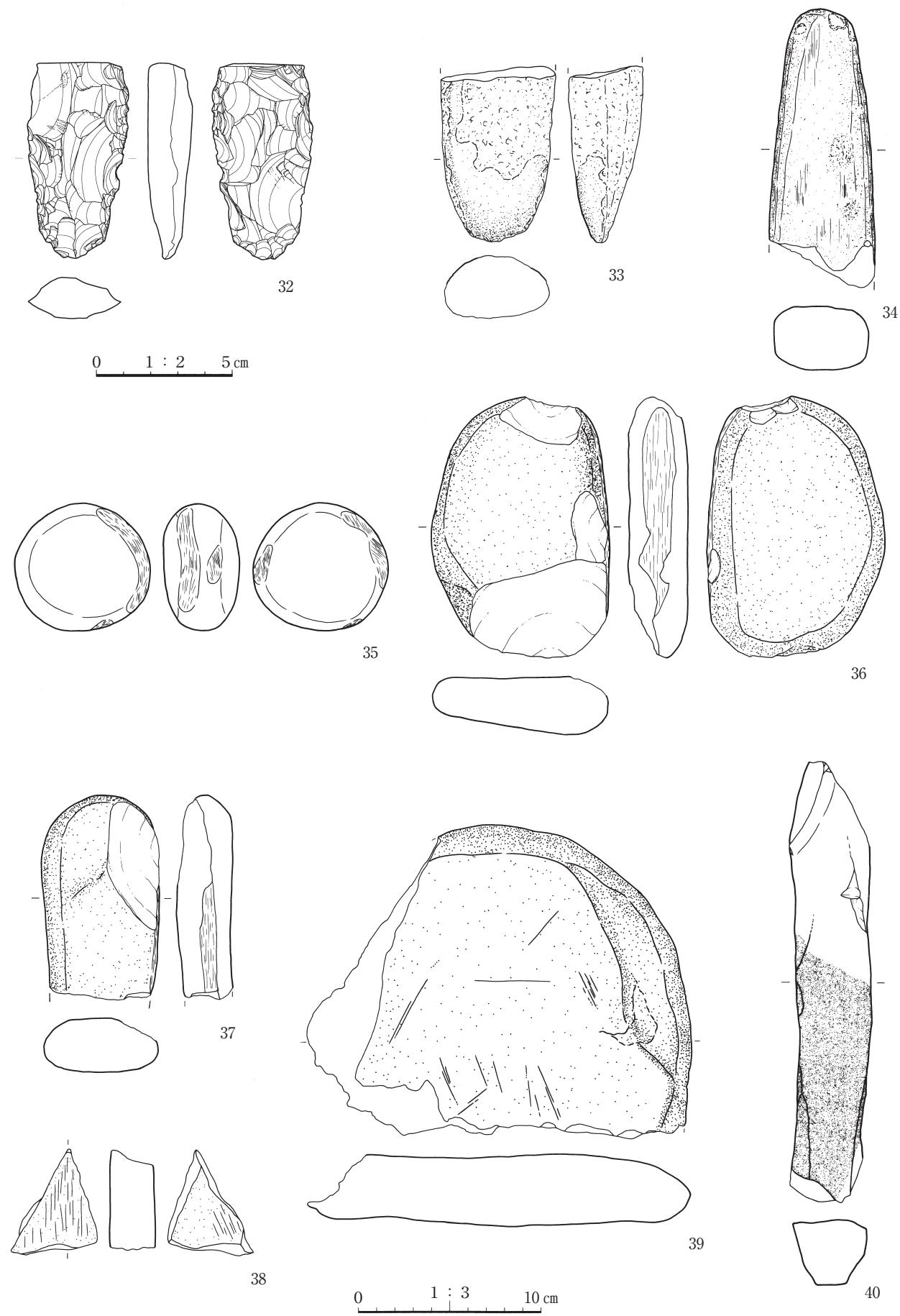
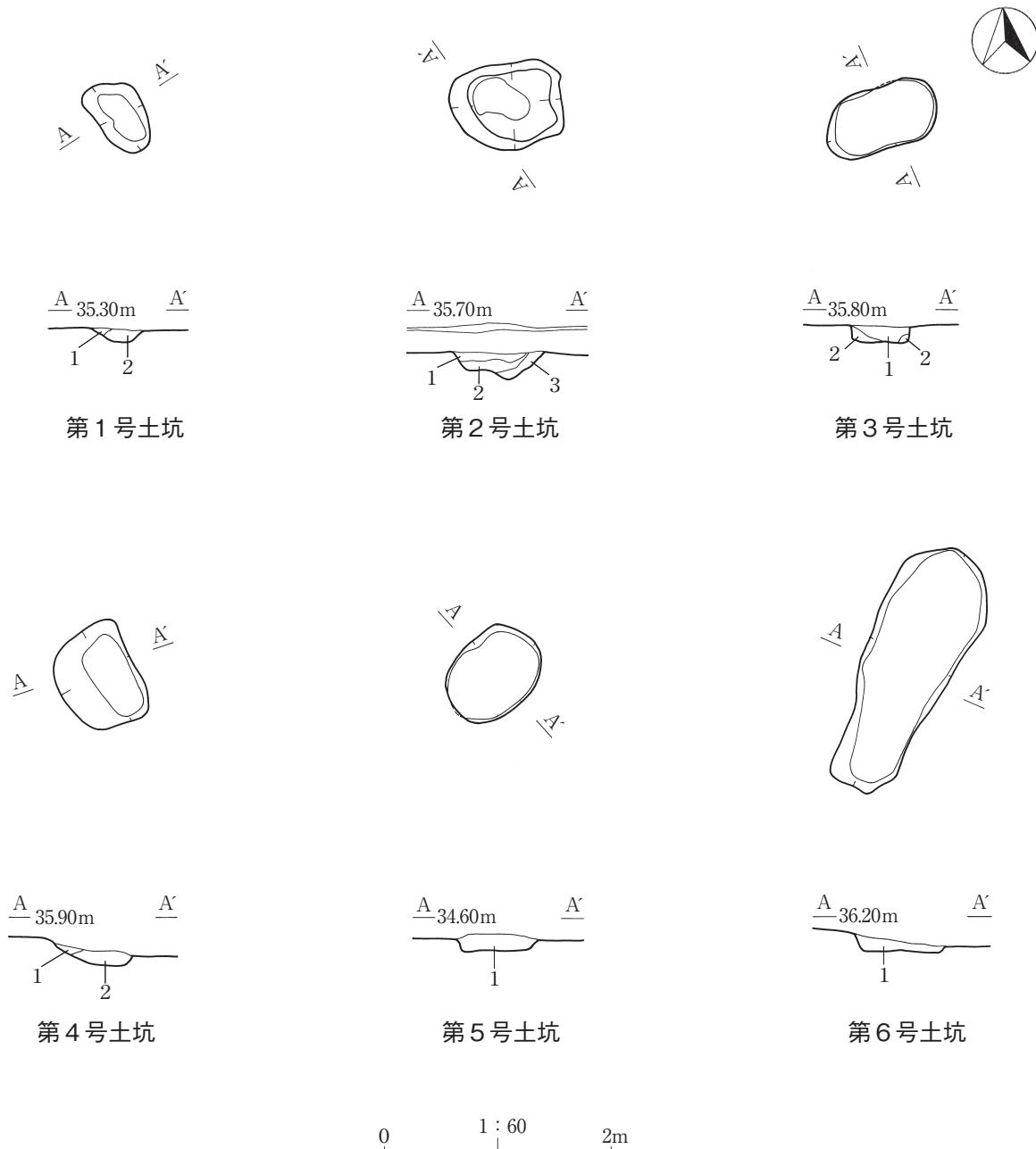
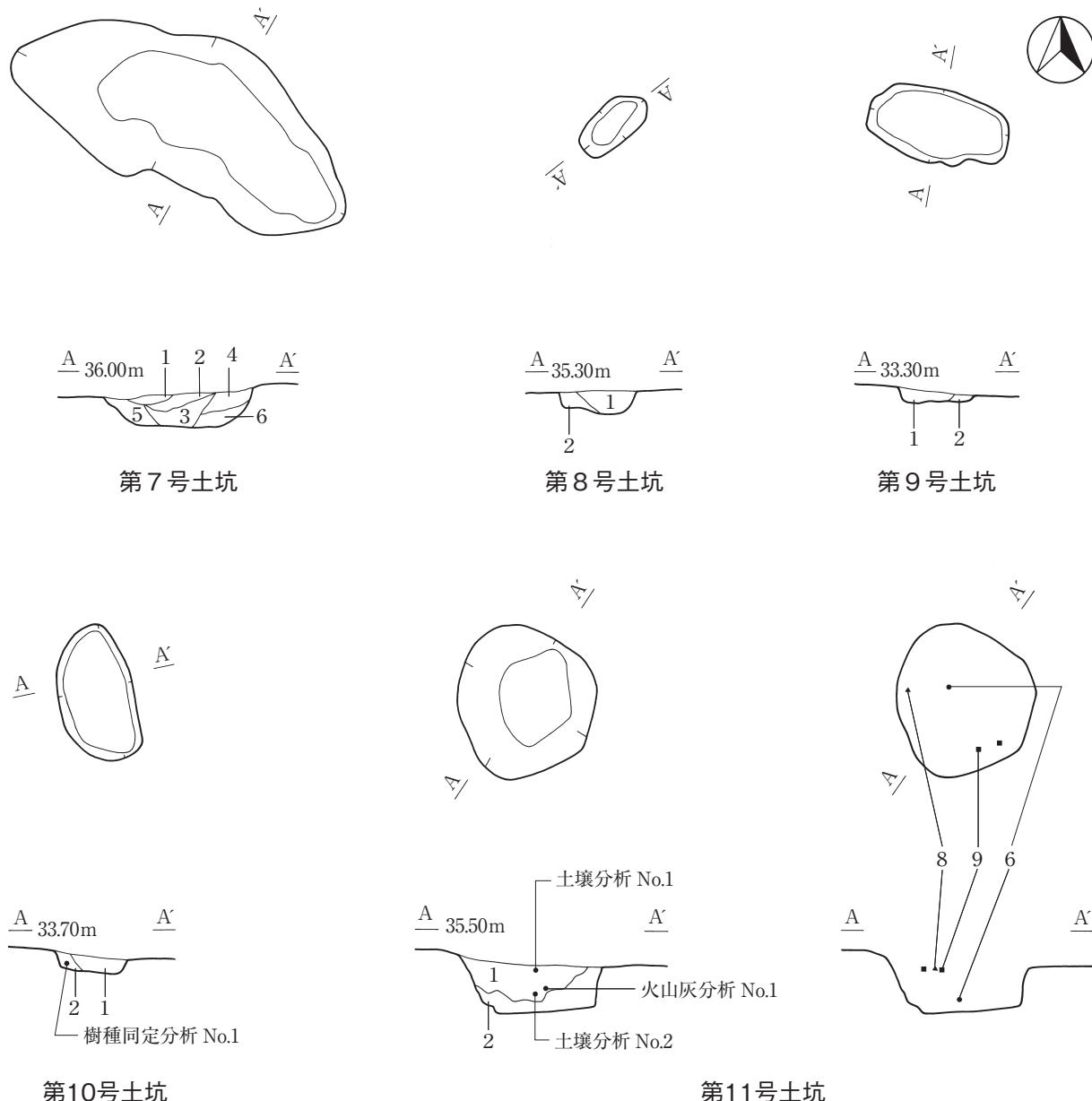


図27 第5号住居跡7



第1号土坑	1層 10Y R 4 / 6 褐色土 2層 10Y R 3 / 4 暗褐色土	10Y R 3 / 4 暗褐色土30% 10Y R 4 / 6 褐色土20%、炭化物（ ϕ 1 mm）1%
第2号土坑	I層 10Y R 3 / 4 暗褐色土 II層 10Y R 4 / 6 褐色土 1層 10Y R 3 / 4 暗褐色土 2層 10Y R 4 / 6 褐色土 3層 10Y R 3 / 4 暗褐色土	10Y R 4 / 6 褐色土10% 10Y R 5 / 6 黄褐色土5%、炭化物（ ϕ 1 mm）1% 炭化物（ ϕ 1 mm）1% 10Y R 3 / 4 暗褐色土25%、10Y R 5 / 6 黄褐色土5% 10Y R 4 / 6 褐色土20%、炭化物（ ϕ 1 mm）1%
第3号土坑	1層 10Y R 4 / 6 褐色土 2層 10Y R 5 / 8 黄褐色粘质土	炭化物（ ϕ 1 ~ 2 mm）1% 炭化物（ ϕ 4 mm）1%
第4号土坑	1層 10Y R 5 / 6 黄褐色土 2層 10Y R 4 / 6 褐色粘土	炭化物（ ϕ 5 mm）1%
第5号土坑	1層 10Y R 4 / 6 褐色土	7.5Y R 4 / 4 褐色土20%、炭化物（ ϕ 3 ~ 4 mm）1%
第6号土坑	1層 10Y R 5 / 8 黄褐色土	炭化物（ ϕ 1 ~ 3 mm）2%

図28 土坑 1



第7号土坑

1層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
2層 10Y R 4 / 6 褐色土
3層 10Y R 4 / 4 褐色土
4層 10Y R 5 / 6 黄褐色土
5層 10Y R 4 / 6 褐色土
6層 10Y R 4 / 6 褐色土

10Y R 4 / 6 暗褐色土10%、炭化物（ $\phi 1\text{ mm}$ ）1%
10Y R 2 / 3 黑褐色土3%、10Y R 4 / 6 褐色粘質土
10Y R 3 / 4 暗褐色土5%、10Y R 4 / 4 褐色粘質土、炭化物（ $\phi 1\text{ mm}$ ）1%
10Y R 5 / 6 黄褐色粘質土
10Y R 4 / 6 褐色粘質土20%
10Y R 4 / 6 褐色粘質土

第8号土坑

1層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
2層 10Y R 4 / 6 褐色土

10Y R 4 / 6 暗褐色土5%
10Y R 3 / 4 暗褐色土15%

第9号土坑

1層 10Y R 4 / 6 褐色土
2層 10Y R 5 / 6 黄褐色土

10Y R 5 / 6 黄褐色粘質土10%、炭化物（ $\phi 1\text{ mm}$ ）1%

第10号土坑

1層 10Y R 4 / 4 褐色土
2層 10Y R 5 / 6 黄褐色土

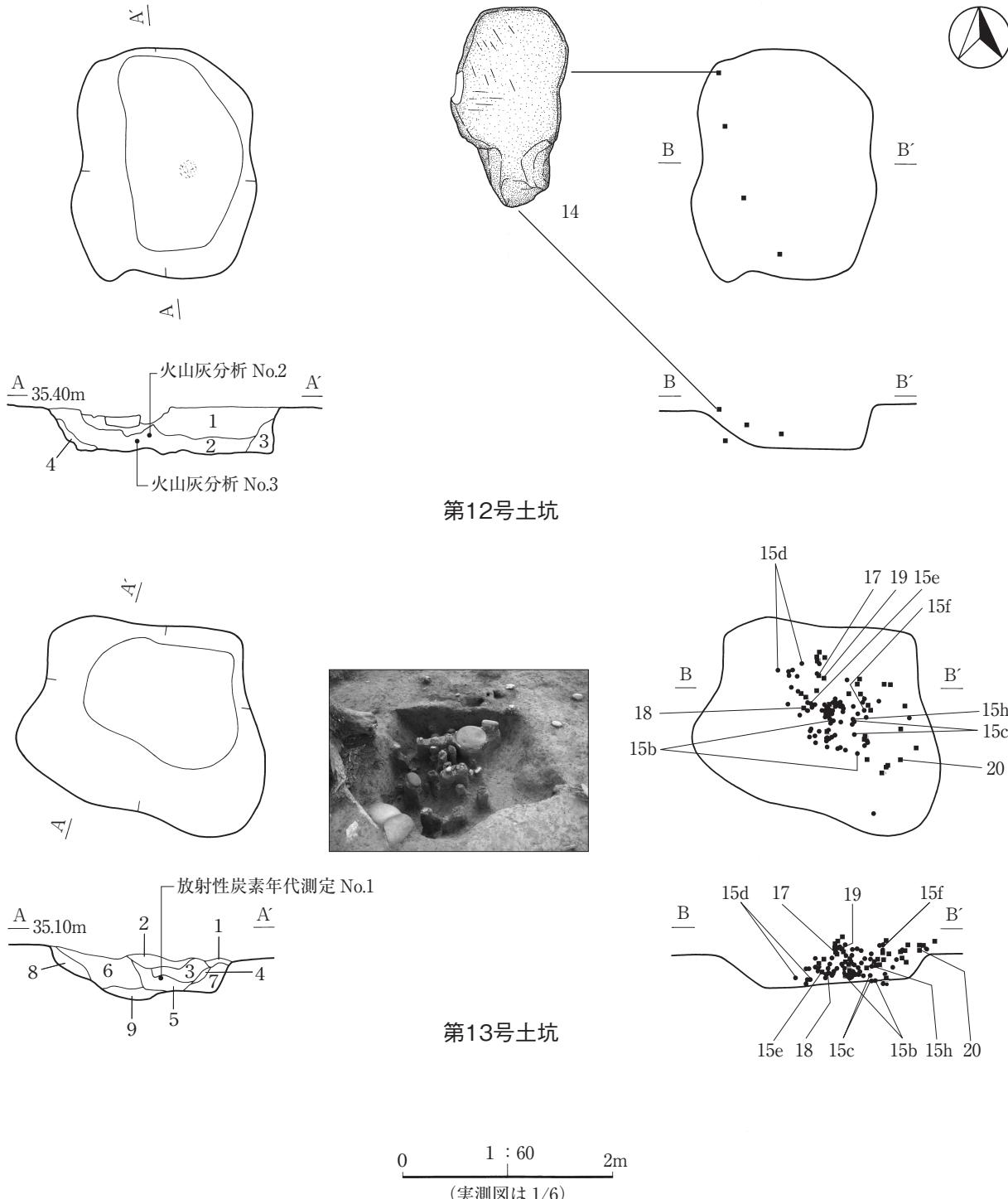
10Y R 3 / 4 暗褐色土5%、炭化物（ $\phi 1\text{ mm}$ ）1%

第11号土坑

1層 10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色土
2層 10Y R 4 / 4 褐色土

10Y R 4 / 6 暗褐色土20%、10Y R 3 / 4 暗褐色土15%、10Y R 5 / 4 にぶい黄褐色火山灰（B-Tm）
5%
10Y R 3 / 4 暗褐色土15%、10Y R 4 / 6 暗褐色土3%、10Y R 5 / 6 黄褐色土3%

図29 土坑2



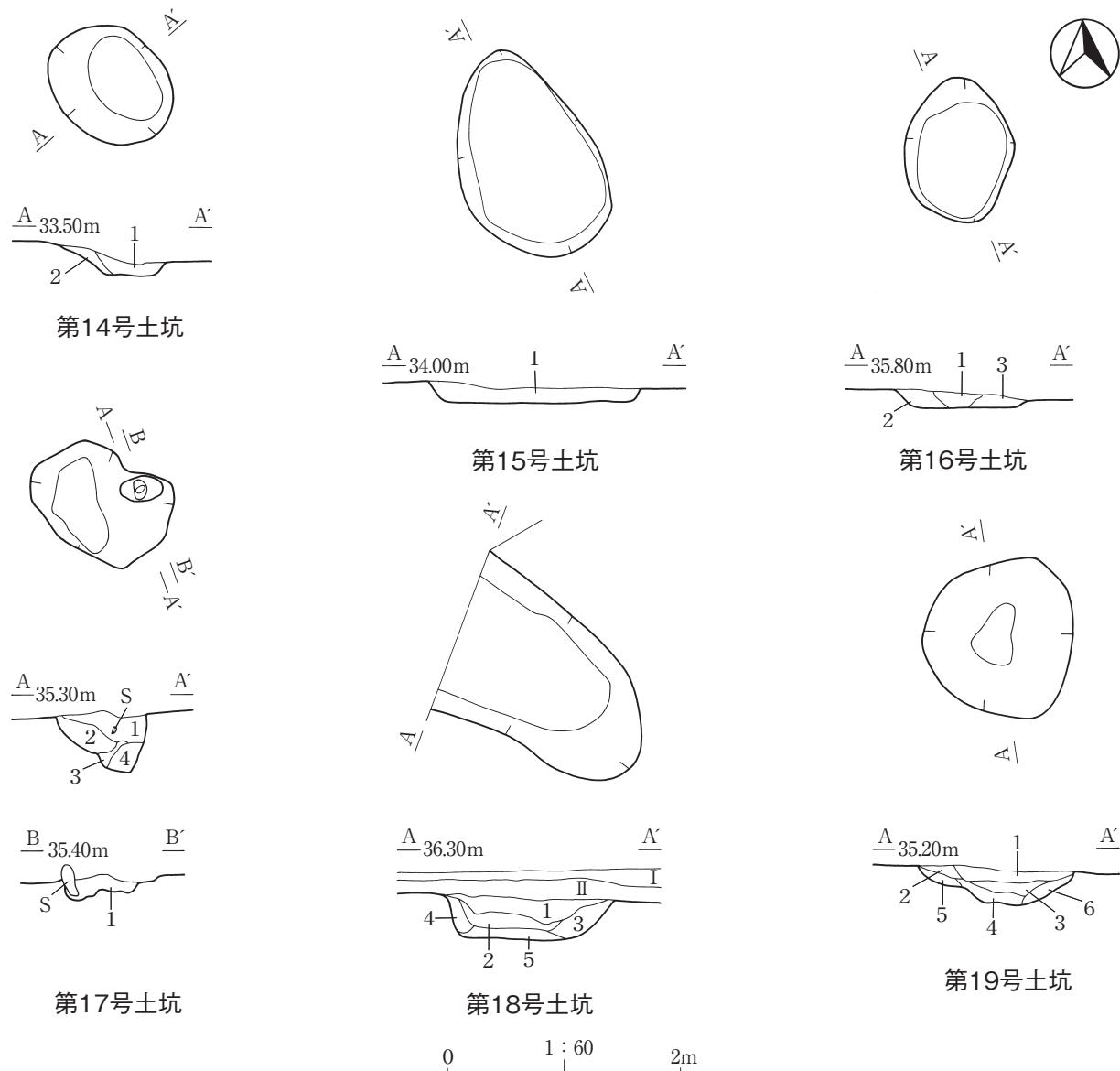
第12号土坑

1層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
10Y R 4 / 6 褐色土25%、10Y R 5 / 4 にぶい黄褐色土3%、10Y R 7 / 3 にぶい黄橙色土1%、炭化物(ϕ 1 ~ 5 mm) 1%
2層 7.5Y R 4 / 6 褐色土
10Y R 3 / 4 暗褐色土
3層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
10Y R 4 / 6 褐色土
4層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
10Y R 4 / 6 褐色土

第13号土坑

1層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
炭化物 (ϕ 1 mm) 1%
10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色火山灰 (B-Tm) 3%、炭化物 (ϕ 1 ~ 2 mm) 1%
2層 10Y R 4 / 4 褐色土
7.5Y R 4 / 4 暗褐色土
3層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
7.5Y R 4 / 4 暗褐色土
4層 7.5Y R 4 / 4 褐色土
5層 7.5Y R 4 / 4 褐色土
6層 10Y R 5 / 8 黄褐色土
10Y R 4 / 4 褐色土10%、7.5Y R 5 / 8 明褐色燒土 (ϕ 1 ~ 2 mm) 1%、炭化物 (ϕ 1 ~ 2 mm) 2%
7層 7.5Y R 4 / 6 褐色土
10Y R 6 / 6 明黃褐色土20%、炭化物 (ϕ 1 mm) 1%
8層 7.5Y R 5 / 6 黄褐色土
10Y R 5 / 8 黄褐色土25%
9層 7.5Y R 4 / 4 褐色土

図30 土坑3

**第14号土坑**

1層 10Y R 4 / 4 褐色土
2層 10Y R 4 / 6 褐色土

10Y R 4 / 6 褐色土 2 %
炭化物 (ϕ 1 ~ 5 mm) 1 %

第15号土坑

1層 10Y R 4 / 4 褐色土

10Y R 4 / 6 褐色土 (ϕ 50mm) をブロック状に20%、炭化物 (ϕ 1 mm) 1 %

第16号土坑

1層 10Y R 4 / 6 褐色土
2層 7.5Y R 4 / 4 褐色土
3層 7.5Y R 4 / 6 褐色土

炭化物 (ϕ 1 mm) 1 %
炭化物 (ϕ 1 ~ 2 mm) 1 %
炭化物 (ϕ 1 mm) 1 %

第17号土坑

1層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
2層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
3層 10Y R 4 / 6 褐色土
4層 10Y R 4 / 6 褐色土

10Y R 4 / 6 褐色土10%、炭化物 (ϕ 1 ~ 3 mm) 3 %
10Y R 4 / 6 褐色土10%、10Y R 3 / 3 暗褐色土5%、10Y R 7 / 1 灰白色火山灰 (B - T m) 3 %
10Y R 3 / 4 暗褐色土25%、炭化物 (ϕ 3 mm) 1 %

第18号土坑

I層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
II層 10Y R 4 / 4 褐色土
1層 10Y R 4 / 6 褐色土
2層 10Y R 5 / 8 黄褐色土
3層 10Y R 5 / 6 黄褐色粘質土
4層 7.5Y R 5 / 8 明黄褐色土
5層 7.5Y R 4 / 6 褐色粘質土

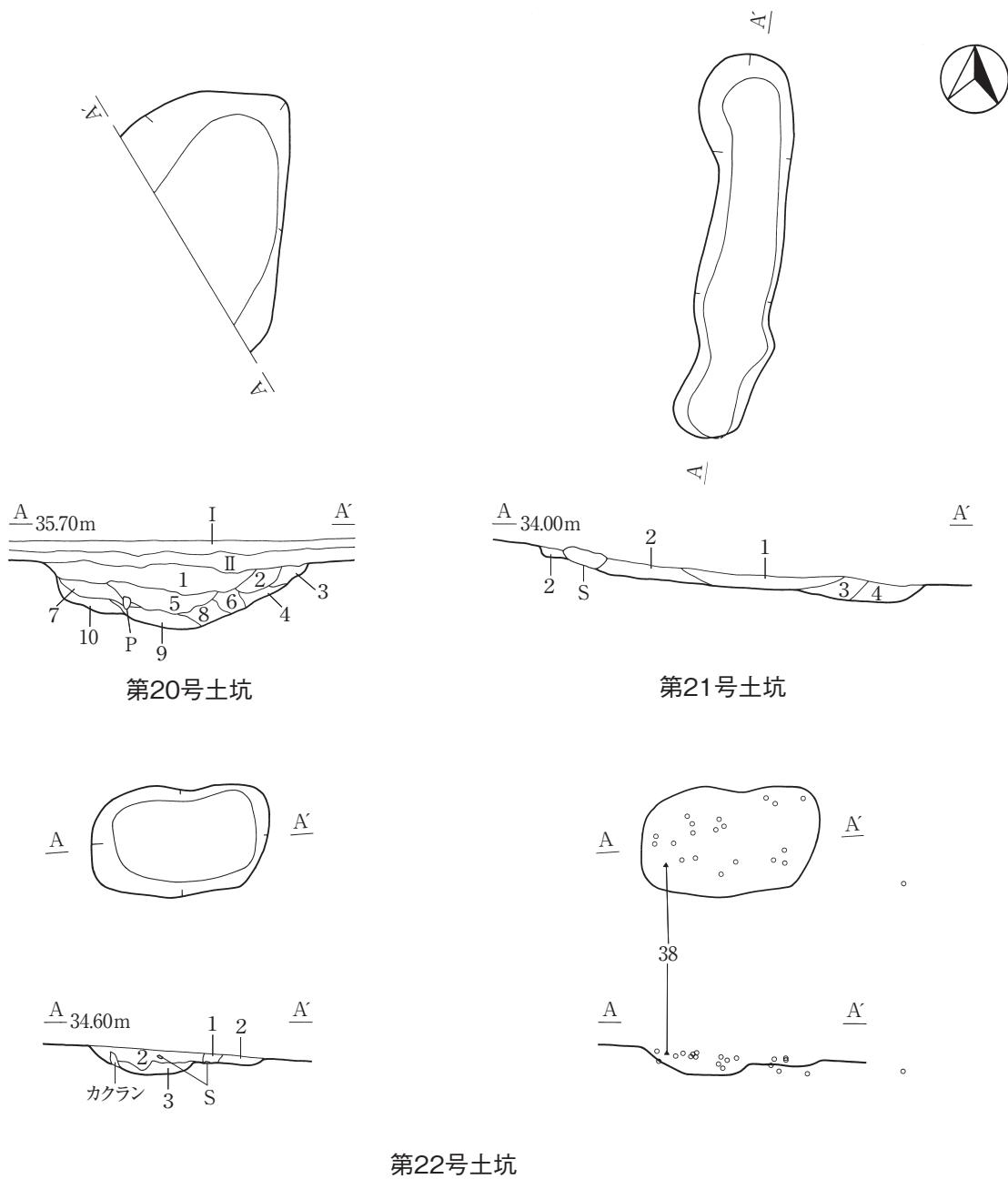
10Y R 2 / 1 黑色土10%
7.5Y R 4 / 6 褐色土15%、炭化物 (ϕ 1 ~ 2 mm) 7 %
10Y R 3 / 3 暗褐色土10%
炭化物 (ϕ 1 mm) 1 %
10Y R 1.7 / 1 黑色土5 %
炭化物 (ϕ 1 mm) 1 %

第19号土坑

1層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
2層 7.5Y R 3 / 4 暗褐色土
3層 10Y R 3 / 3 暗褐色土
4層 10Y R 4 / 6 褐色粘質土
5層 10Y R 4 / 4 褐色土
6層 7.5Y R 4 / 4 褐色粘質土

7.5Y R 5 / 8 明褐色土5 %、炭化物 (ϕ 1 ~ 2 mm) 1 %
炭化物 (ϕ 1 mm) 1 %
炭化物 (ϕ 1 ~ 2 mm) 3 %
炭化物 (ϕ 1 mm) 1 %
10Y R 3 / 2 黑褐色土2 %
7.5Y R 2 / 2 黑褐色粘質土5 %、炭化物 (ϕ 1 ~ 2 mm) 1 %

図31 土坑4



第20号土坑

I層	10Y R 4 / 2灰褐色土	10Y R 6 / 2灰褐色土40%
II層	10Y R 3 / 3暗褐色土	10Y R 6 / 4明黃褐色土5%、10Y R 6 / 2灰褐色土3%、炭化物(Φ1~2mm) 2%
III層	7.5Y R 4 / 4褐色土	10Y R 3 / 4褐色土5%、炭化物(Φ1mm) 1%
1層	10Y R 2 / 3黒褐色土	7.5Y R 5 / 8明褐色土5%、炭化物(Φ2~5mm) 10%
2層	10Y R 4 / 6褐色土	炭化物(Φ2~5mm) 2%
3層	10Y R 4 / 4褐色土	炭化物(Φ1~2mm) 2%
4層	10Y R 5 / 6黄褐色土	7.5Y R 4 / 4褐色土5%
5層	7.5Y R 3 / 1黒褐色土	7.5Y R 4 / 3褐色土3%、炭化物(Φ2~5mm) 5%
6層	10Y R 3 / 4暗褐色土	7.5Y R 5 / 8明褐色土3%
7層	7.5Y R 3 / 2黒褐色土	7.5Y R 4 / 4褐色土40%
8層	10Y R 5 / 8黄褐色粘質土	10Y R 3 / 3暗褐色粘質土30%
9層	10Y R 2 / 3黒褐色粘質土	7.5Y R 5 / 6明褐色粘質土5%、7.5Y R 3 / 1黒褐色粘質土3%、炭化物(Φ1~2mm) 2%
10層	7.5Y R 4 / 6褐色土	10Y R 4 / 3にぶい黄褐色土5%

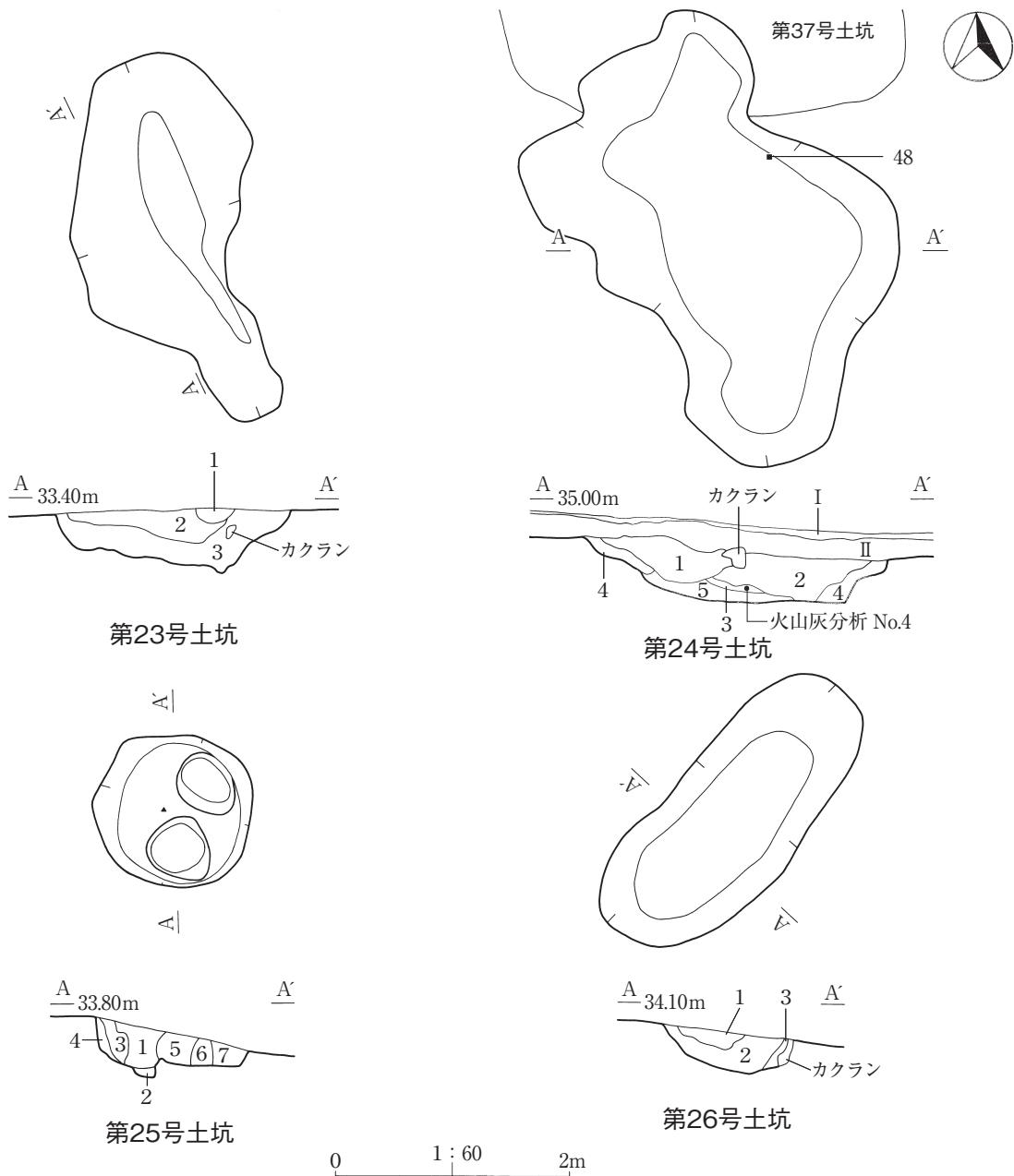
第21号土坑

1層	10Y R 4 / 4褐色土	10Y R 4 / 6褐色粘質土15%、7.5Y R 5 / 8明褐色土1%、炭化物(Φ2mm) 1%
2層	10Y R 4 / 6褐色土	7.5Y R 4 / 6褐色粘質土10%
3層	10Y R 3 / 4暗褐色土	10Y R 4 / 6褐色粘質土10%、炭化物(Φ5mm) 1%
4層	7.5Y R 4 / 6褐色土	

第22号土坑

1層	10Y R 3 / 2黒褐色土	10Y R 4 / 6褐色土5%、5Y R 4 / 8赤褐色燒土2%、炭化物(Φ1~2mm) 3%、骨(Φ1mm) 1%
2層	10Y R 3 / 4暗褐色土	10Y R 4 / 6褐色土15%、10Y R 3 / 3暗褐色土5%、炭化物(Φ1~3mm) 5%、骨(Φ1mm) 1%
3層	10Y R 4 / 6褐色土	10Y R 3 / 4暗褐色土10%、炭化物(Φ1~2mm) 3%

図32 土坑5

**第23号土坑**

1層 10Y R 3 / 3 暗褐色土
2層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
3層 10Y R 2 / 3 黒褐色土
炭化物 (φ 1 ~ 2 mm) 2 %

第24号土坑

I層 10Y R 3 / 3 暗褐色土
II層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
1層 10Y R 2 / 3 黒褐色土
2層 10Y R 4 / 4 褐色土
3層 10Y R 5 / 4 ぶい黄
褐色火山灰 (B-Tm)
4層 7.5Y R 5 / 6 明褐色土
5層 10Y R 4 / 6 褐色土
7.5Y R 5 / 8 明褐色土 2 %, 10Y R 5 / 6 黄褐色土 2 %, 炭化物 (φ 1 mm) 1 %
10Y R 3 / 4 暗褐色土 5 %, 炭化物 (φ 1 mm) 1 %

第25号土坑

1層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
2層 10Y R 4 / 4 褐色土
3層 10Y R 4 / 4 褐色土
4層 10Y R 4 / 6 褐色土
5層 10Y R 3 / 3 暗褐色土
6層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
7層 10Y R 4 / 4 褐色土
10Y R 4 / 4 褐色土 5 %, 炭化物 (φ 1 ~ 4 mm) 3 %
炭化物 (φ 1 ~ 3 mm) 5 %
炭化物 (φ 1 ~ 2 mm) 3 %
炭化物 (φ 1 mm) 2 %
10Y R 4 / 6 褐色土 3 %, 炭化物 (φ 1 ~ 4 mm) 5 %
10Y R 4 / 6 褐色土 10 %, 炭化物 (φ 1 ~ 5 mm) 3 %
10Y R 3 / 3 暗褐色土 3 %, 炭化物 (φ 2 ~ 5 mm) 5 %

第26号土坑

1層 10Y R 4 / 4 暗褐色土 15 %, 炭化物 (φ 2 ~ 3 mm) 3 %
2層 10Y R 3 / 3 暗褐色土
3層 10Y R 4 / 6 褐色土
10Y R 4 / 4 褐色土 10 %, 10Y R 3 / 2 黑褐色土 5 %, 5 Y R 4 / 8 赤褐色燒土 2 %, 炭化物 (φ 2 ~ 5 mm) 7 %
炭化物 (φ 1 ~ 2 mm) 1 %

図33 土坑6

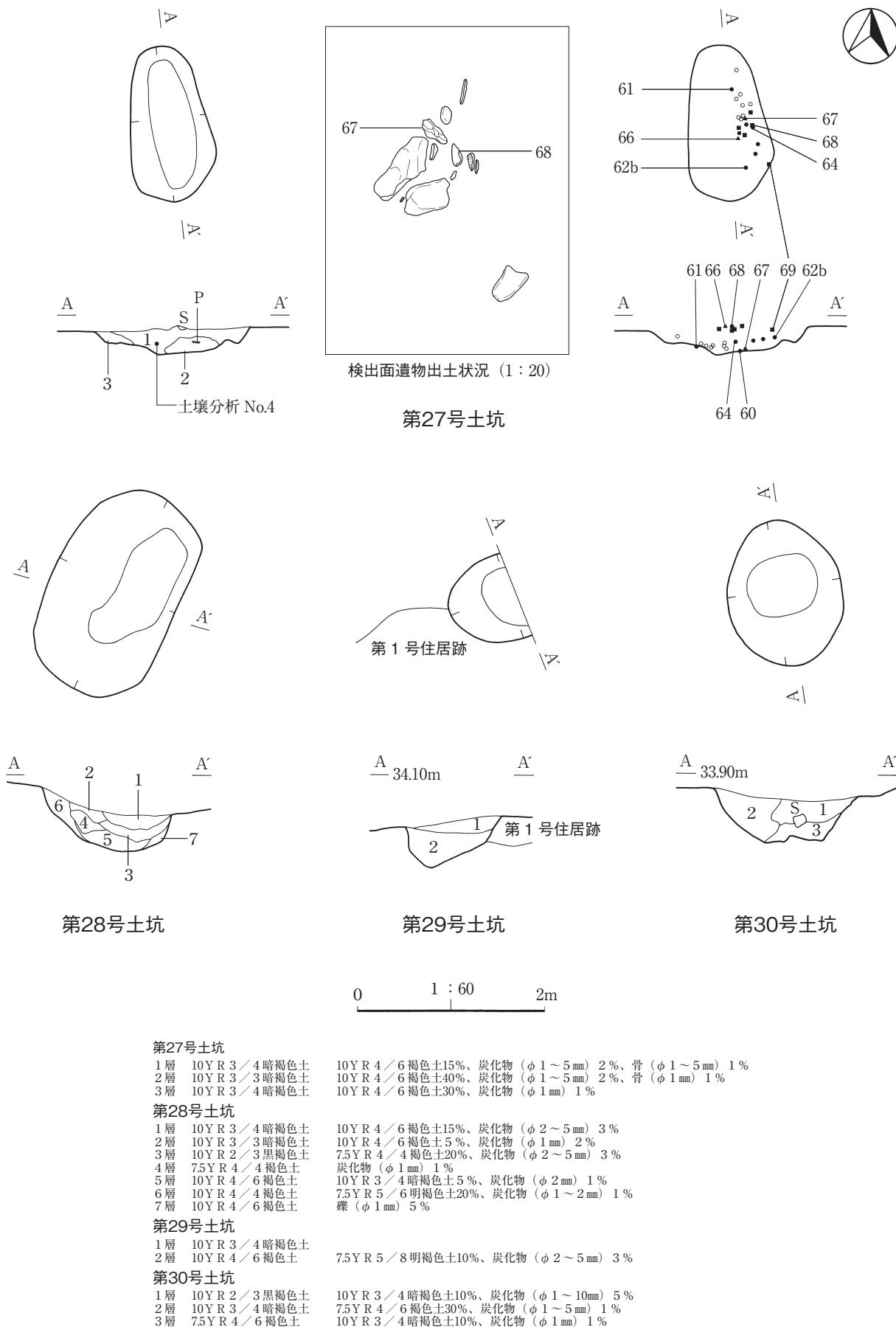
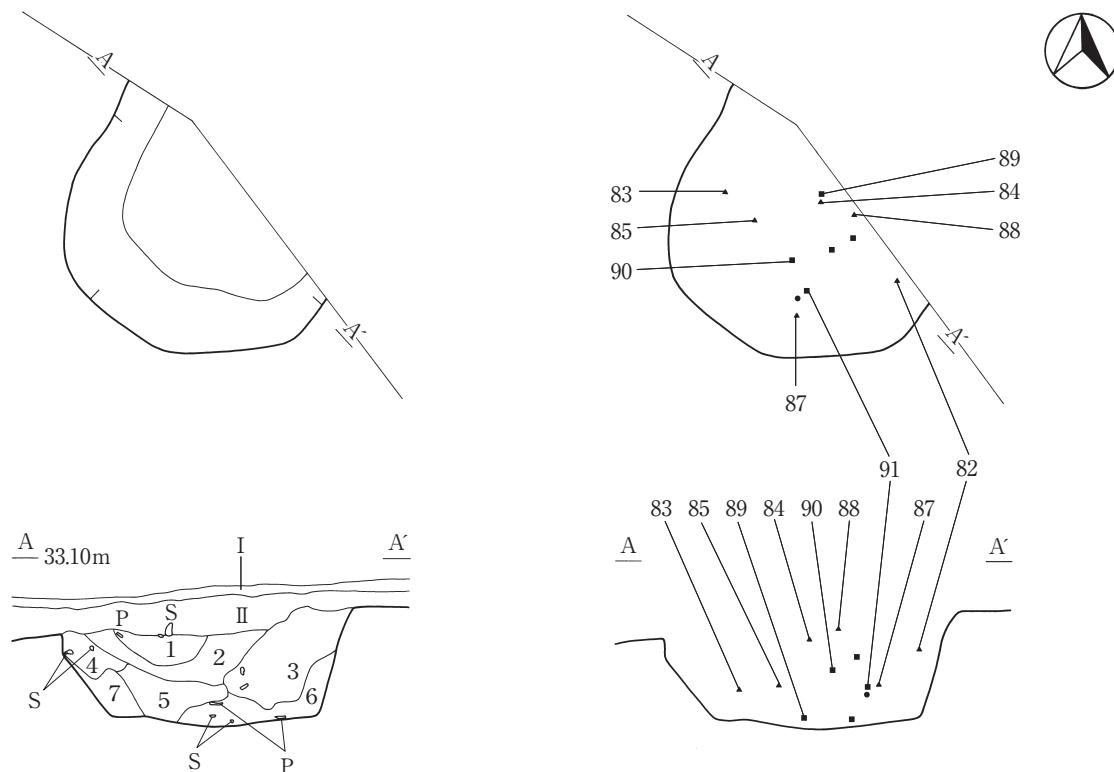


図34 土坑7



第31号土坑

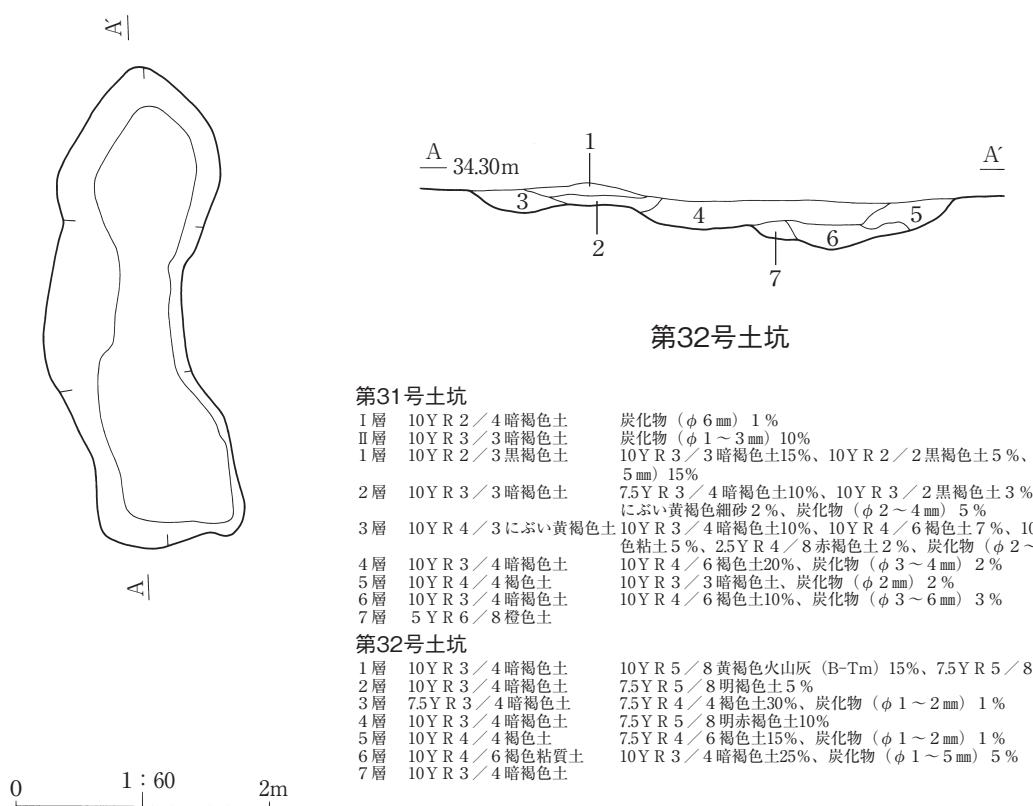
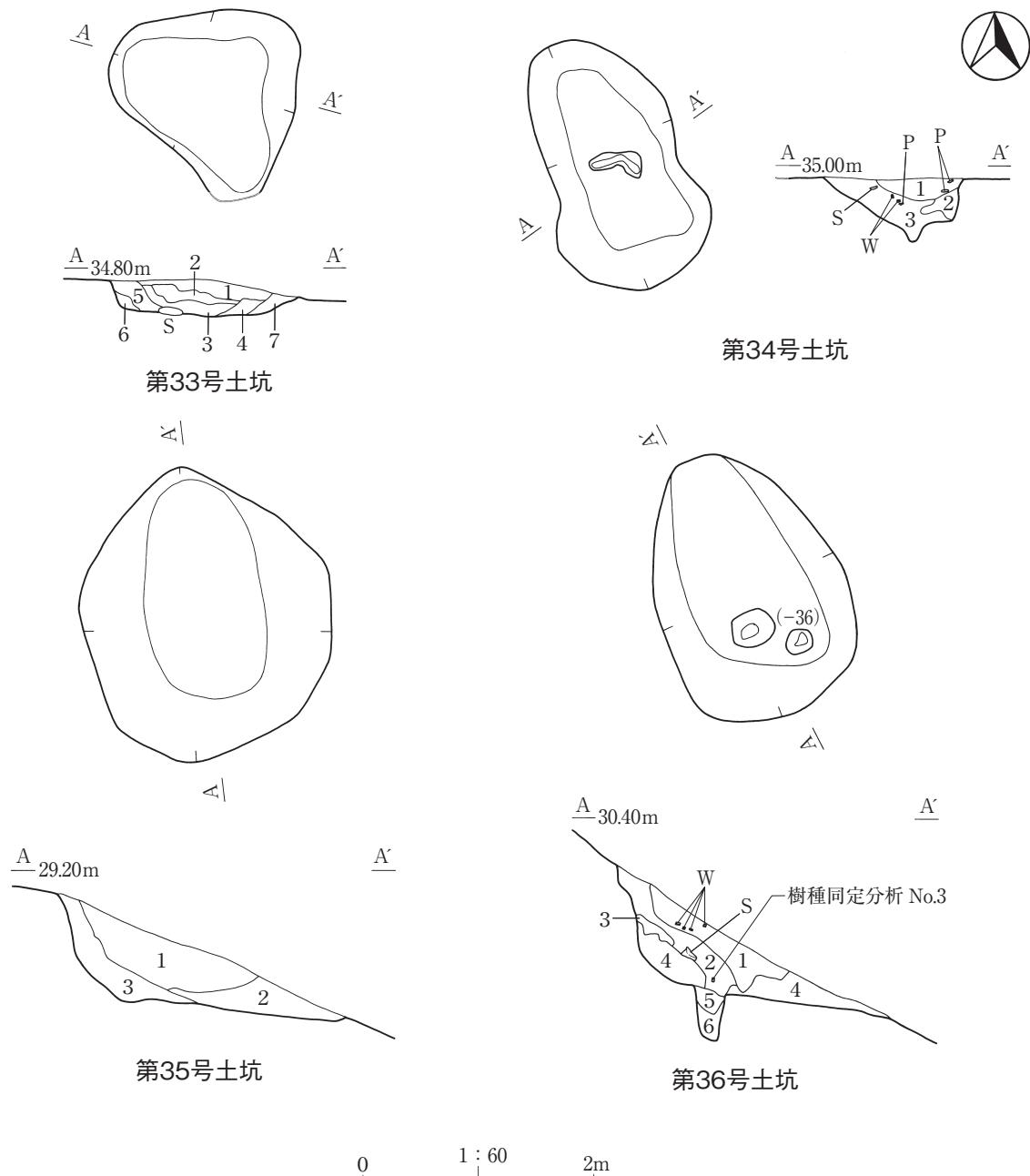


図35 土坑8



第33号土坑

1層 10Y R 5 / 4 にぶい黄褐色火山灰 (B-Tm)
10Y R 4 / 4 褐色土
2層 10Y R 4 / 4 褐色土
3層 10Y R 4 / 6 褐色土
4層 10Y R 4 / 4 褐色土
5層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
6層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
7層 10Y R 4 / 6 褐色土

第34号土坑

1層 10Y R 3 / 4 褐色土
2層 10Y R 5 / 6 黄褐色土
3層 10Y R 3 / 3 暗褐色土
10Y R 3 / 2 黑褐色土 5 %、炭化物 ($\phi 2 \sim 5$ mm) 3 %
炭化物 ($\phi 1 \sim 3$ mm) 2 %
10Y R 3 / 2 黑褐色土 15 %、10Y R 5 / 6 黄褐色土 10 %、5 Y R 3 / 6 暗赤褐色燒土 3 %、炭化物 ($\phi 1 \sim 40$ mm) 5 %

第35号土坑

1層 10Y R 3 / 3 暗褐色土
2層 10Y R 4 / 4 褐色土
3層 10Y R 3 / 4 暗褐色土
10Y R 2 / 3 黑色土 20 %、浮石 ($\phi 2 \sim 60$ mm) 10 %、炭化物 ($\phi 2 \sim 4$ mm) 5 %、
10Y R 4 / 6 褐色土 5 %、浮石 ($\phi 2 \sim 40$ mm) 15 %、炭化物 ($\phi 1 \sim 3$ mm) 5 %
10Y R 4 / 6 褐色土 5 %、浮石 ($\phi 2 \sim 50$ mm) 20 %、炭化物 ($\phi 1 \sim 3$ mm) 3 %

第36号土坑

1層 10Y R 3 / 2 黑褐色土 20 %、10Y R 4 / 4 褐色火山灰 (B-Tm) 3 %、炭化物 ($\phi 2 \sim 15$ mm) 15 %、浮石 ($\phi 2 \sim 10$ mm) 5 %
10Y R 2 / 3 黑褐色土 15 %、10Y R 2 / 2 黑褐色土 5 %、炭化物 ($\phi 2 \sim 7$ mm) 10 %、浮石 ($\phi 1 \sim 5$ mm) 5 %
10Y R 3 / 3 暗褐色土 25 %、浮石 ($\phi 2 \sim 3$ mm) 20 %、炭化物 ($\phi 1 \sim 3$ mm) 3 %
10Y R 3 / 3 暗褐色土 10 %、10Y R 4 / 6 褐色土 5 %、浮石 ($\phi 4 \sim 90$ mm) 3 %、炭化物 ($\phi 2$ mm) 2 %
10Y R 2 / 3 黑褐色土 15 %、浮石 ($\phi 1 \sim 3$ mm) 10 %、炭化物 ($\phi 3 \sim 4$ mm) 3 %
10Y R 4 / 6 褐色土 15 %、浮石 ($\phi 1 \sim 3$ mm) 10 %、炭化物 ($\phi 2 \sim 3$ mm) 5 %

図36 土坑9

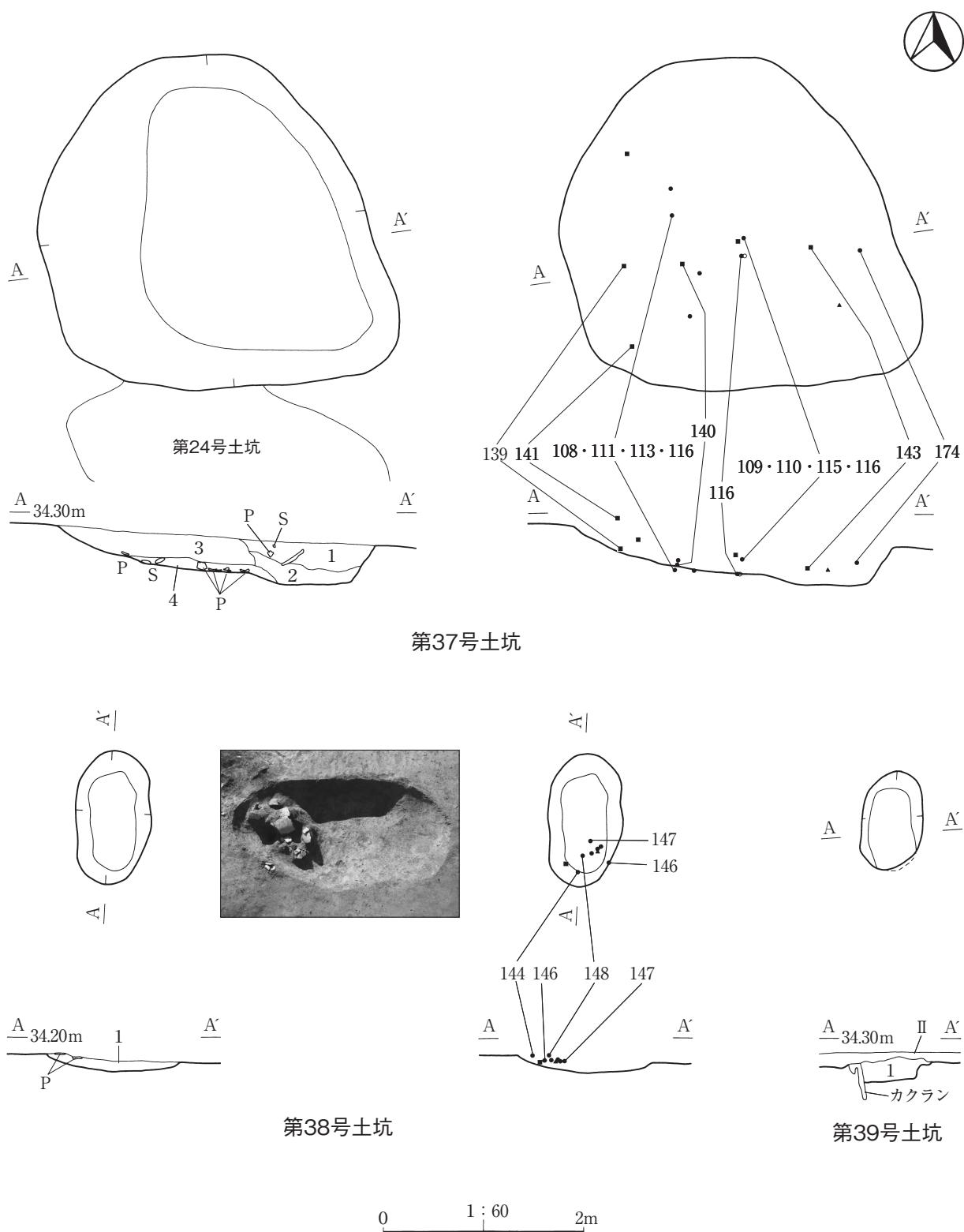
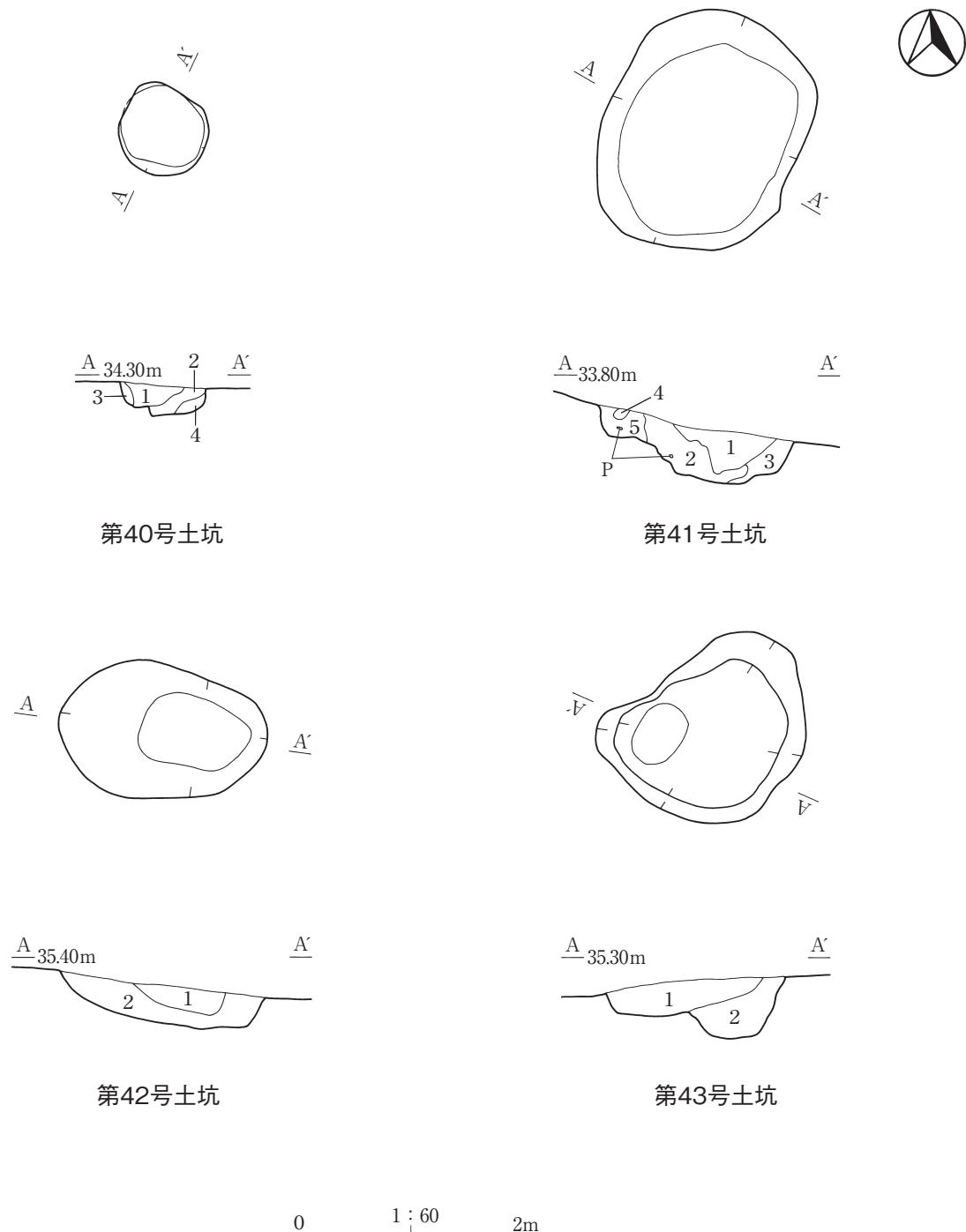


図37 土坑10



第40号土坑

1層 10Y R 3／3 暗褐色土
2層 10Y R 3／4 暗褐色土
3層 10Y R 4／4 褐色土
4層 10Y R 4／6 褐色土

7.5Y R 5／8 明褐色土 3%、炭化物 ($\phi 3 \sim 5\text{ mm}$) 5%
10Y R 3／3 暗褐色土 10%、10Y R 4／6 褐色土 5%、炭化物 ($\phi 3\text{ mm}$) 1%
10Y R 4／6 褐色土 15%、炭化物 ($\phi 1\text{ mm}$) 1%
10Y R 4／2 灰黃褐色粘土 10%

第41号土坑

1層 10Y R 3／4 暗褐色土
2層 7.5Y R 4／4 褐色土
3層 7.5Y R 4／6 褐色土
4層 10Y R 5／6 黄褐色土
5層 7.5Y R 3／4 暗褐色土

10Y R 5／4 にぶい黄褐色火山灰 (B-Tm) 5%、炭化物 ($\phi 1 \sim 2\text{ mm}$) 2%
10Y R 6／3 にぶい黄橙色火山灰 (B-Tm) 5%
7.5Y R 3／4 暗褐色土 10%、炭化物 ($\phi 2 \sim 5\text{ mm}$) 5%

7.5Y R 4／4 褐色土 10%、炭化物 ($\phi 1 \sim 2\text{ mm}$) 1%

第42号土坑

1層 10Y R 4／6 褐色土
2層 10Y R 4／4 褐色土

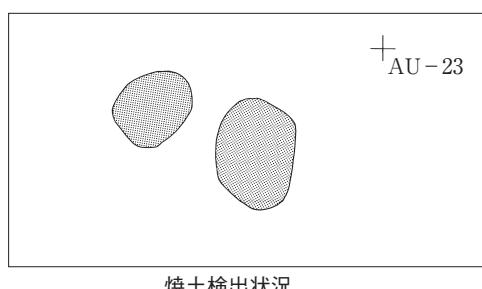
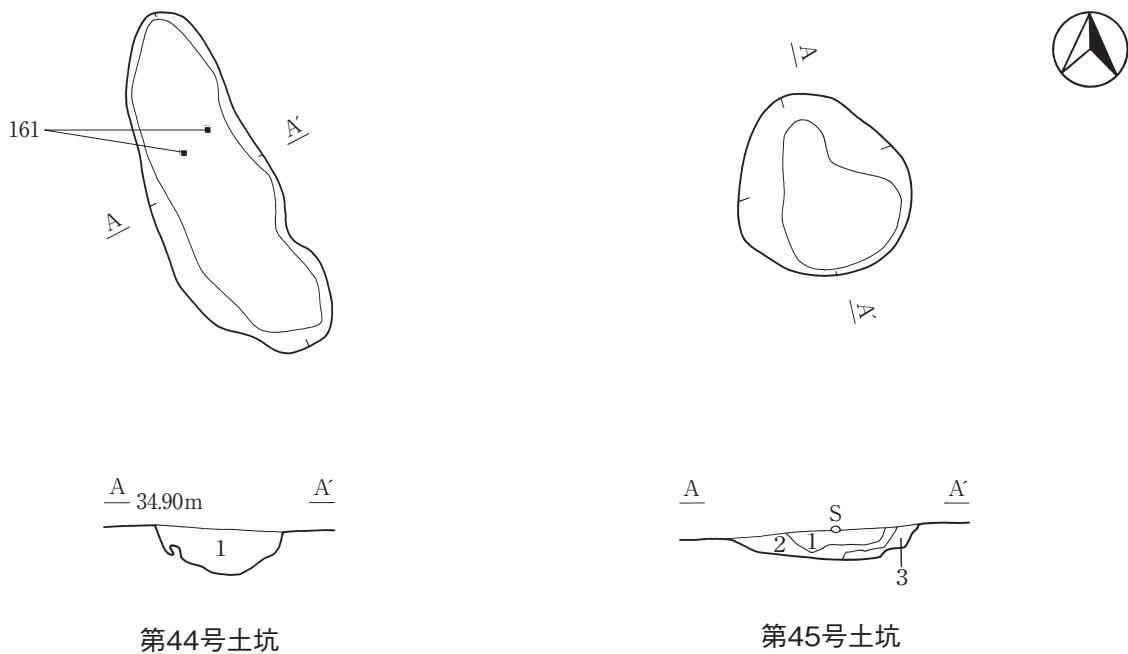
10Y R 5／6 黄褐色火山灰 (B-Tm) 10%、10Y R 3／4 暗褐色土 10%
10Y R 3／4 暗褐色土 10%

第43号土坑

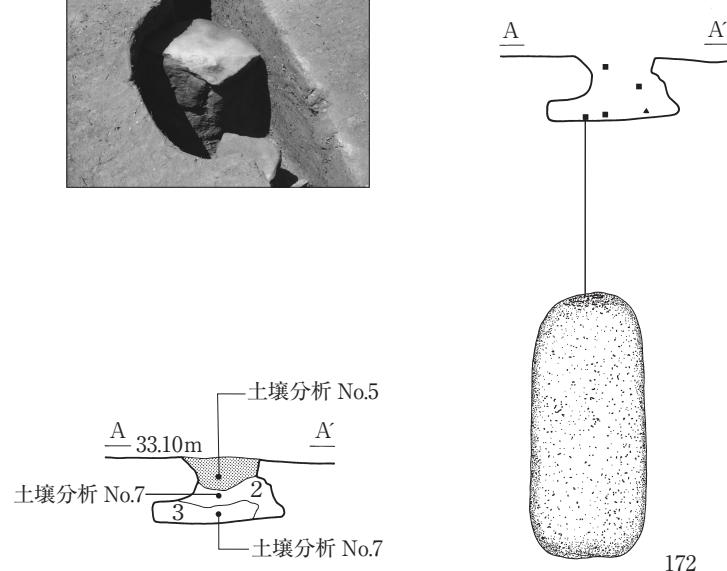
1層 10Y R 3／3 暗褐色土
2層 10Y R 4／4 褐色土

10Y R 4／6 褐色土 20%、7.5Y R 4／4 褐色土 10%、10Y R 5／4 にぶい黄褐色火山灰 (B-Tm) 5%、炭化物 ($\phi 1 \sim 5\text{ mm}$) 5%
7.5Y R 4／4 褐色土 30%、炭化物 ($\phi 1 \sim 3\text{ mm}$) 1%

図38 土坑11



焼土検出状況



第46号土坑

0 1 : 60 2m
(実測図は 1/8)

第44号土坑

1層 10YR 3/4 暗褐色土

10YR 4/4 褐色土15%、10YR 4/6 褐色土5%、10YR 5/6 黄褐色土3%、炭化物(Φ3~6mm) 5%

第45号土坑

1層 10YR 3/4 暗褐色土

10YR 4/6 褐色土20%、7.5YR 5/6 明褐色燒土3%、骨(Φ1mm) 5%、炭化物(Φ1~3mm) 5%

2層 10YR 3/3 暗褐色土

10YR 4/6 褐色土10%、10YR 5/8 黄褐色土5%、骨(Φ1mm) 10%、炭化物(Φ2~5mm) 5%

3層 10YR 4/6 褐色土

10YR 3/4 暗褐色土5%、骨(Φ1mm) 3%、炭化物(Φ3mm) 1%

第46号土坑

1層 5YR 4/4 にぶい赤褐色燒土

7.5YR 4/4 褐色土15%、2.5YR 4/6 赤褐色燒土10%、7.5YR 3/4 暗褐色土5%

2層 7.5YR 4/4 褐色土

7.5YR 4/6 褐色粘土15%

3層 7.5YR 3/4 暗褐色土

7.5YR 4/4 褐色土20%、炭化物(Φ3~5mm) 3%

図39 土坑12

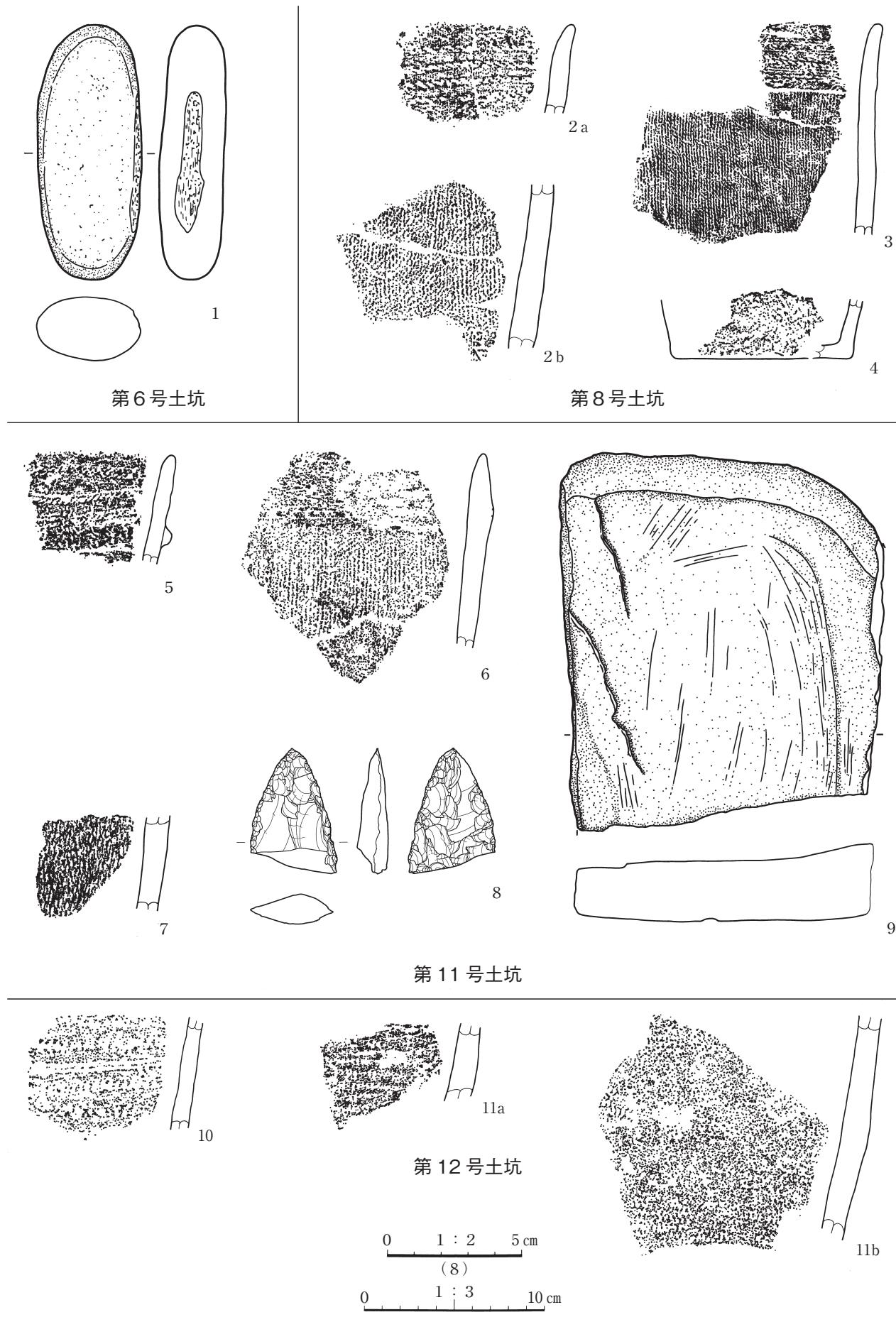
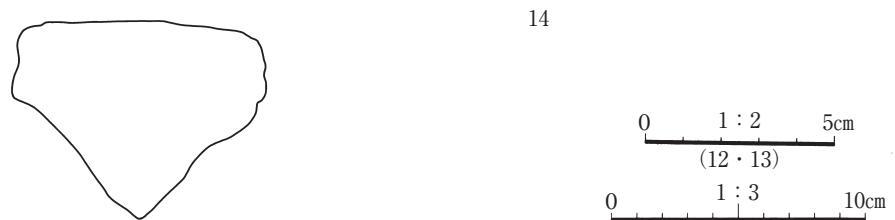
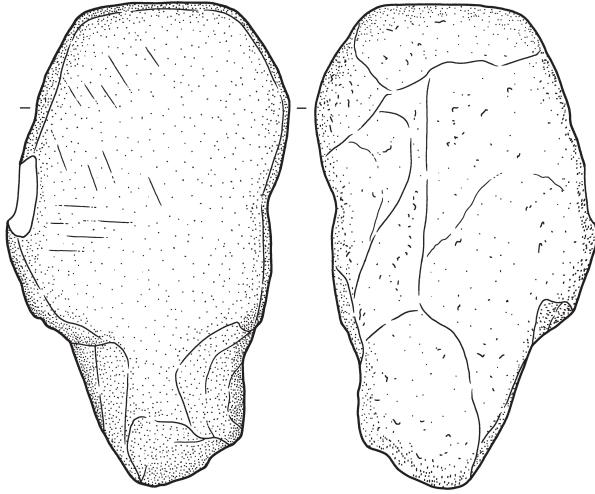
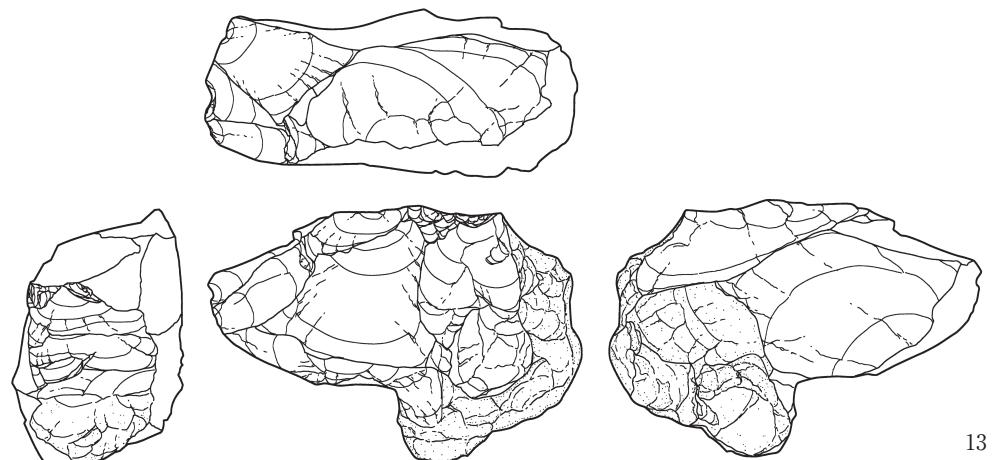
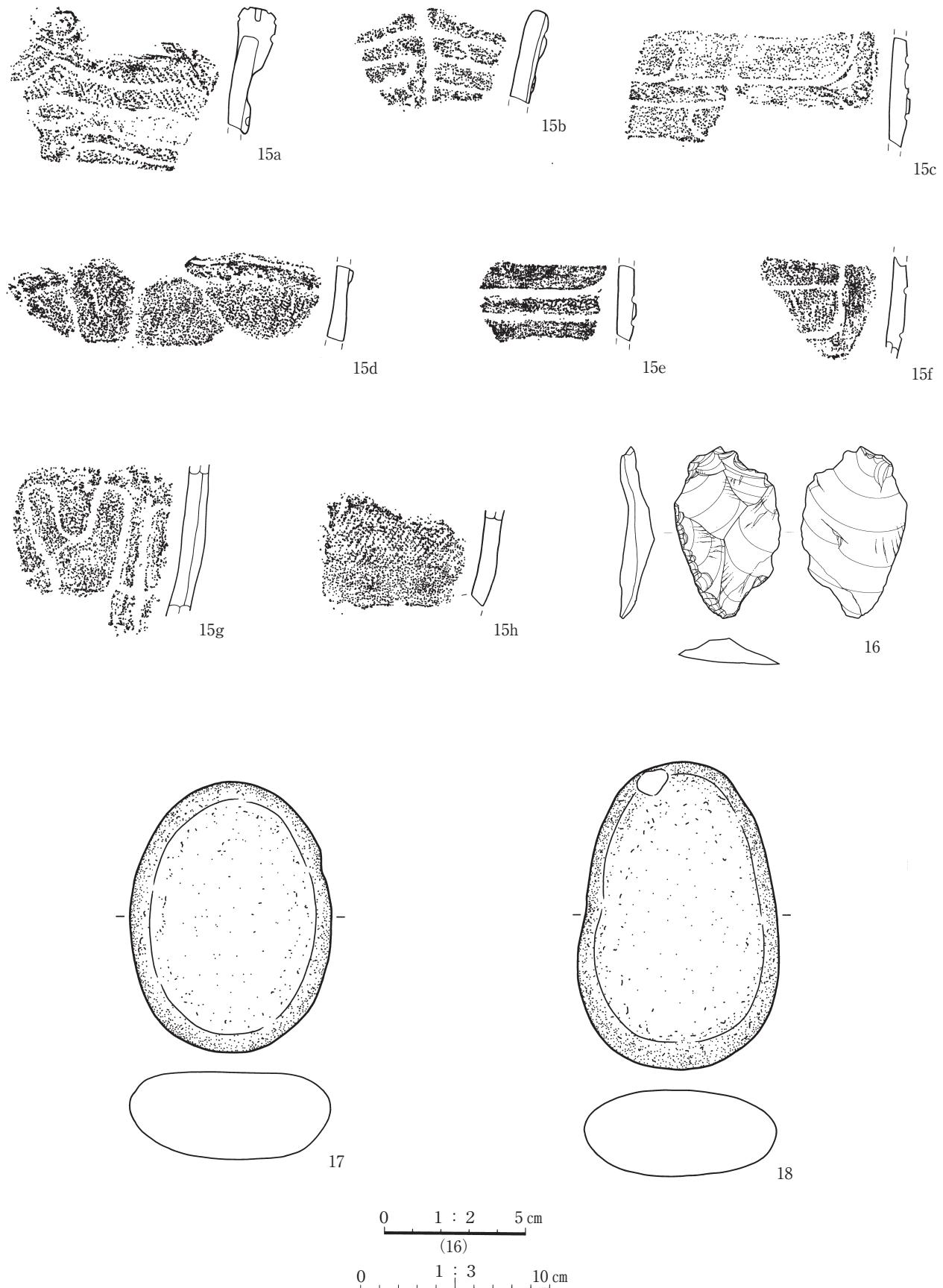


図40 土坑13



第12号土坑

図41 土坑14



第13号土坑

図42 土坑15

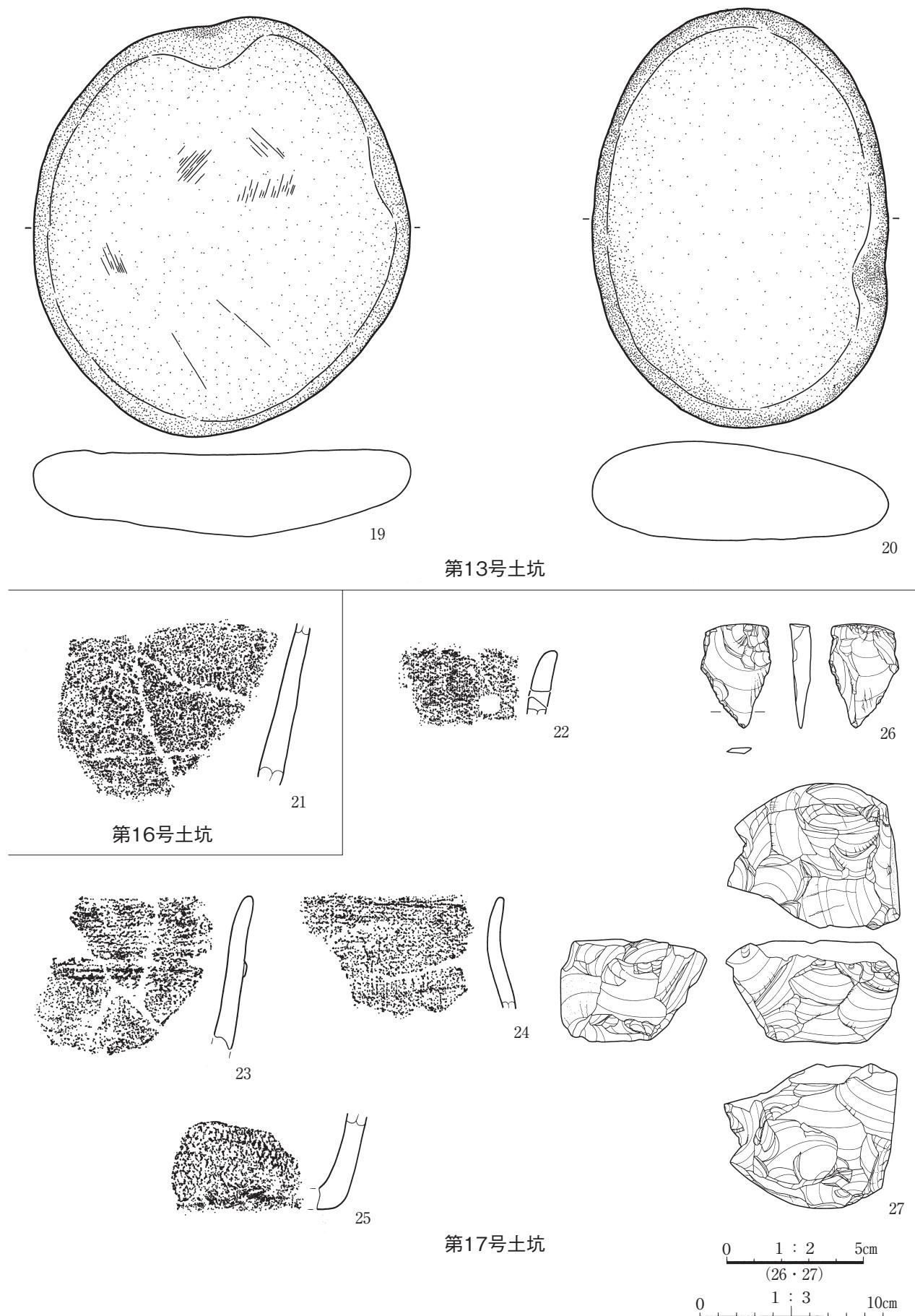
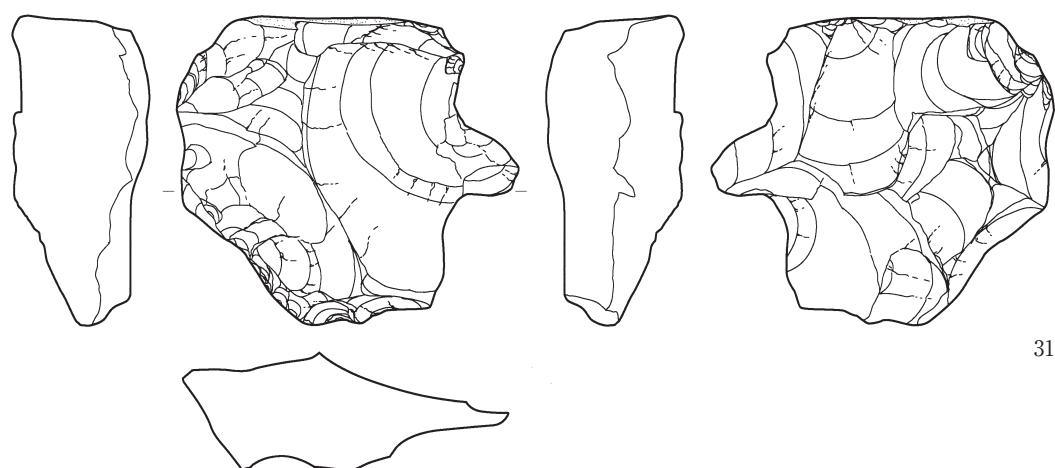
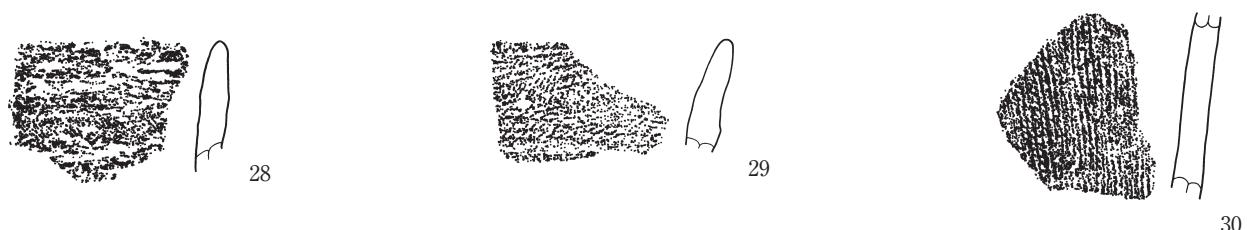
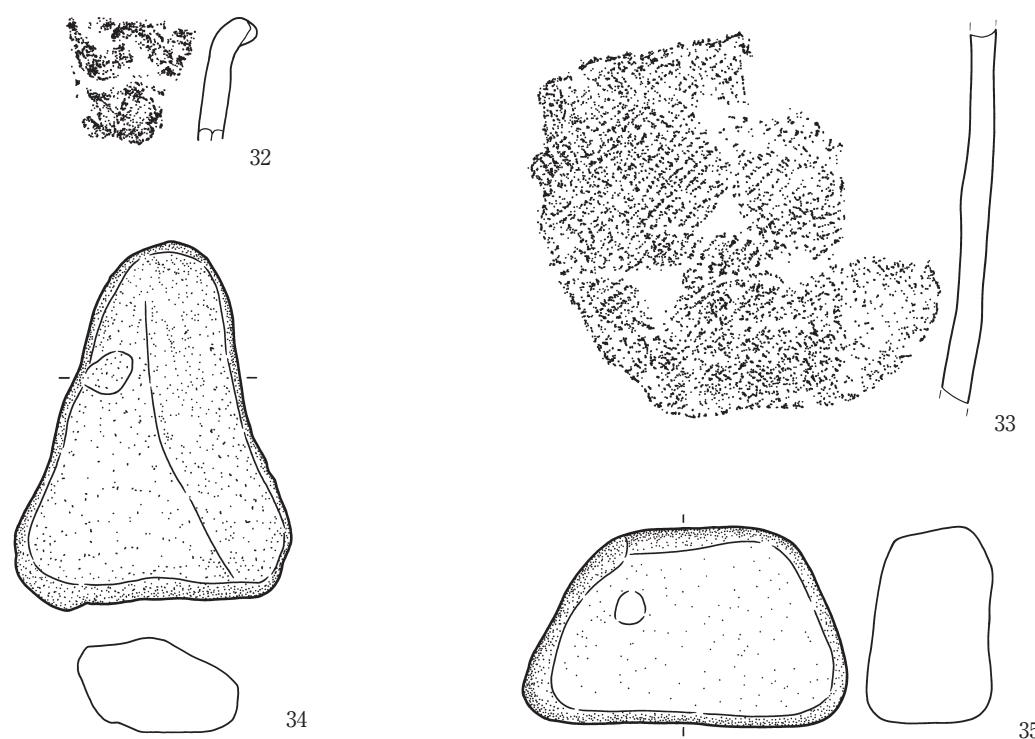


図43 土坑16



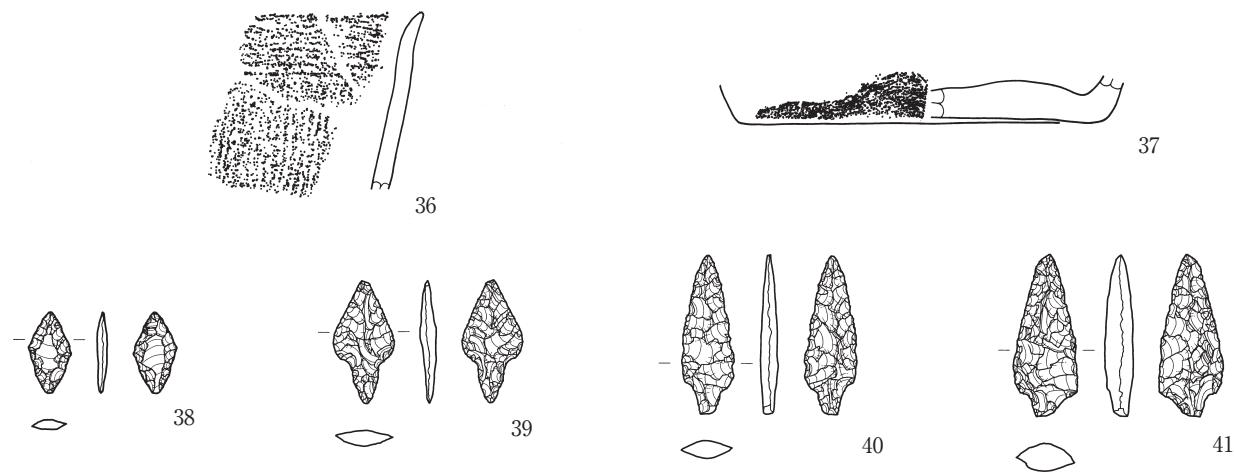
第18号土坑



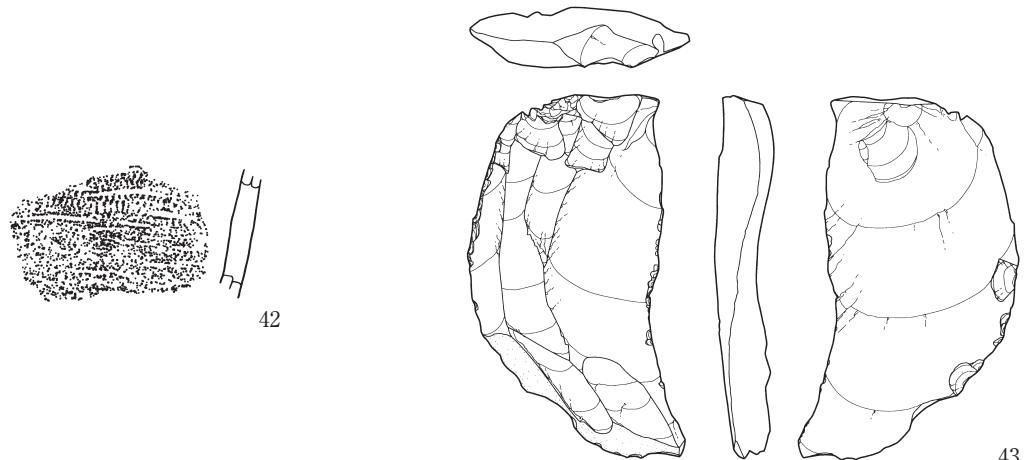
第20号土坑

0 1 : 2 5cm
 (31)
 0 1 : 3 10cm

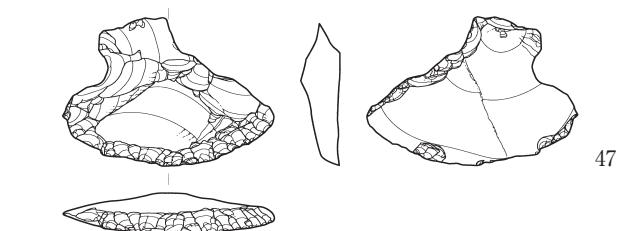
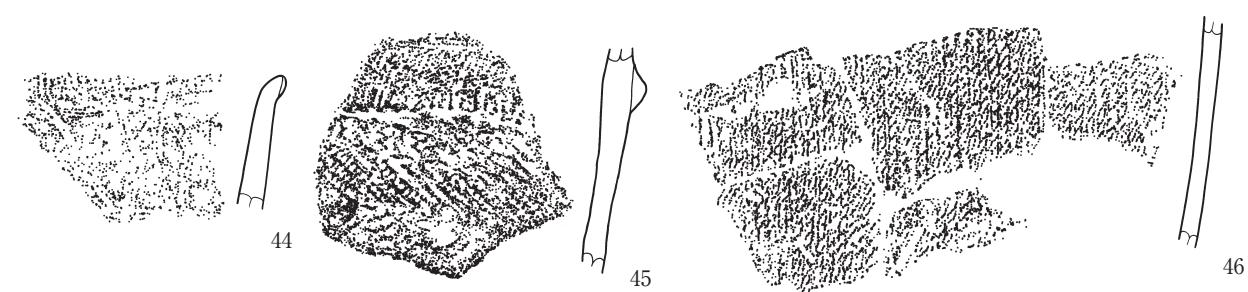
図44 土坑17



第22号土坑



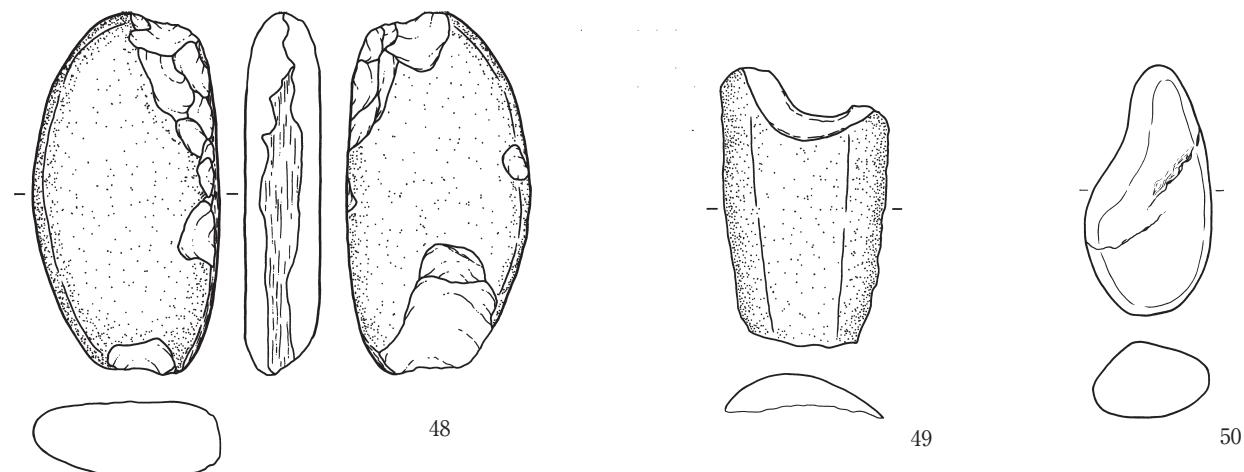
第23号土坑



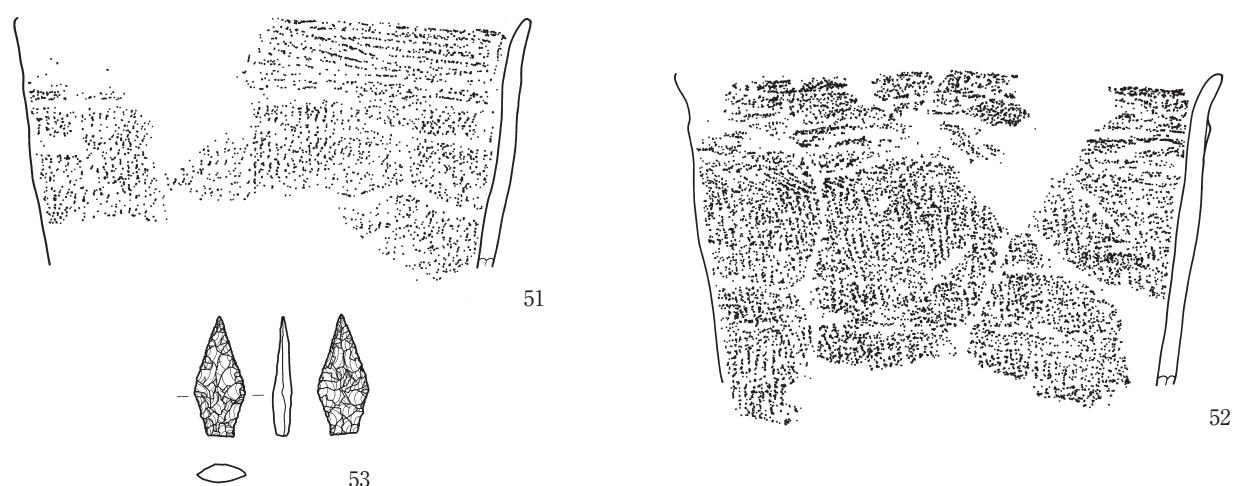
第24号土坑

0 1 : 2 5cm
(38~41・43・47)
0 1 : 3 10cm
(36・37・42・44~46)

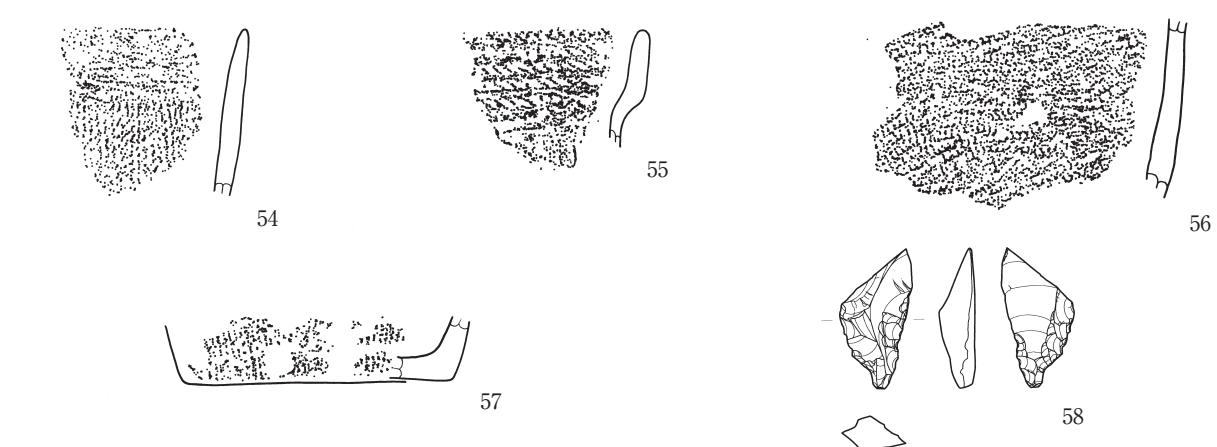
図45 土坑18



第24号土坑



第25号土坑



第26号土坑

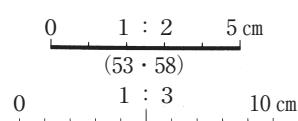
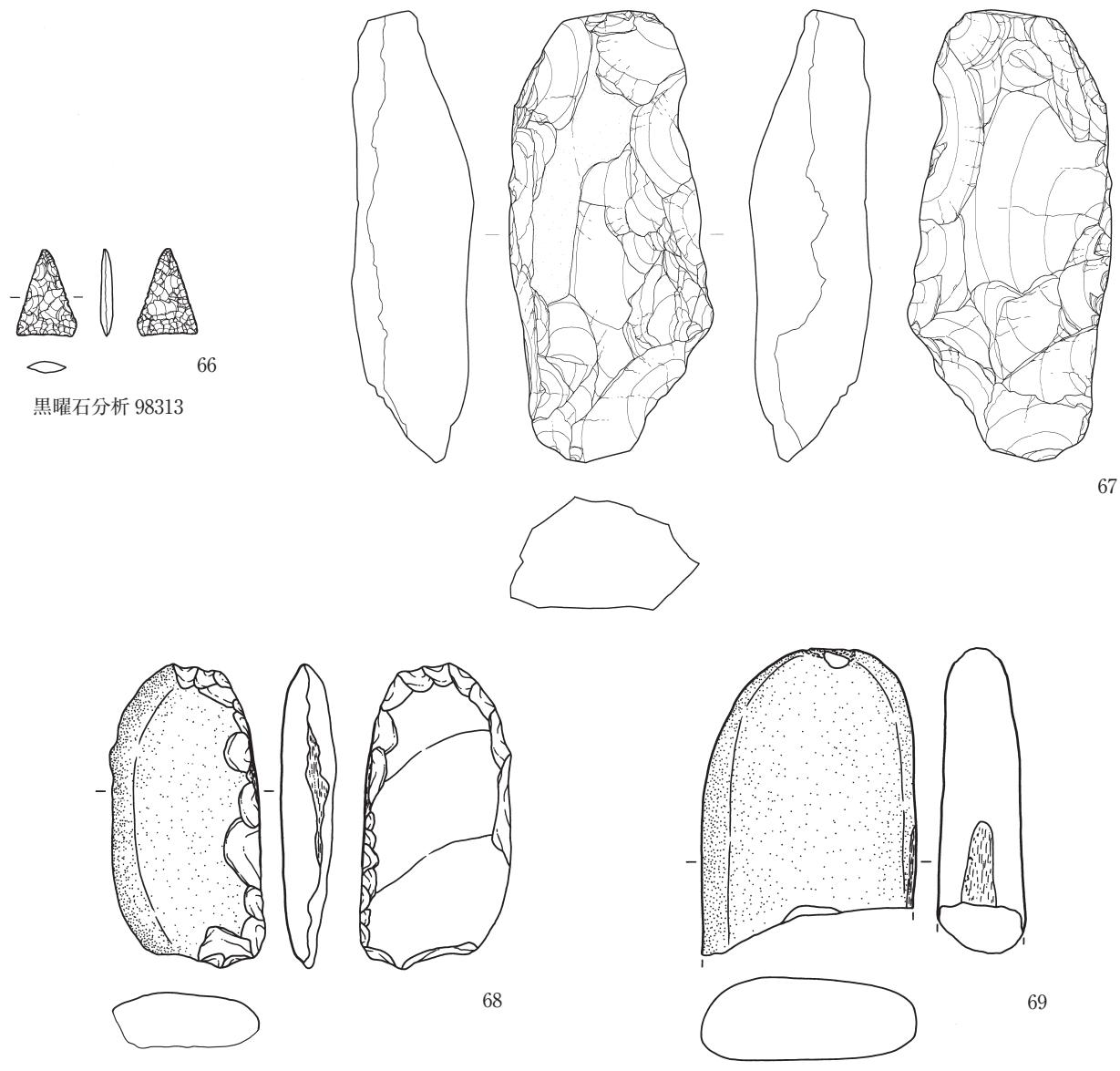


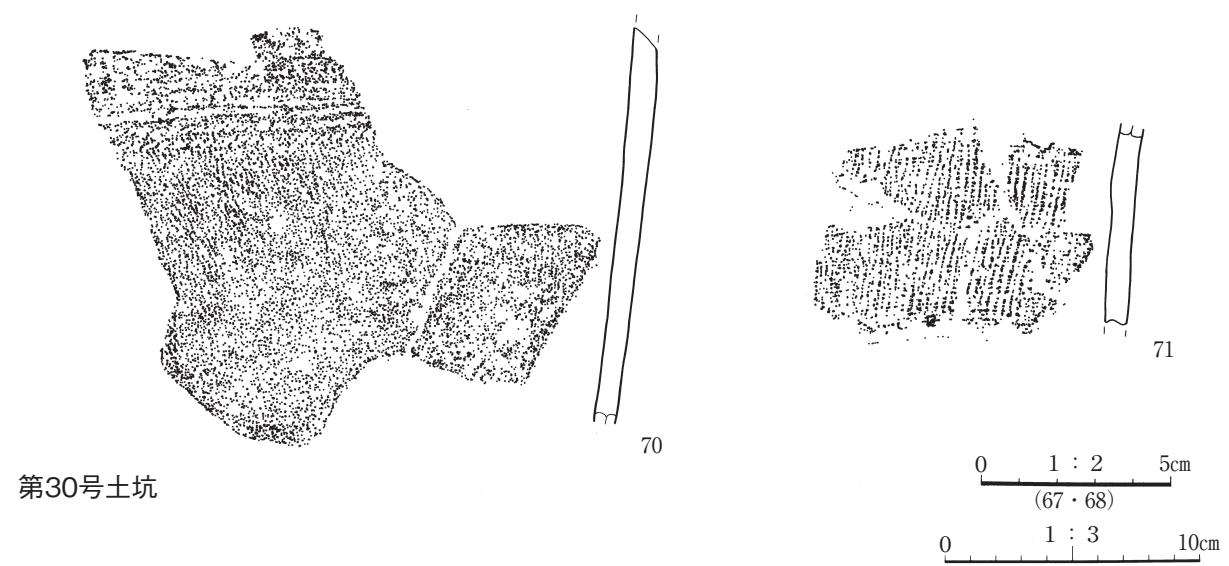
図46 土坑19



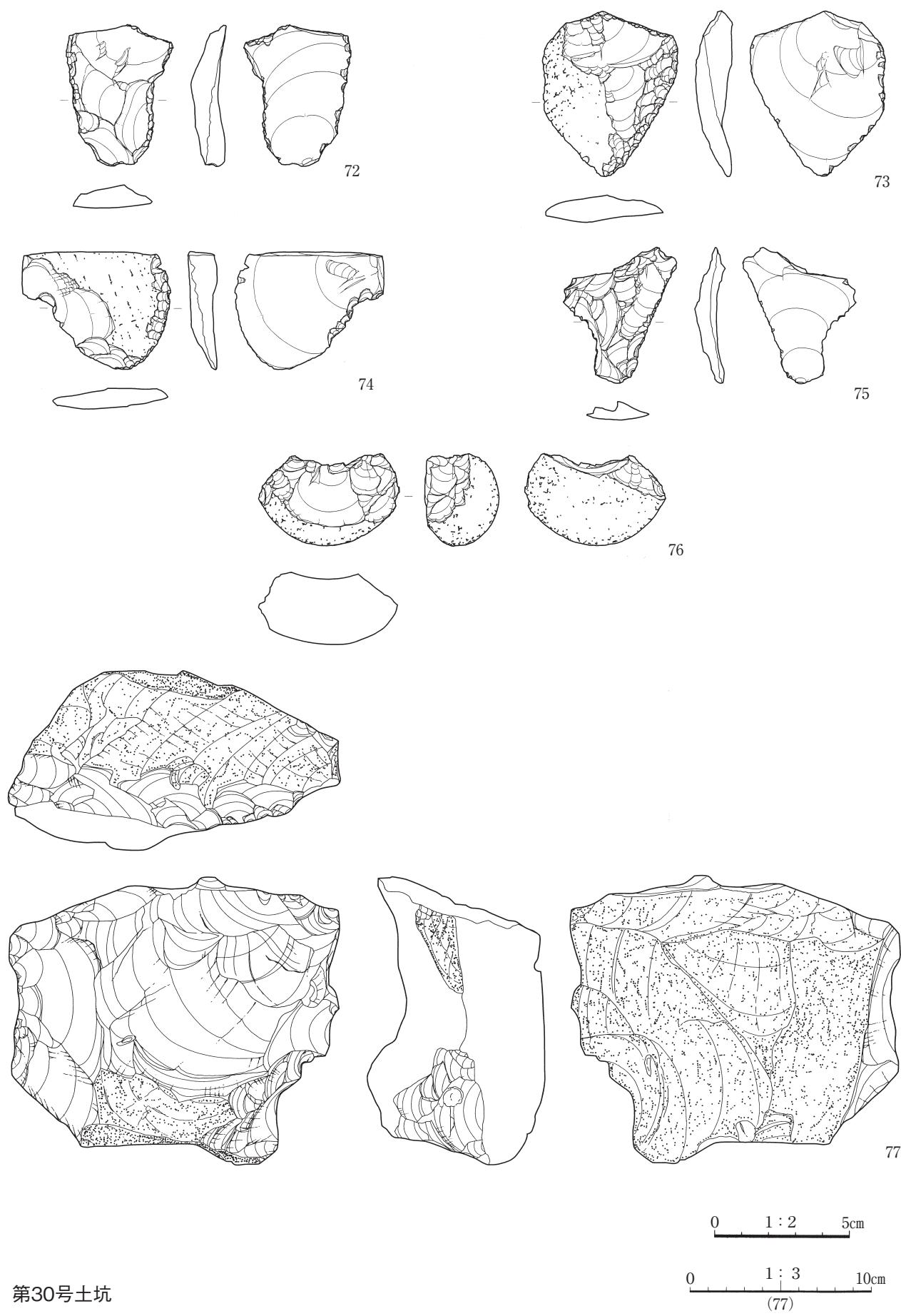
図47 土坑20



第27号土坑

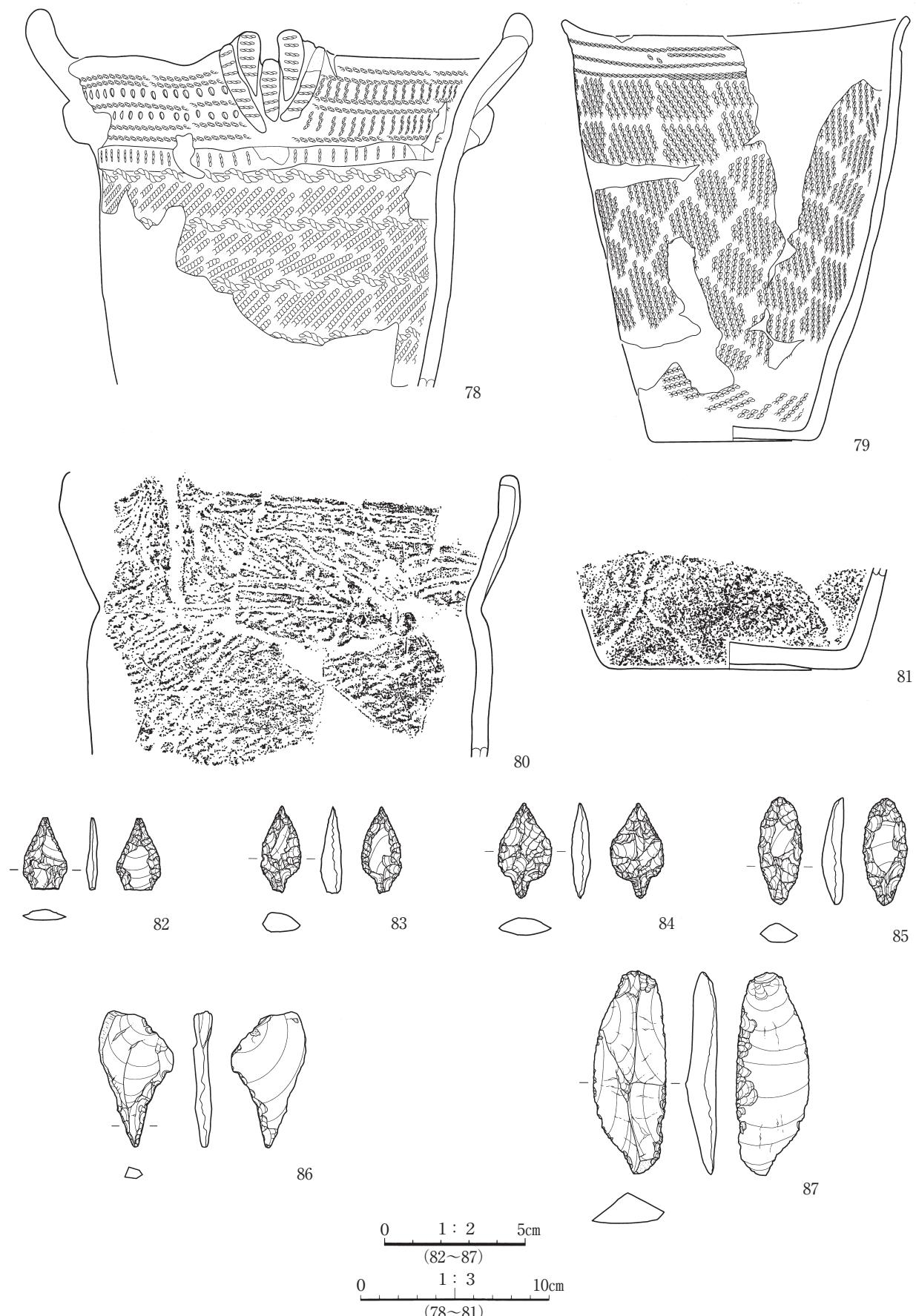


第30号土坑



第30号土坑

図49 土坑22



第31号土坑

図50 土坑23

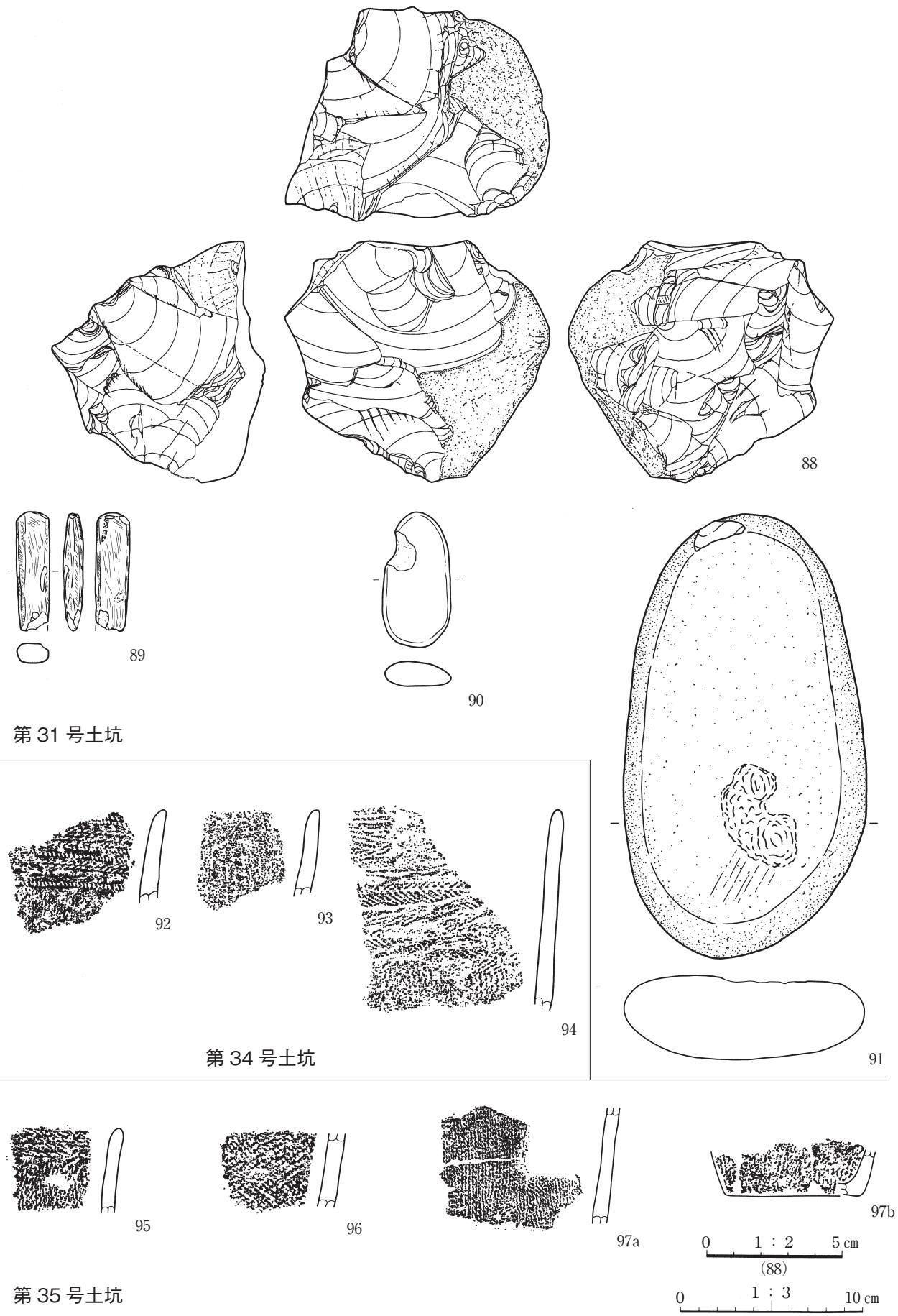
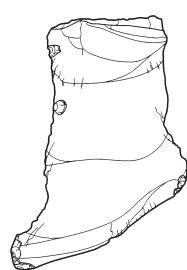
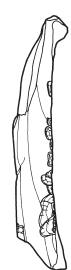
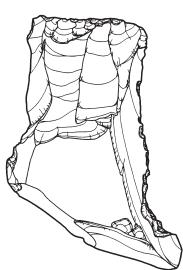
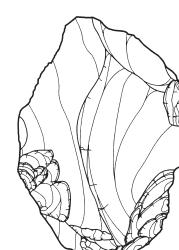
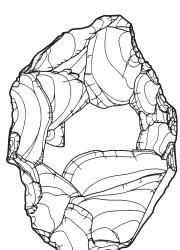


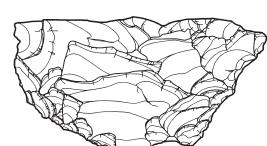
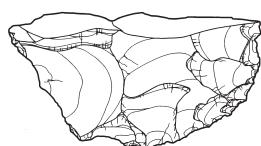
図51 土坑24



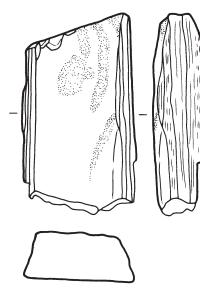
98



99



110



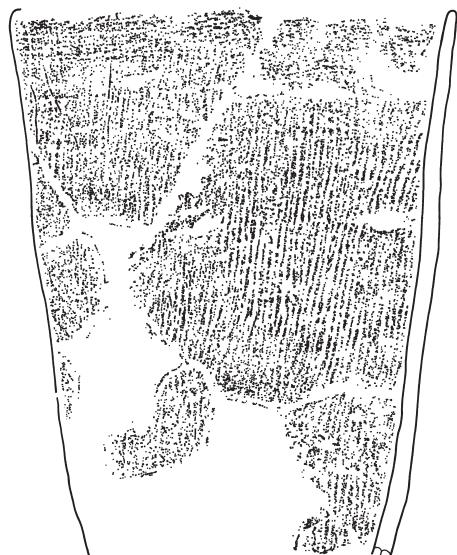
101

第35号土坑



102

103



105a



105b

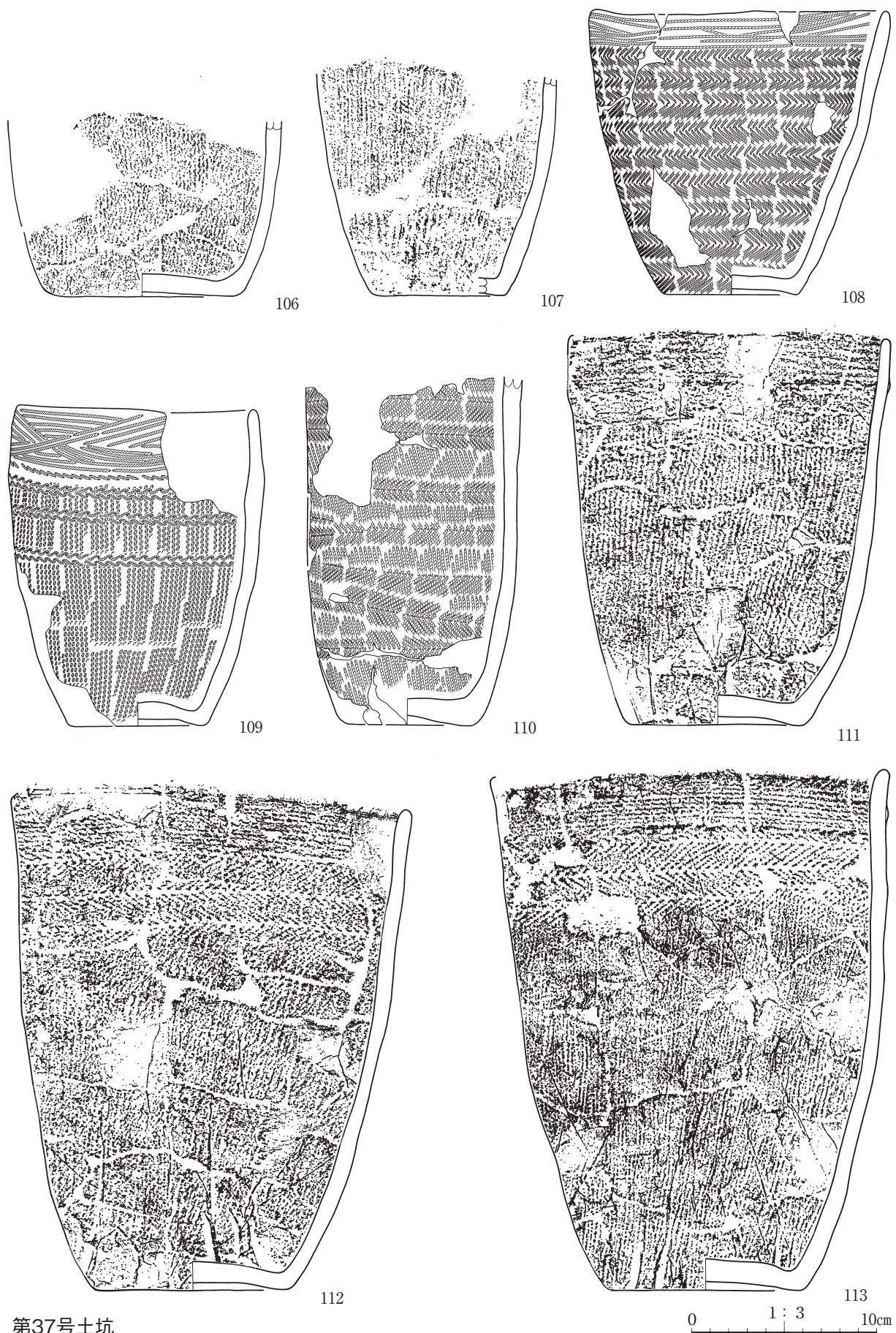
104

0 1 : 2 5cm
(98~100)

0 1 : 3 10cm
(101~105)

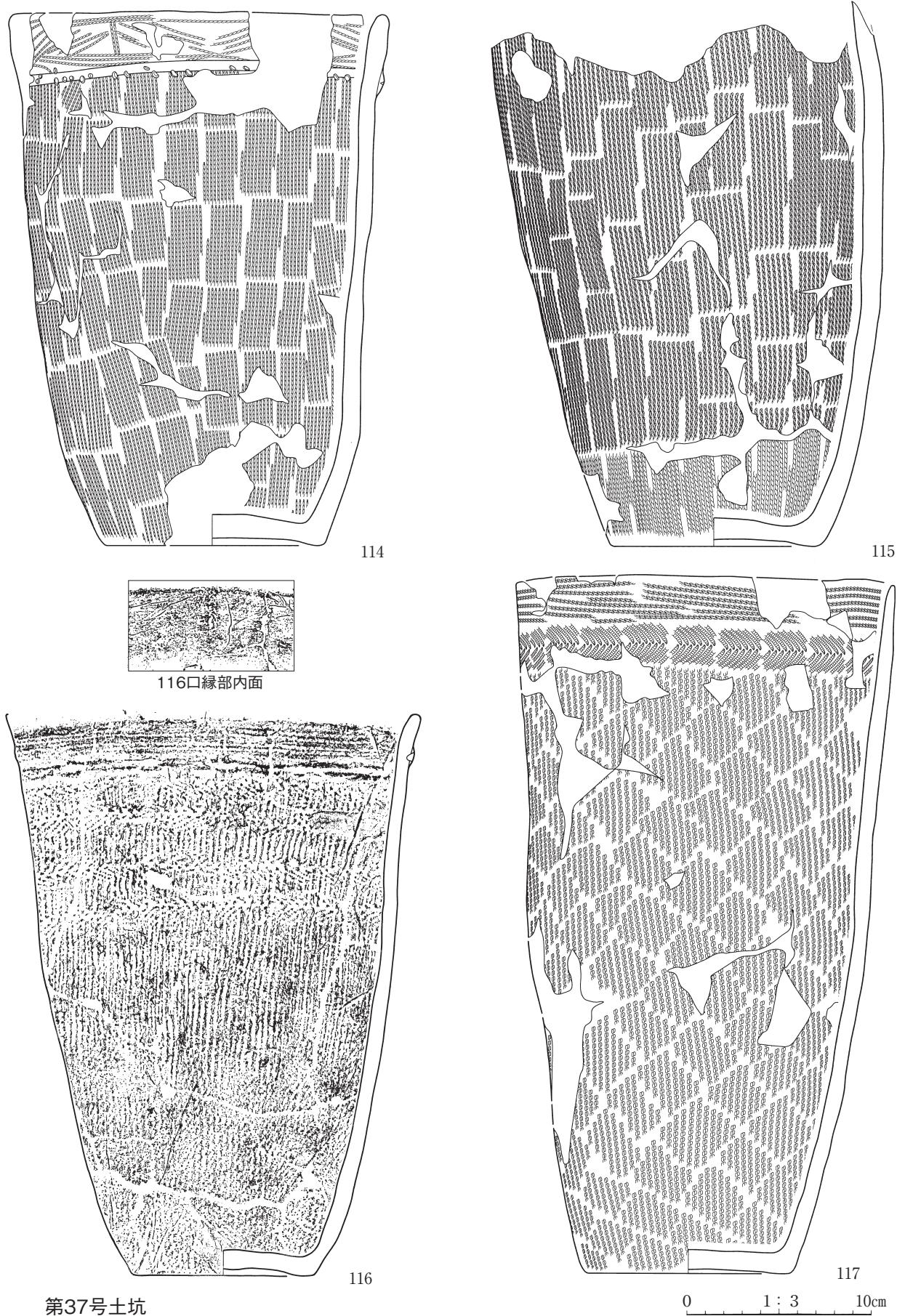
第37号土坑

図52 土坑25



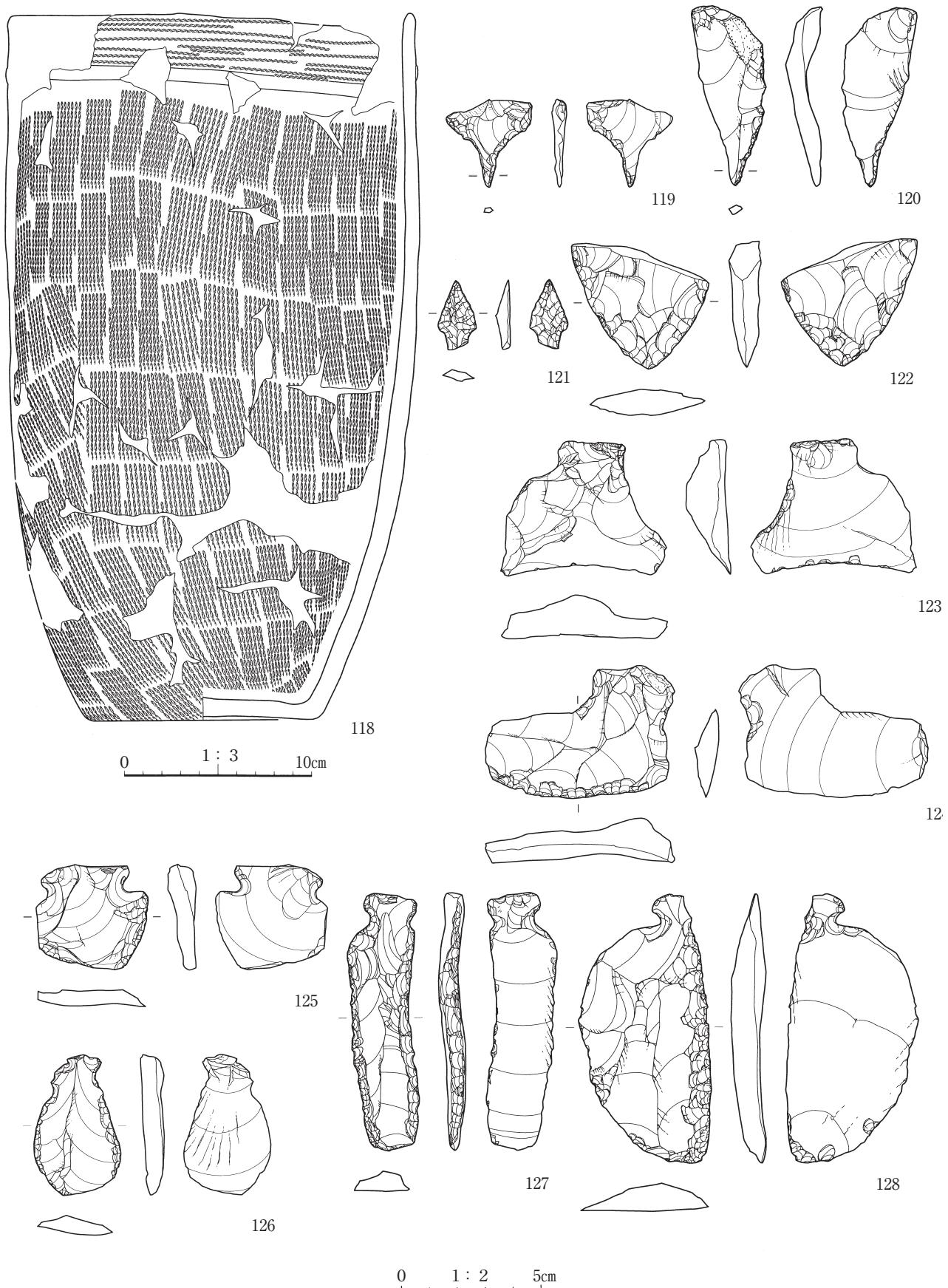
第37号土坑

図53 土坑26



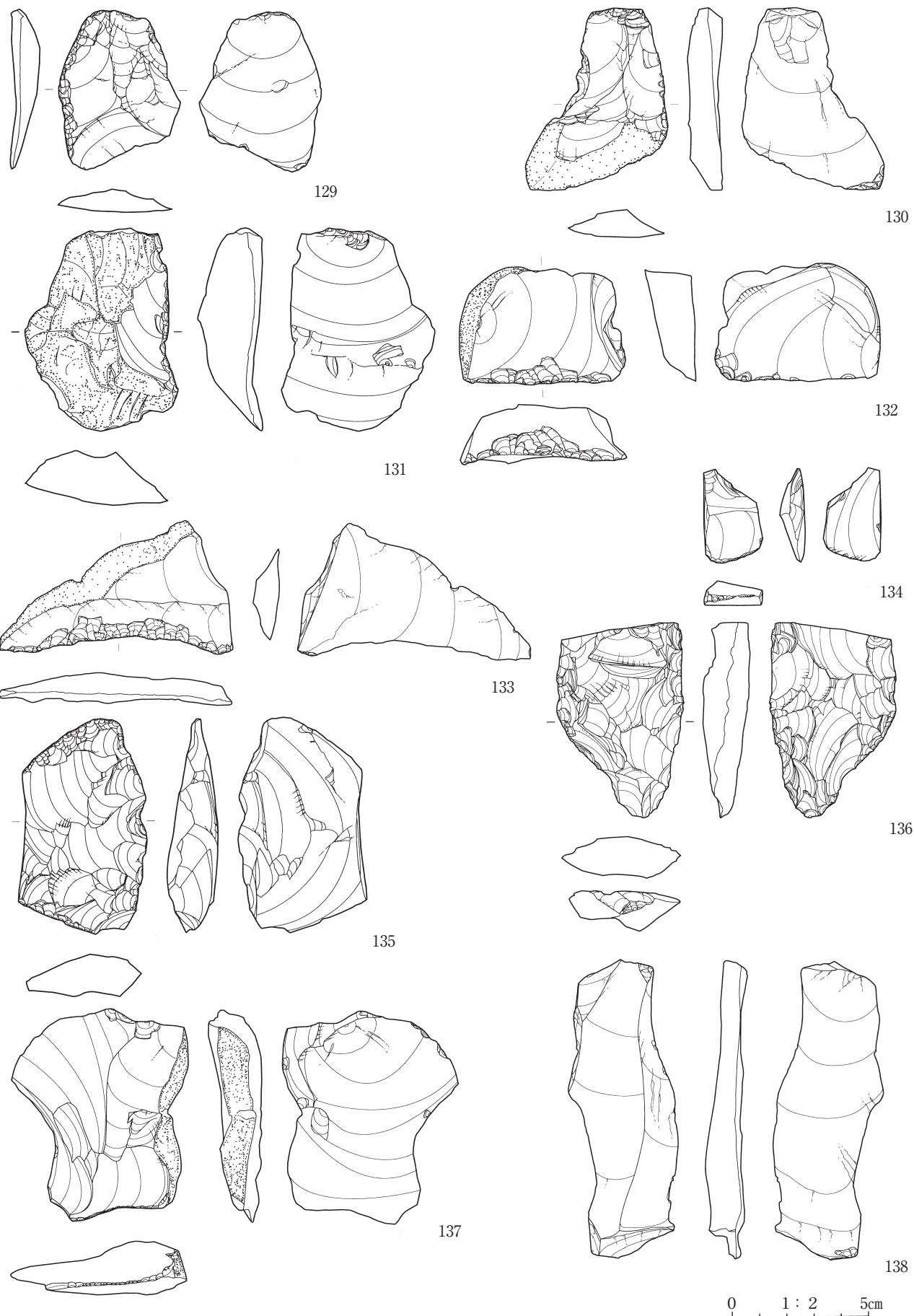
第37号土坑

図54 土坑27

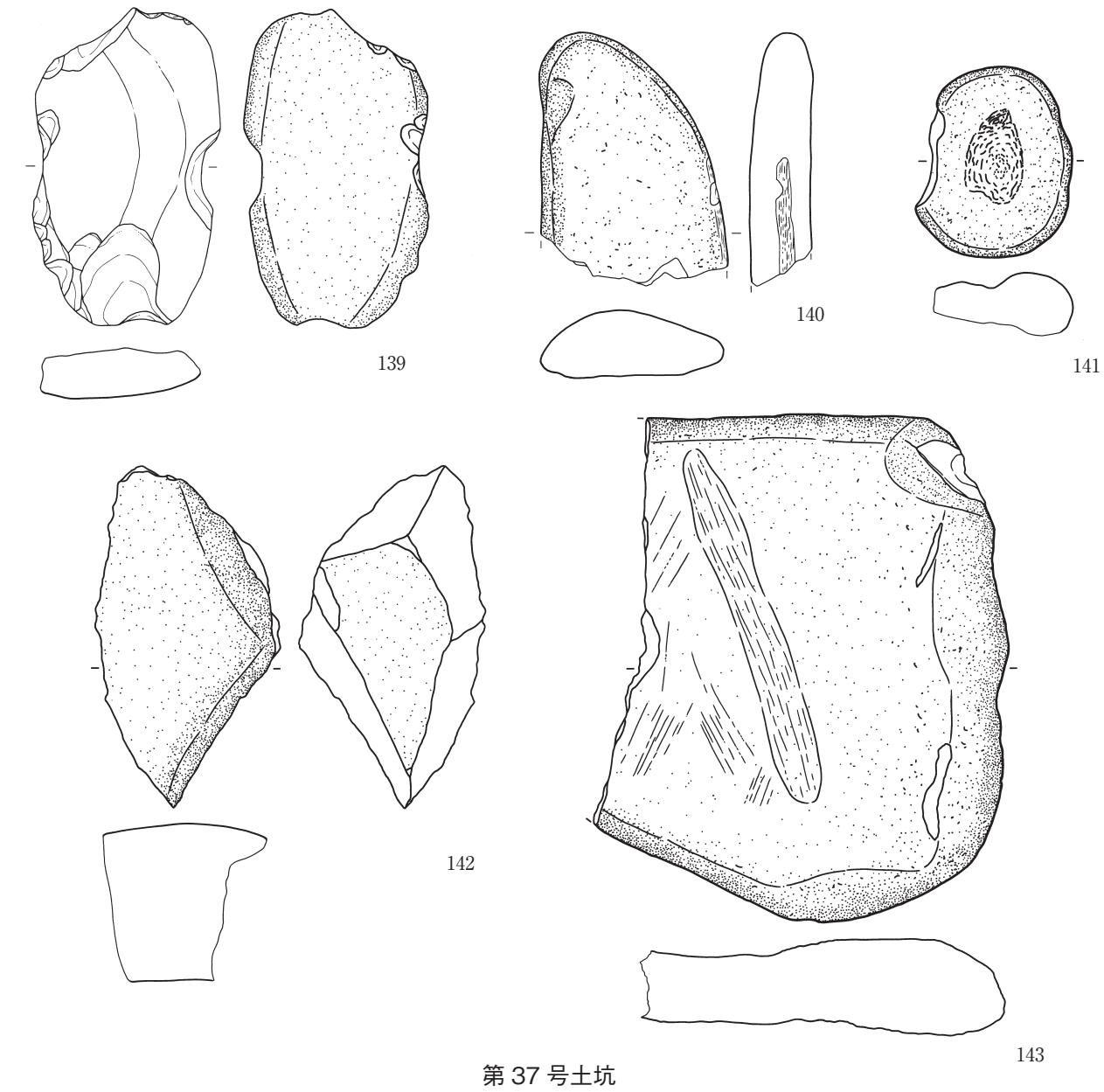


第37号土坑

図55 土坑28



第37号土坑
図56 土坑29



第37号土坑

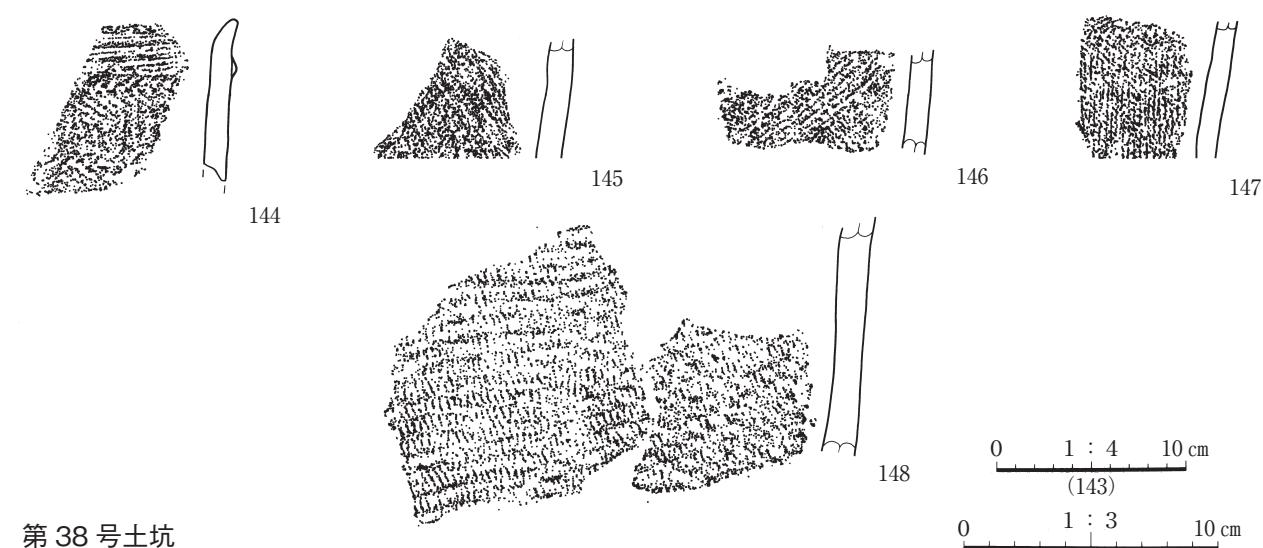
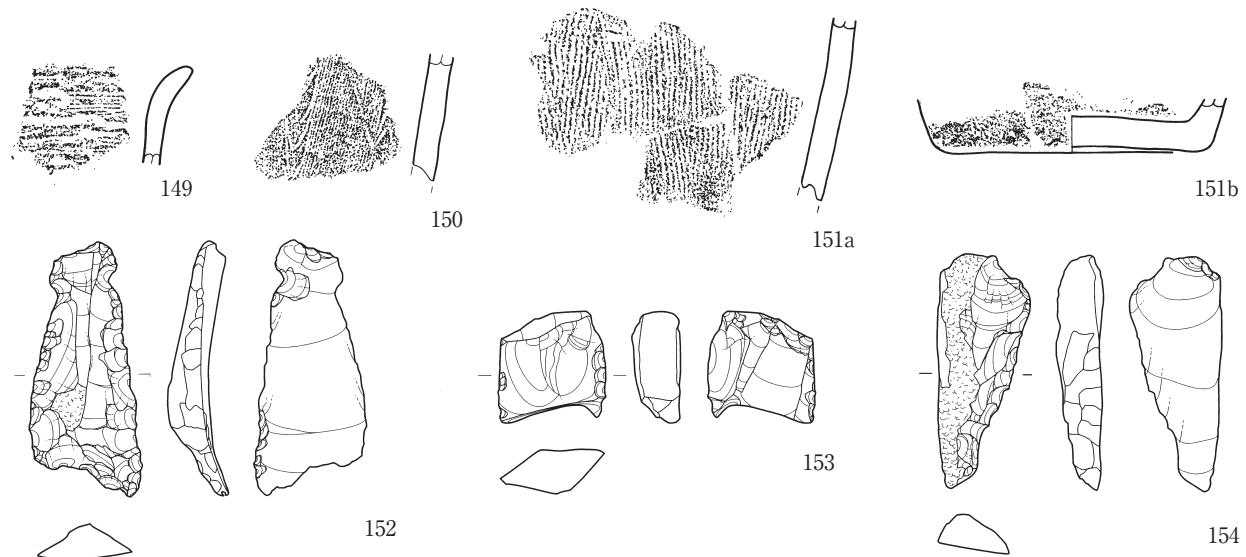
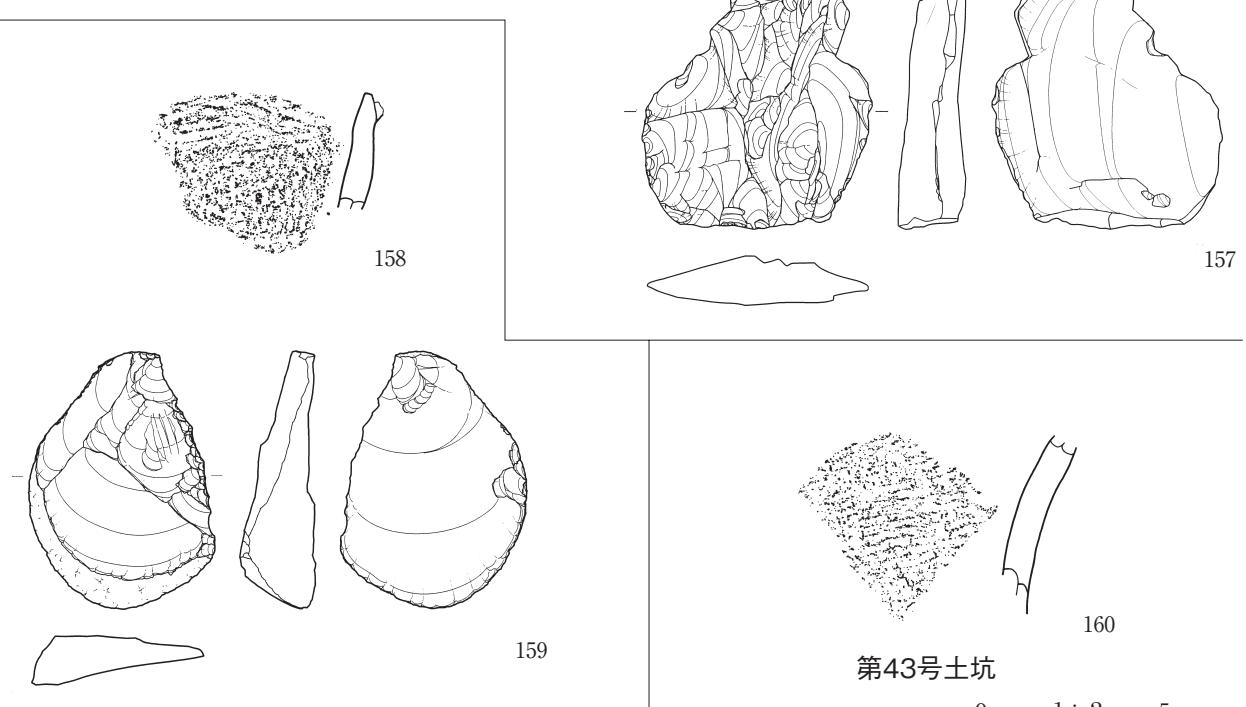


図57 土坑30



第41号土坑



第42号土坑

第43号土坑

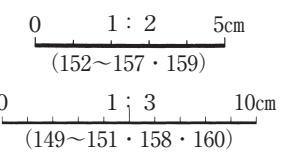
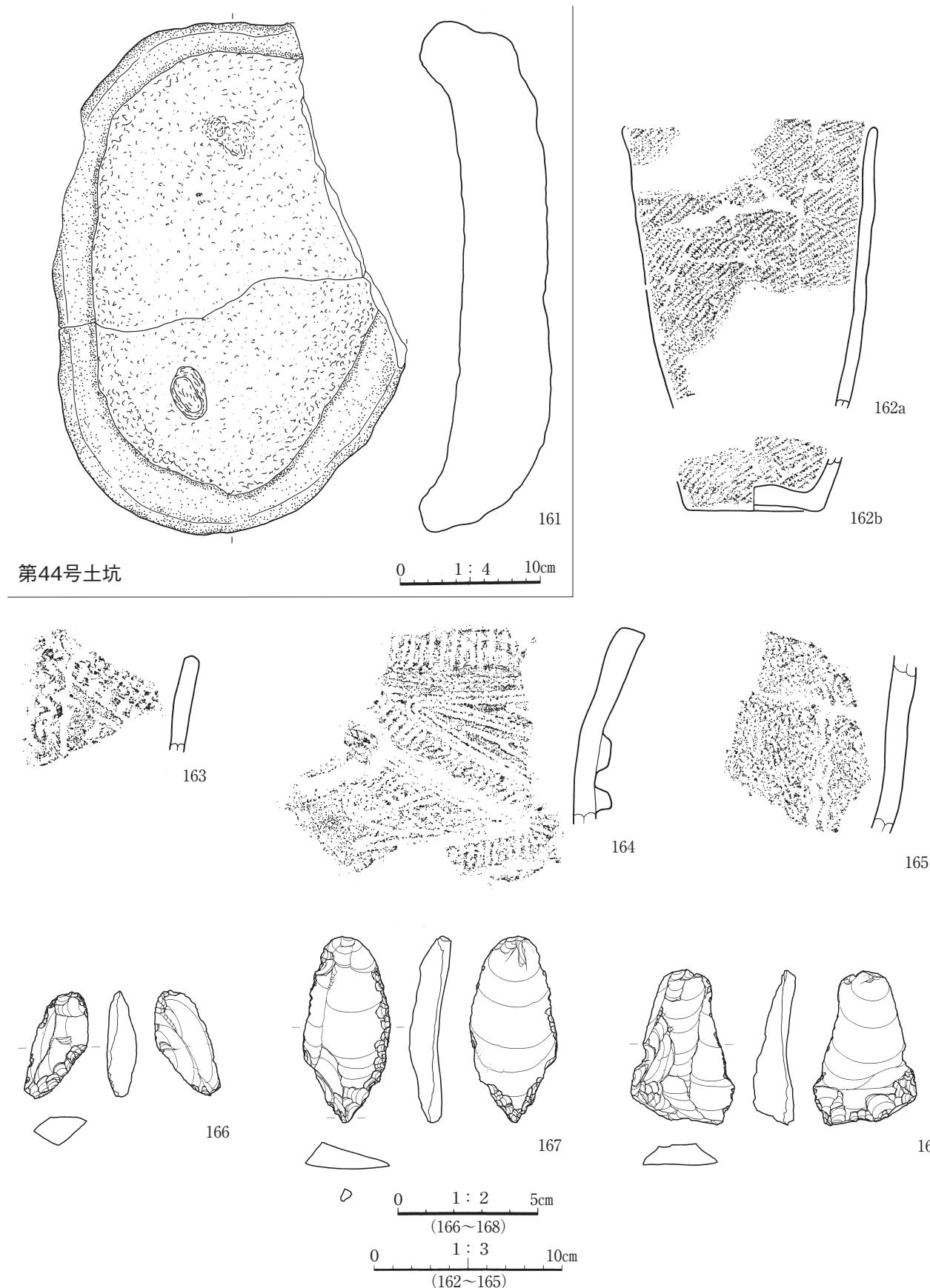


図58 土坑31



第45号土坑

図59 土坑32

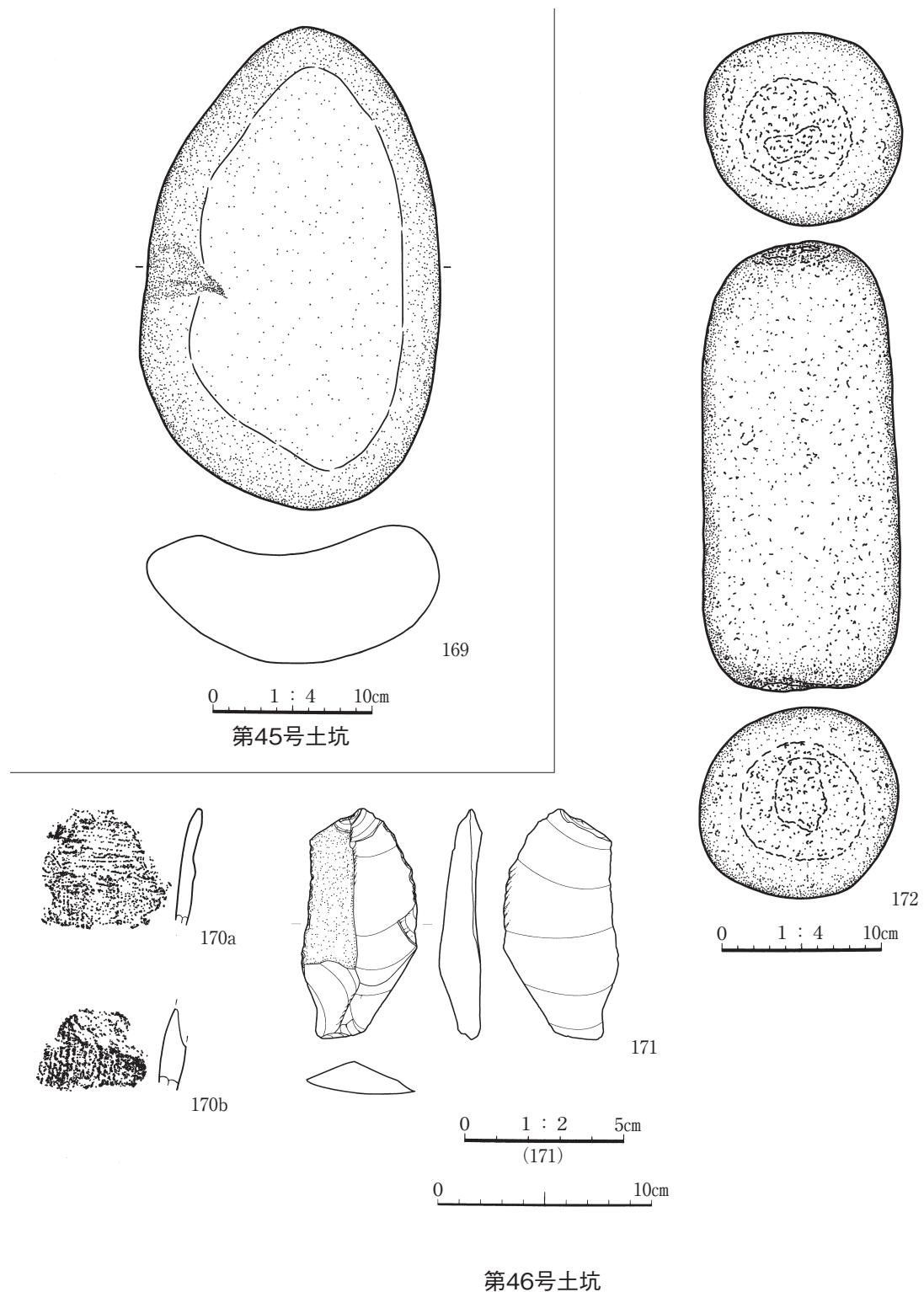


図60 土坑33

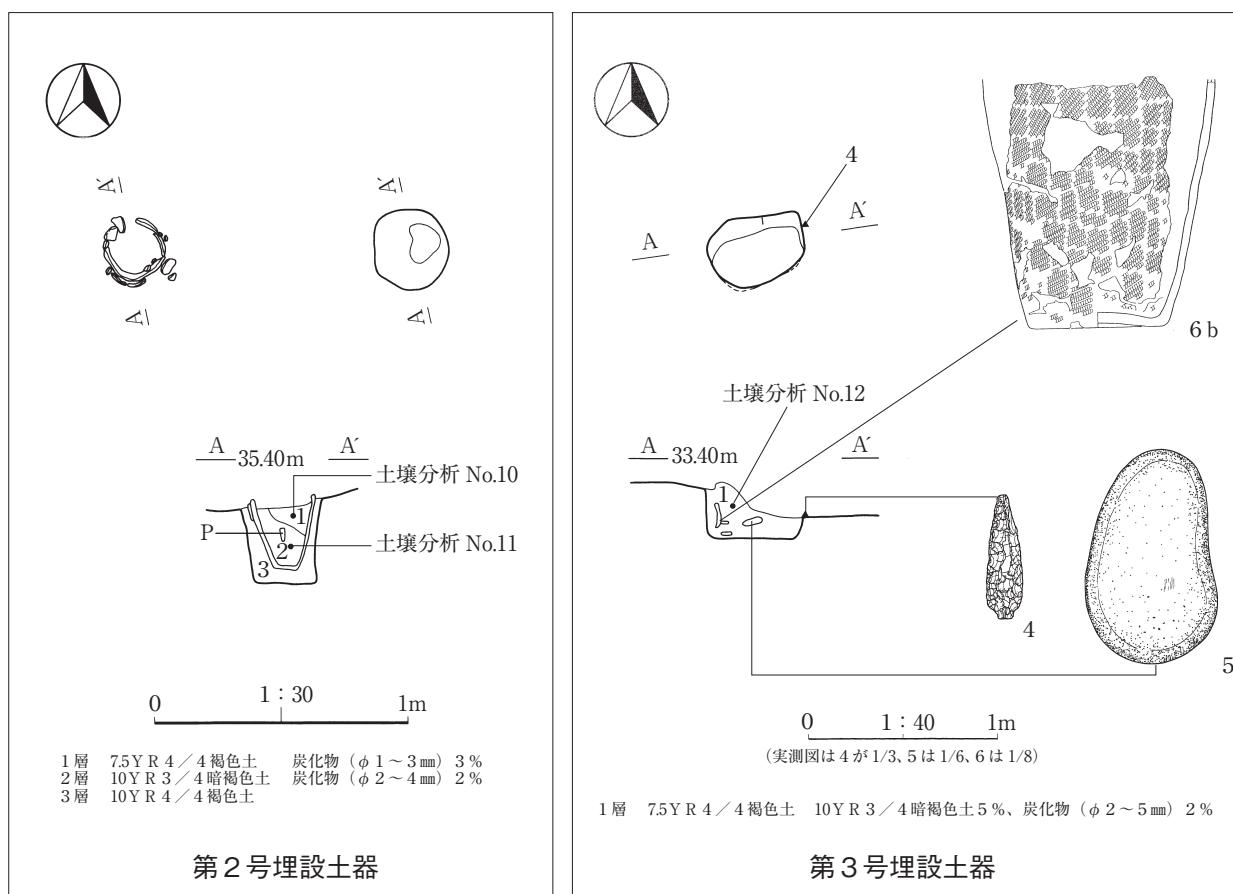
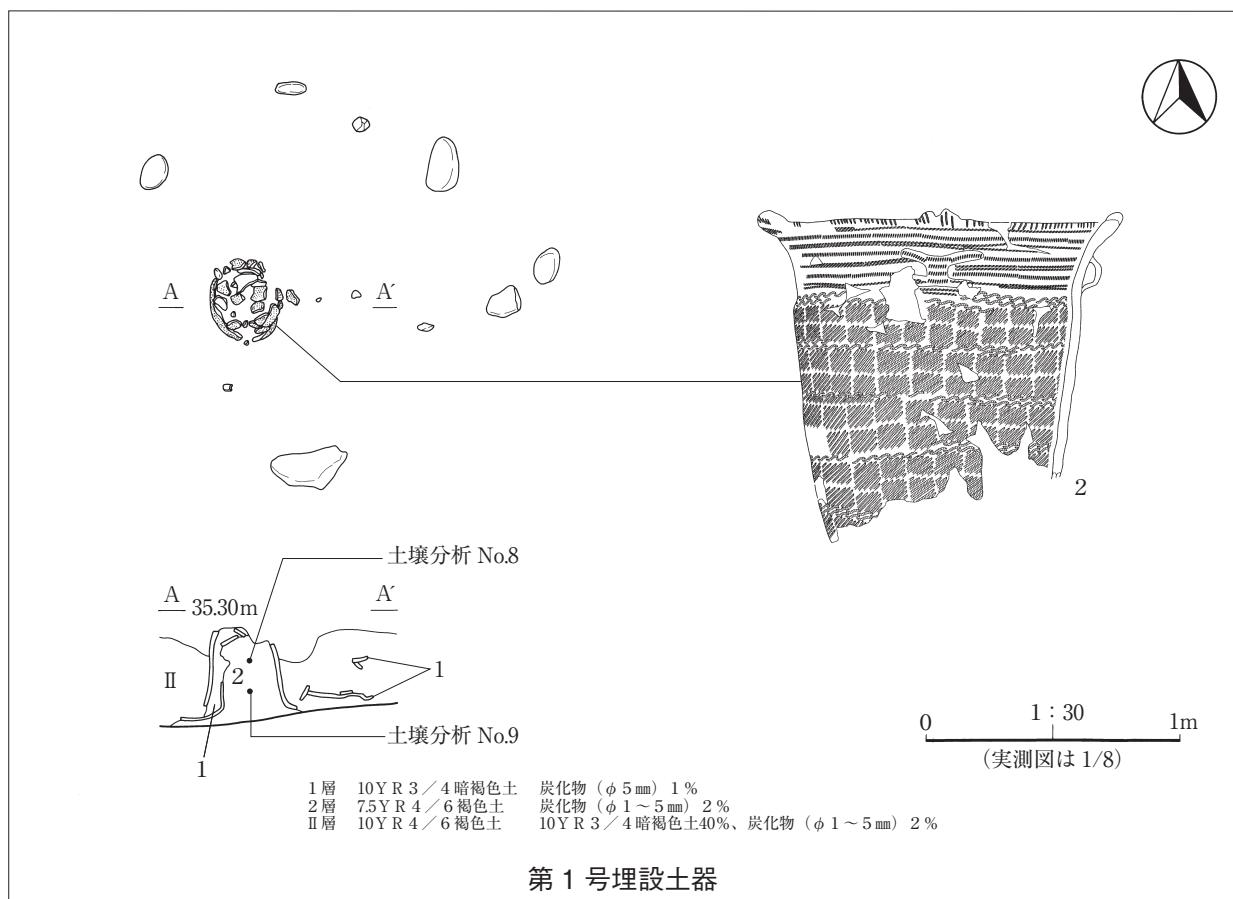


図61 埋設土器 1

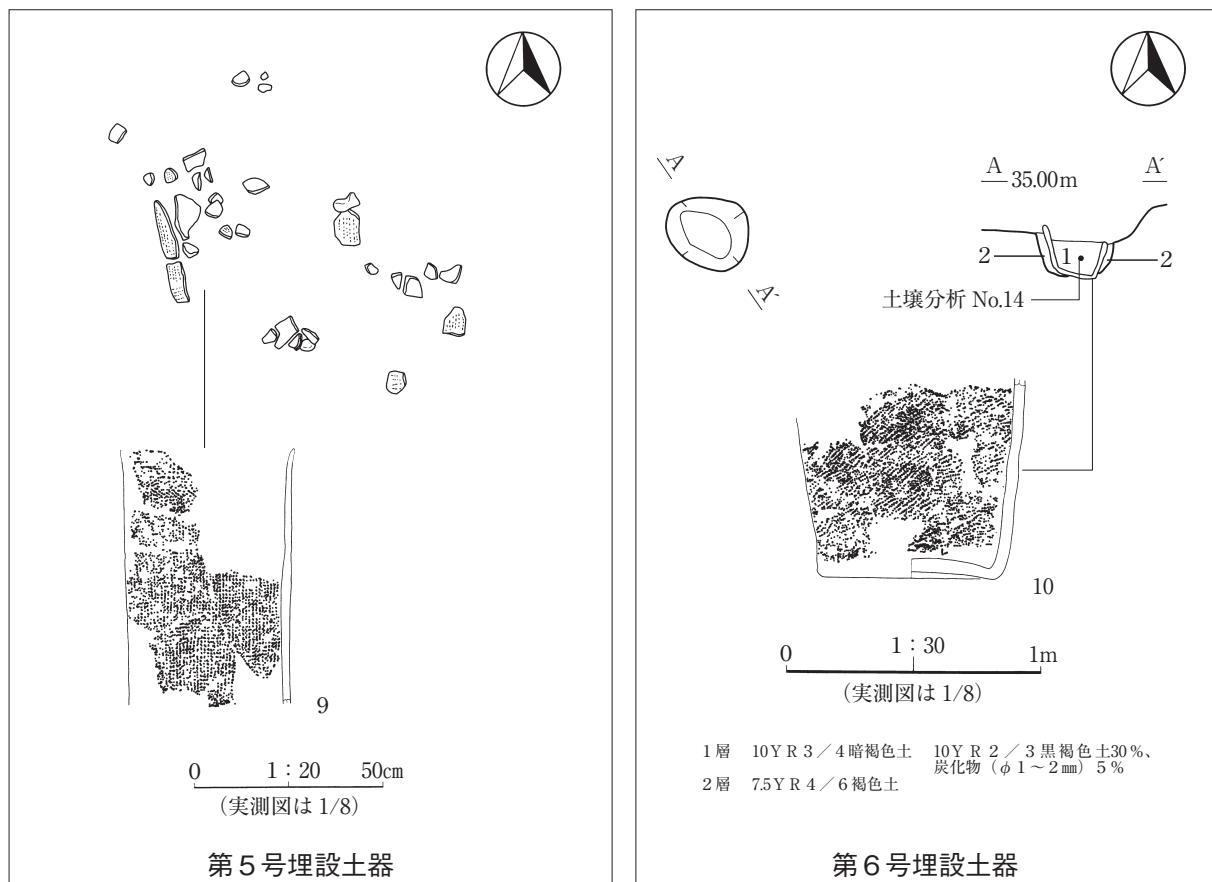
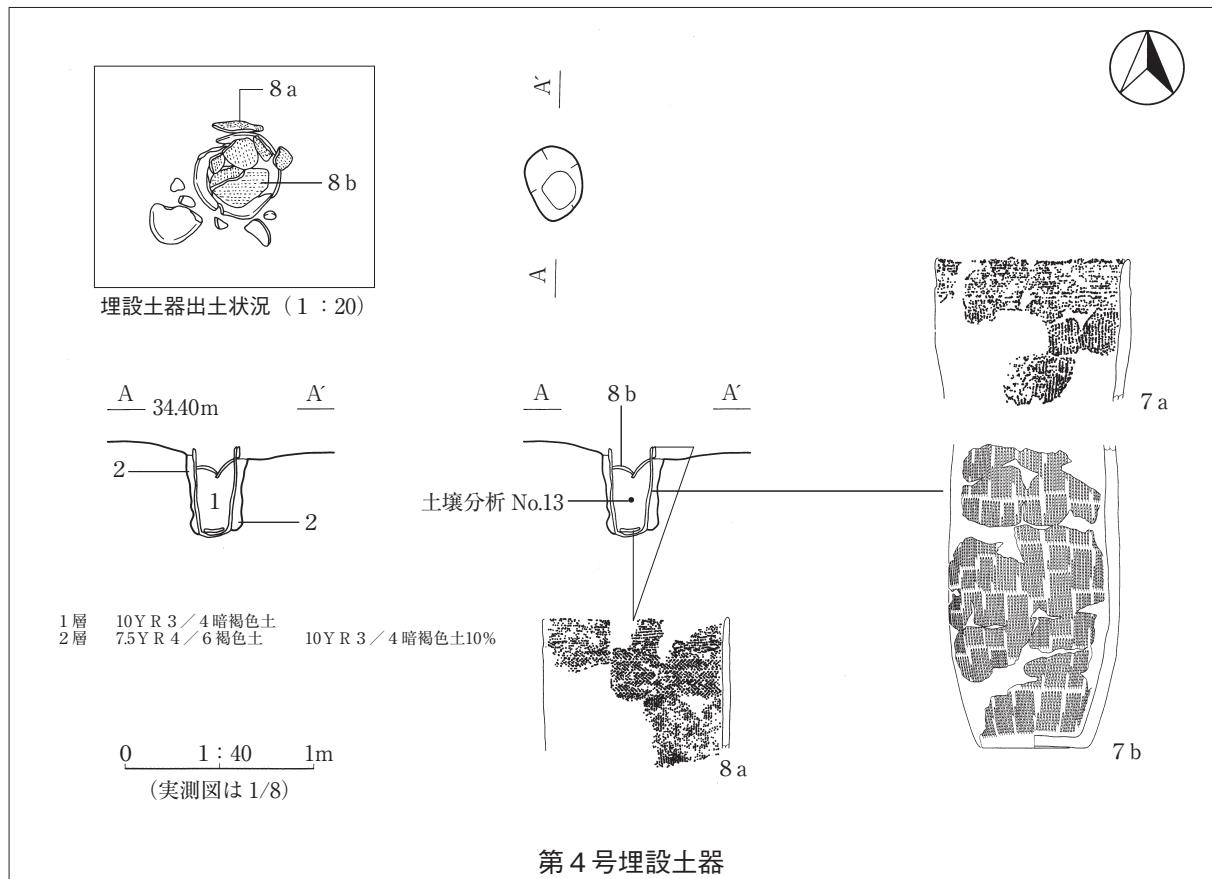


図62 埋設土器2

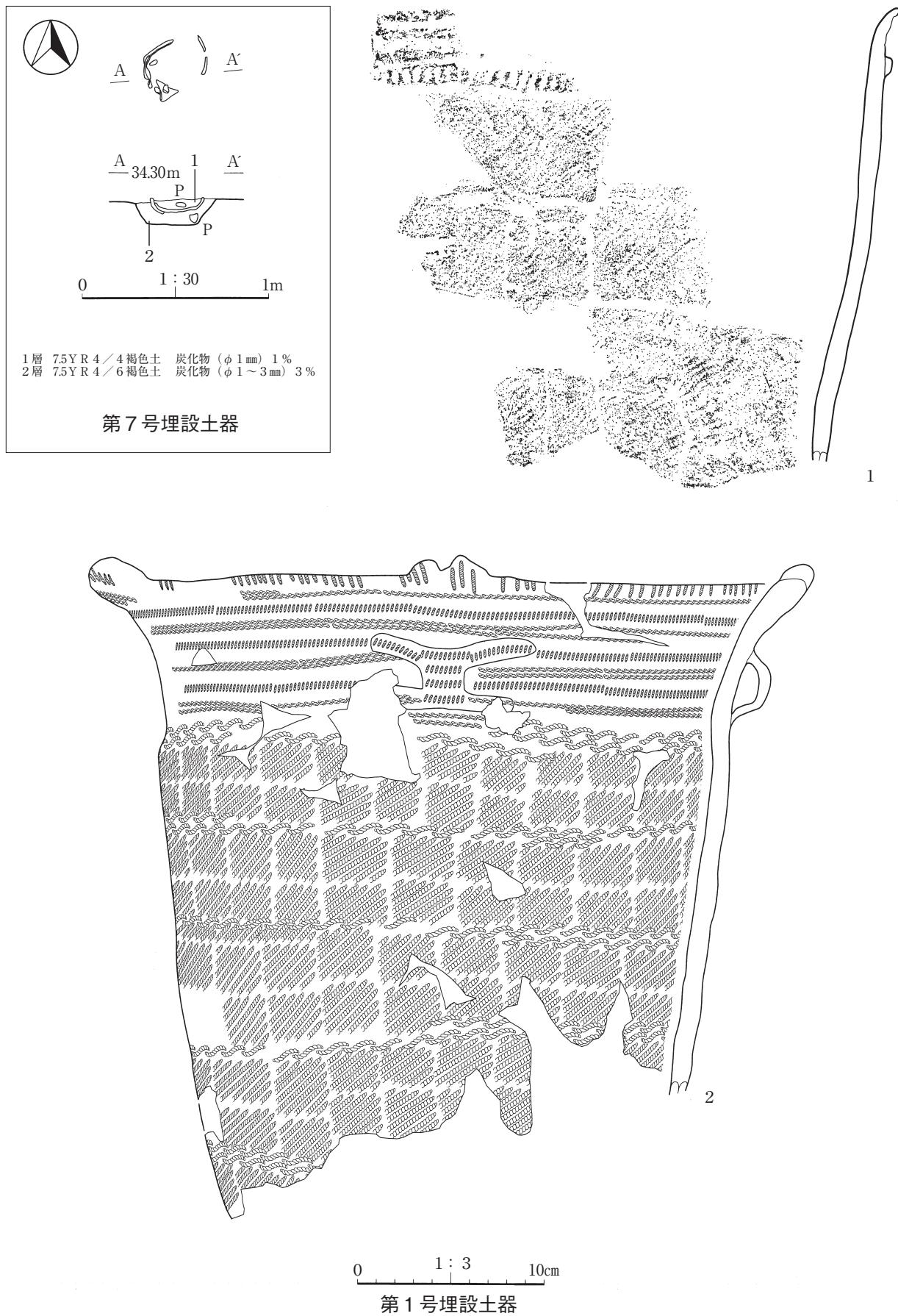
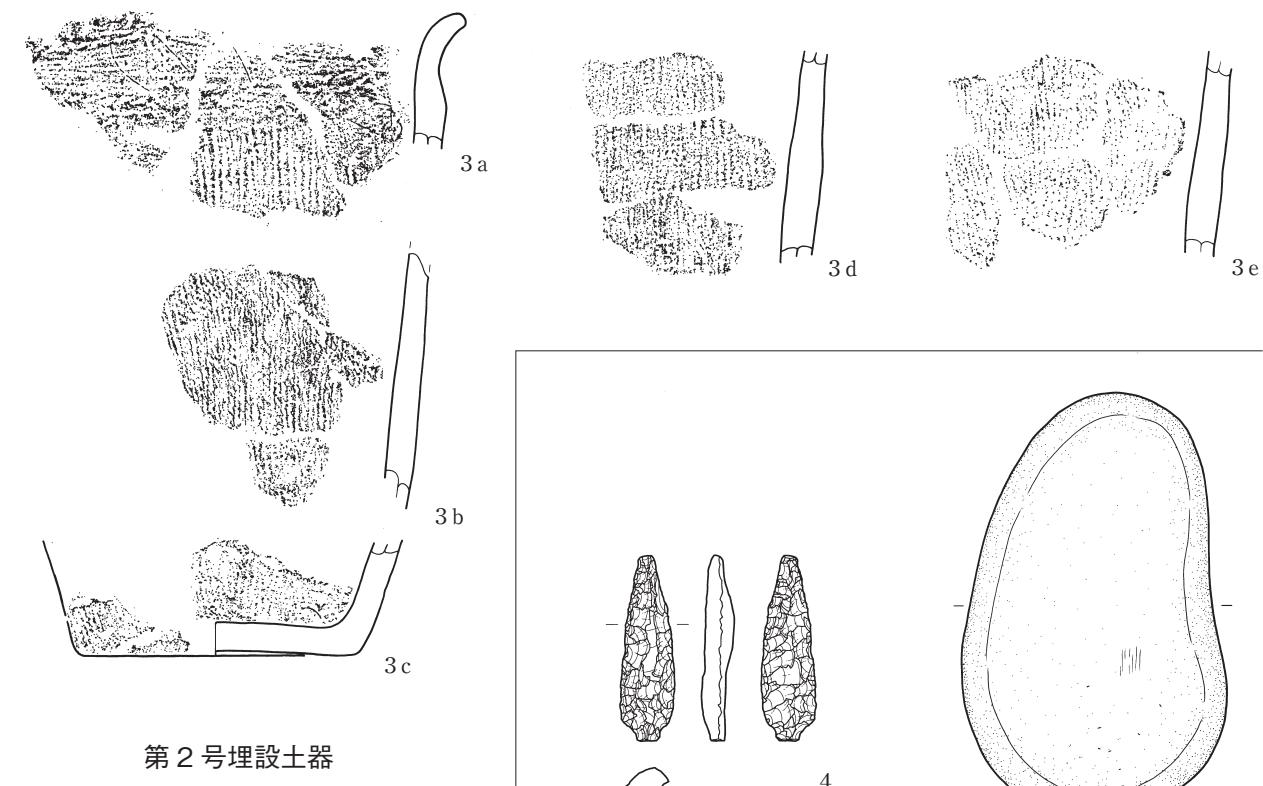
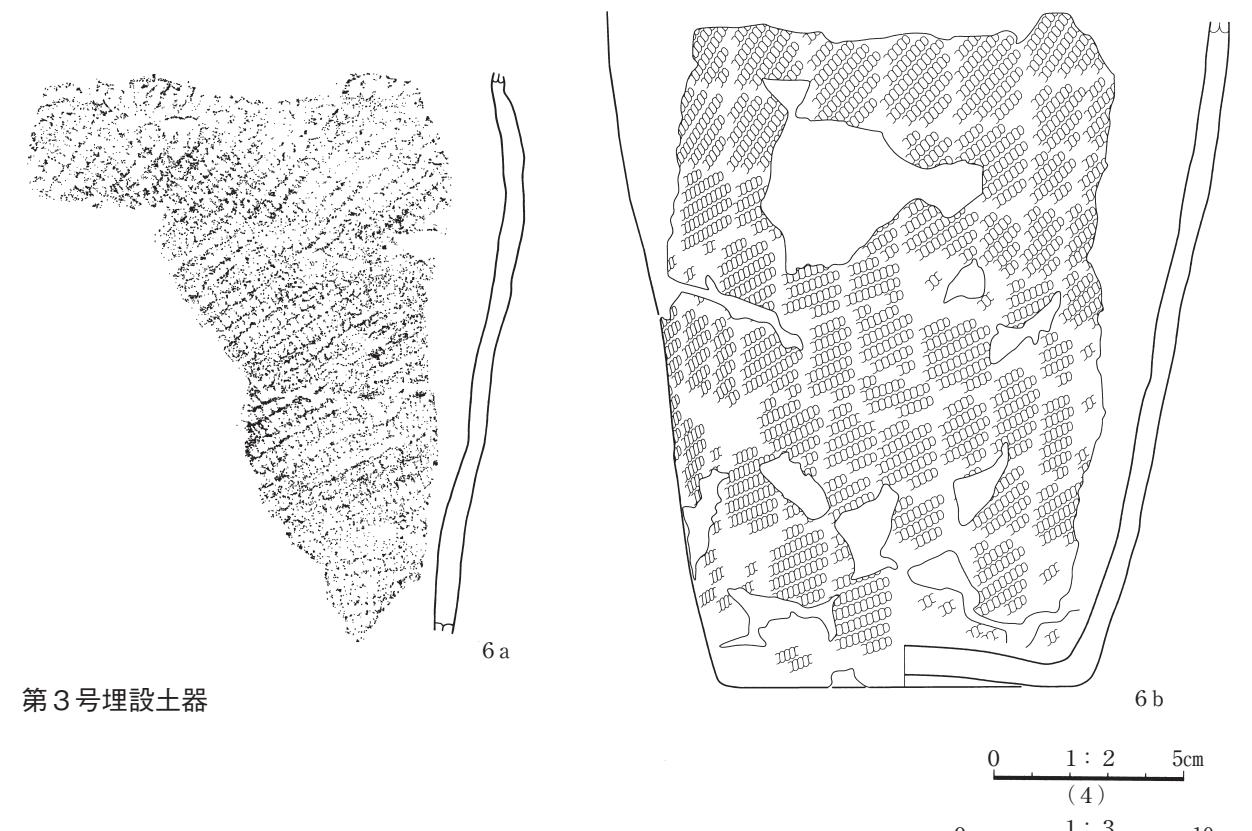


図63 埋設土器3

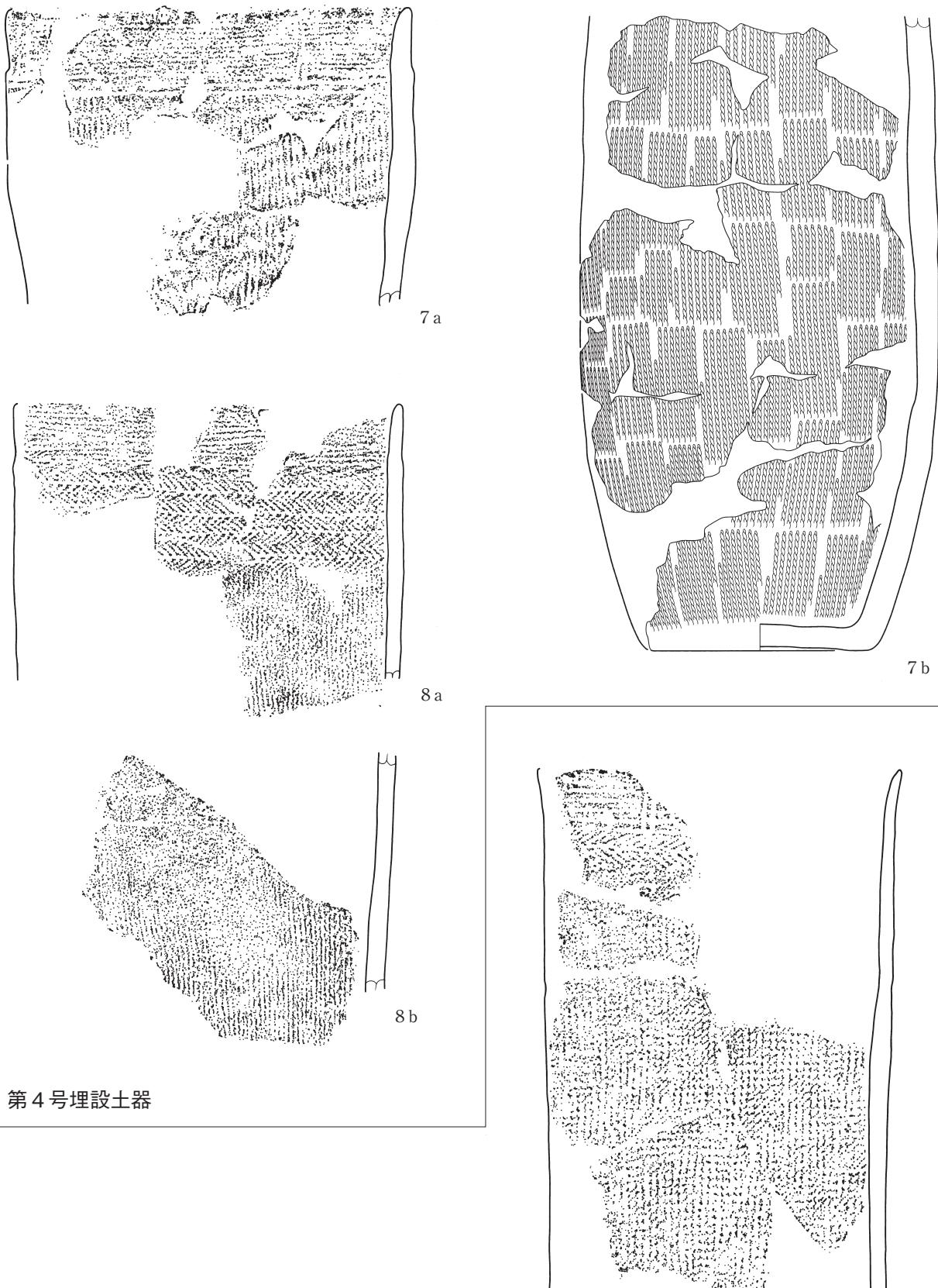


第2号埋設土器



第3号埋設土器

図64 埋設土器4



第4号埋設土器

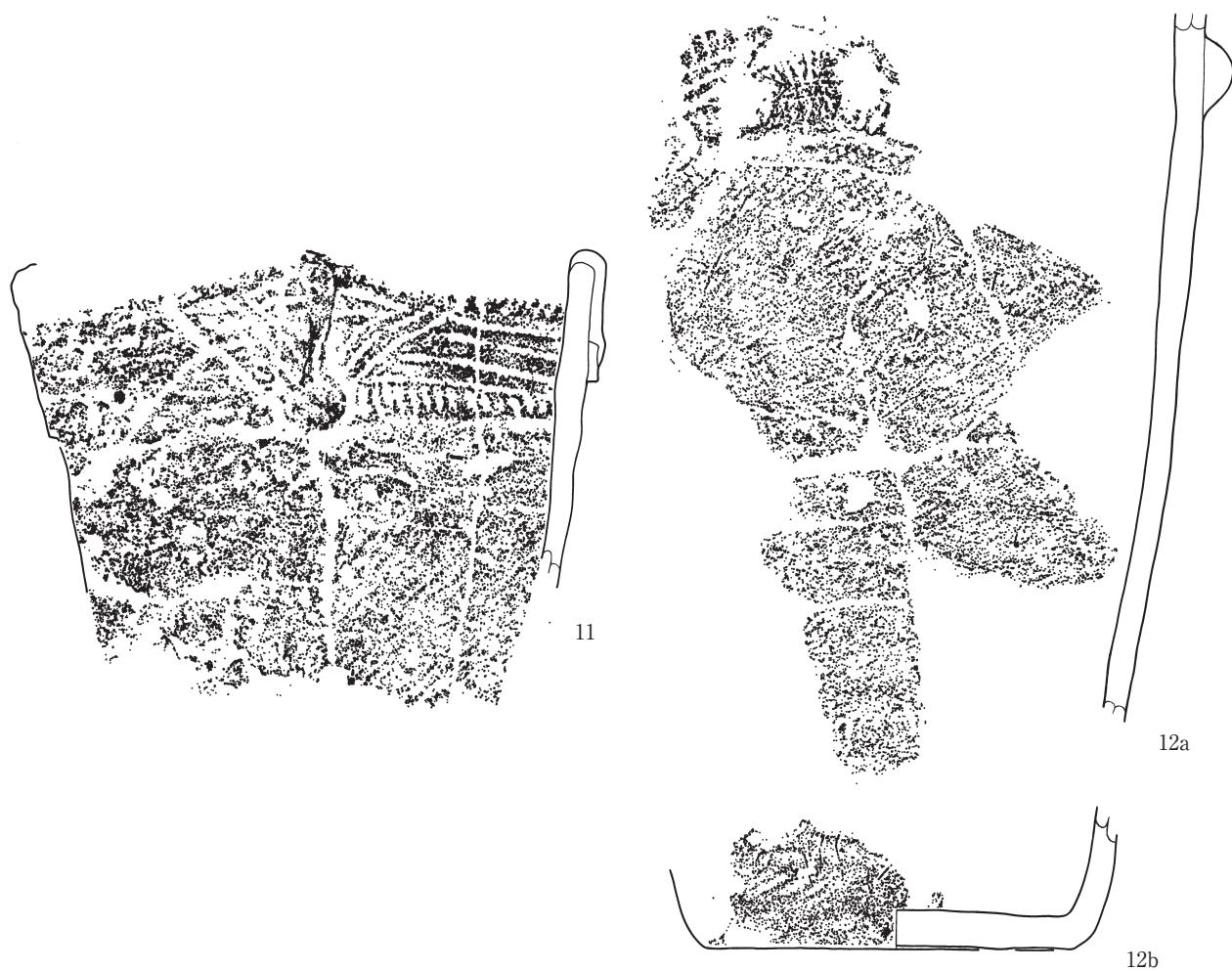
第5号埋設土器

0 1 : 3 10cm

図65 埋設土器5



第6号埋設土器



第7号埋設土器

0 1 : 3 10 cm

図66 埋設土器6

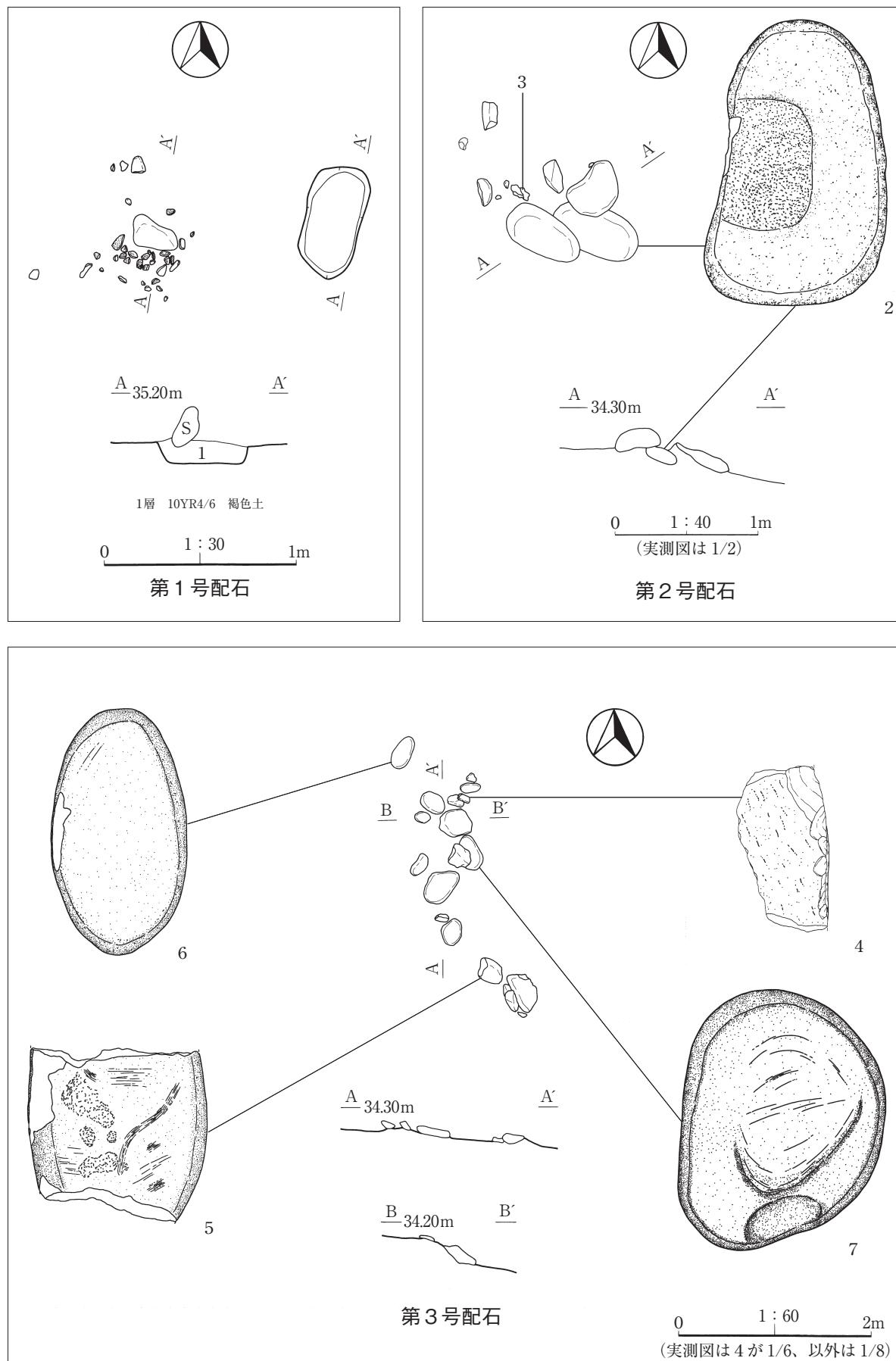


図67 配石 1

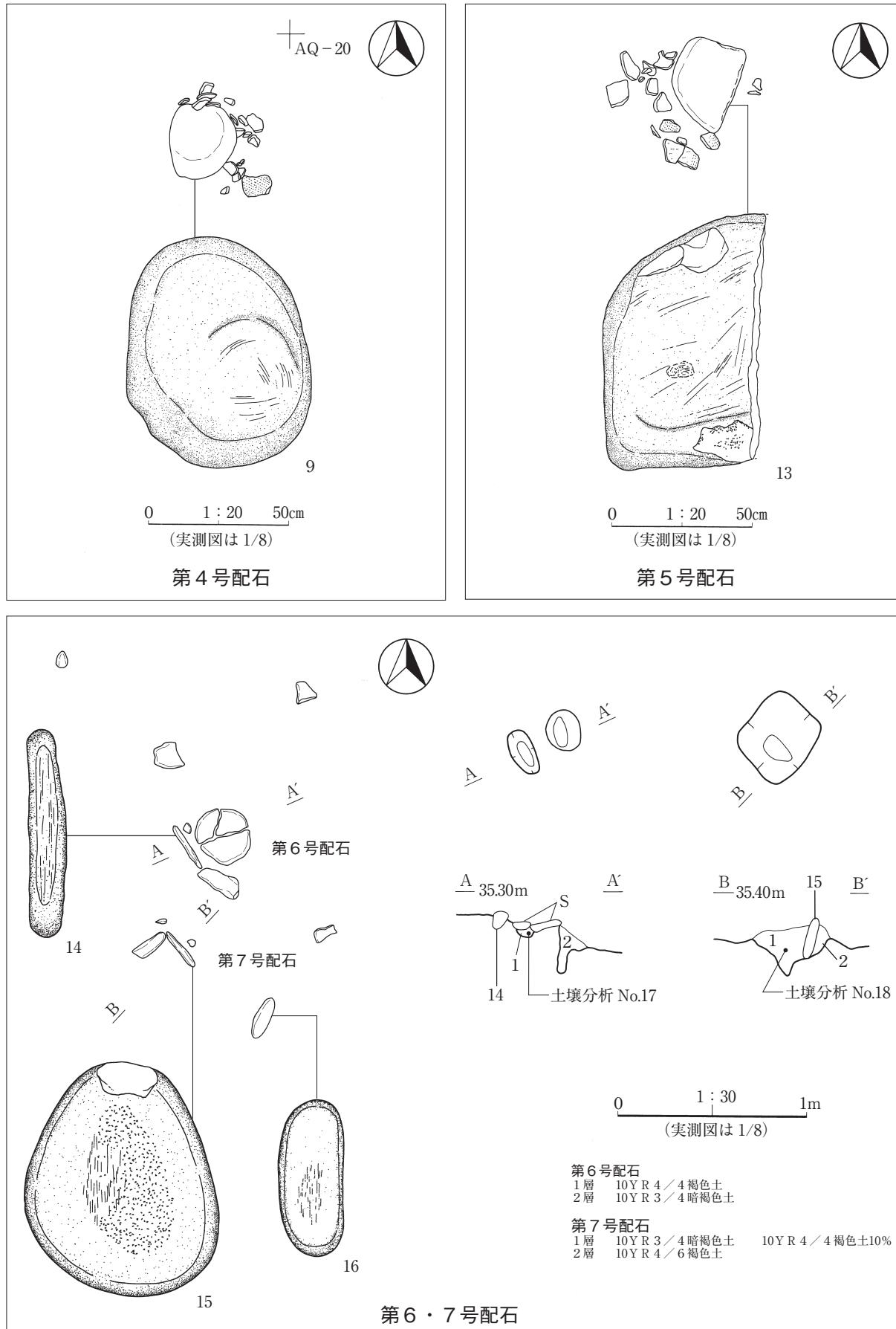


図68 配石2

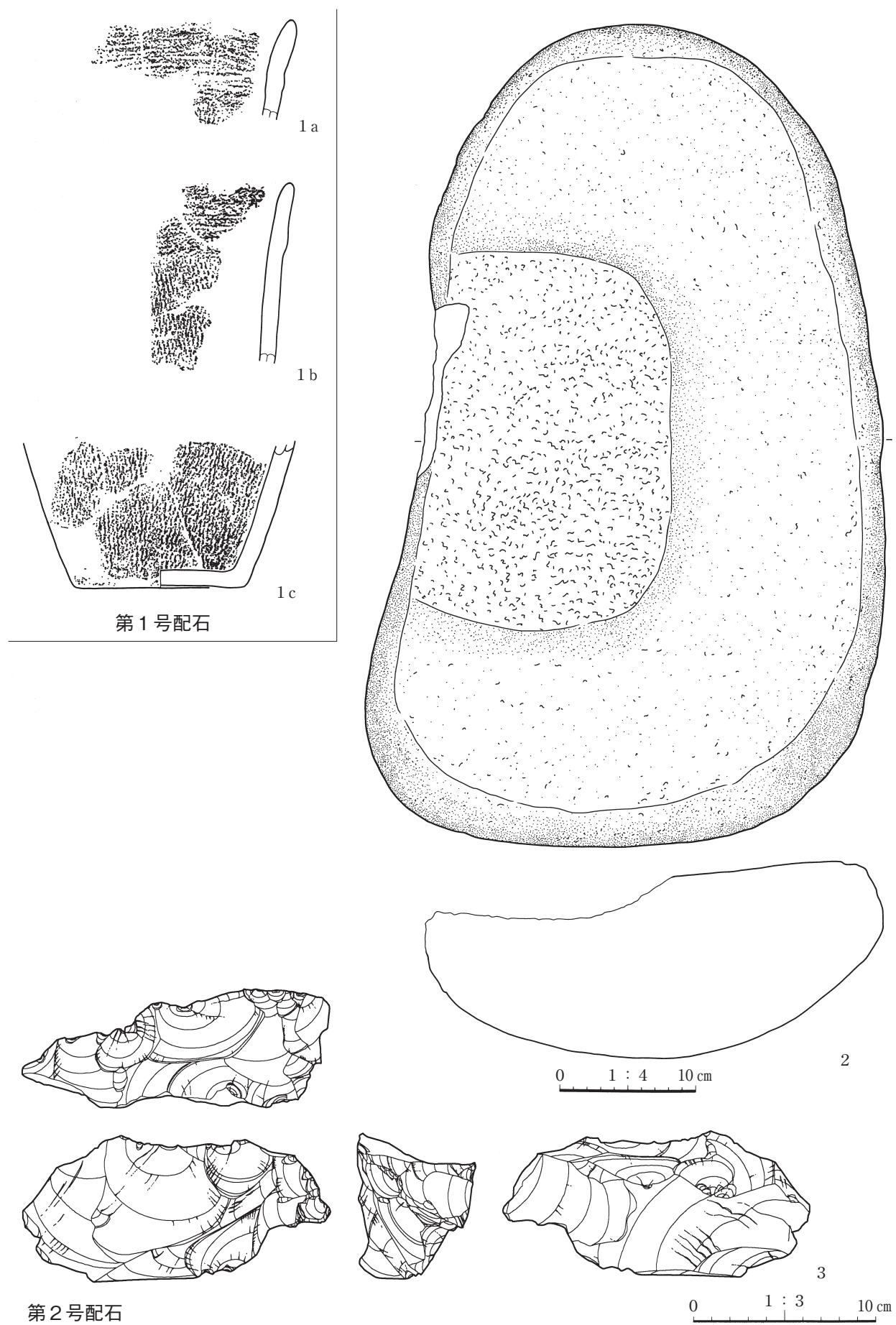
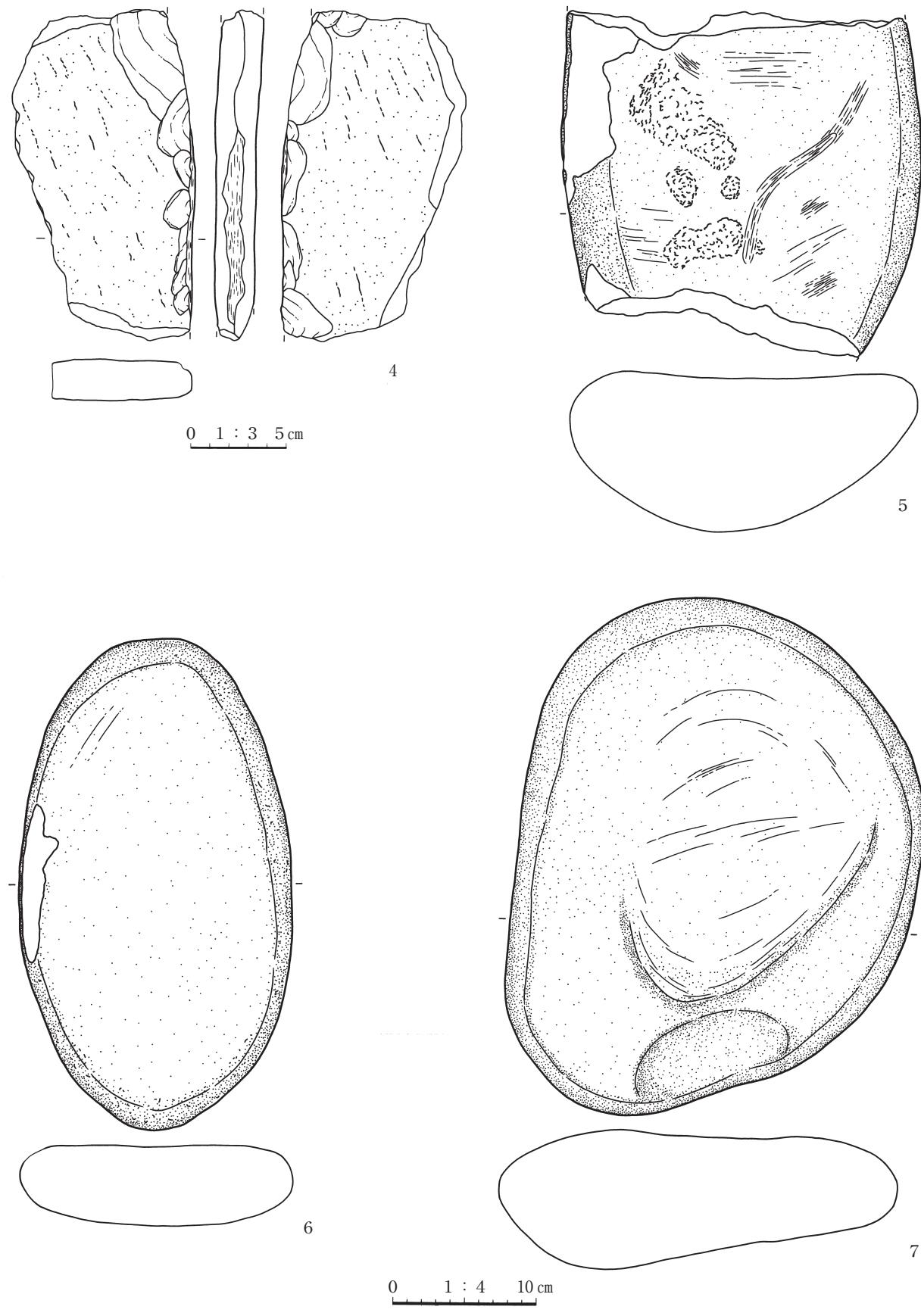


図69 配石3



第3号配石

図70 配石4

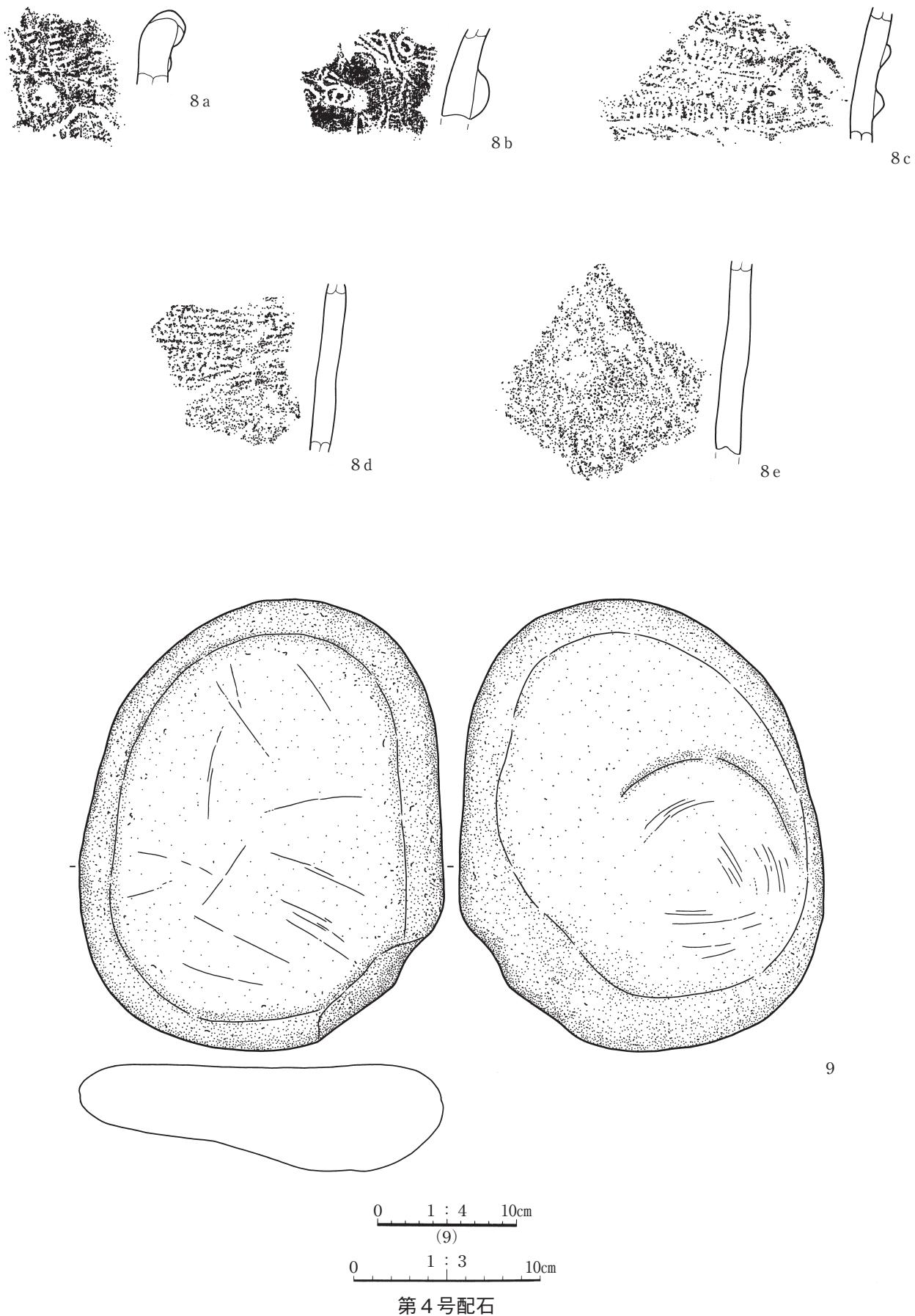
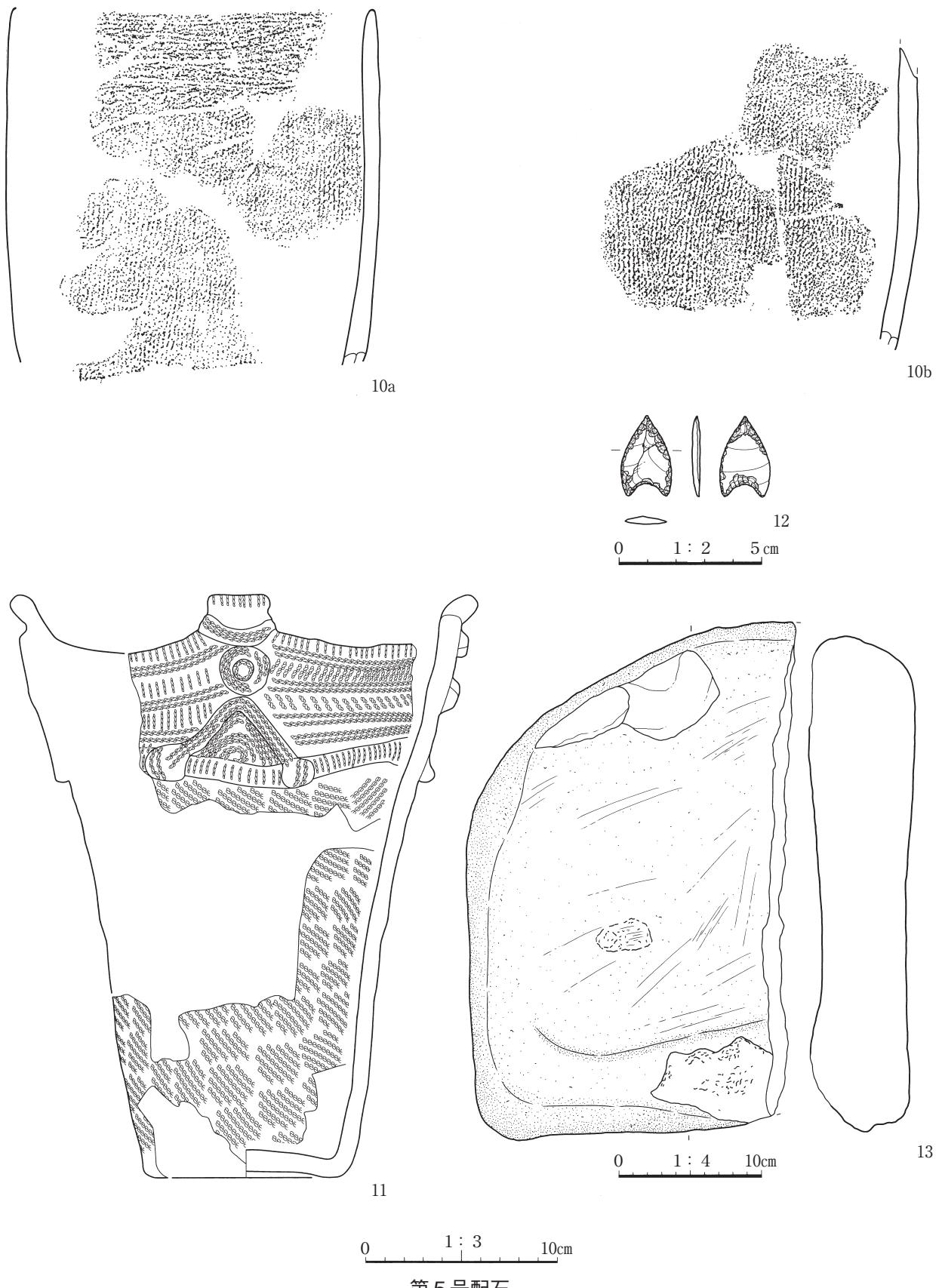
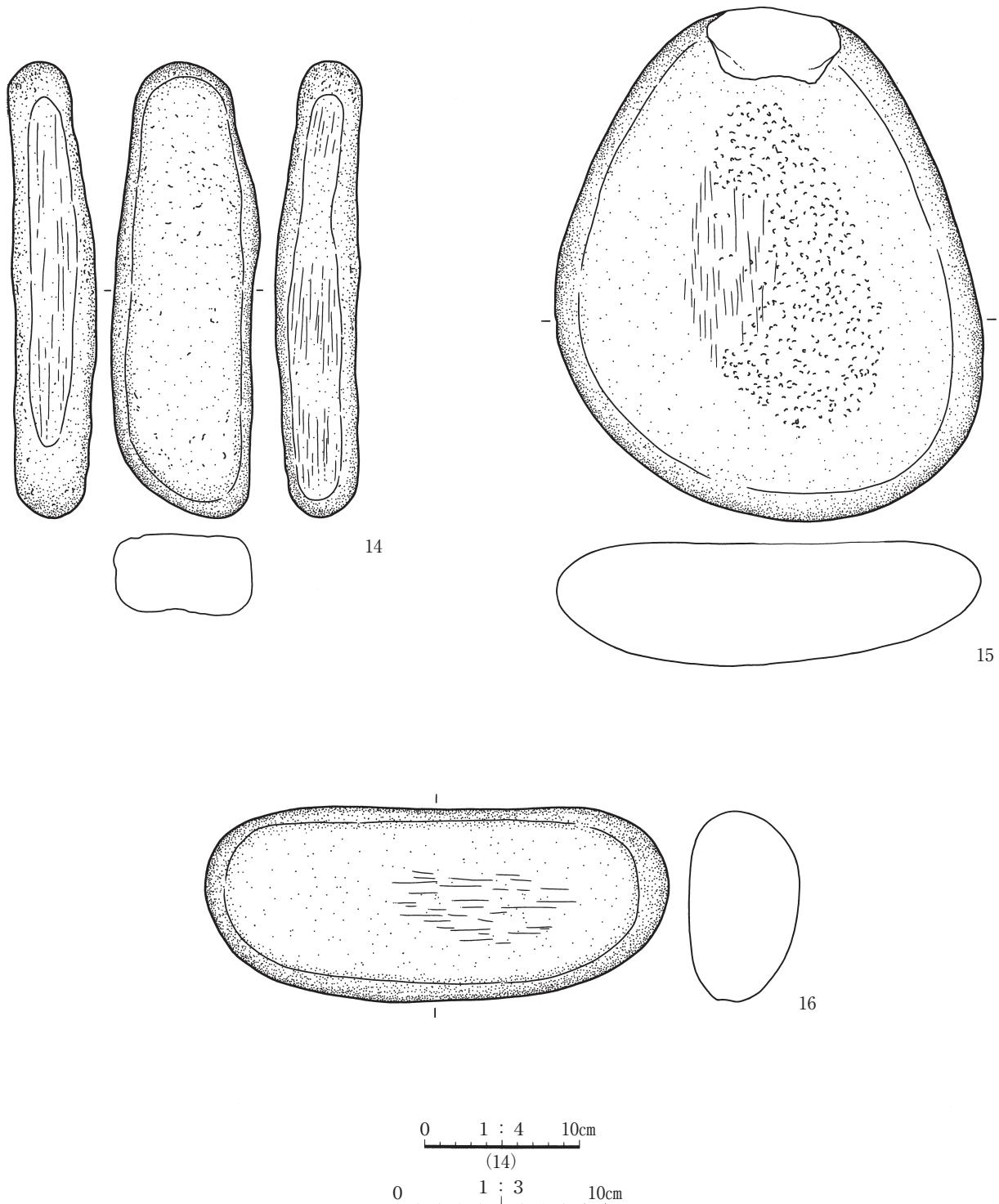


図71 配石5



第5号配石

図72 配石6



第6・7号配石

図73 配石7

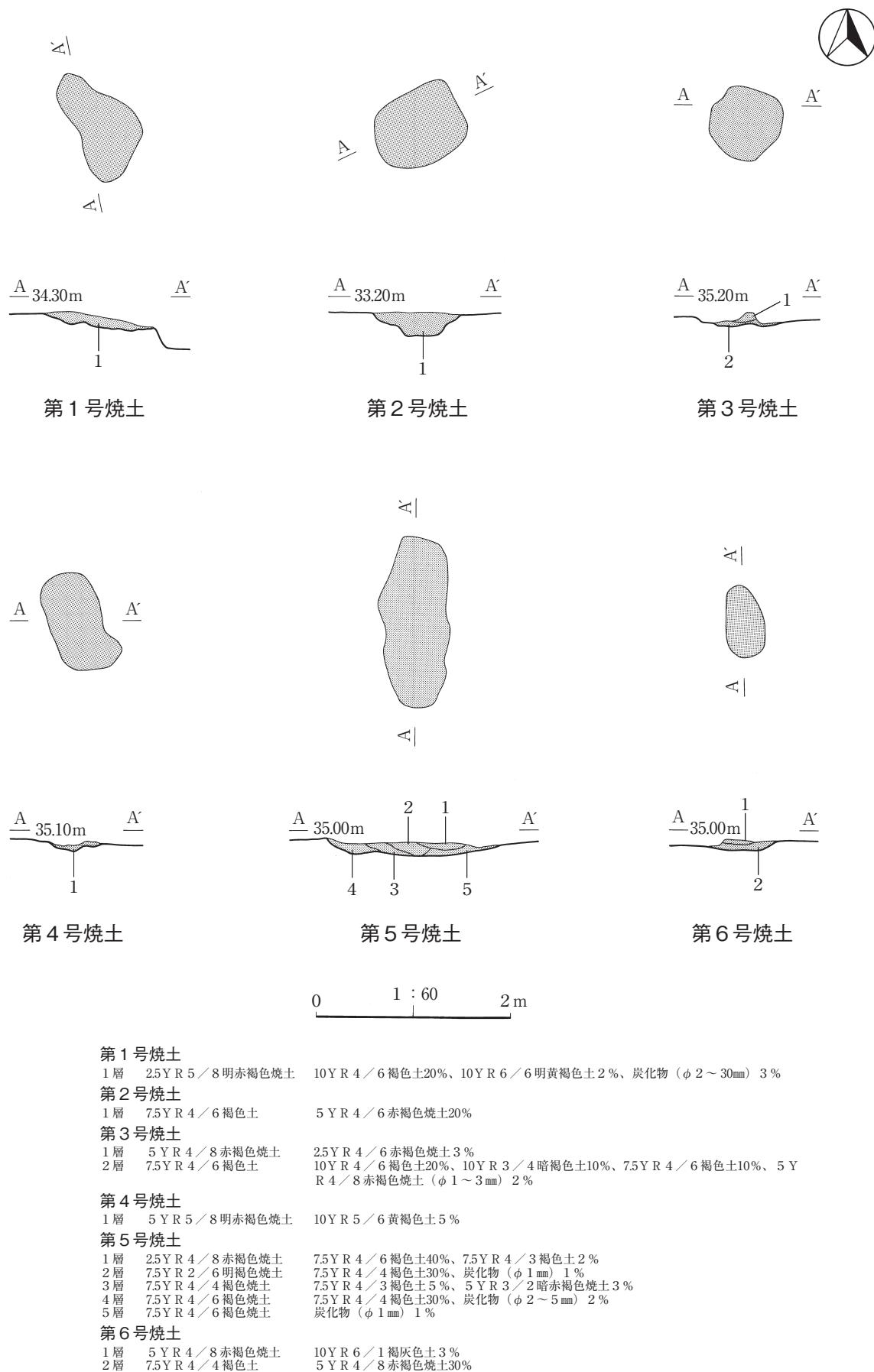
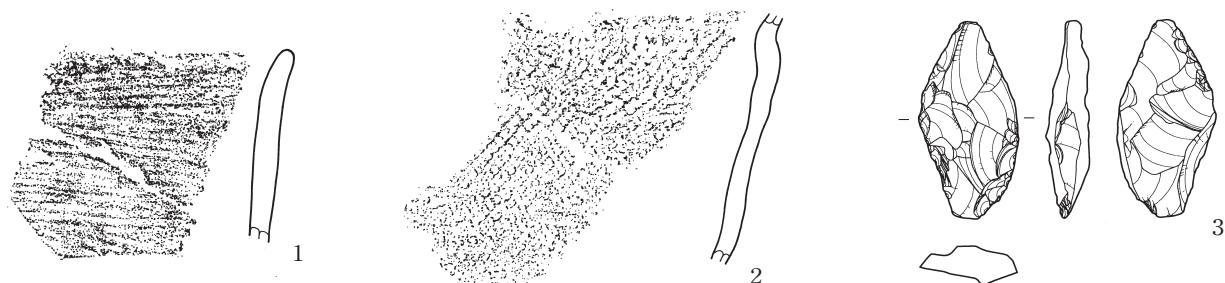
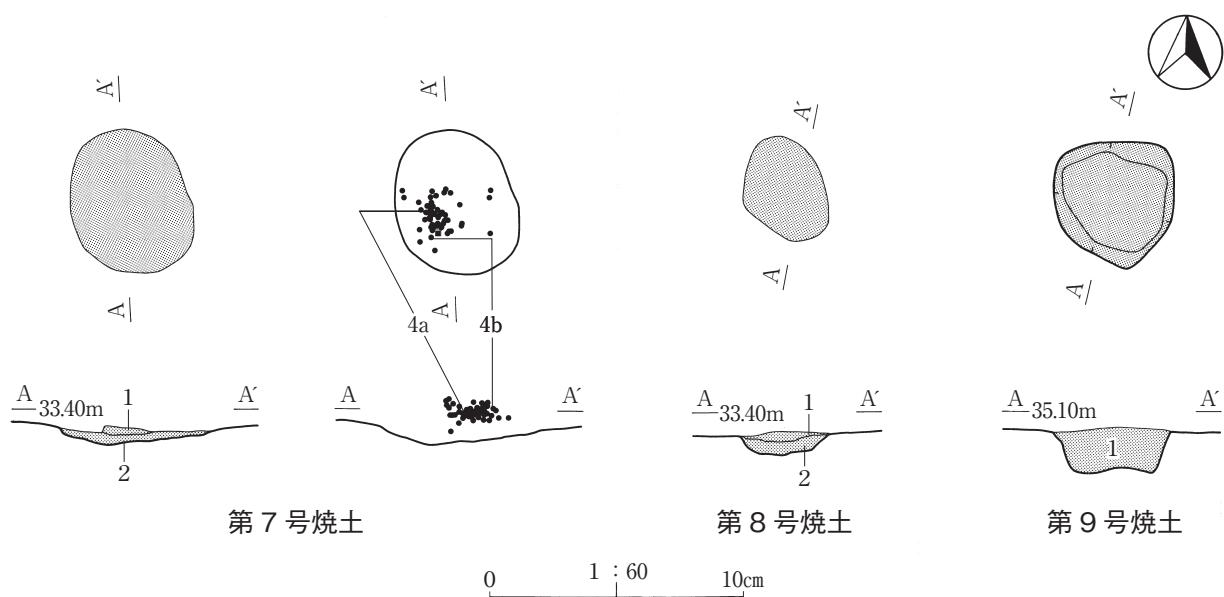


図74 烧土 1



第1号焼土

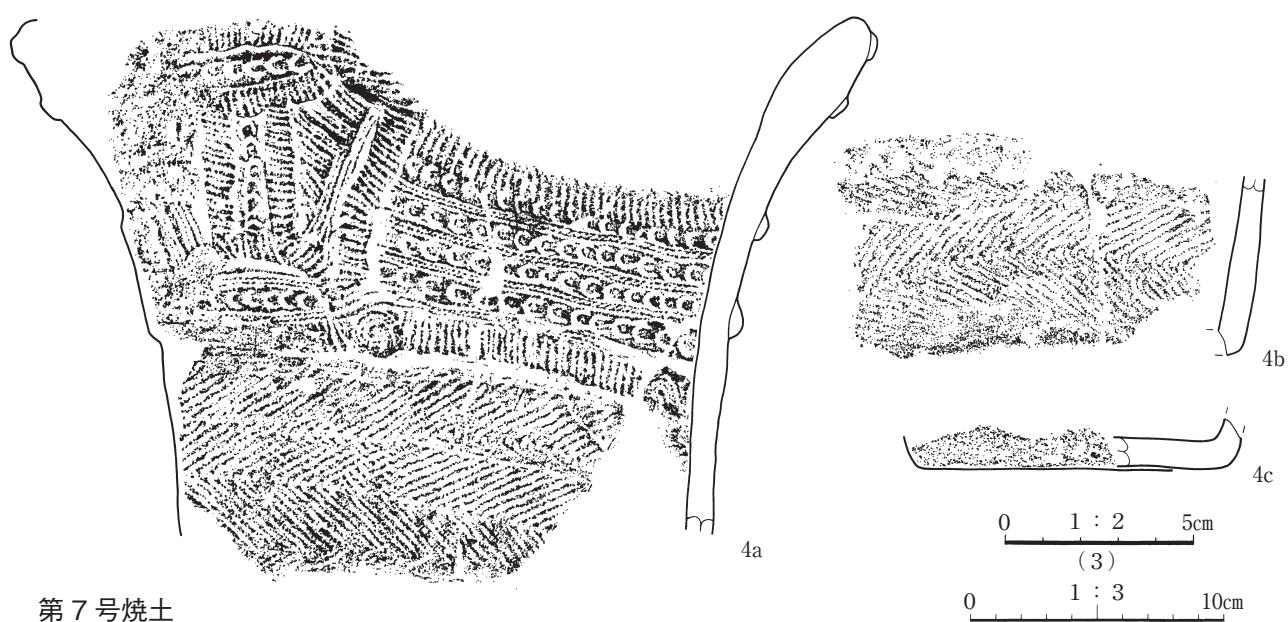


図75 焼土2



北側斜面作業風景



下風呂小学校による遺跡見学



遺跡の北側に発達する沢ノ黒沢

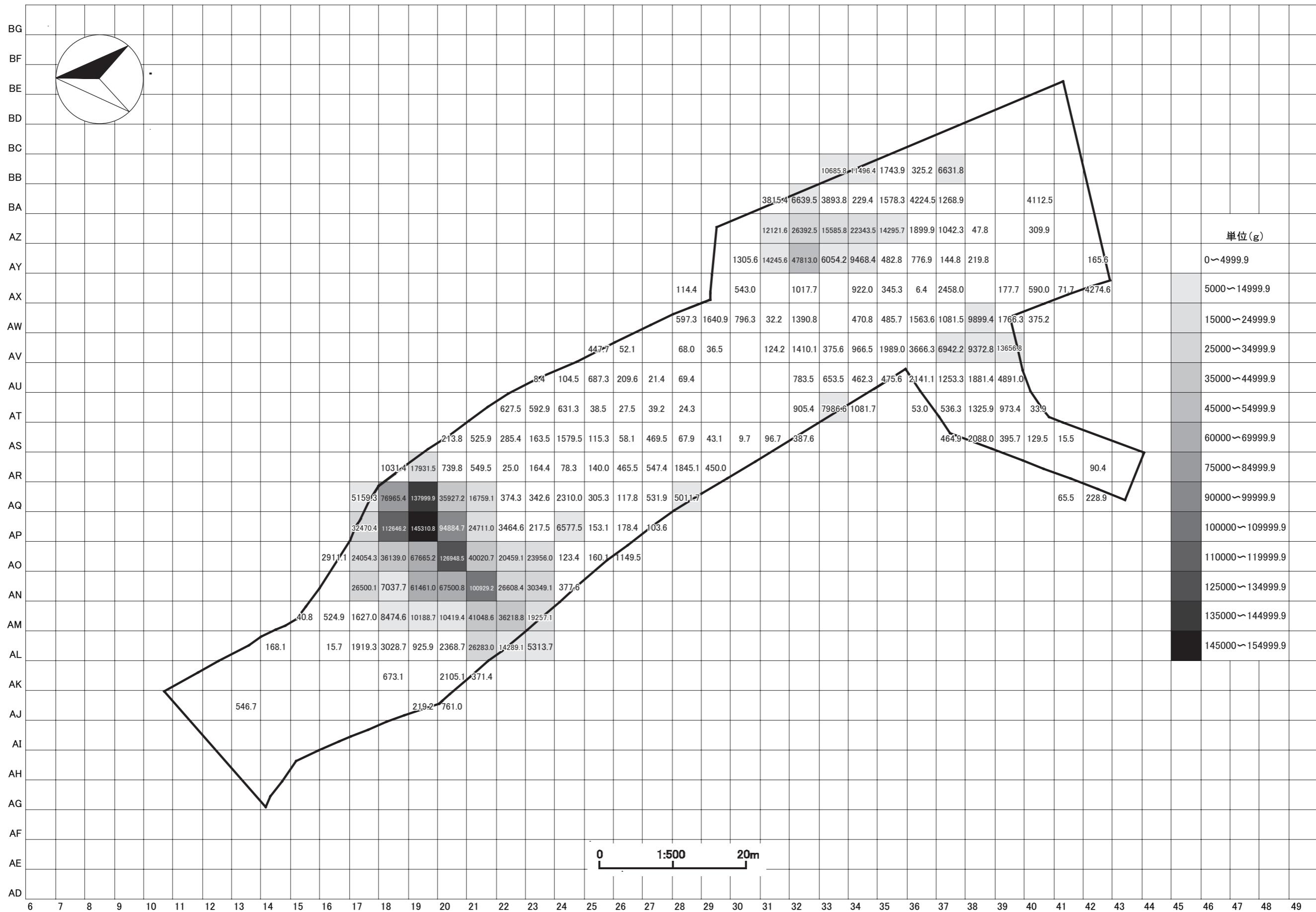


図76 出出土器重量分布図



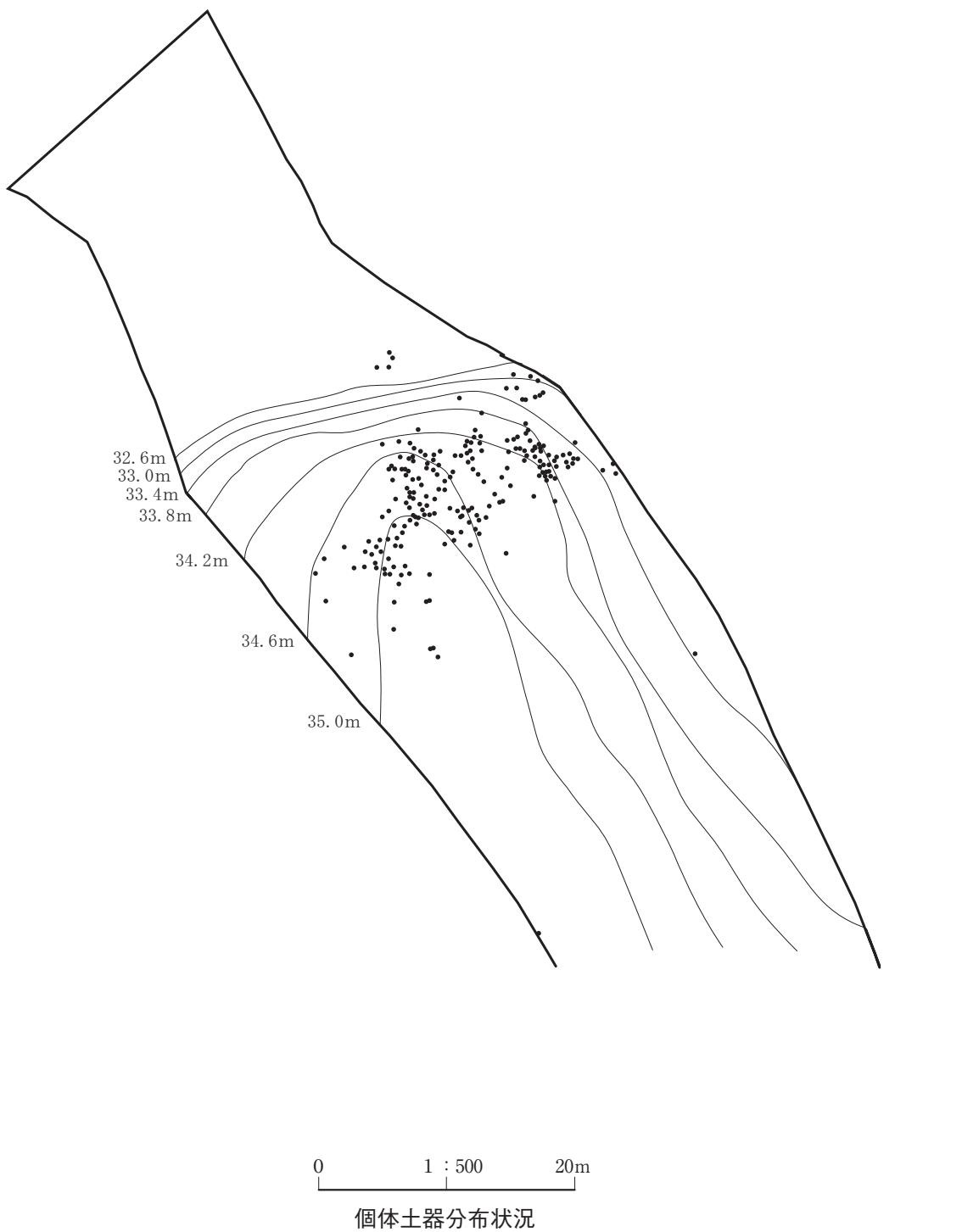
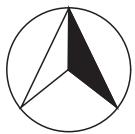
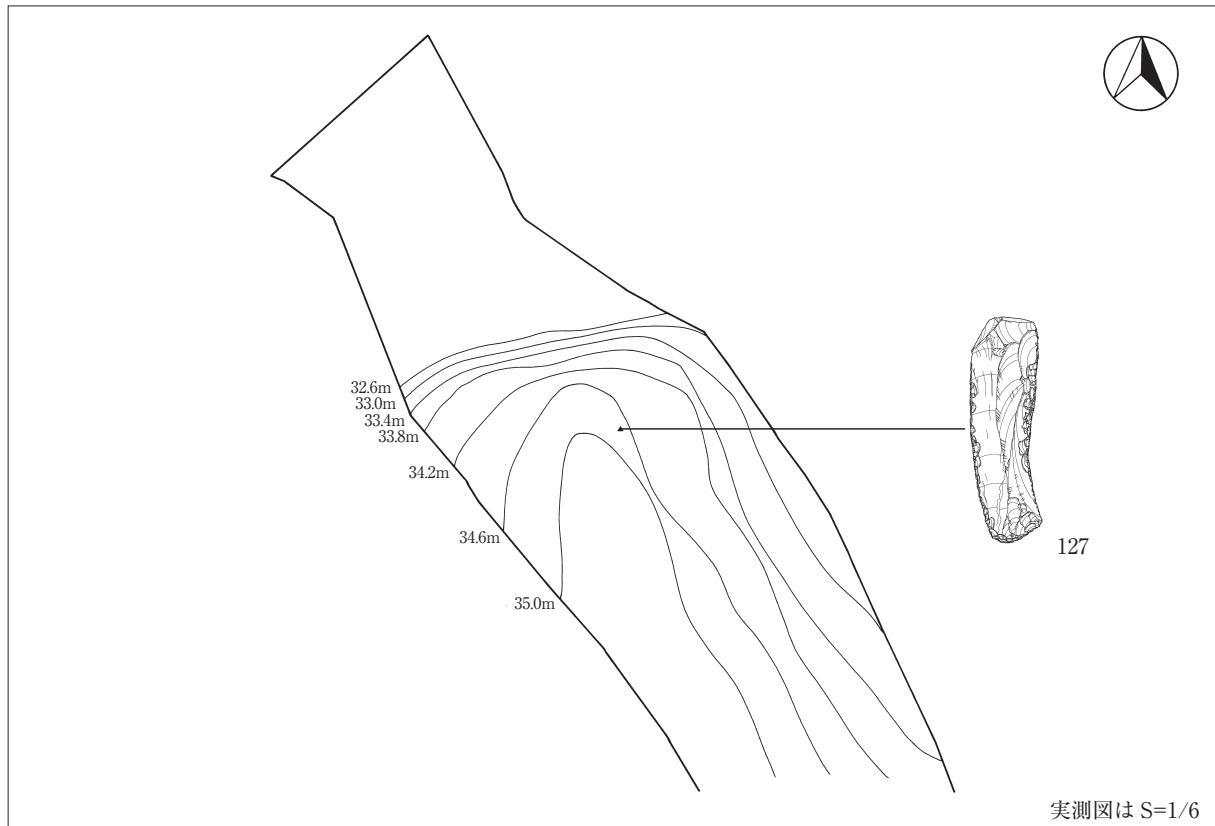
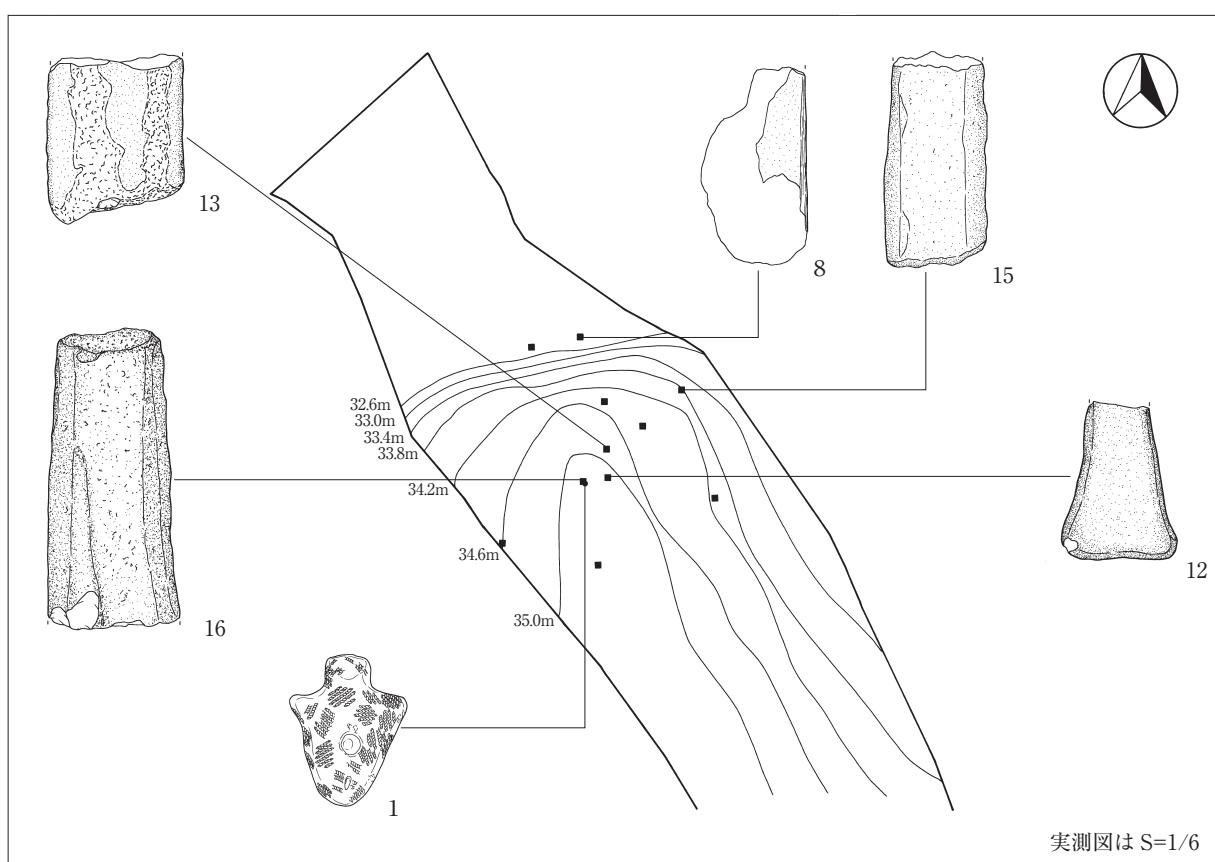


図78 第1号捨て場2



削器出土状況 (1 : 750)



土偶・石製品出土状況 (1 : 750)

図79 第1号捨て場3

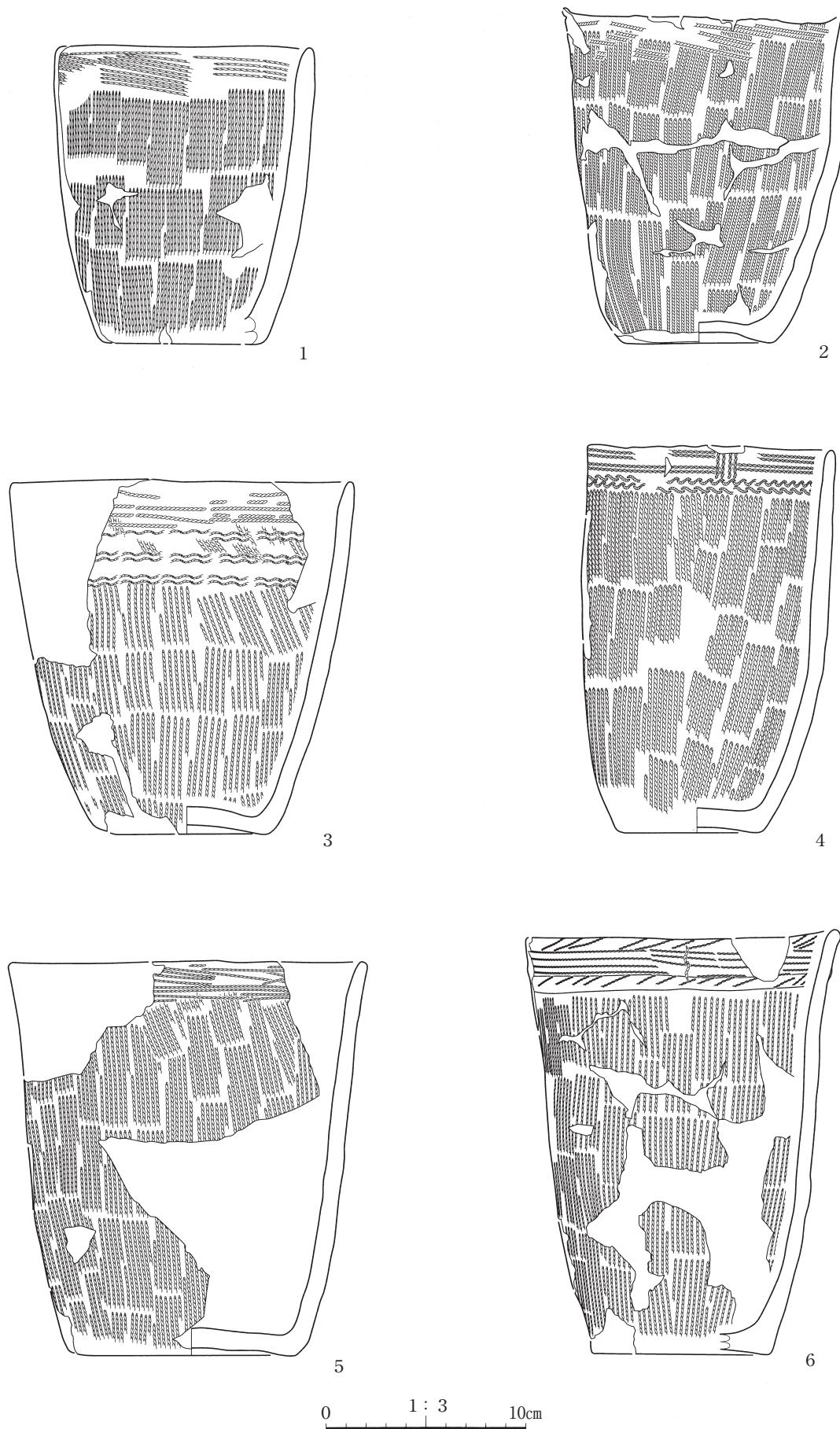
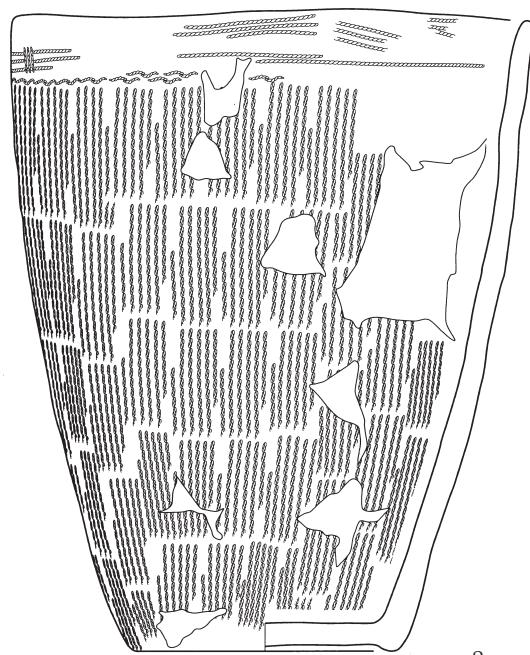


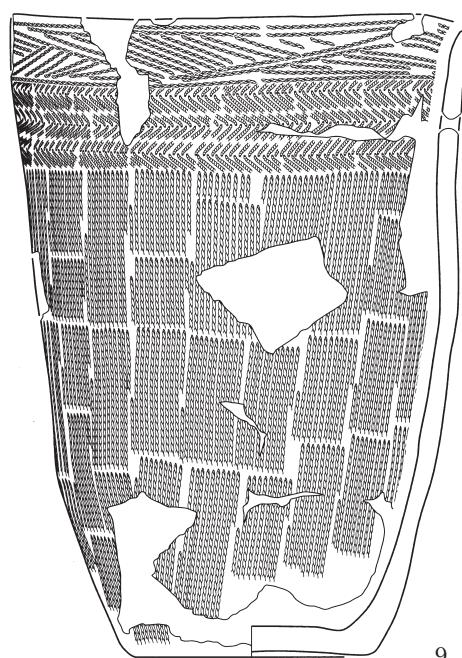
図80 第1号捨て場4



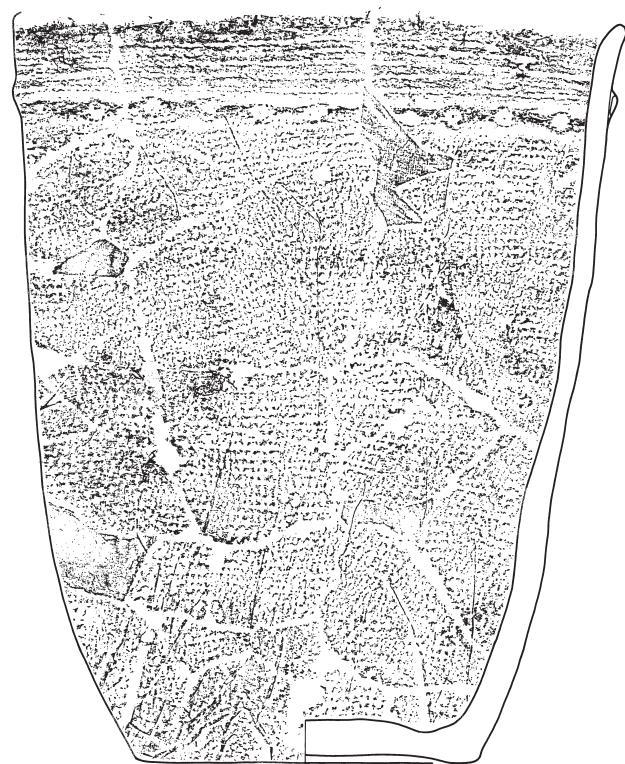
7



8



9



10

0 1 : 3 10cm

図81 第1号捨て場5

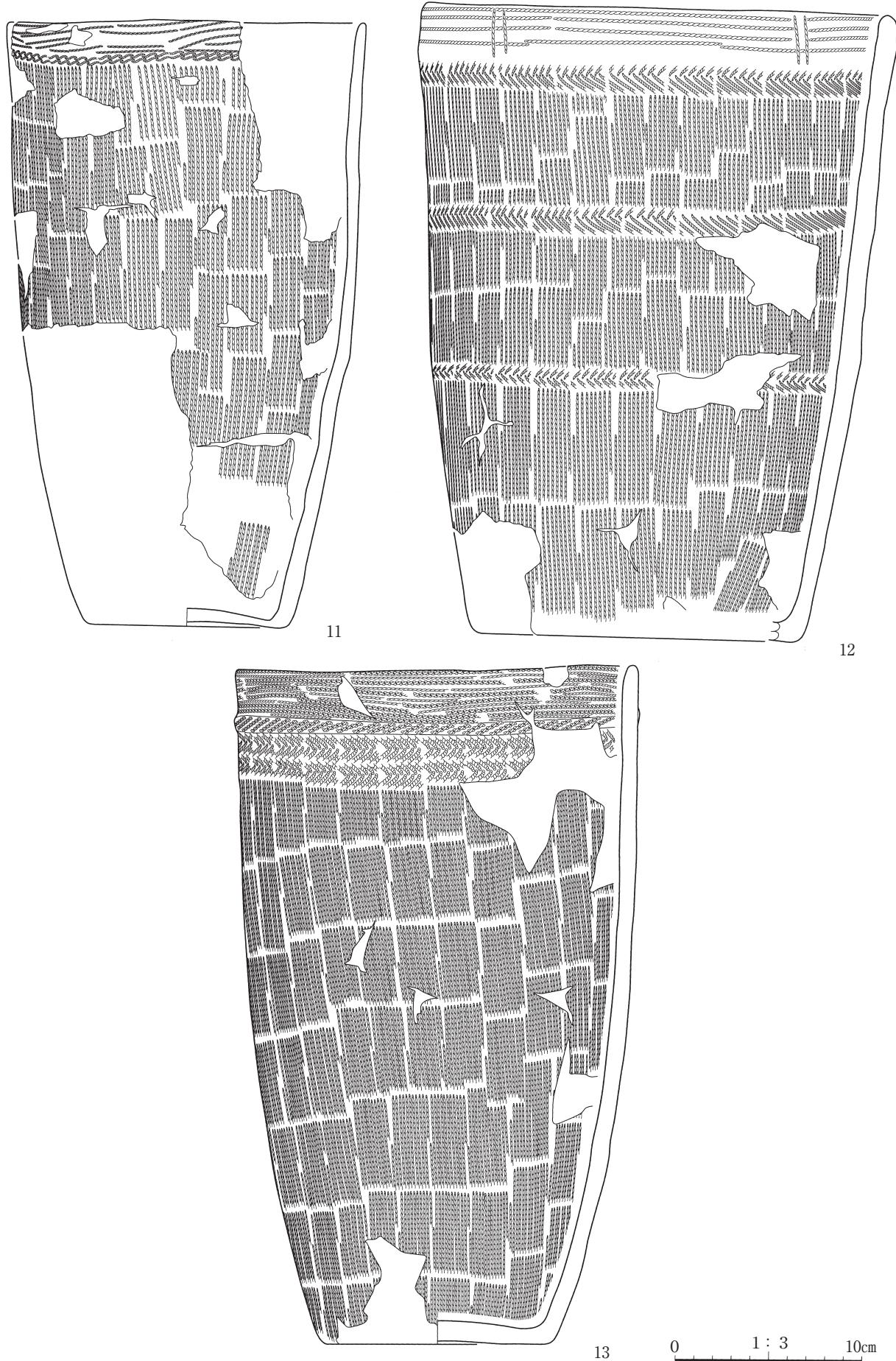


図82 第1号捨て場6

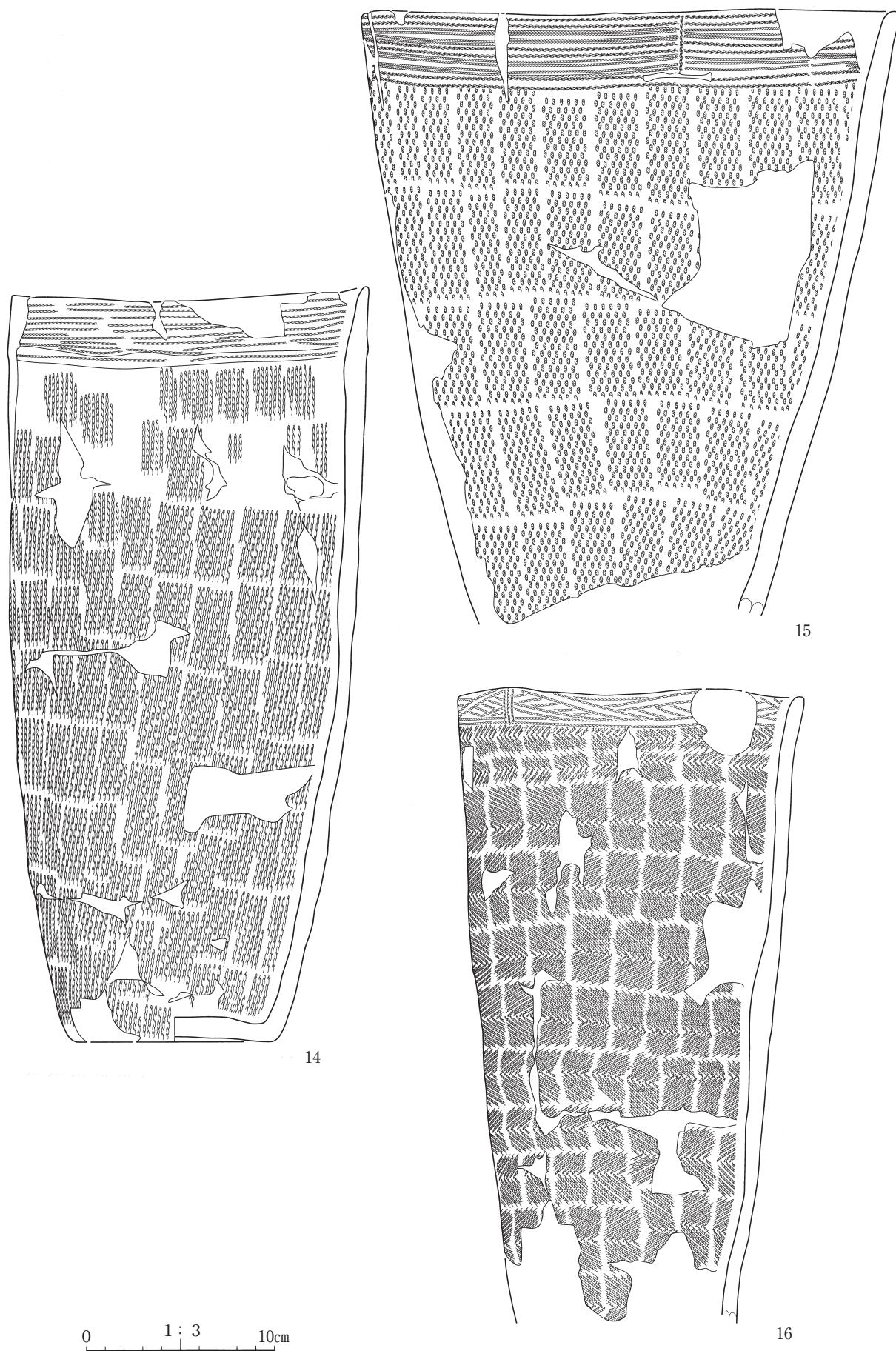


図83 第1号捨て場7

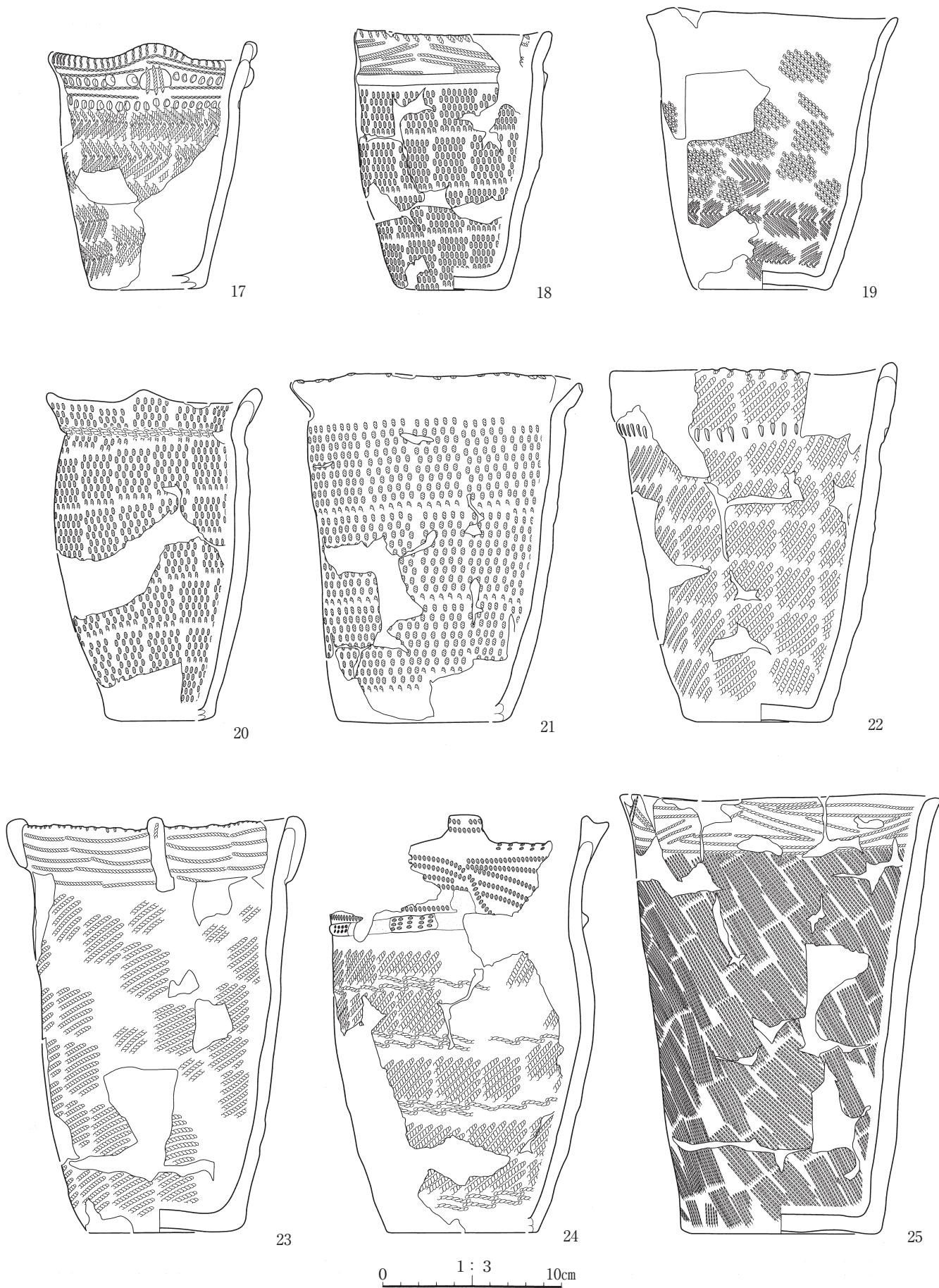
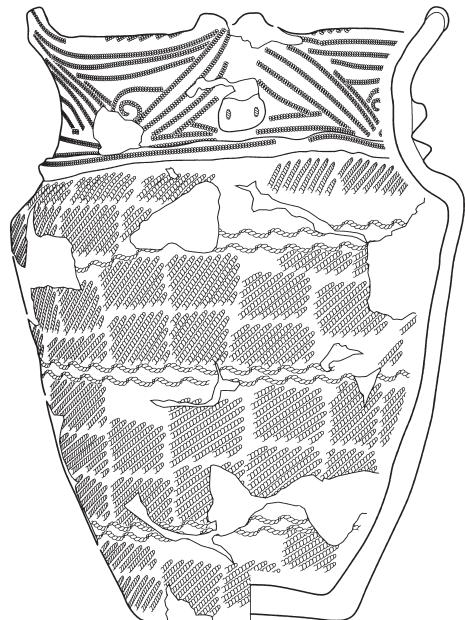
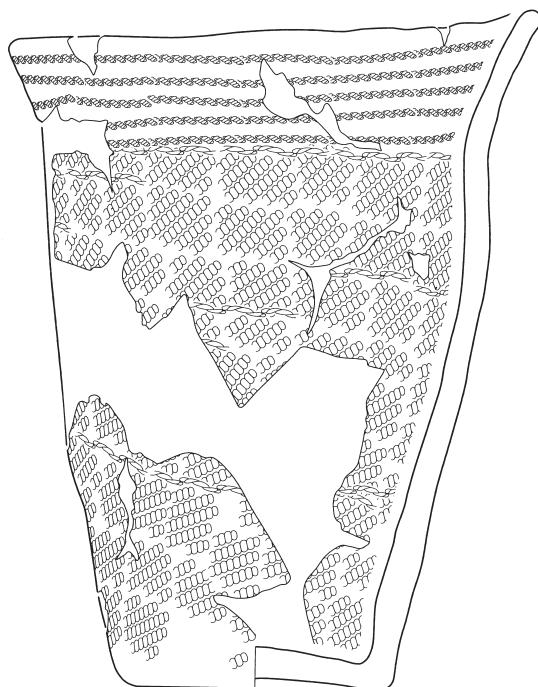


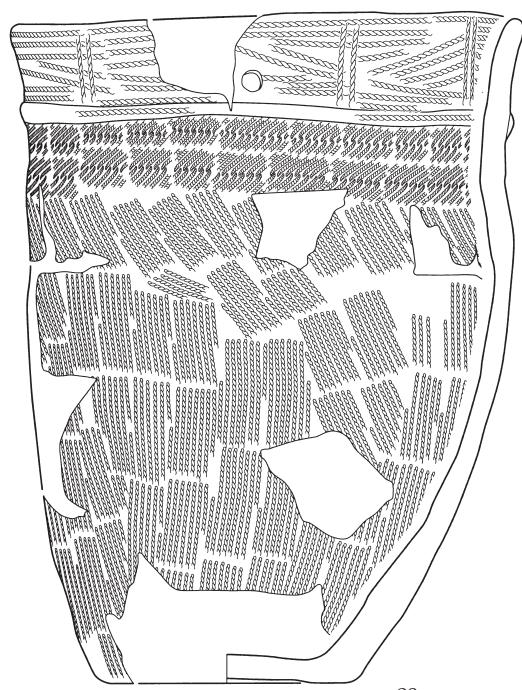
図84 第1号捨て場8



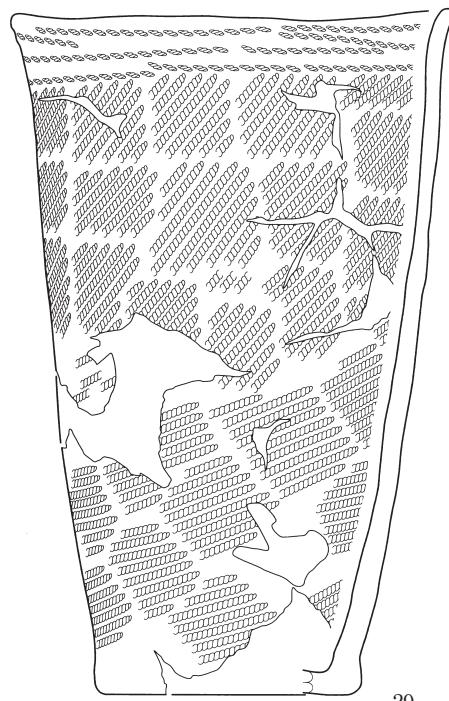
26



27



28



29

0 1 : 3 10cm

図85 第1号捨て場9

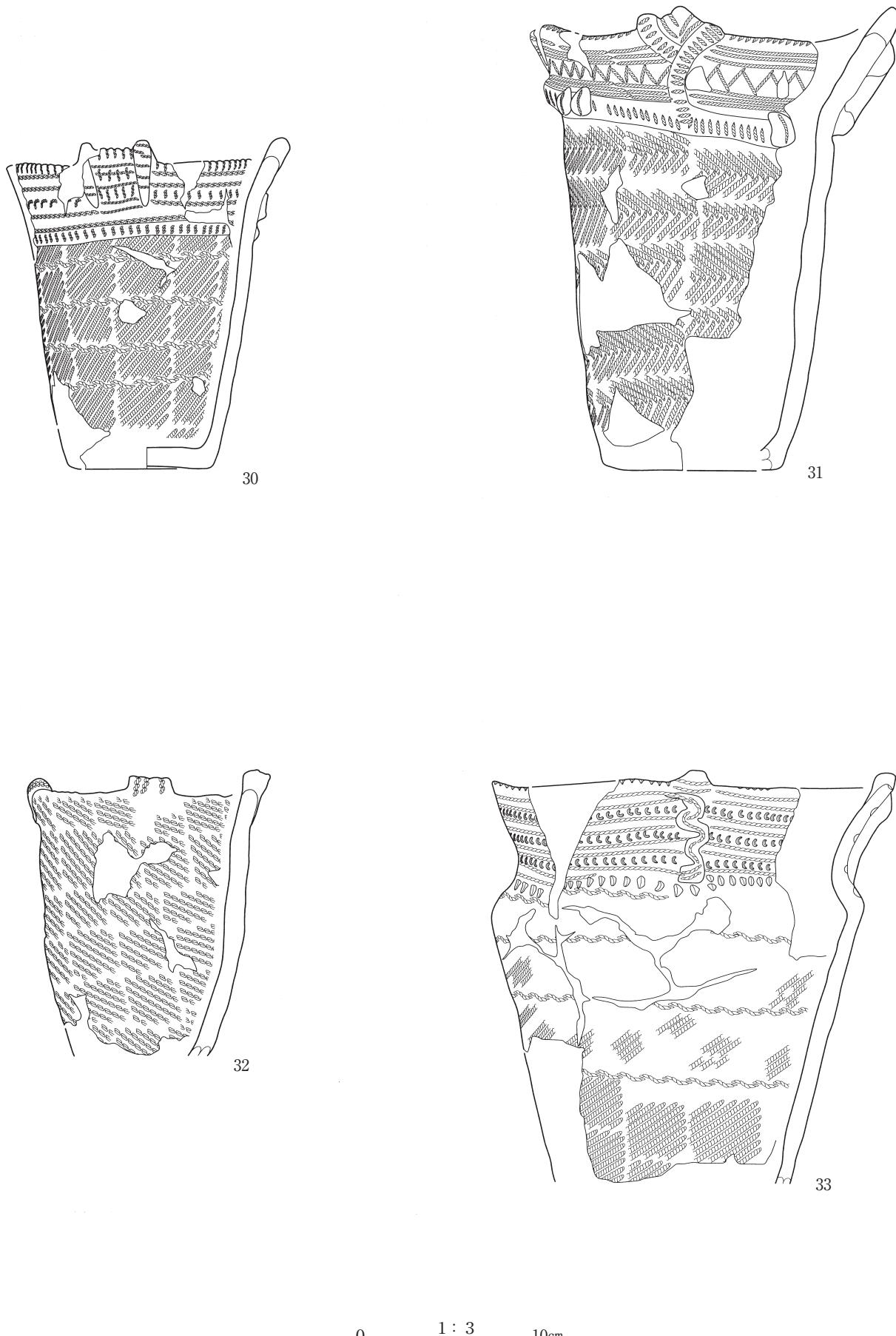
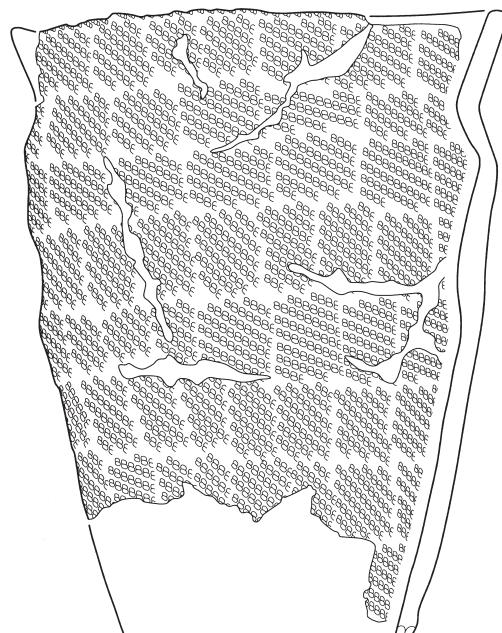
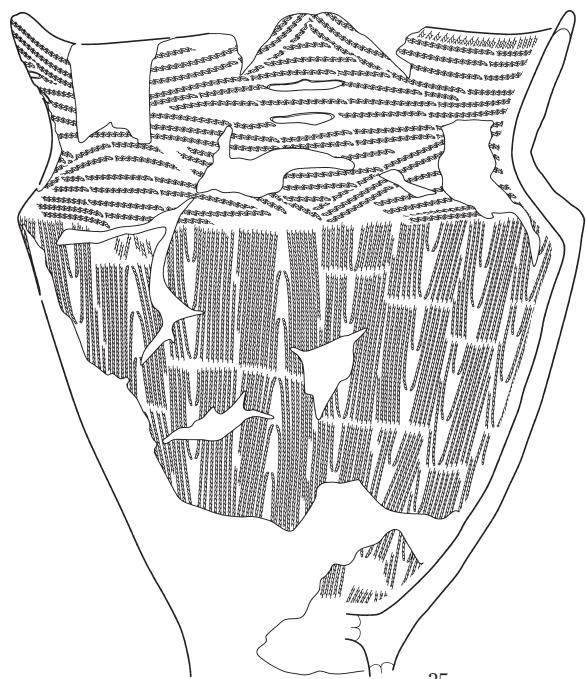


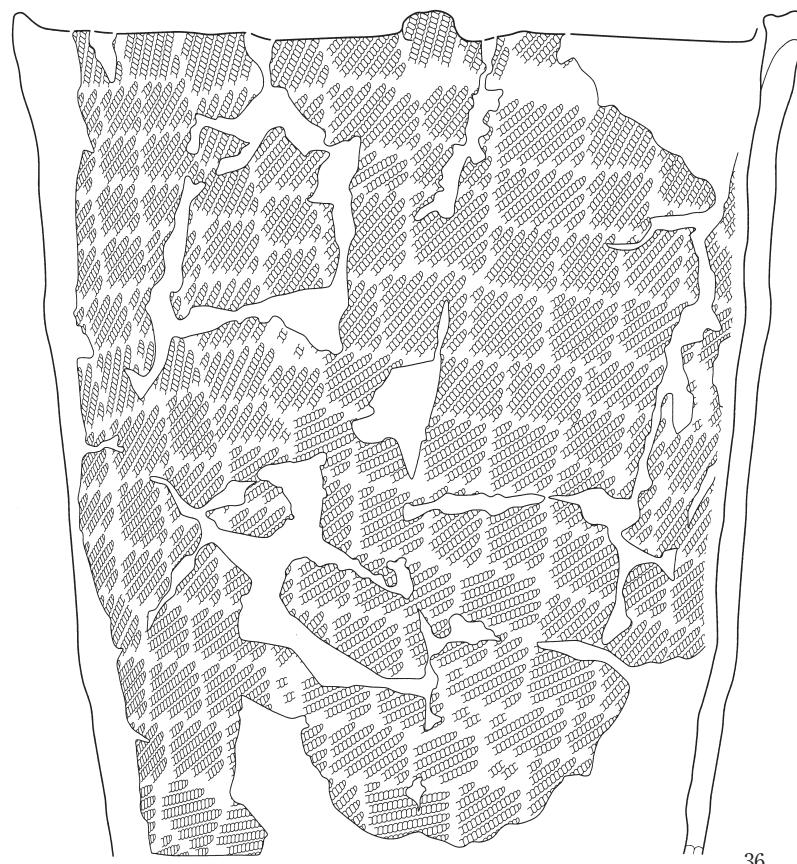
図86 第1号捨て場10



34



35



36

0 1 : 3 10cm

図87 第1号捨て場11

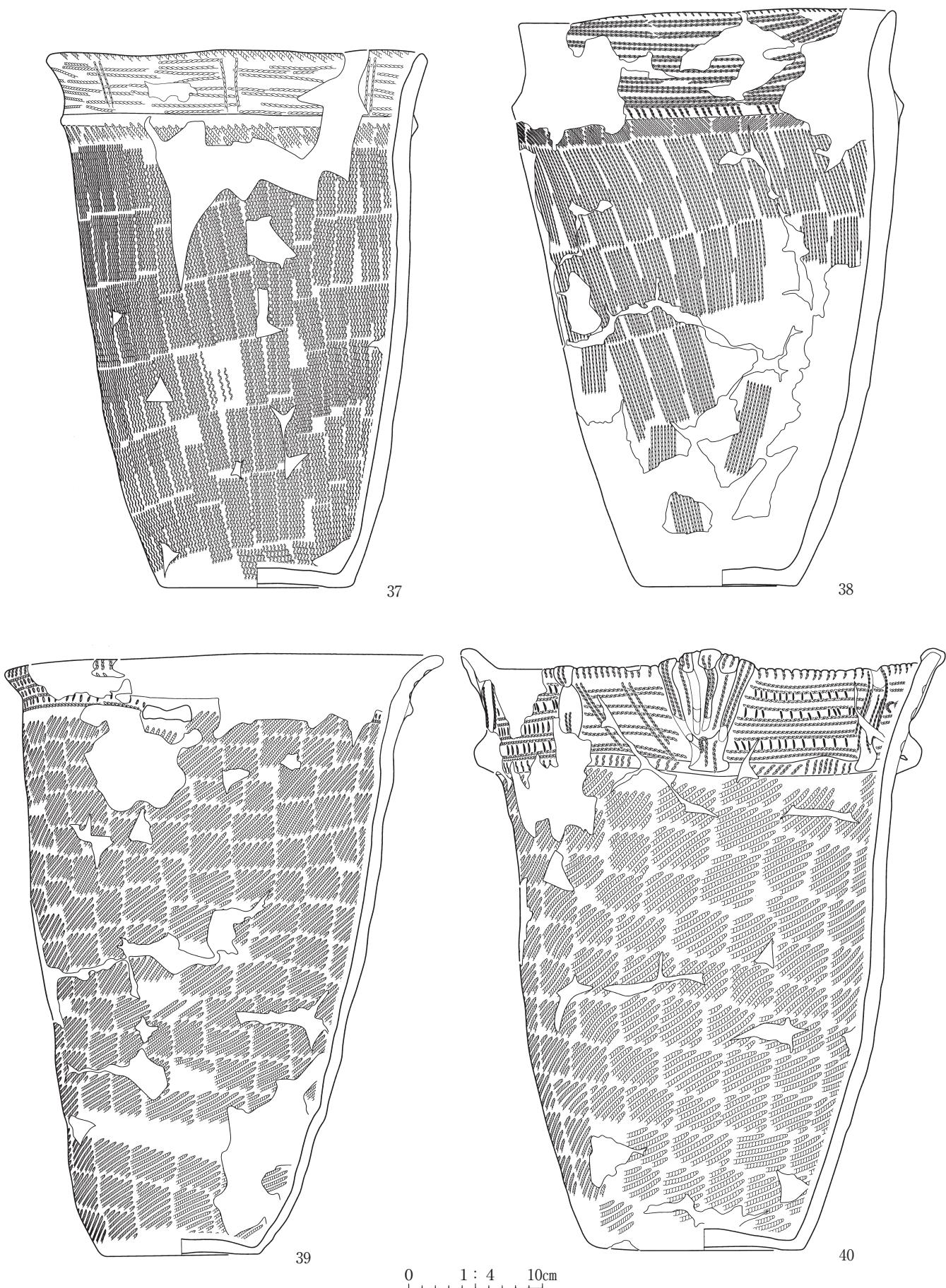
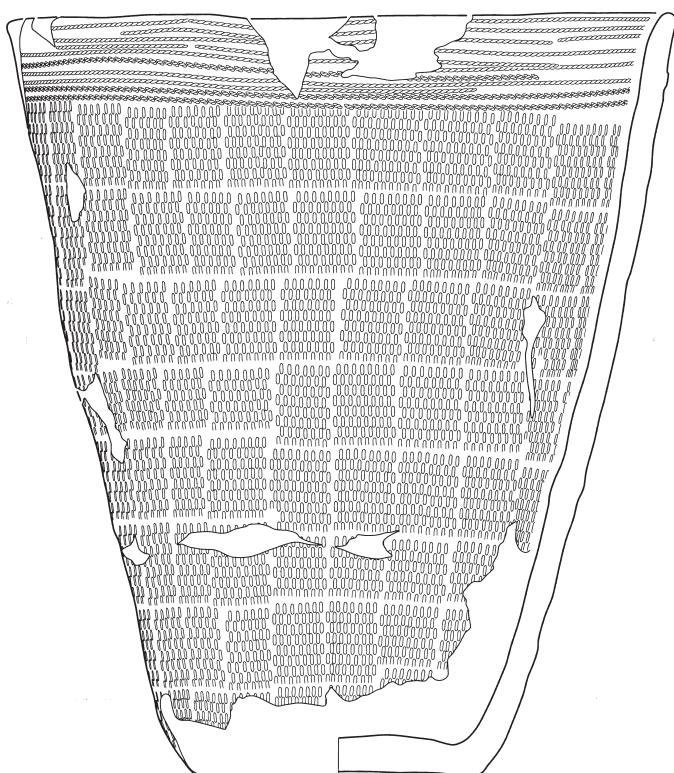
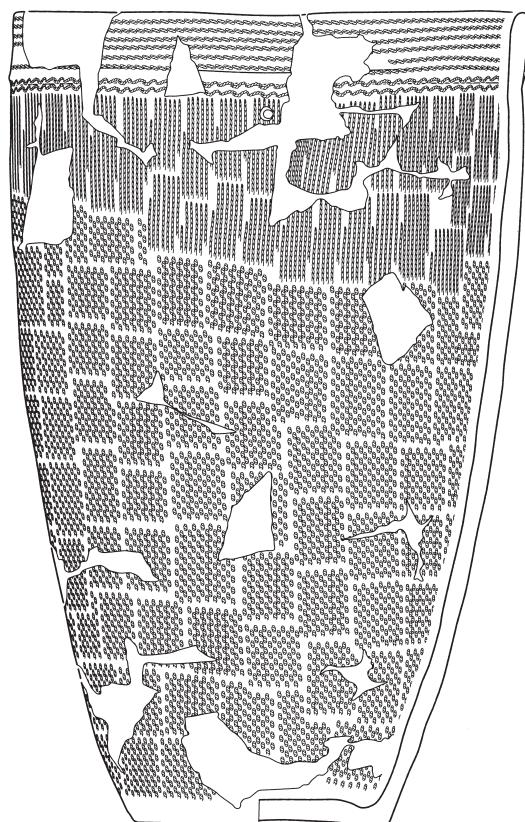


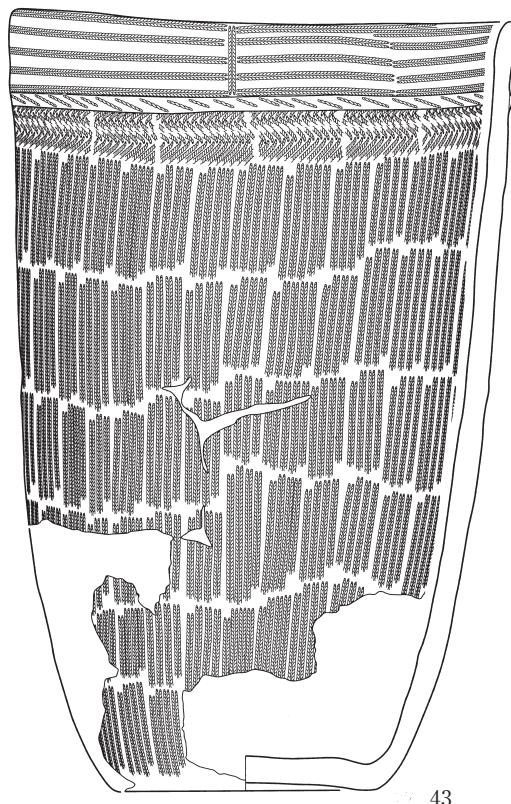
図88 第1号捨て場12



41



42



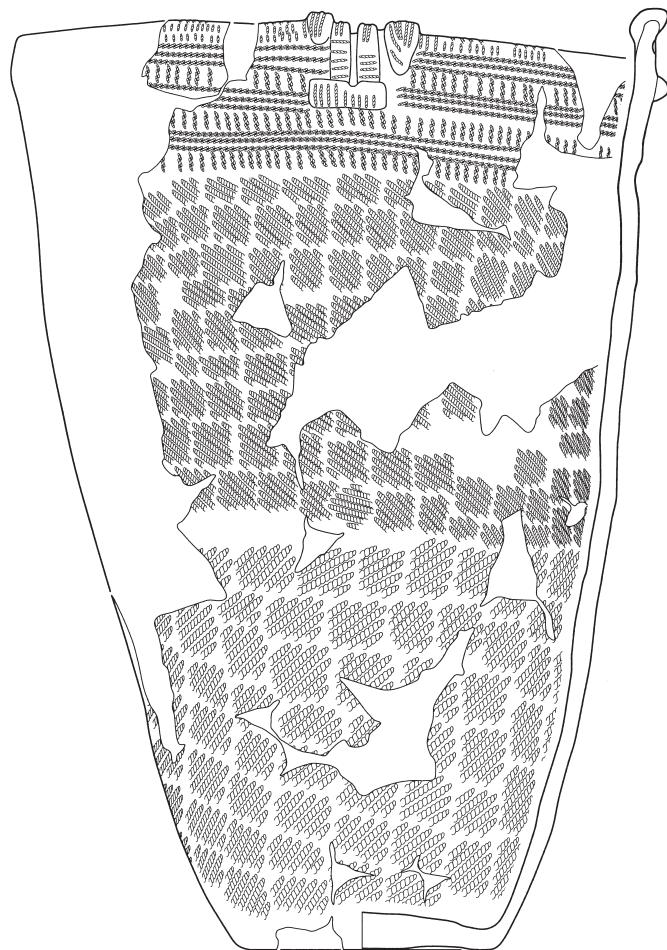
43

0 1 : 4 10cm

図89 第1号捨て場13



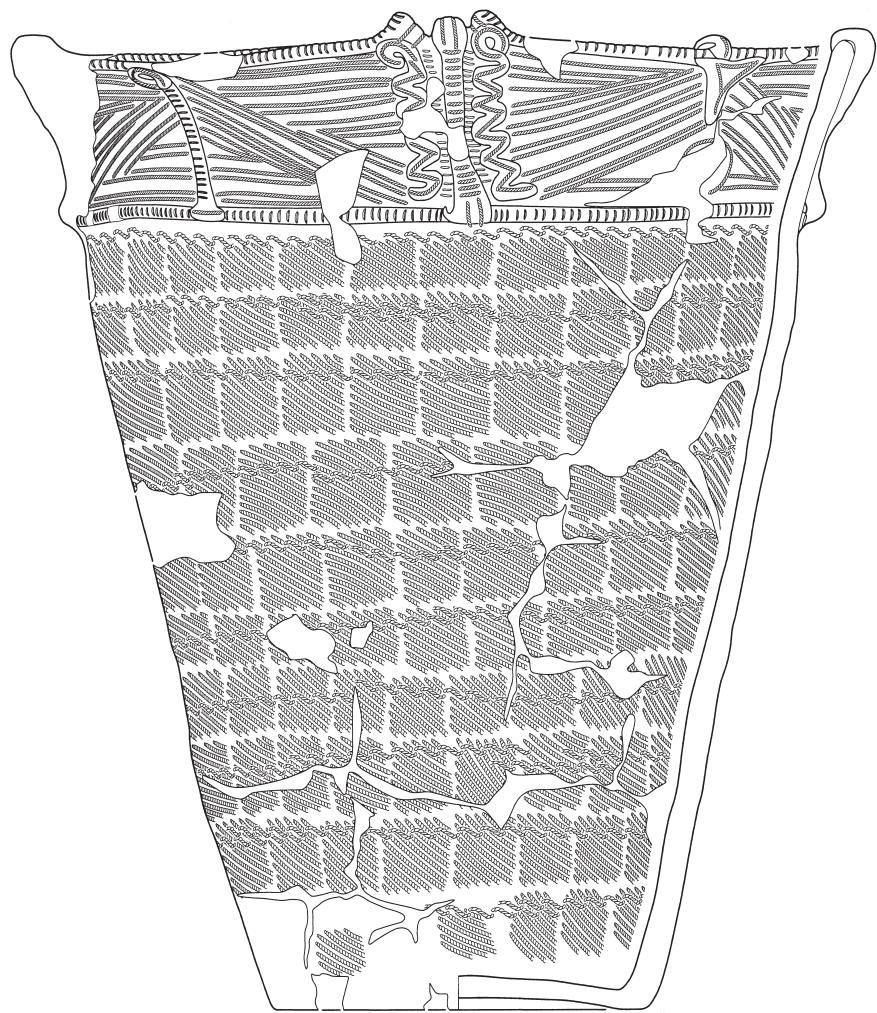
44



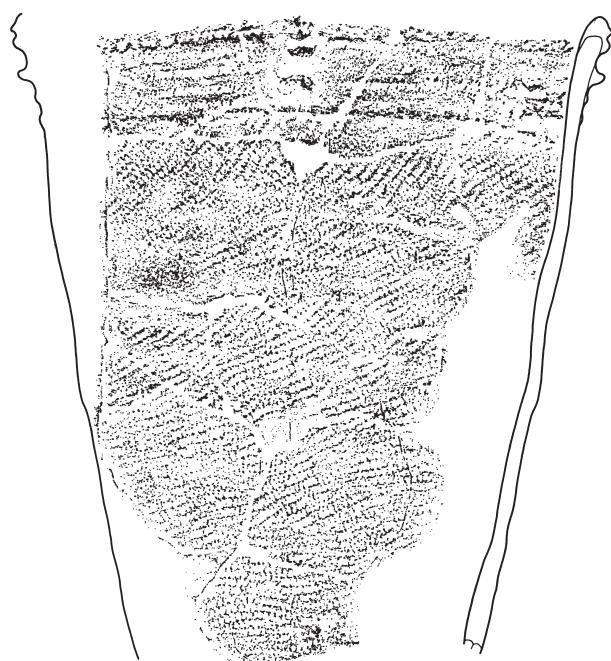
45

0 1 : 4 10cm

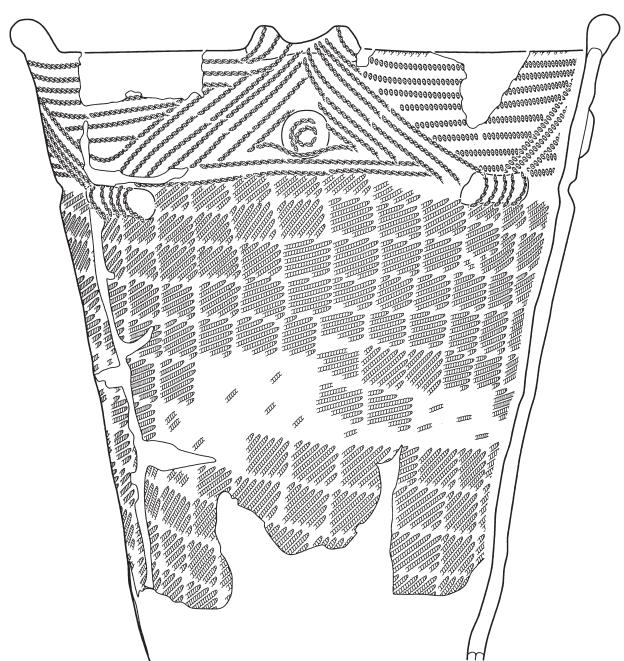
図90 第1号捨て場14



46



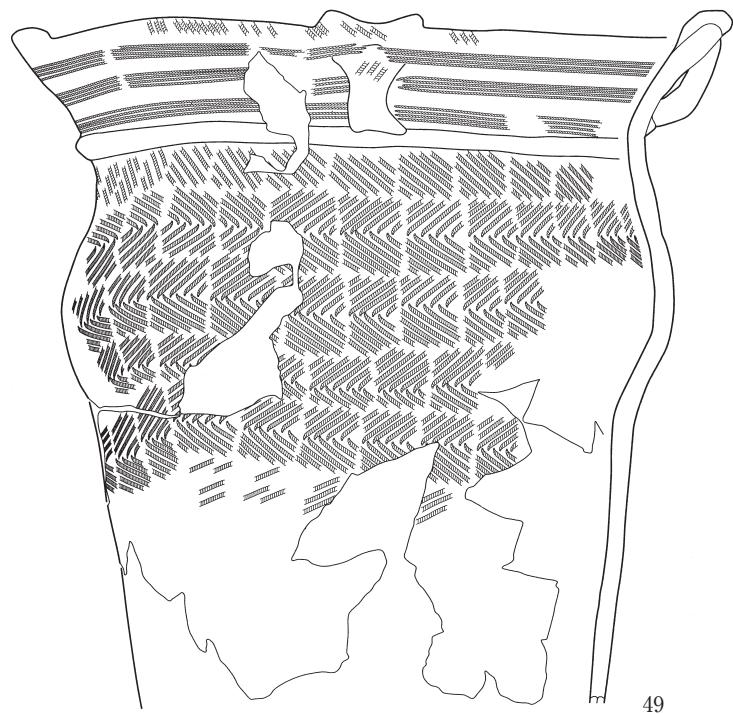
47



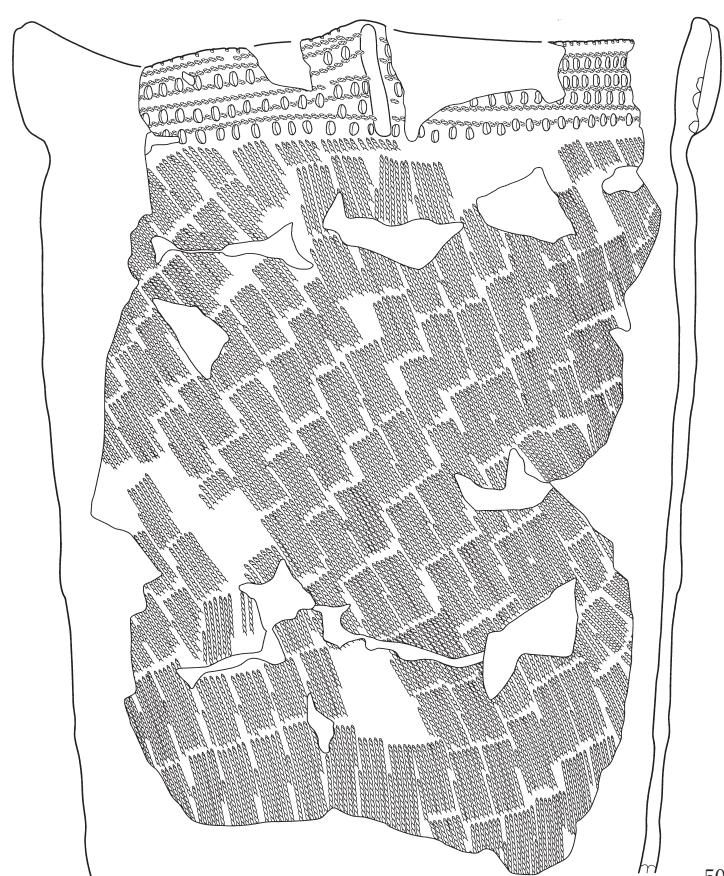
48

0 1 : 4 10cm

図91 第1号捨て場15



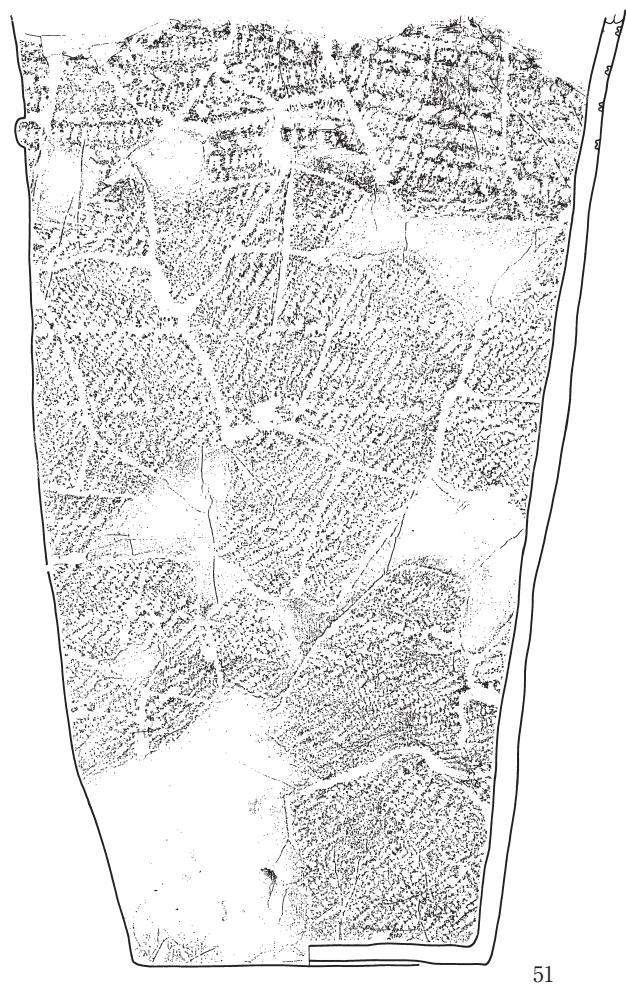
49



50

0 1 : 4 5cm

図92 第1号捨て場16



0 1 : 4 10cm



遺跡の北側に発達する沢（沢ノ黒沢）であり、河川の流れは津軽海峡に注ぐ。縄文時代には、サケが遡上したことが考えられる。



夕刻に海岸より北海道を遠望した光景である。この海峡を幾度となく人々が往来したことであろう。

図93 第1号捨て場17

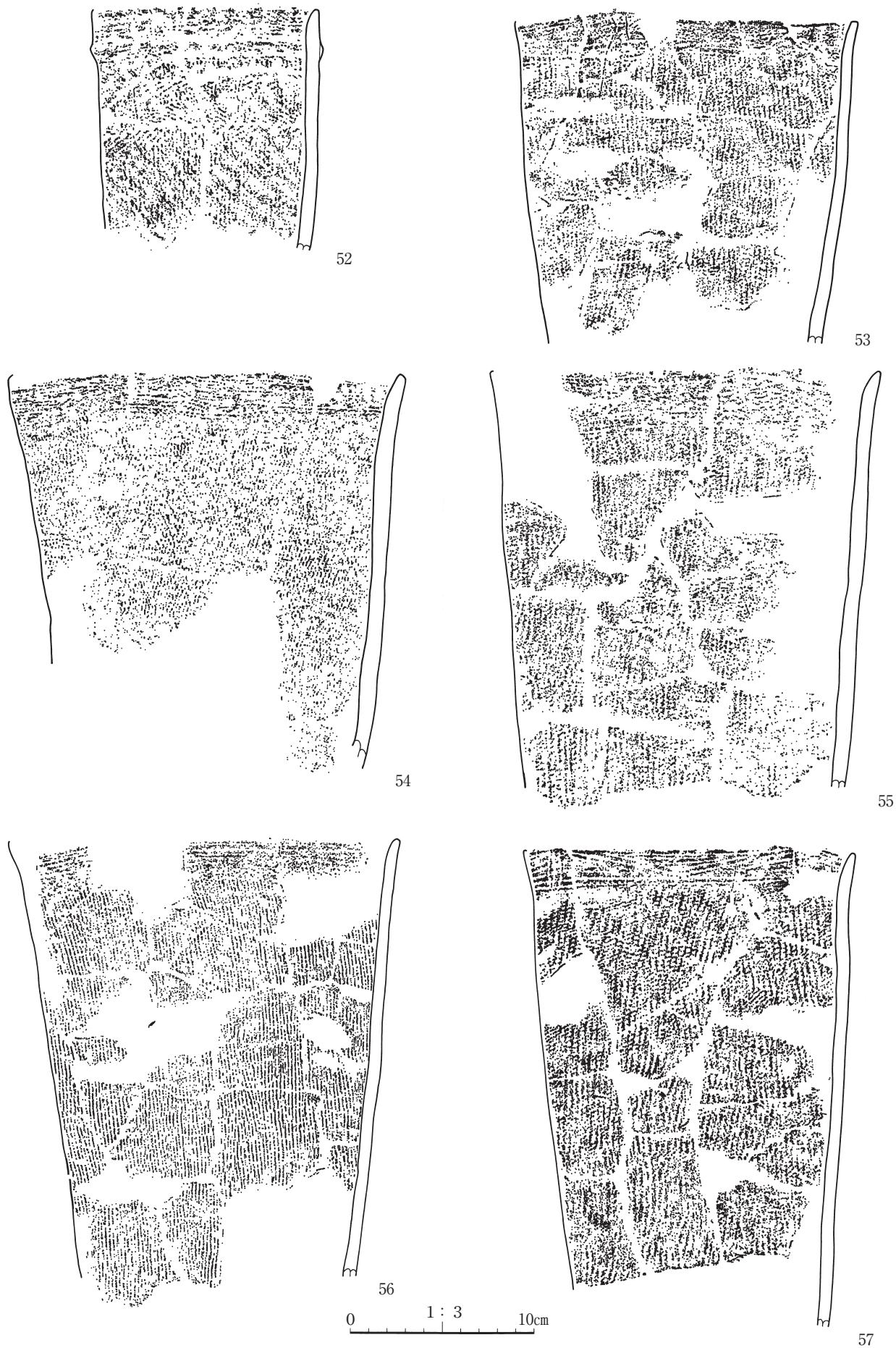
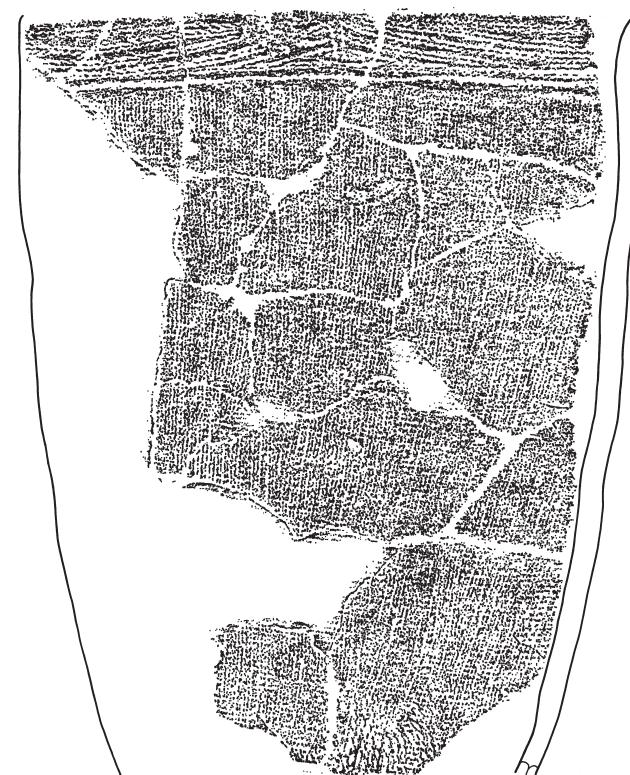


図94 第1号捨て場18



58



59

0 1 : 3 10cm

図95 第1号捨て場19



図96 第1号捨て場20



図97 第1号捨て場21

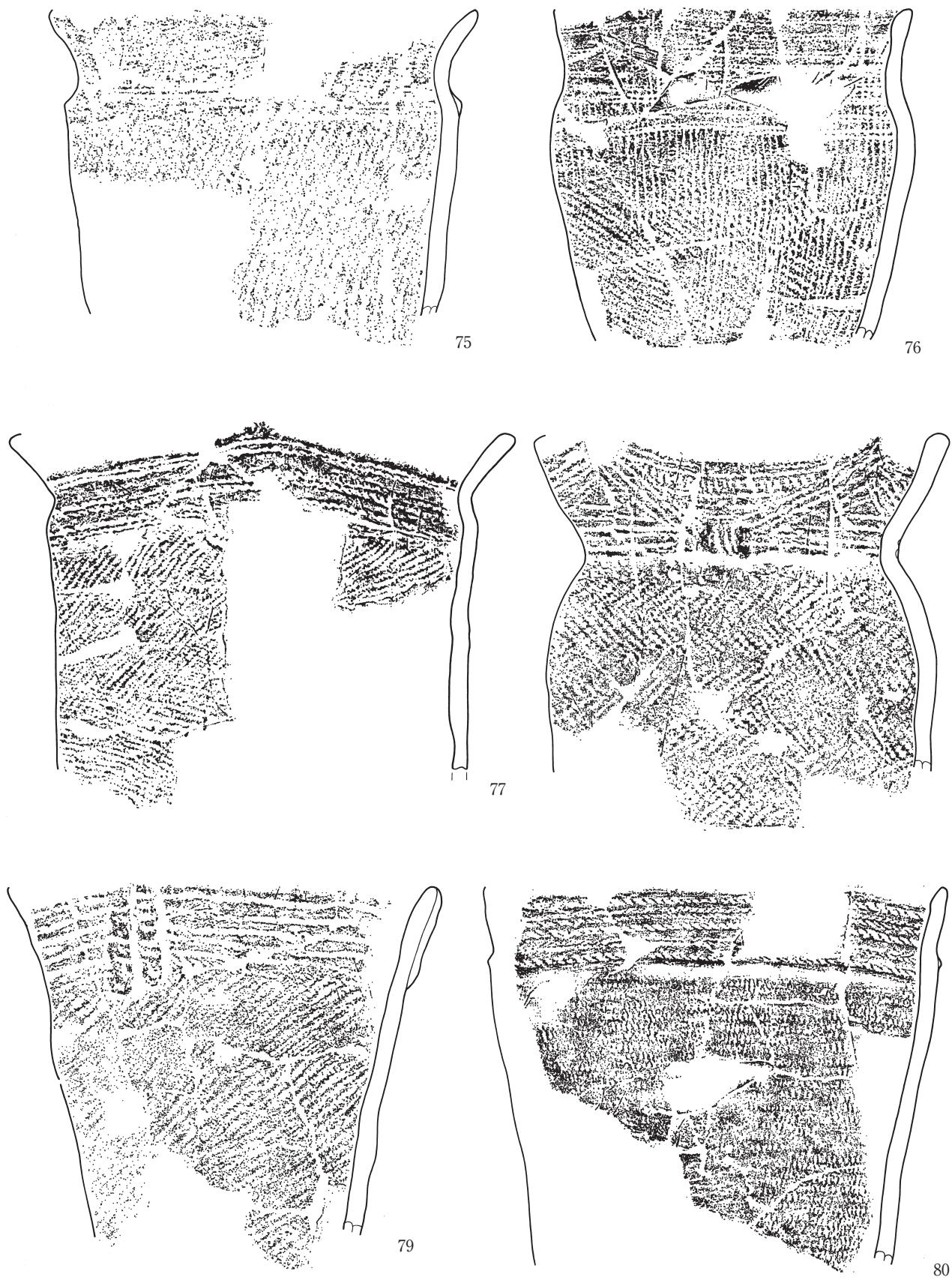
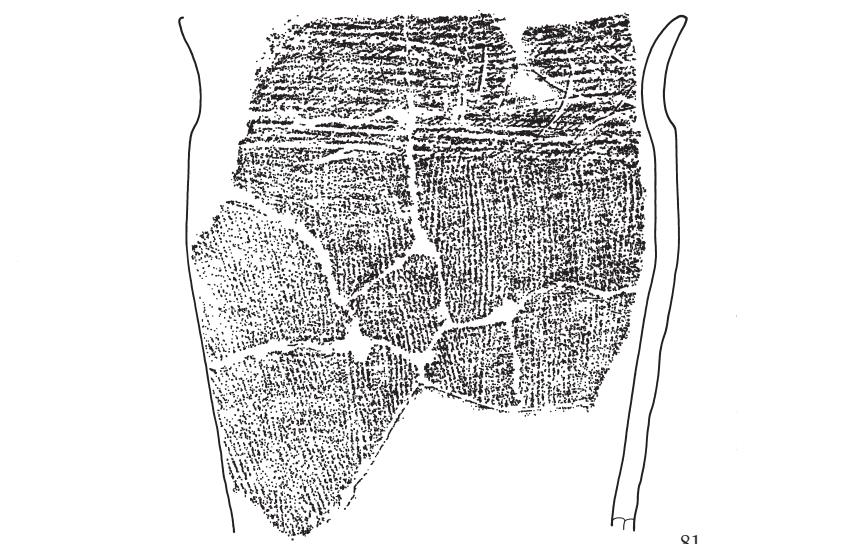
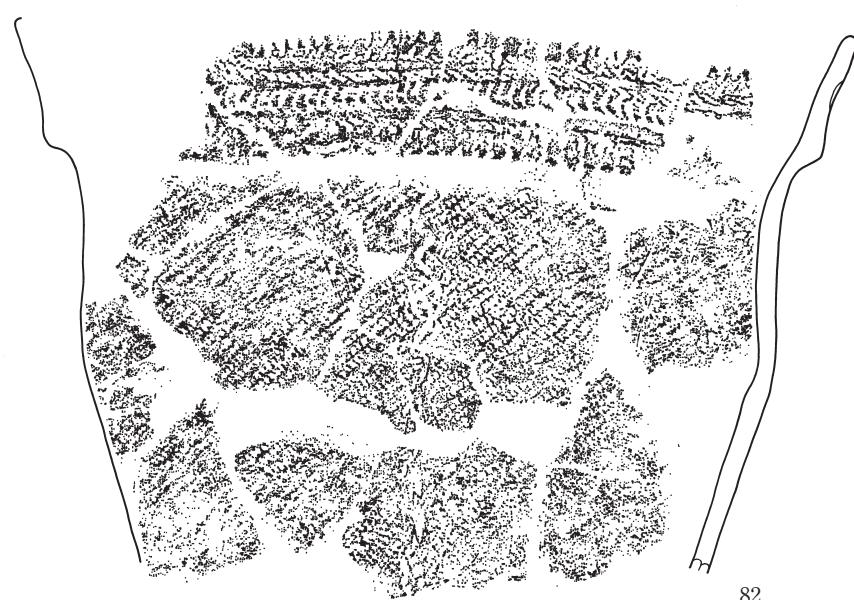


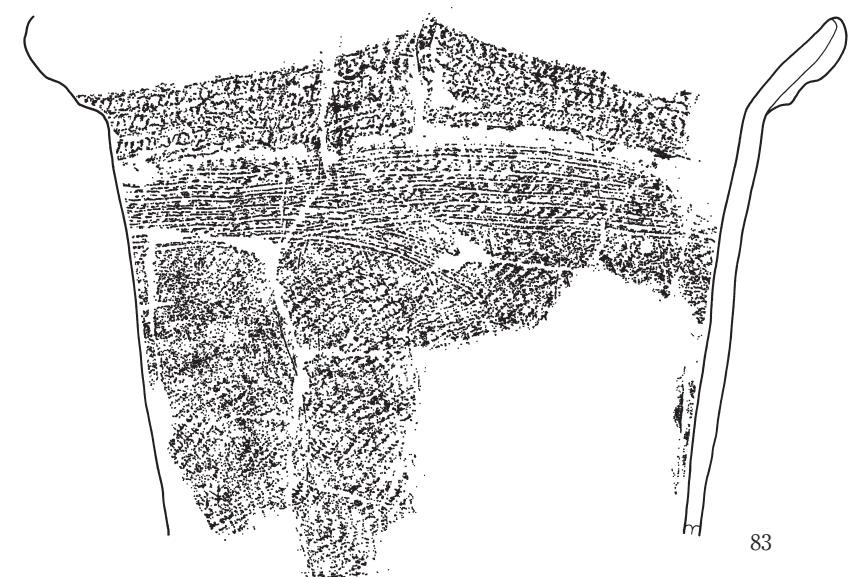
図98 第1号捨て場22



81



82



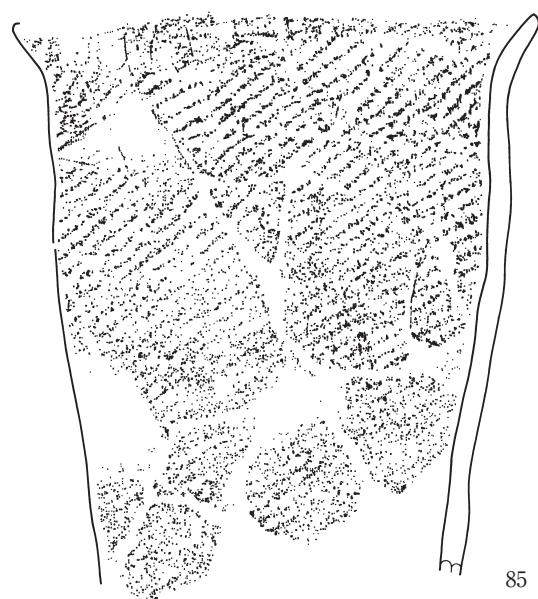
83

0 1 : 3 10cm

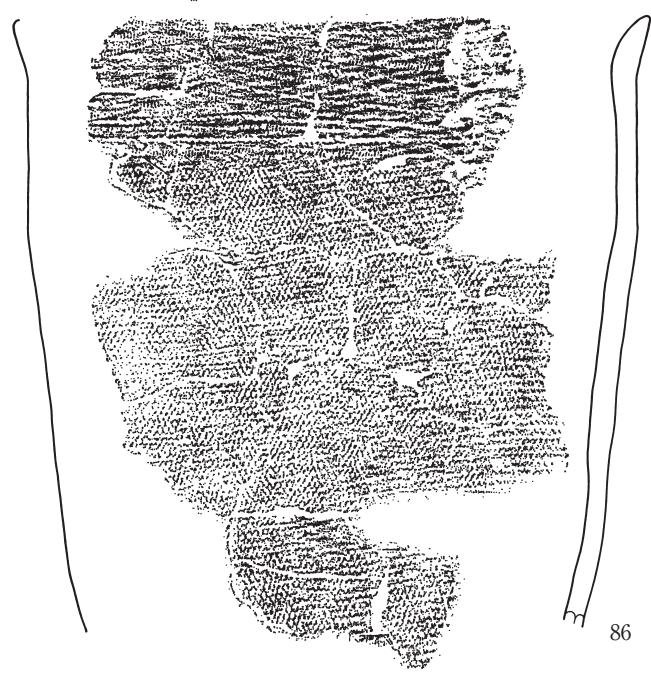
図99 第1号捨て場23



84



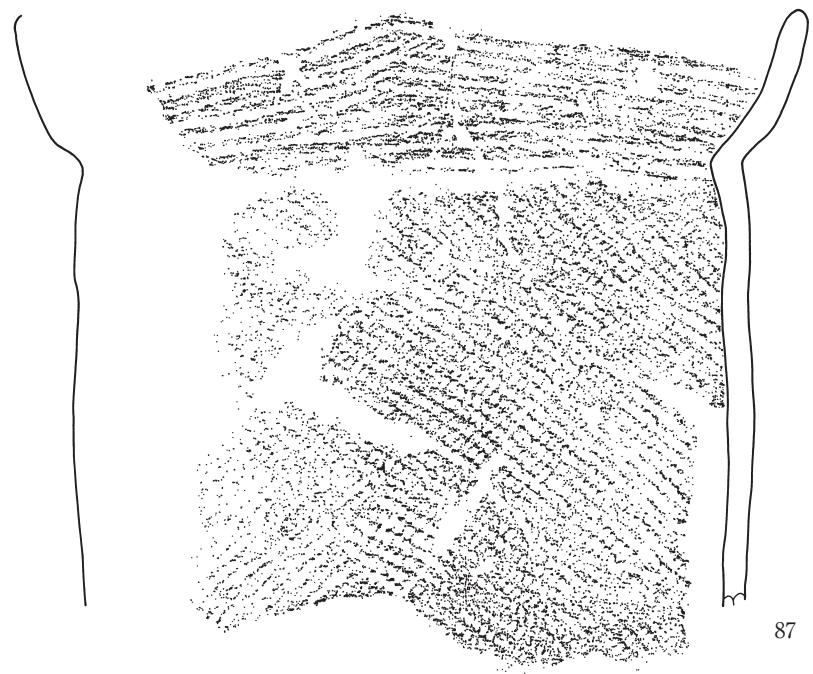
85



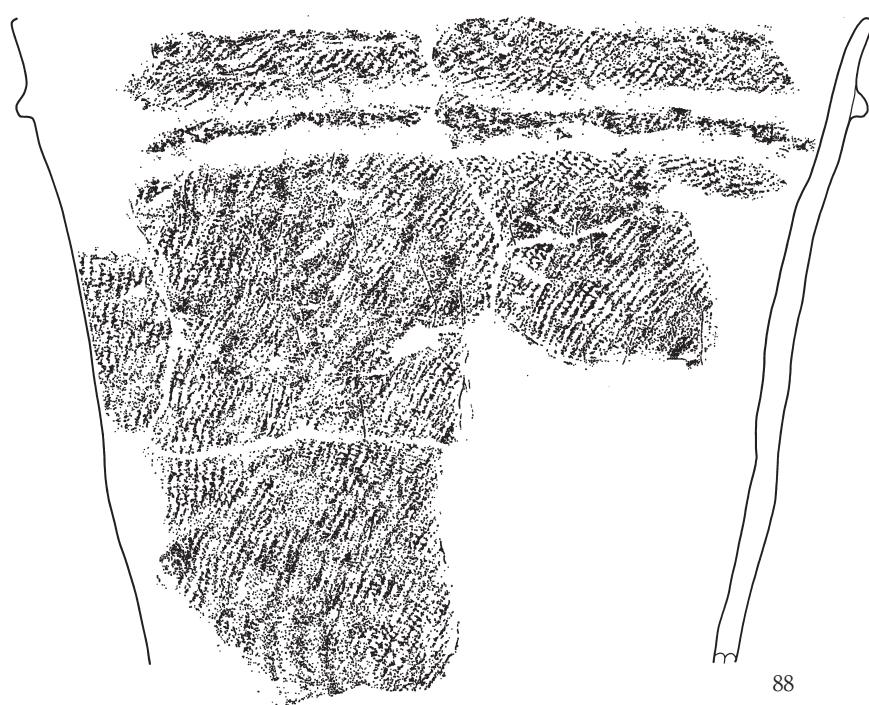
86

0 1 : 3 10cm

図100 第1号捨て場24



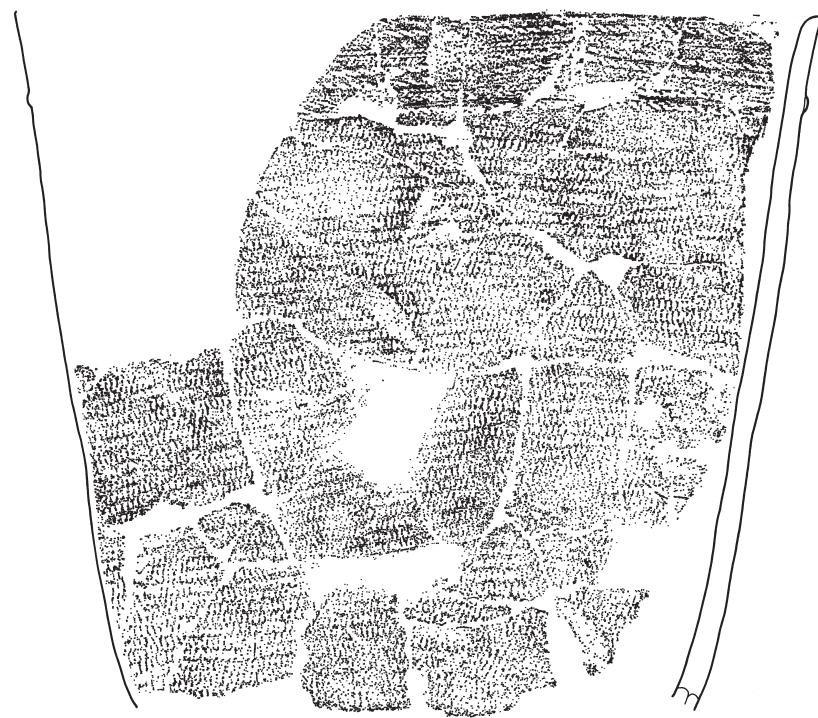
87



88

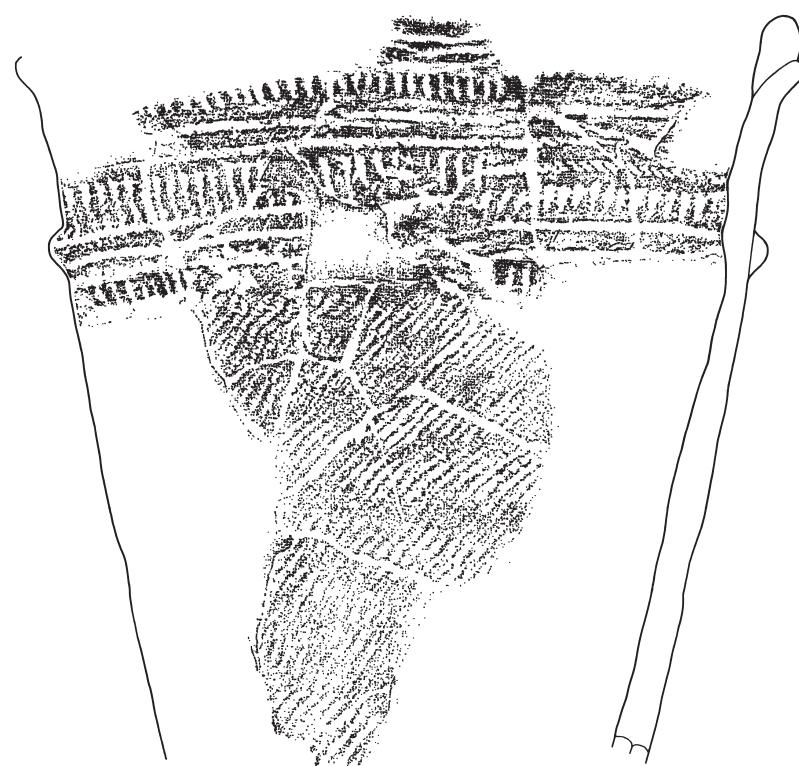
0 1 : 3 10cm

図101 第1号捨て場25



0 1 : 3 10cm

図102 第1号捨て場26

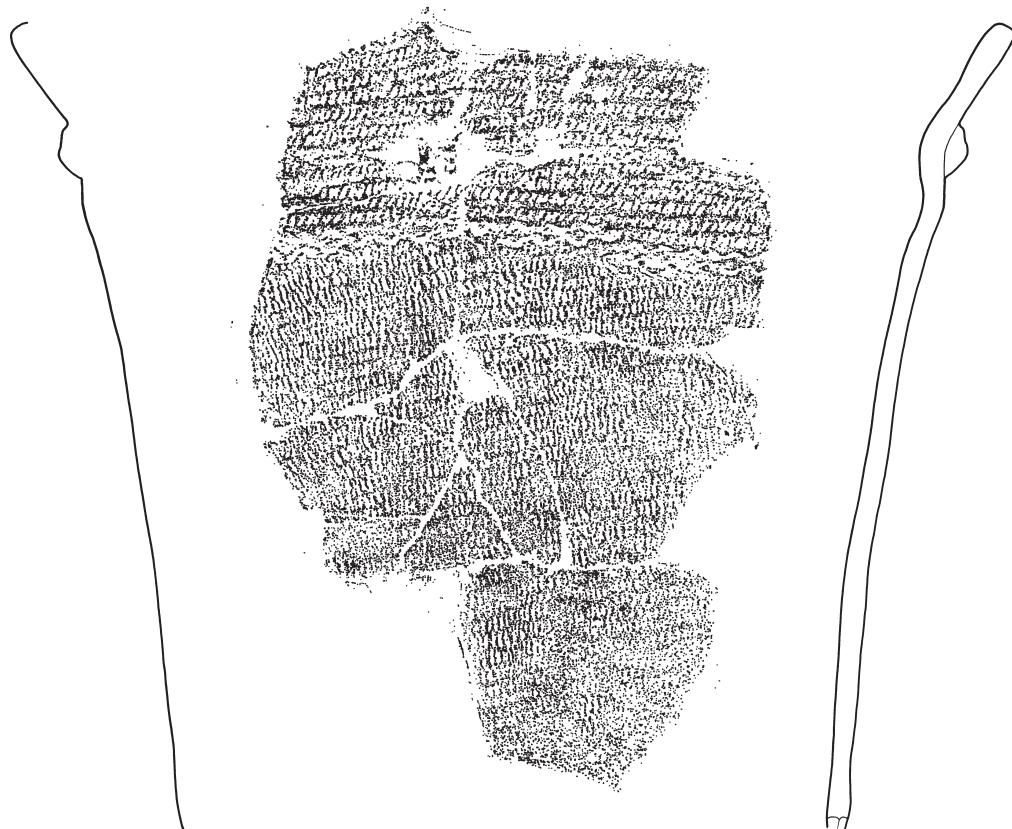


0 1 : 3 10cm

図103 第1号捨て場27



93



94

0 1 : 3 10cm

図104 第1号捨て場28

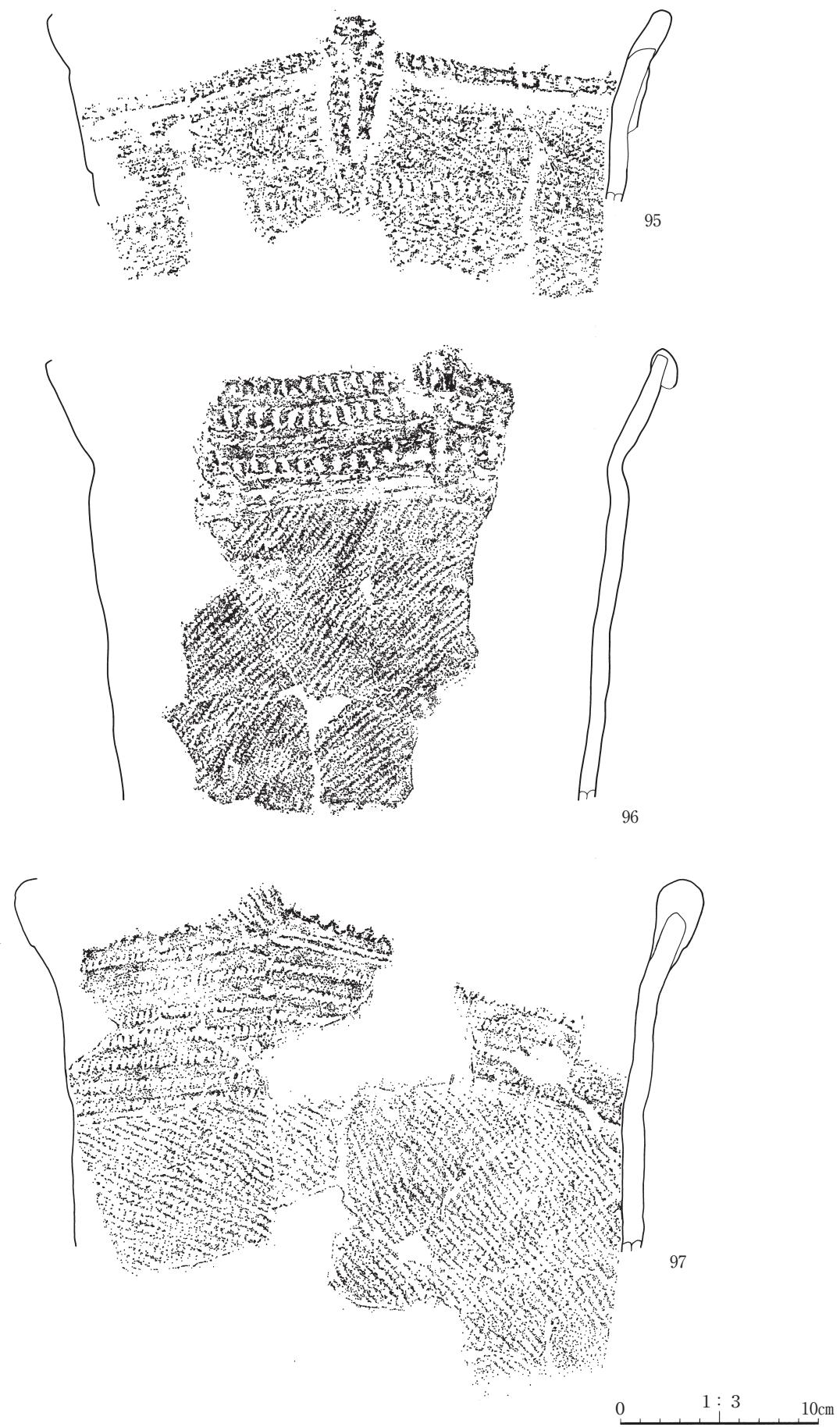


図105 第1号捨て場29

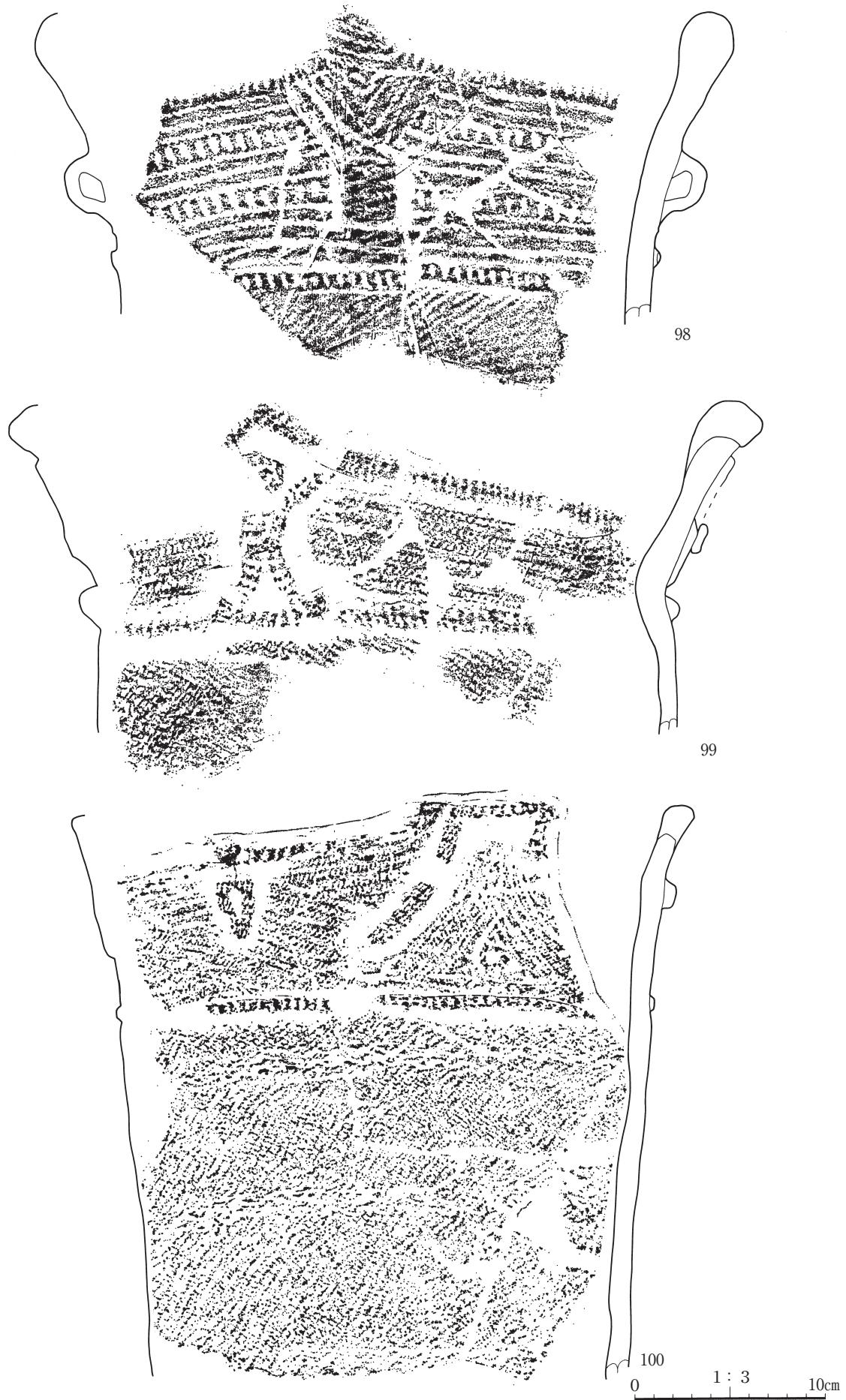
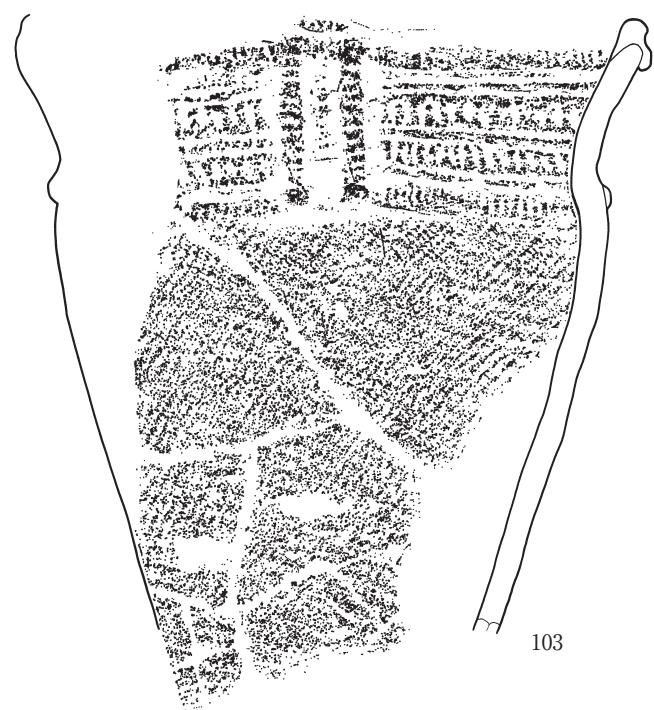
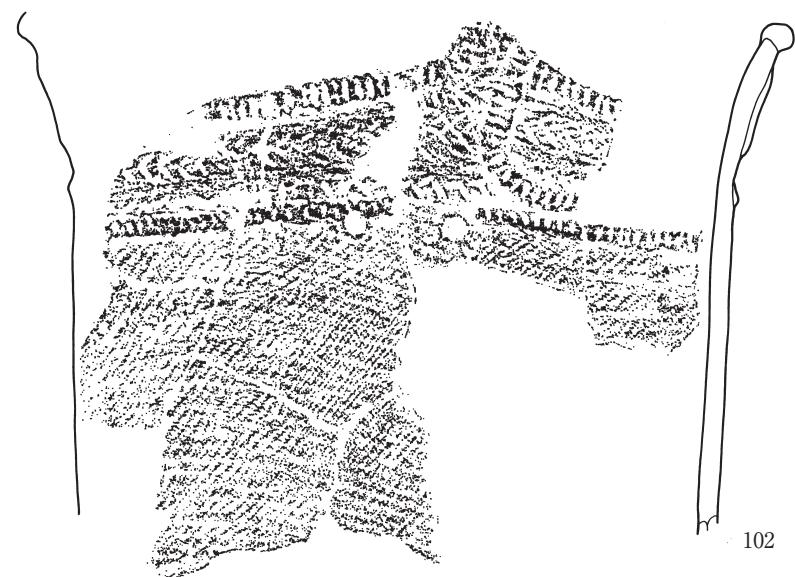
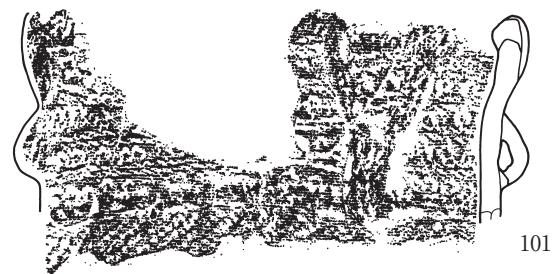


図106 第1号捨て場30



0 1 : 3 10cm

図107 第1号捨て場31

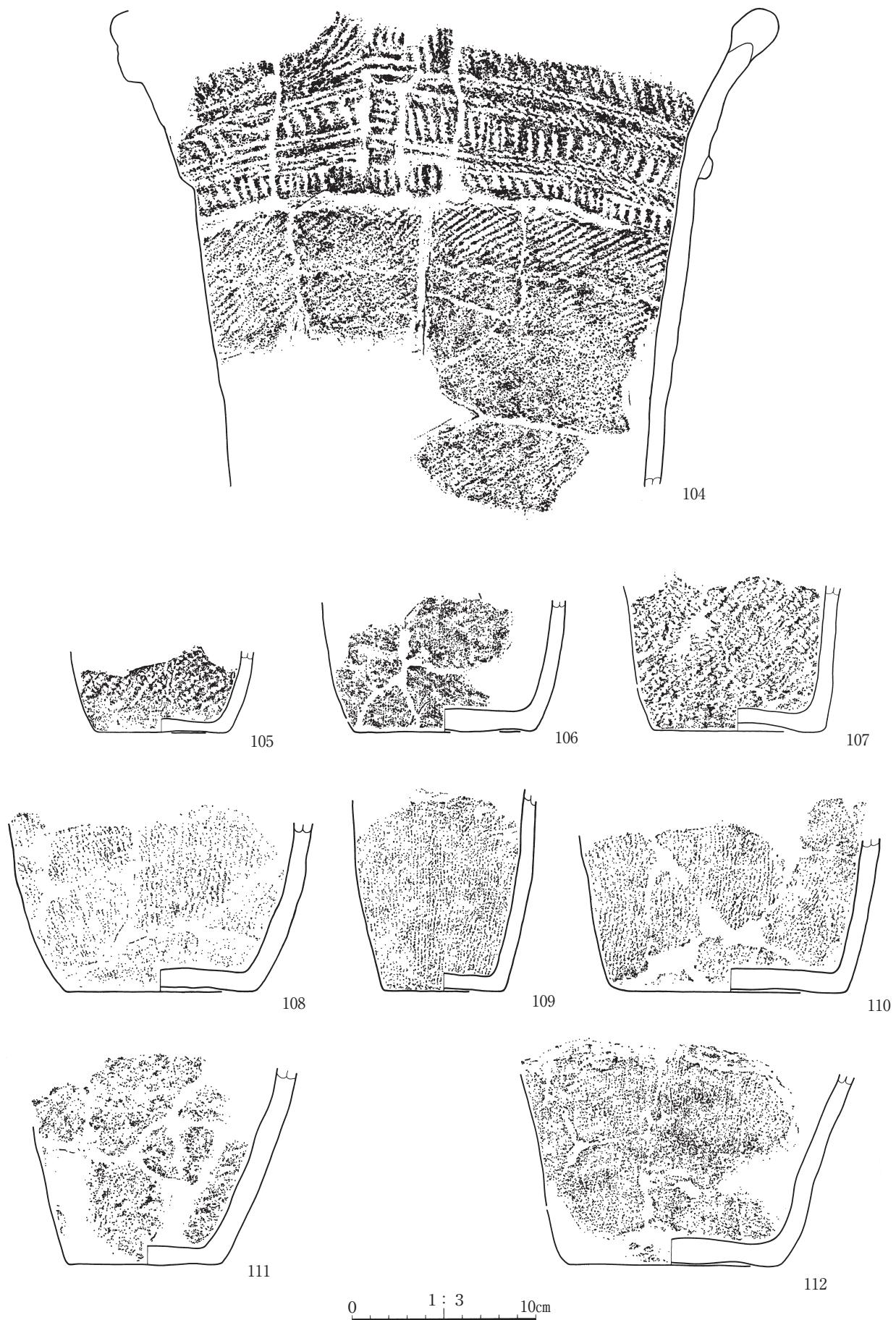
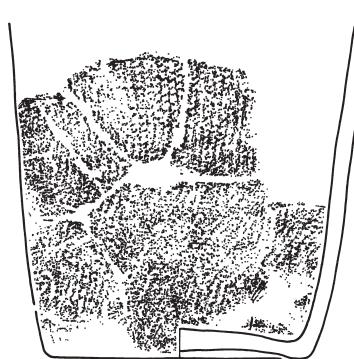
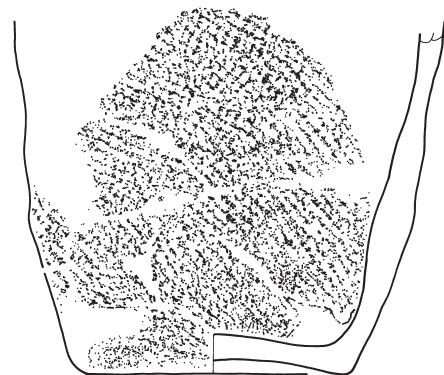


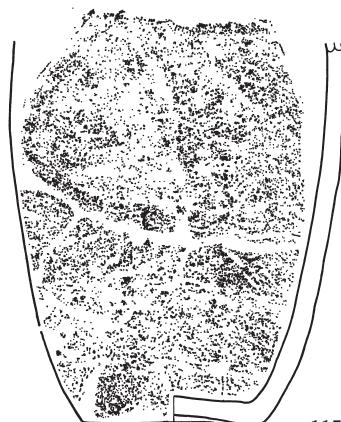
図108 第1号捨て場32



113



114



115



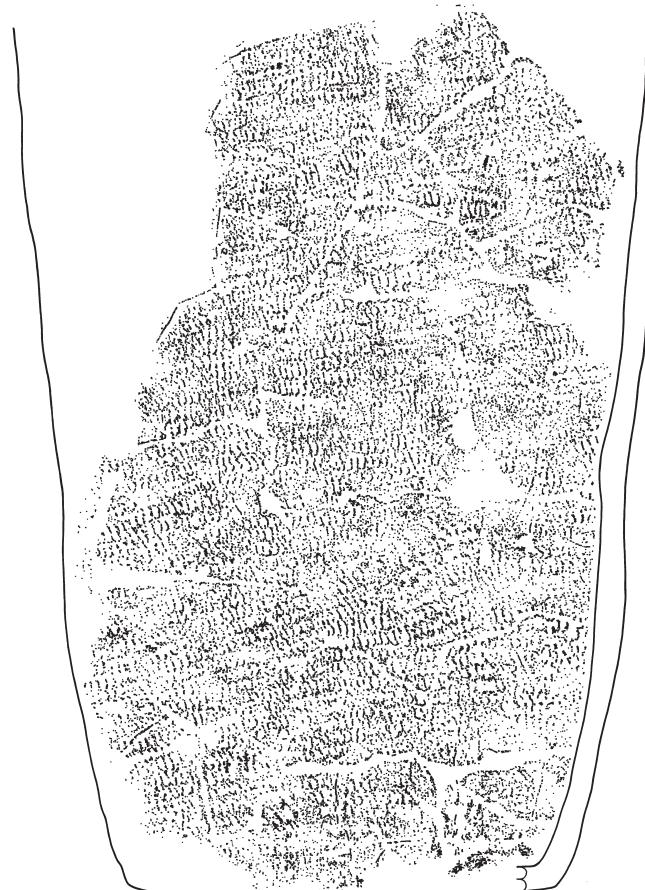
116



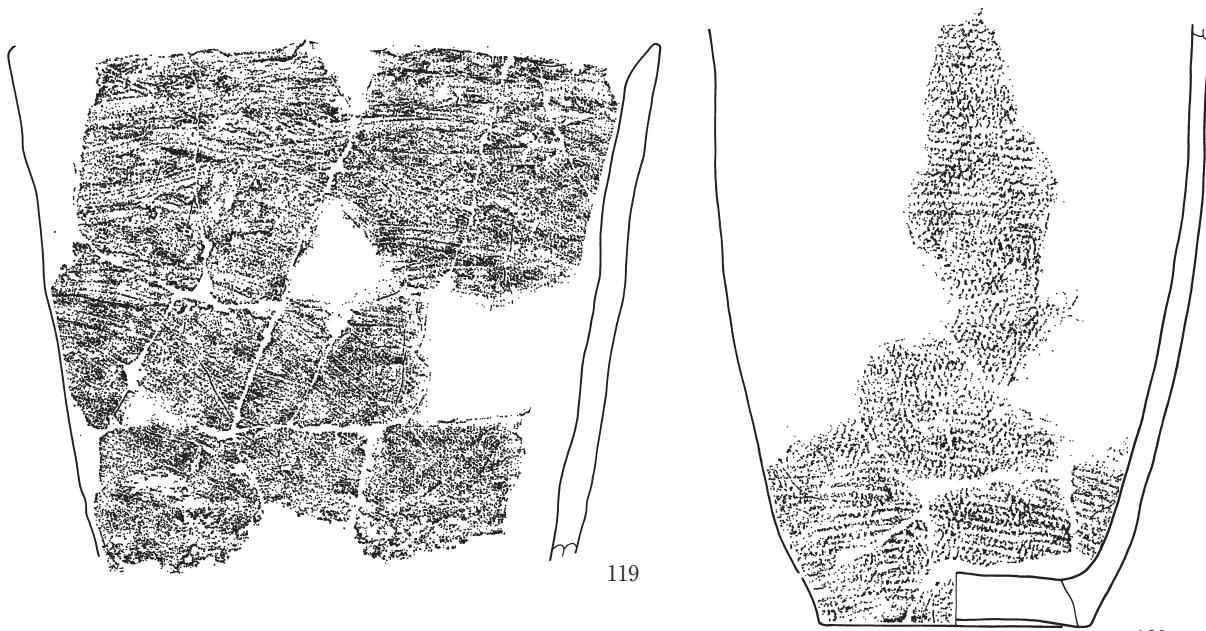
117

0 1 : 3 10cm

図109 第1号捨て場33



118



119

120

0 1 : 3 10cm

図110 第1号捨て場34

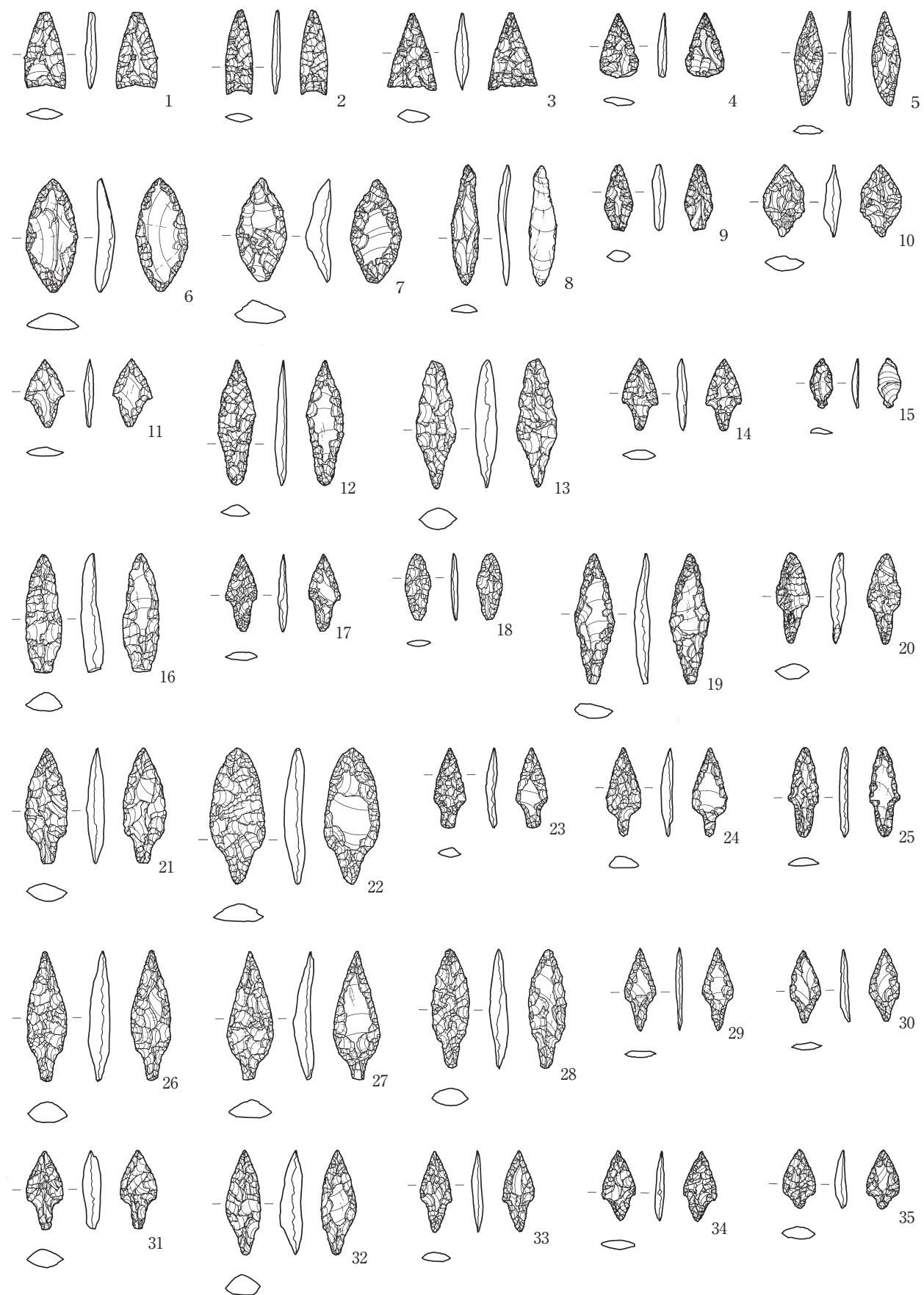
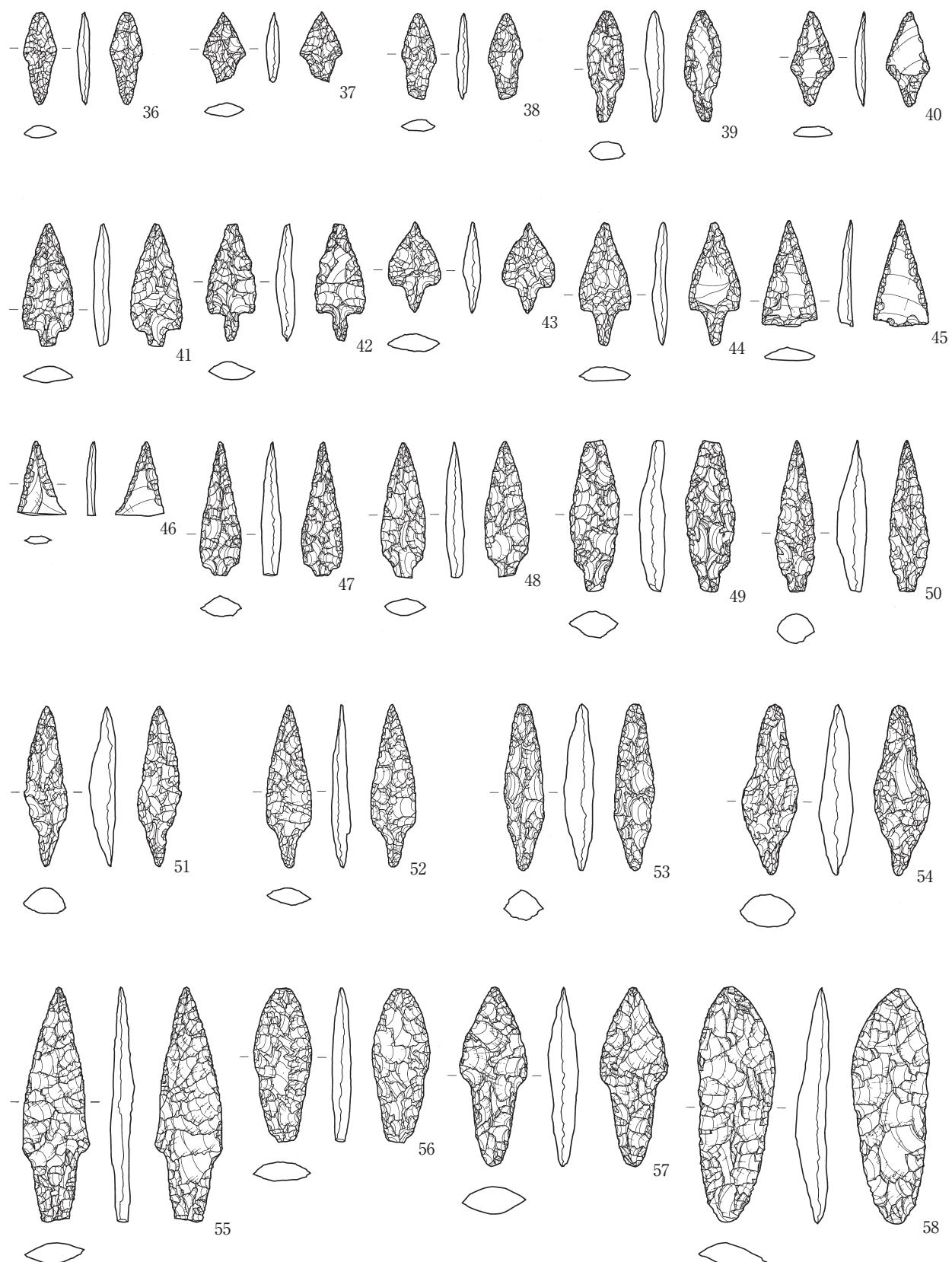
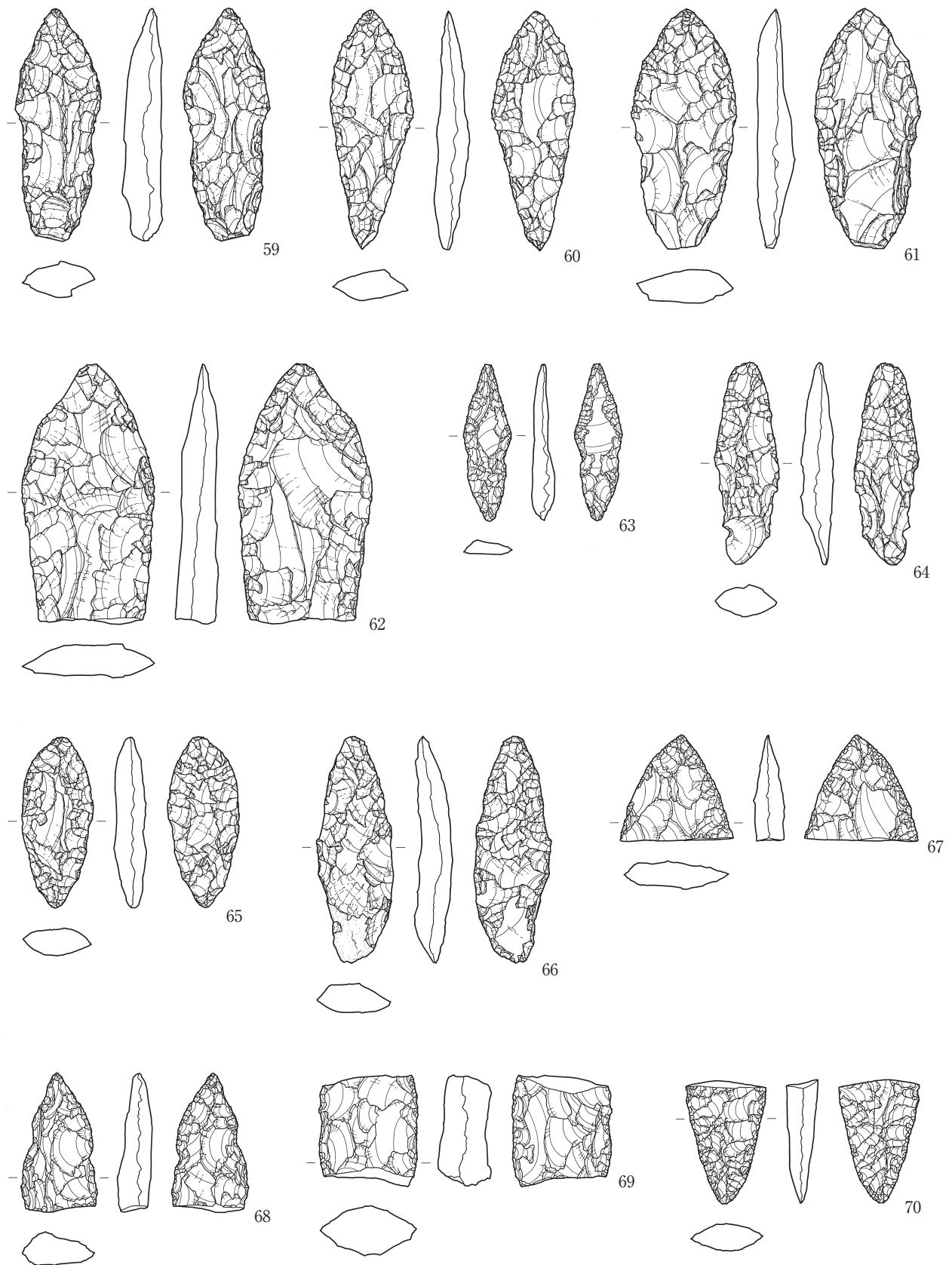


図111 第1号捨て場35



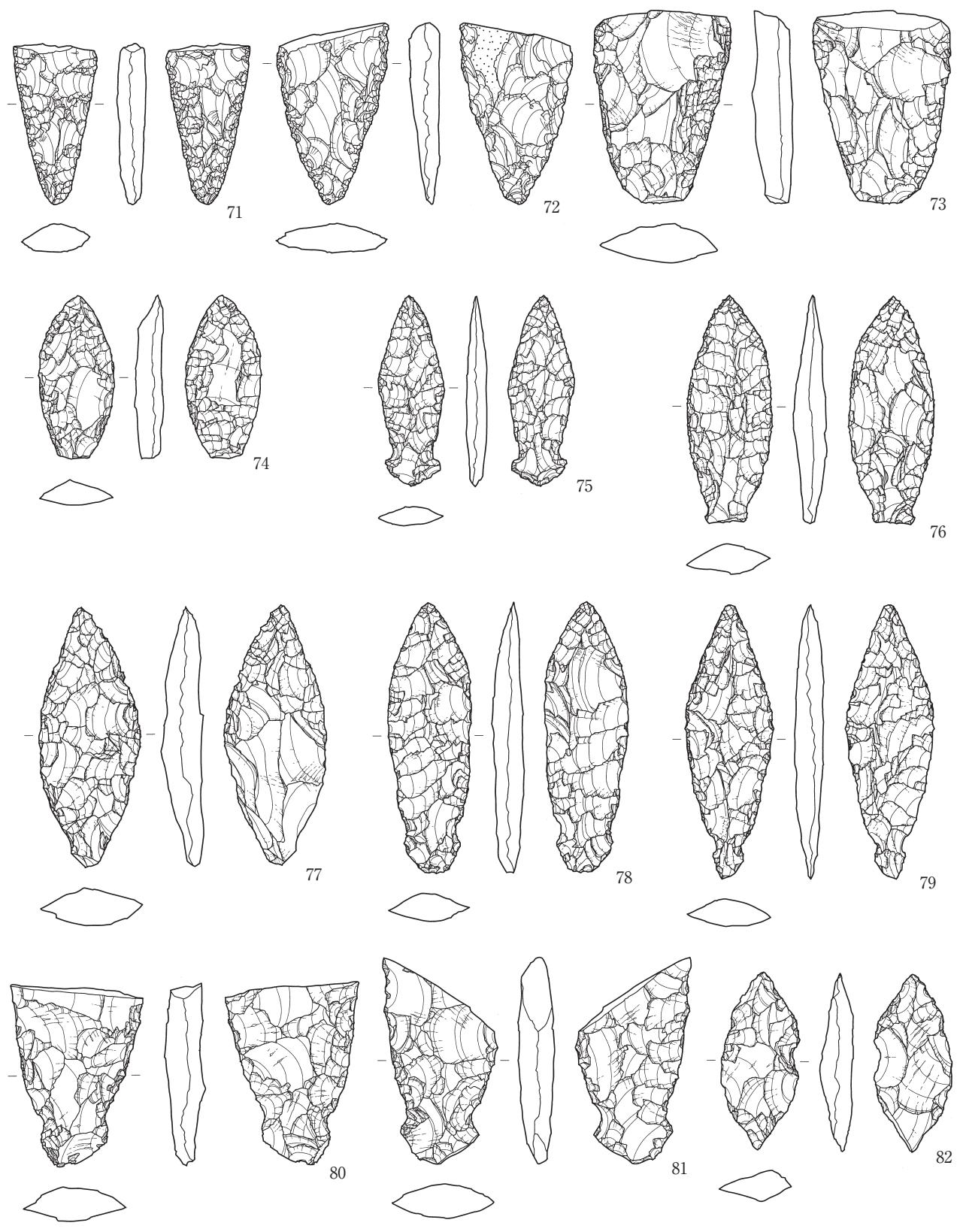
0 1 : 2 5cm

図112 第1号捨て場36



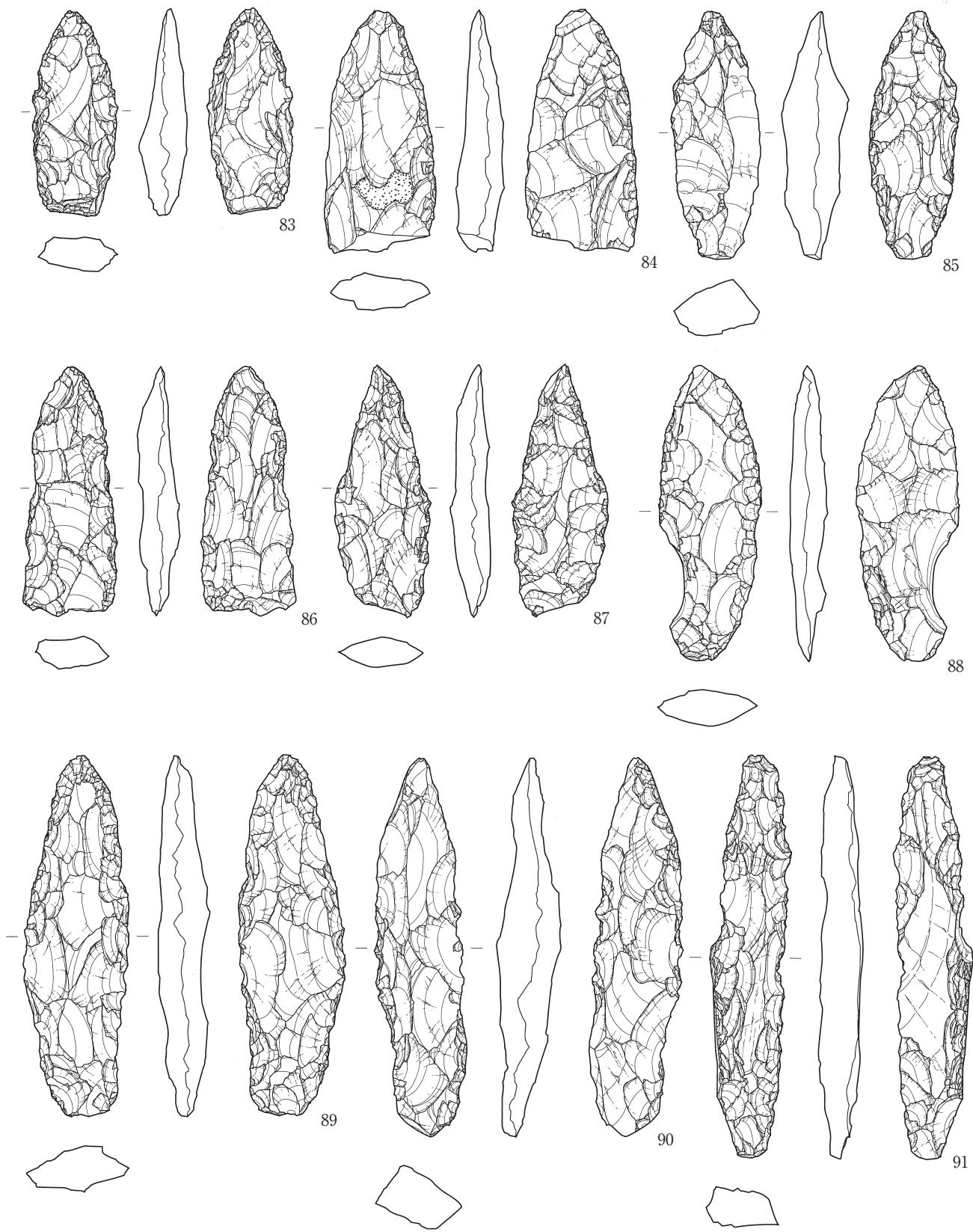
0 1 : 2 5cm

図113 第1号捨て場37



0 1 : 2 5cm

図114 第1号捨て場38



0 1 : 2 5cm

図115 第1号捨て場39

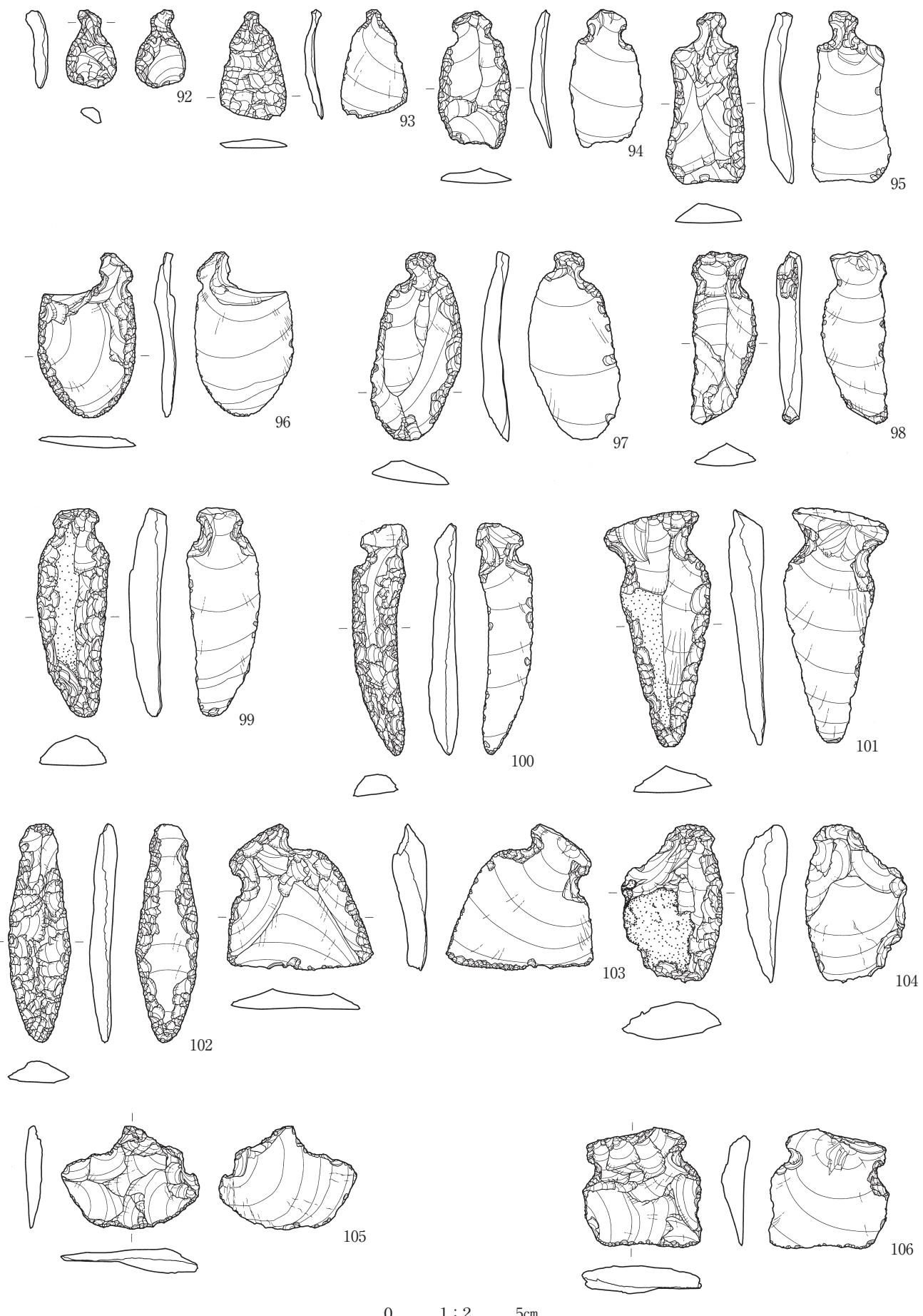


図116 第1号捨て場40

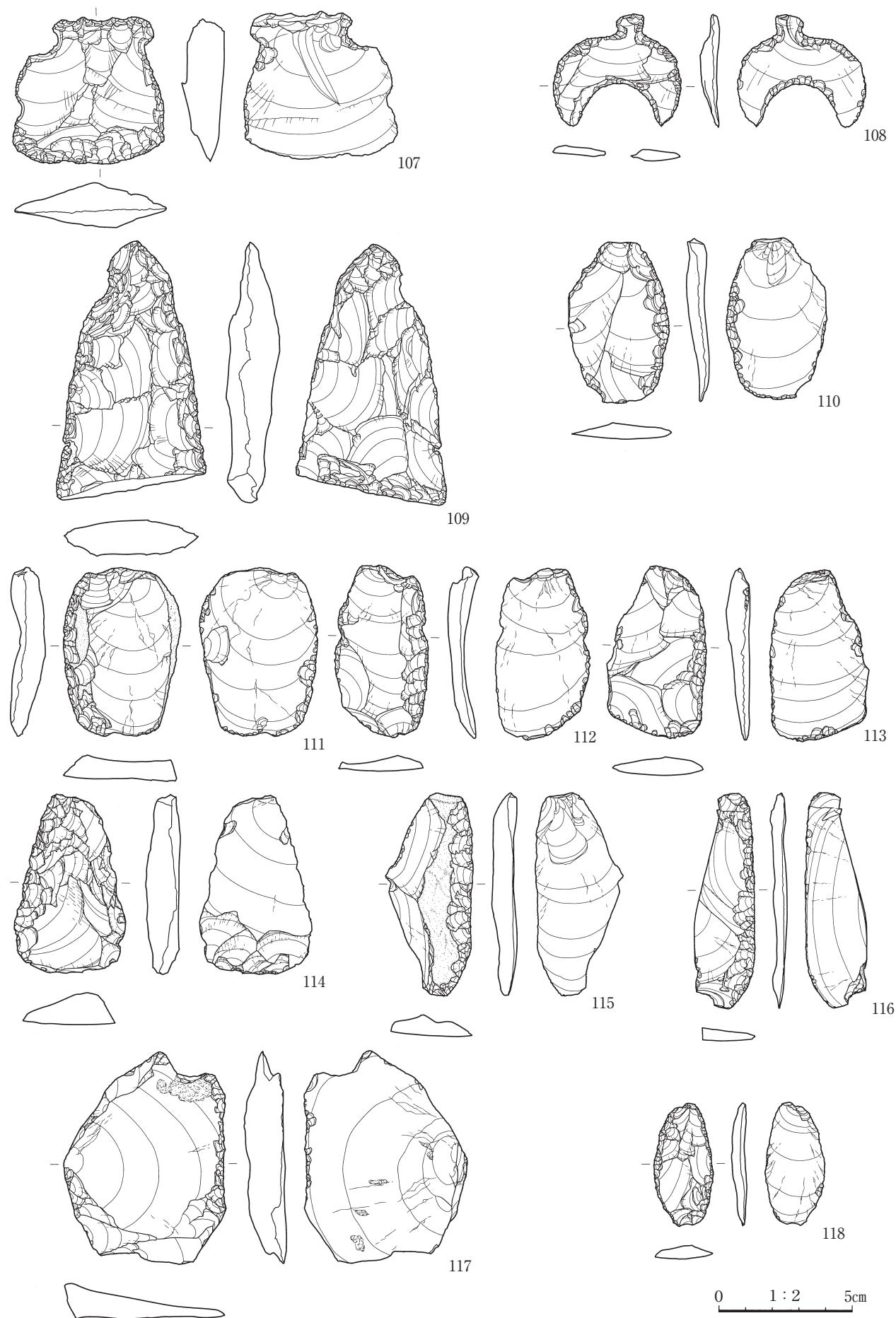


図117 第1号捨て場41

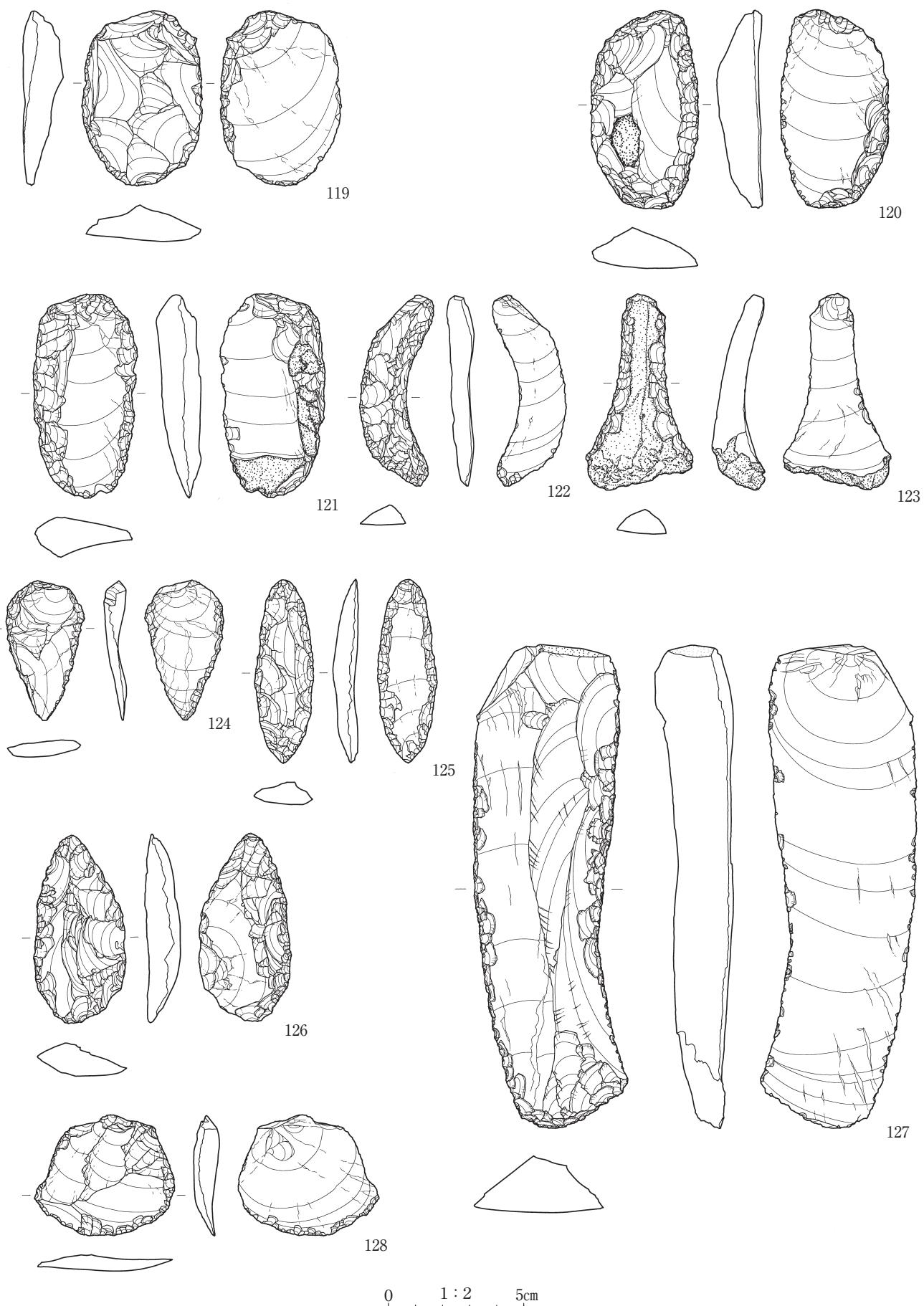


図118 第1号捨て場42

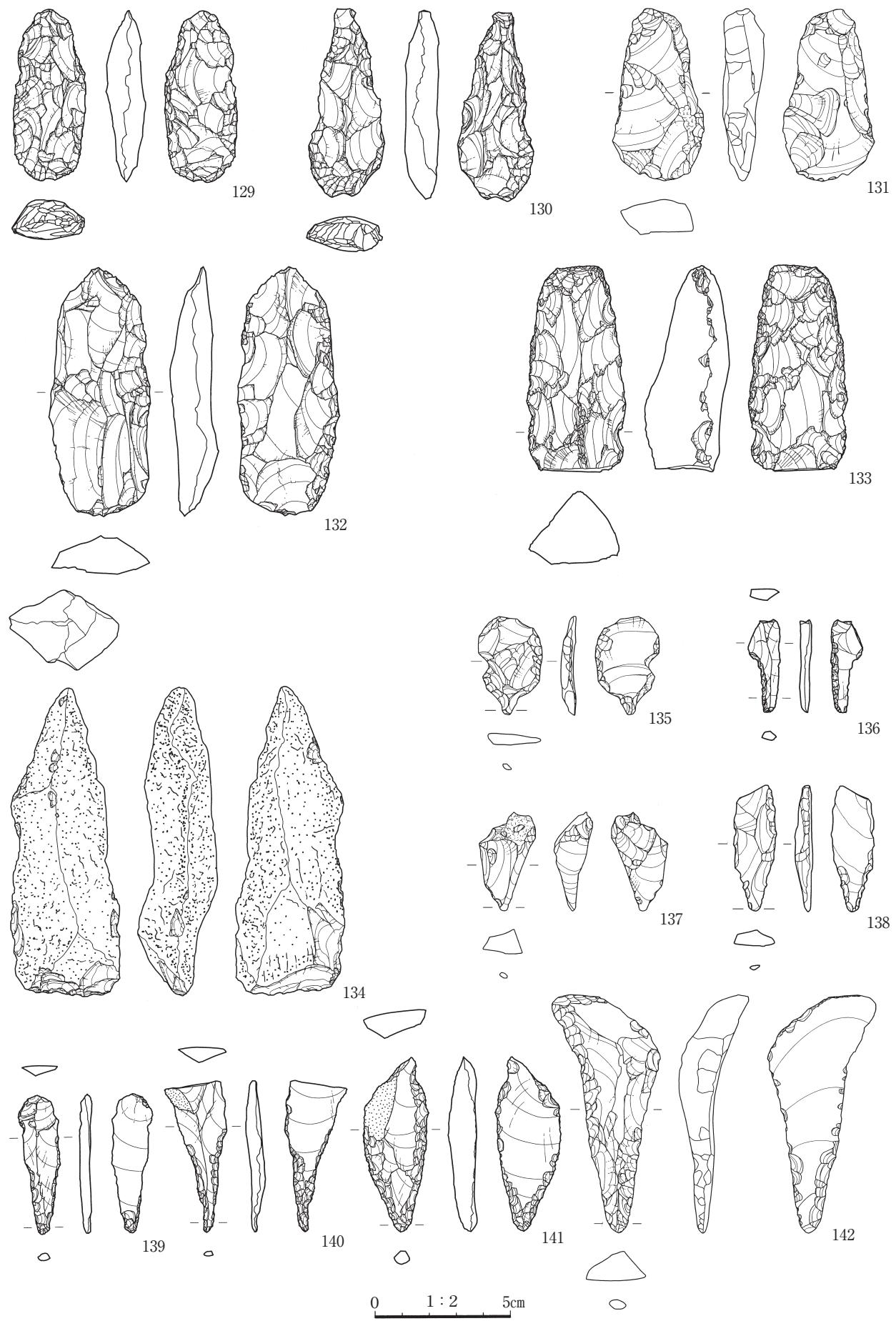


図119 第1号捨て場43

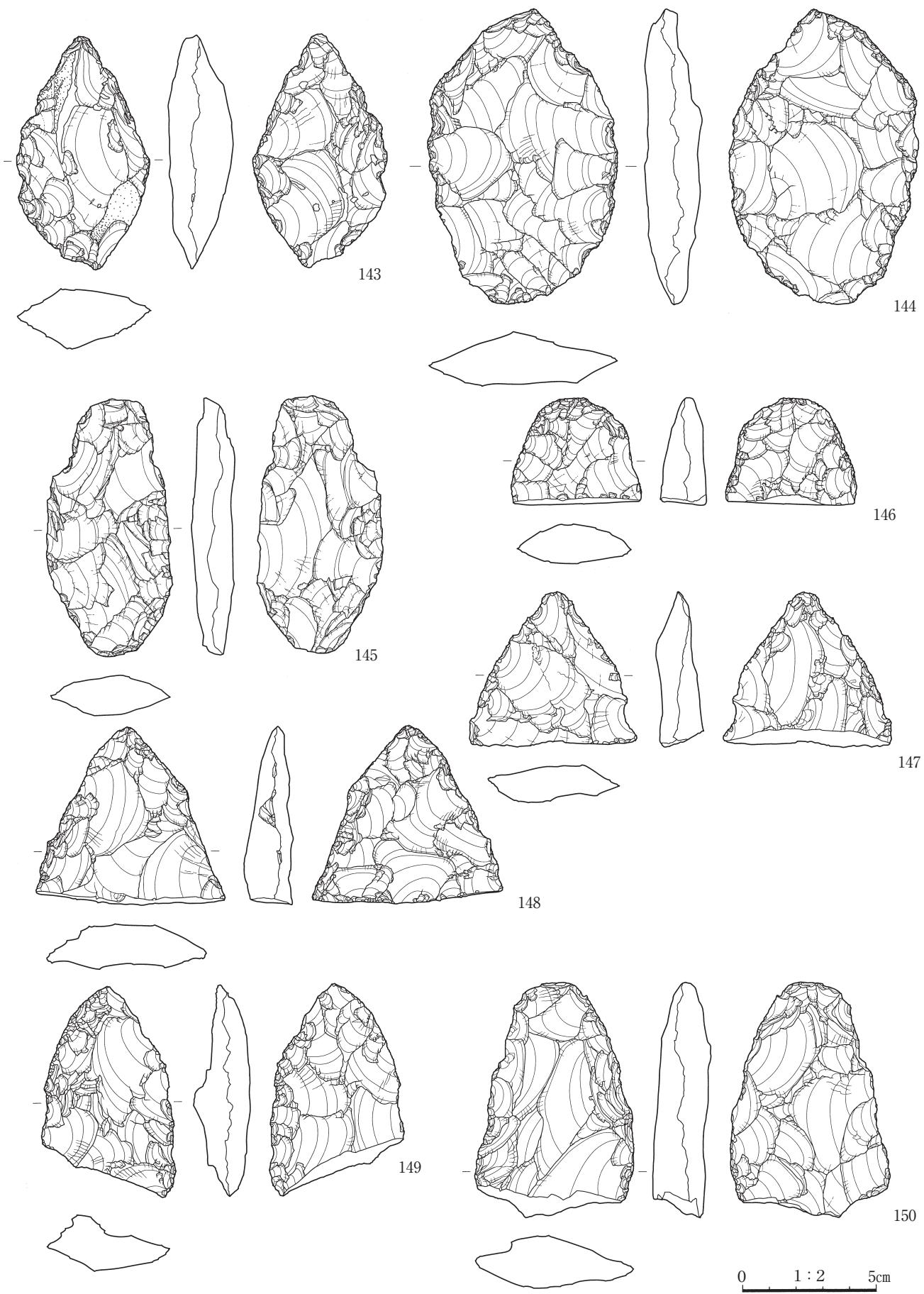


図120 第1号捨て場44

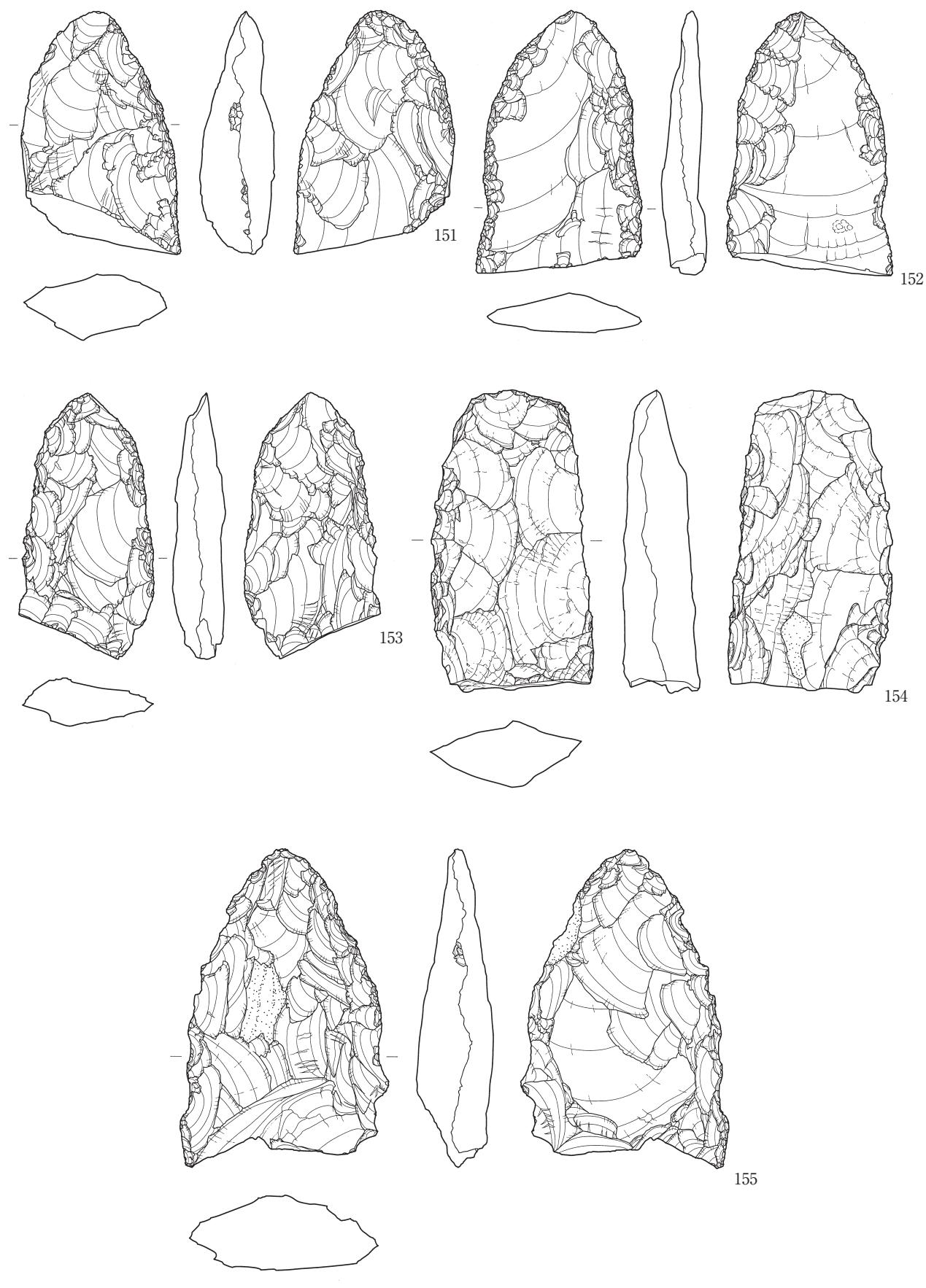


図121 第1号捨て場45

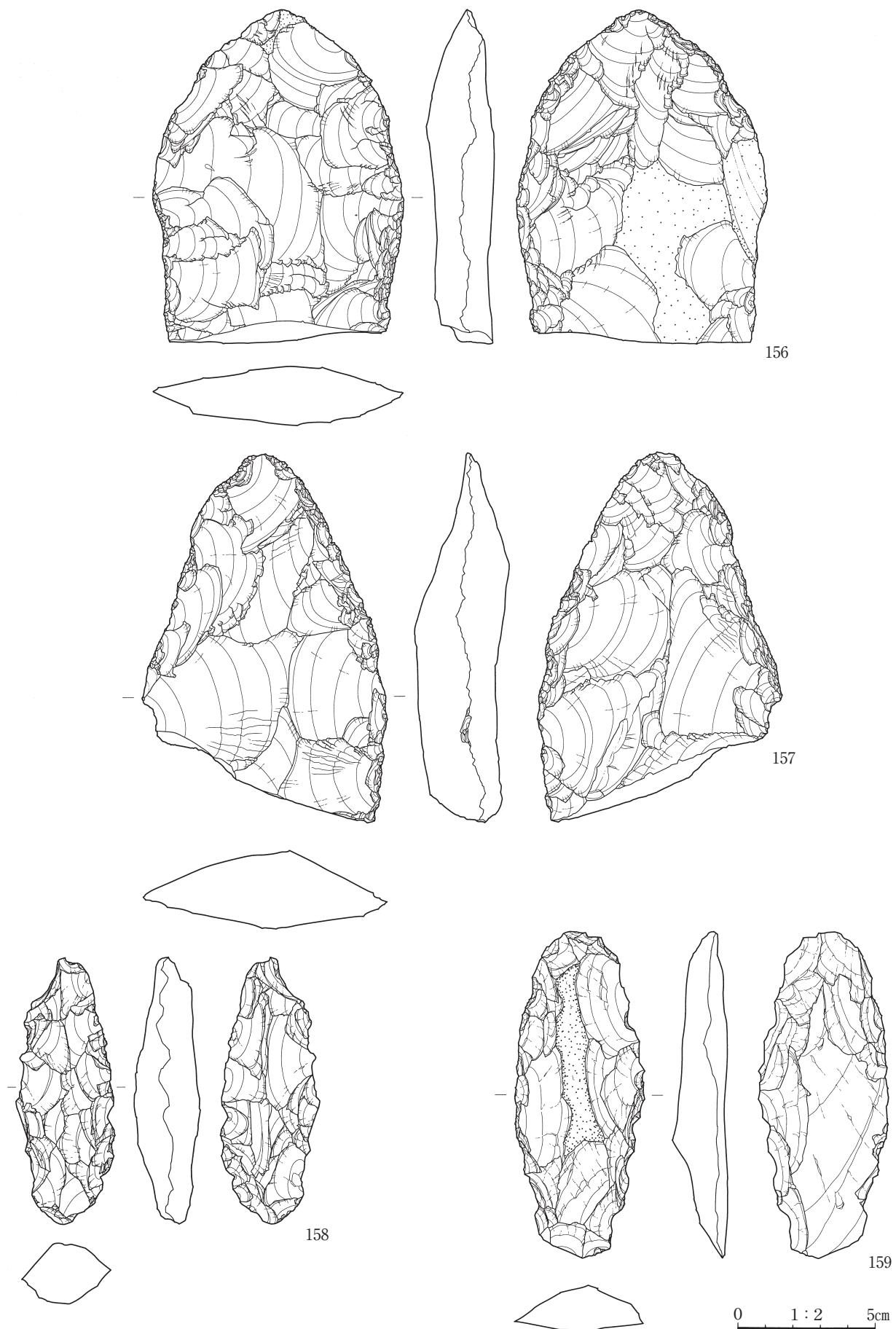


図122 第1号捨て場46



0 1 : 2 5cm

図123 第1号捨て場47

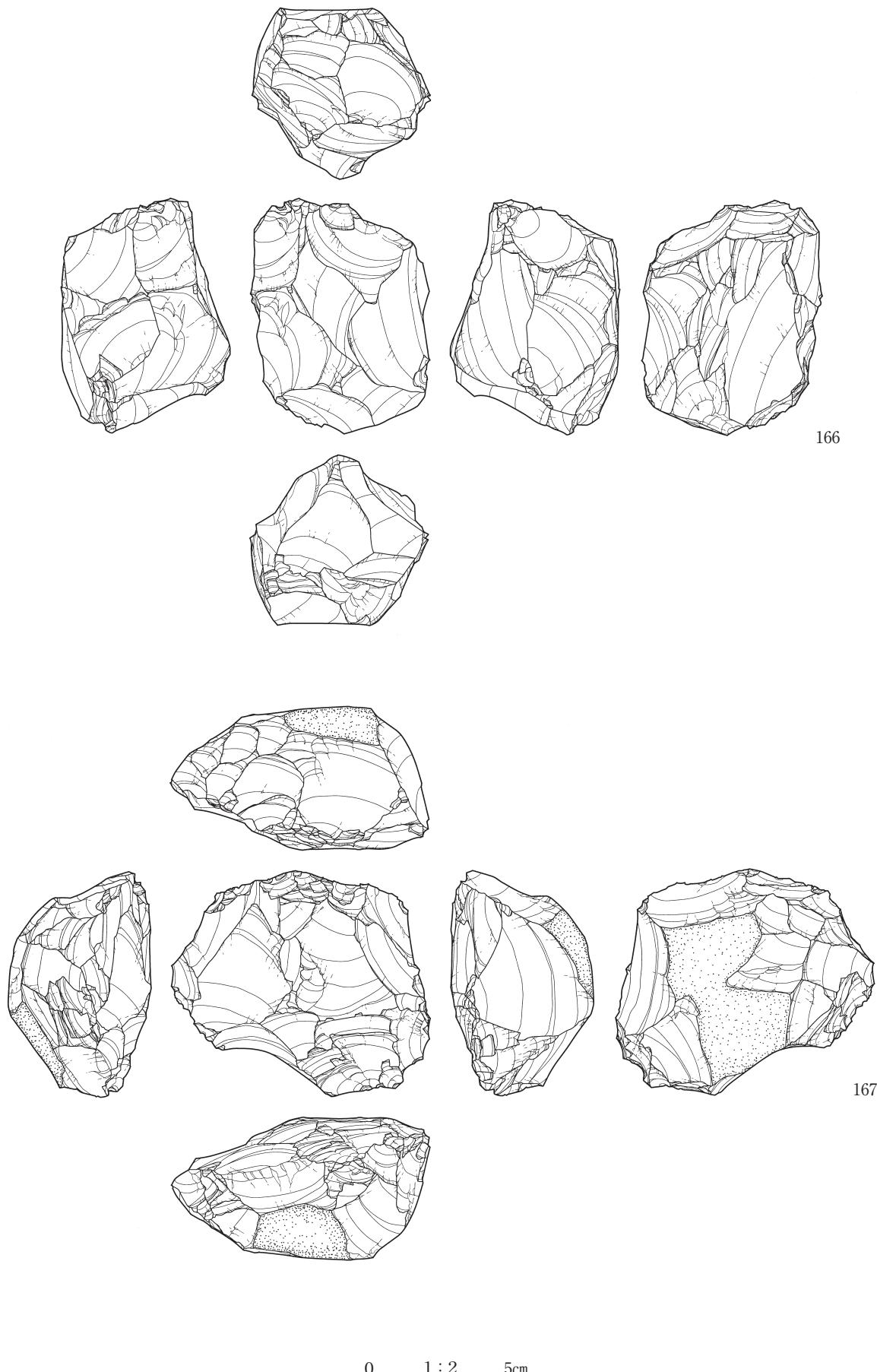


図124 第1号捨て場48

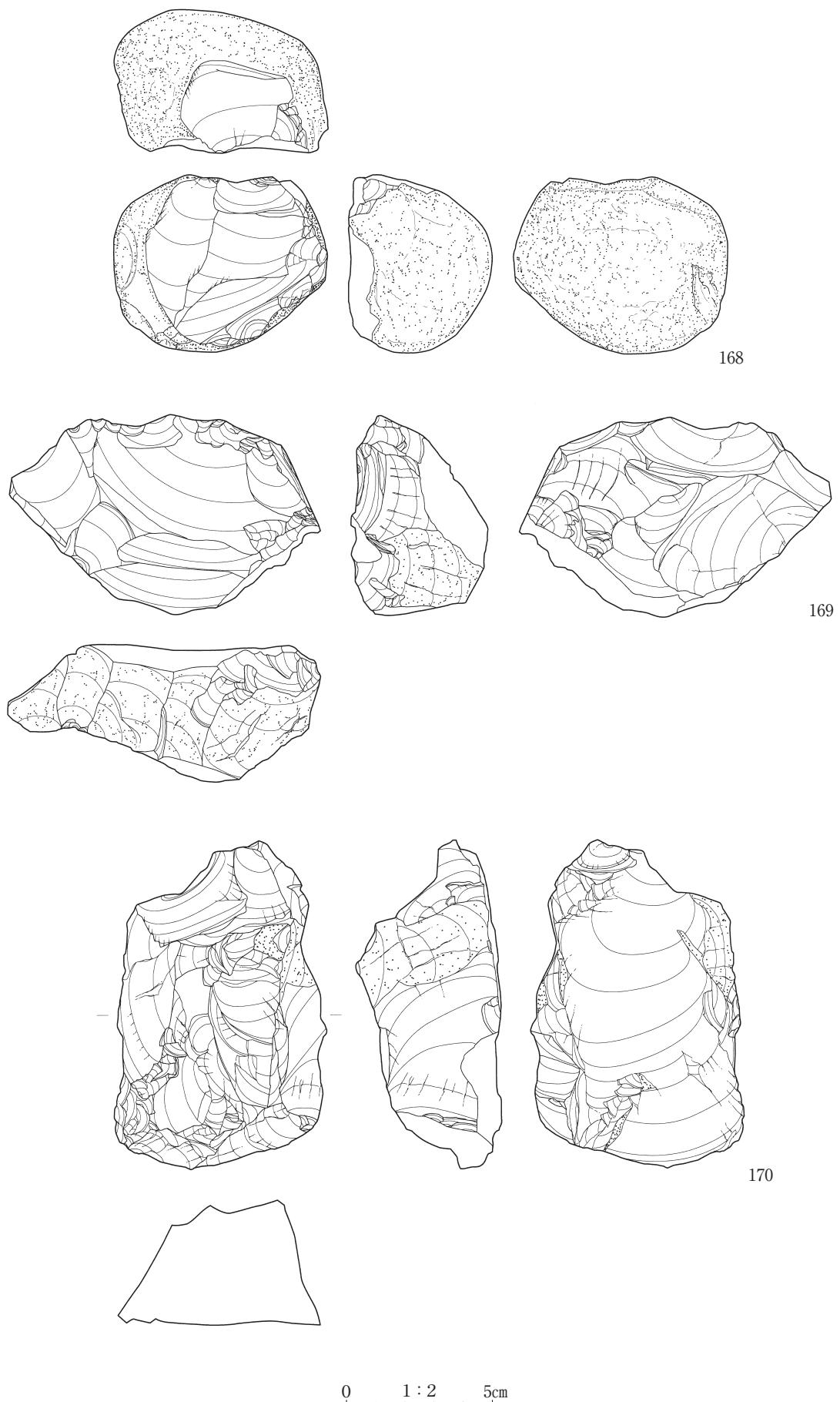
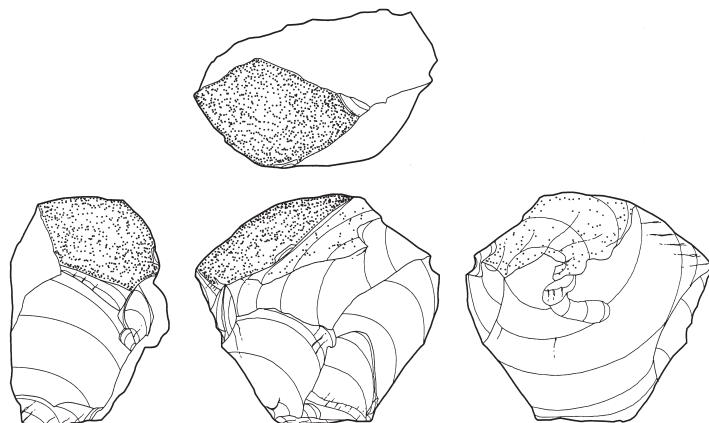
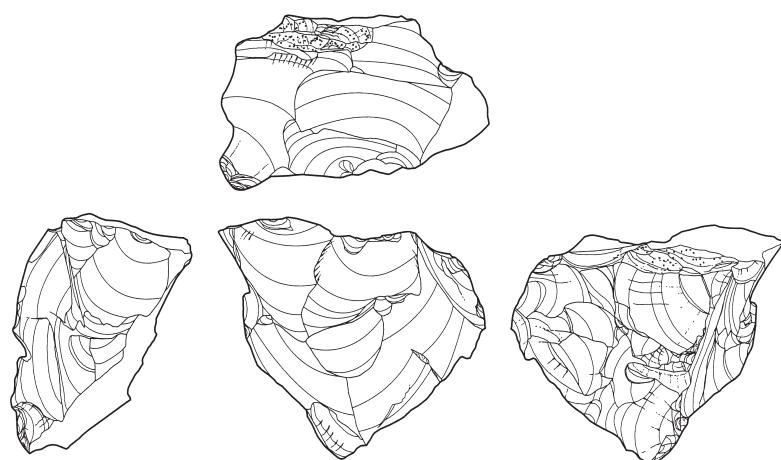


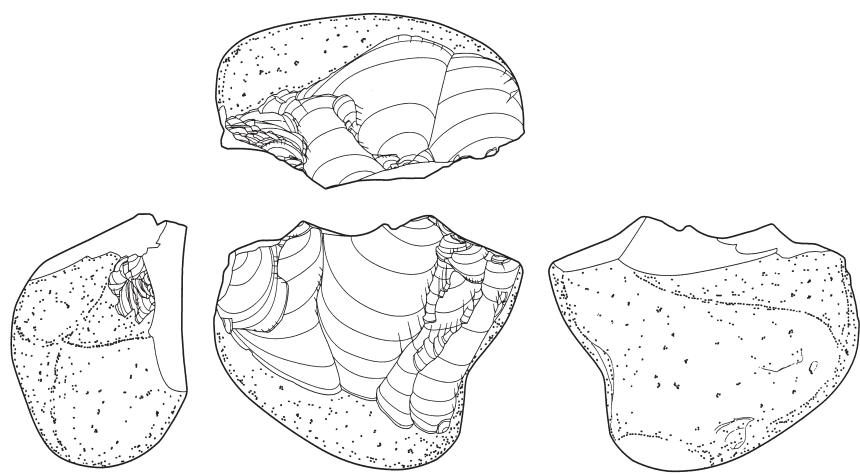
図125 第1号捨て場49



171



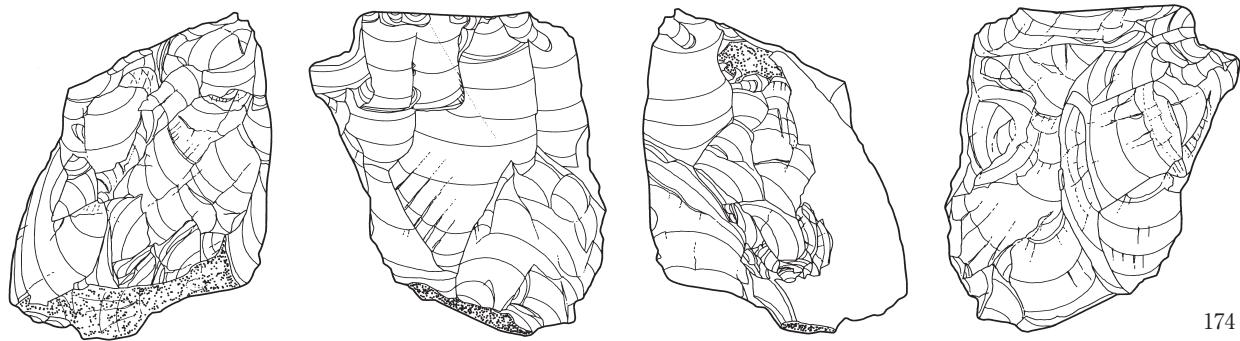
172



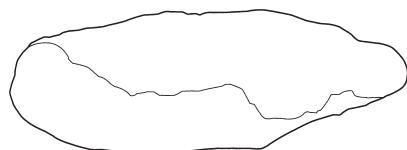
173

0 1 : 3 10cm

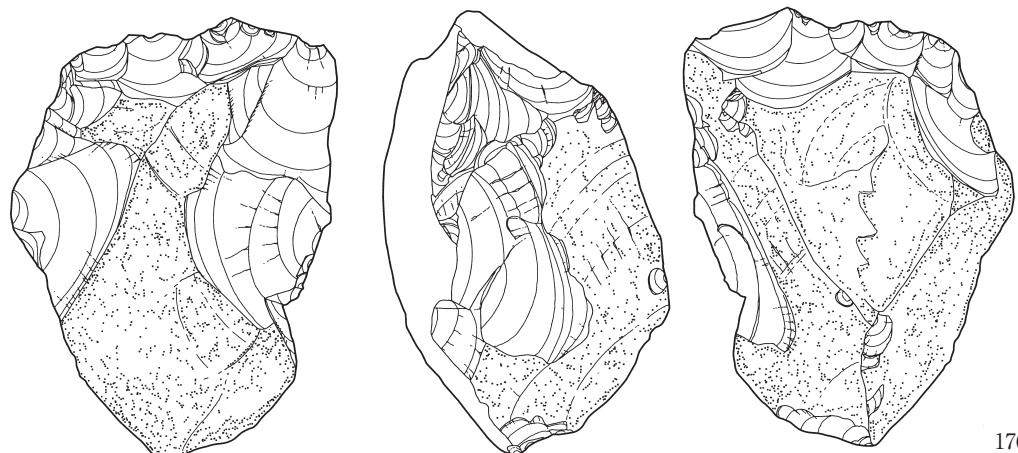
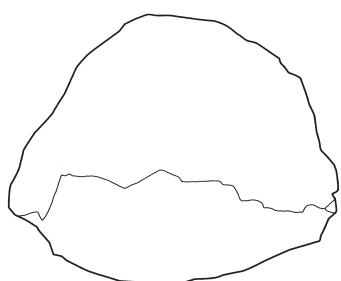
図126 第1号捨て場50



174



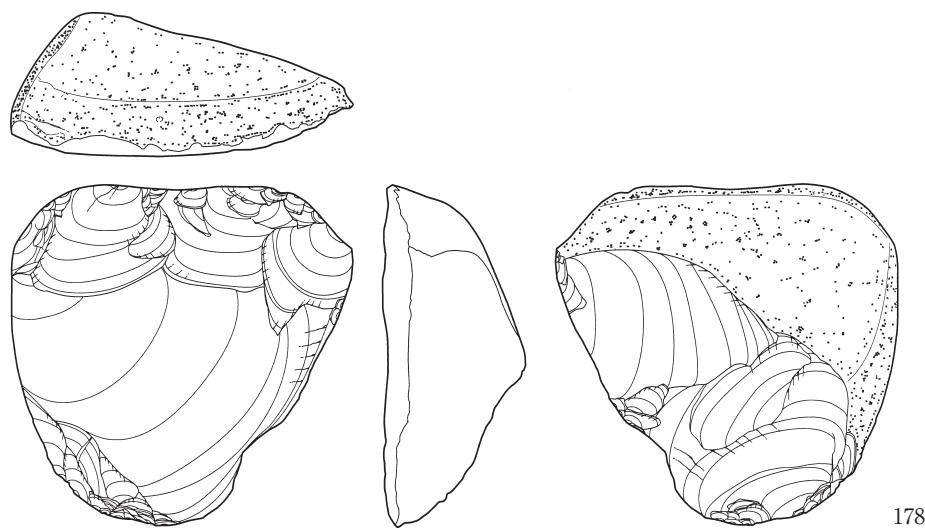
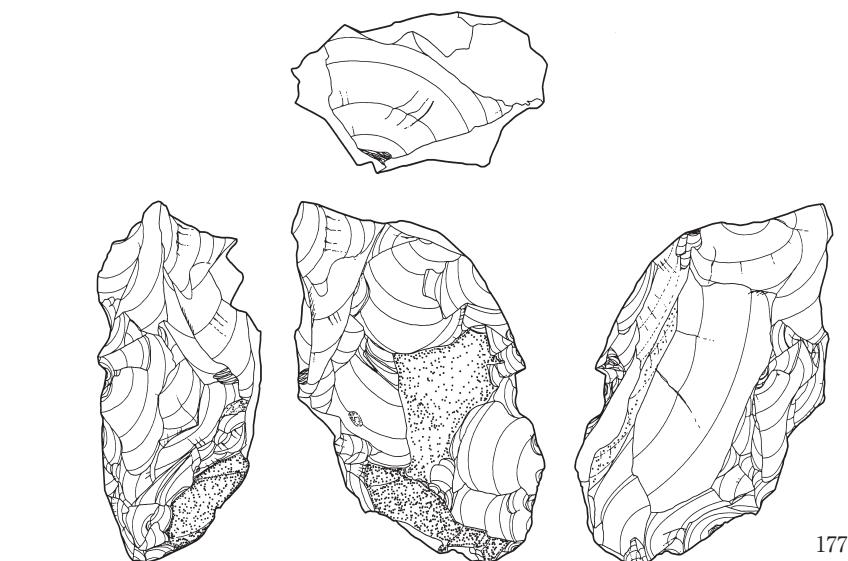
175



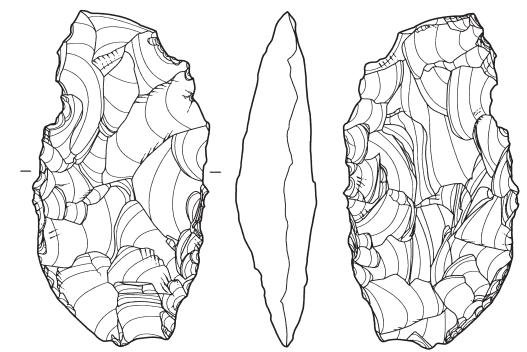
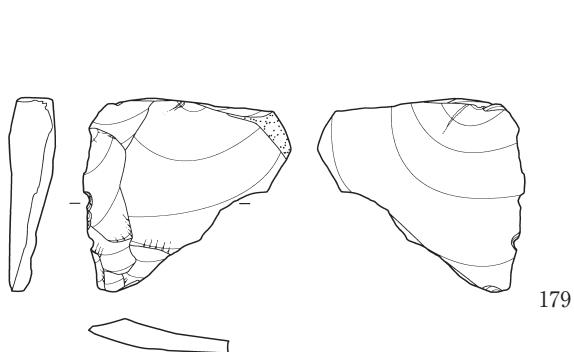
176

0 1 : 3 10cm

図127 第1号捨て場51



0 1 : 4 10cm



0 1 : 2 5cm

図128 第1号捨て場52

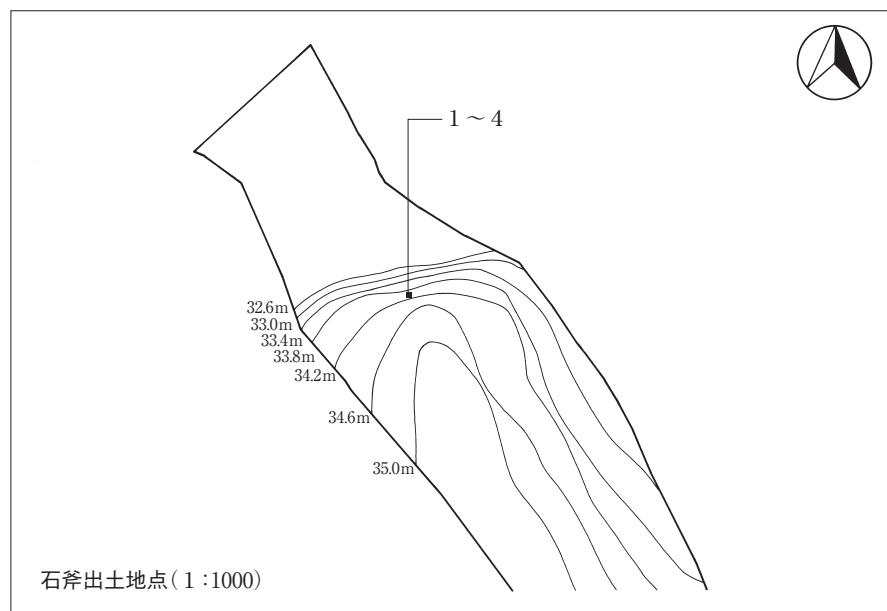
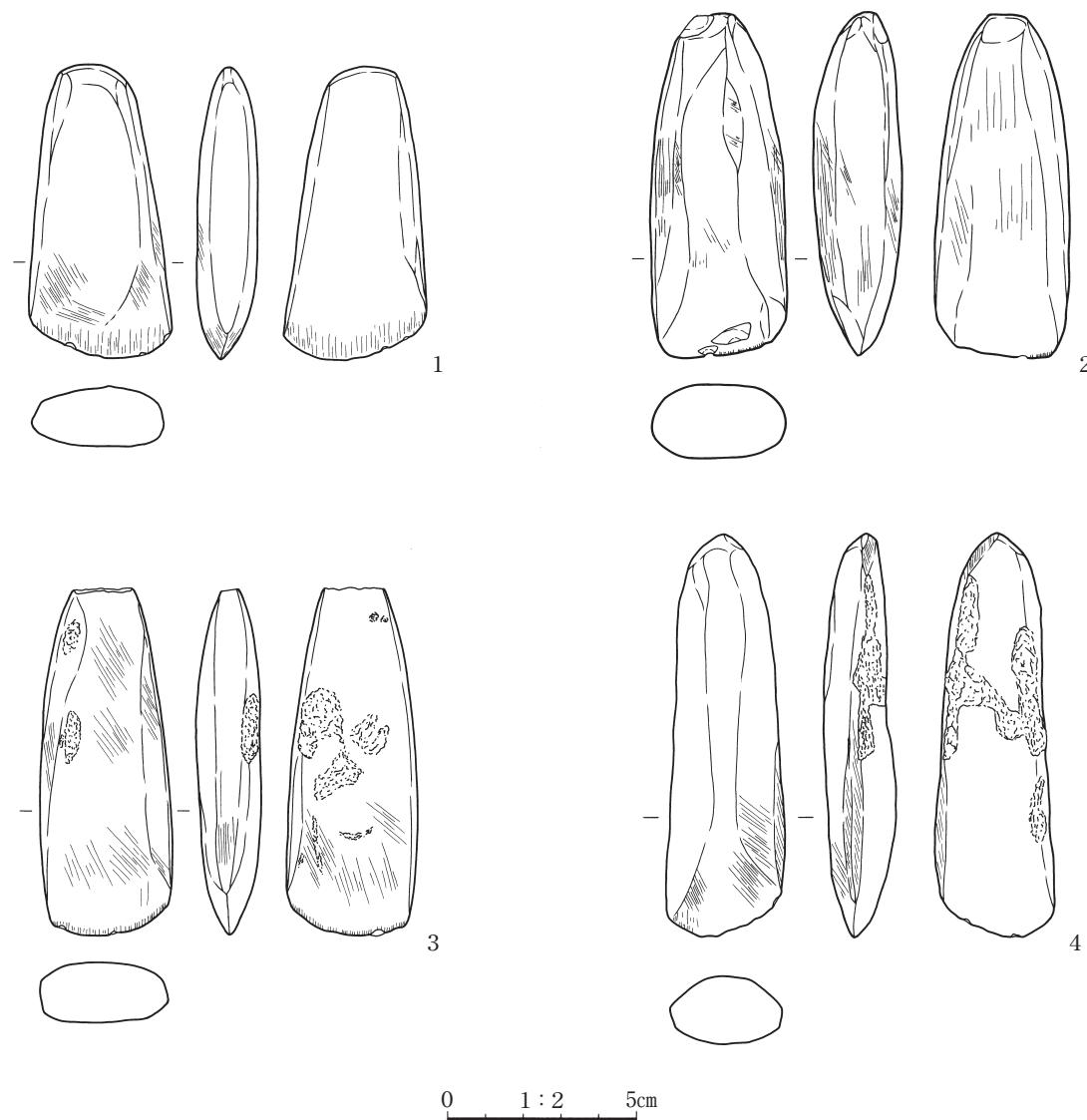


図129 第1号捨て場53



図130 第1号捨て場54

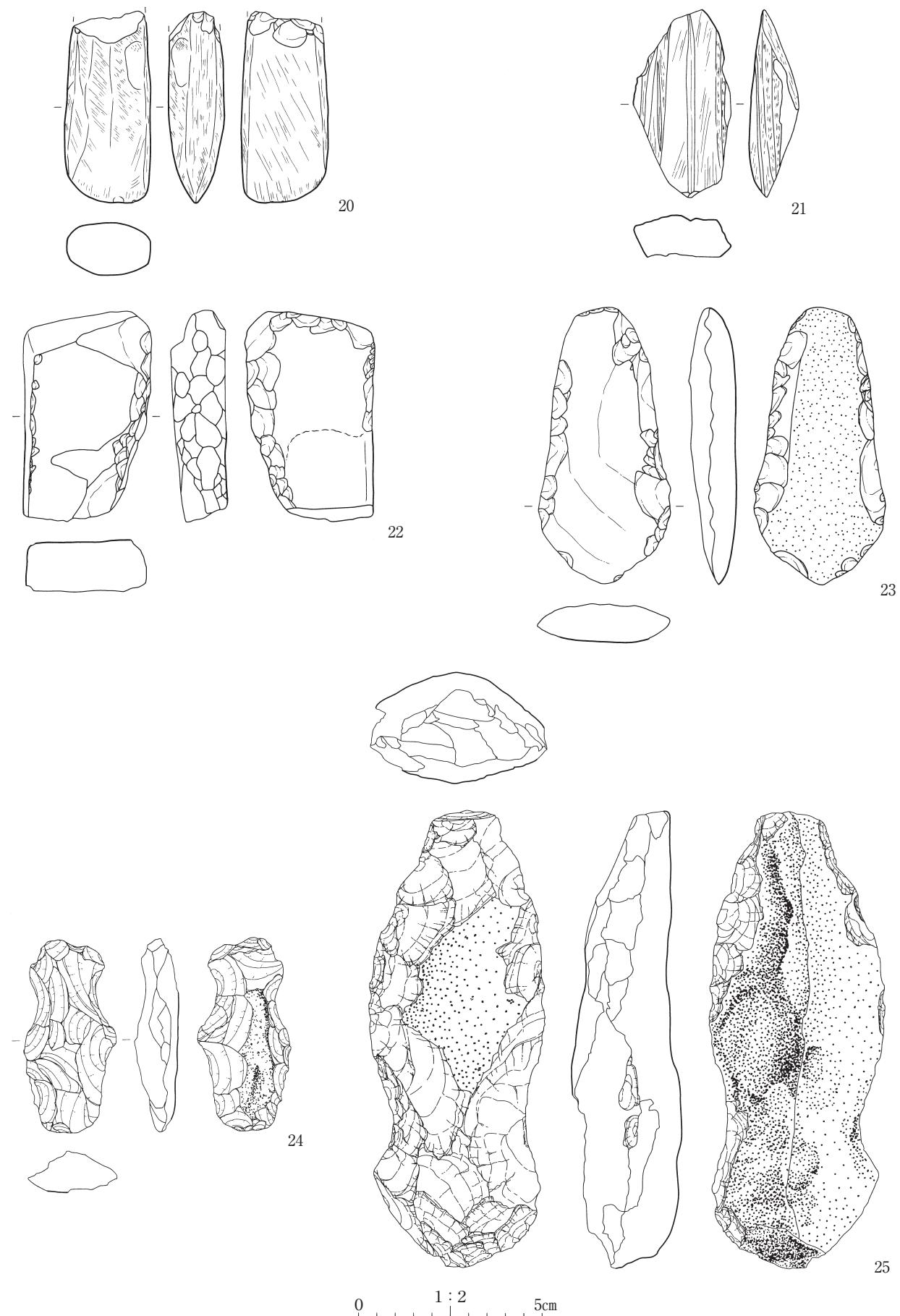


図131 第1号捨て場55

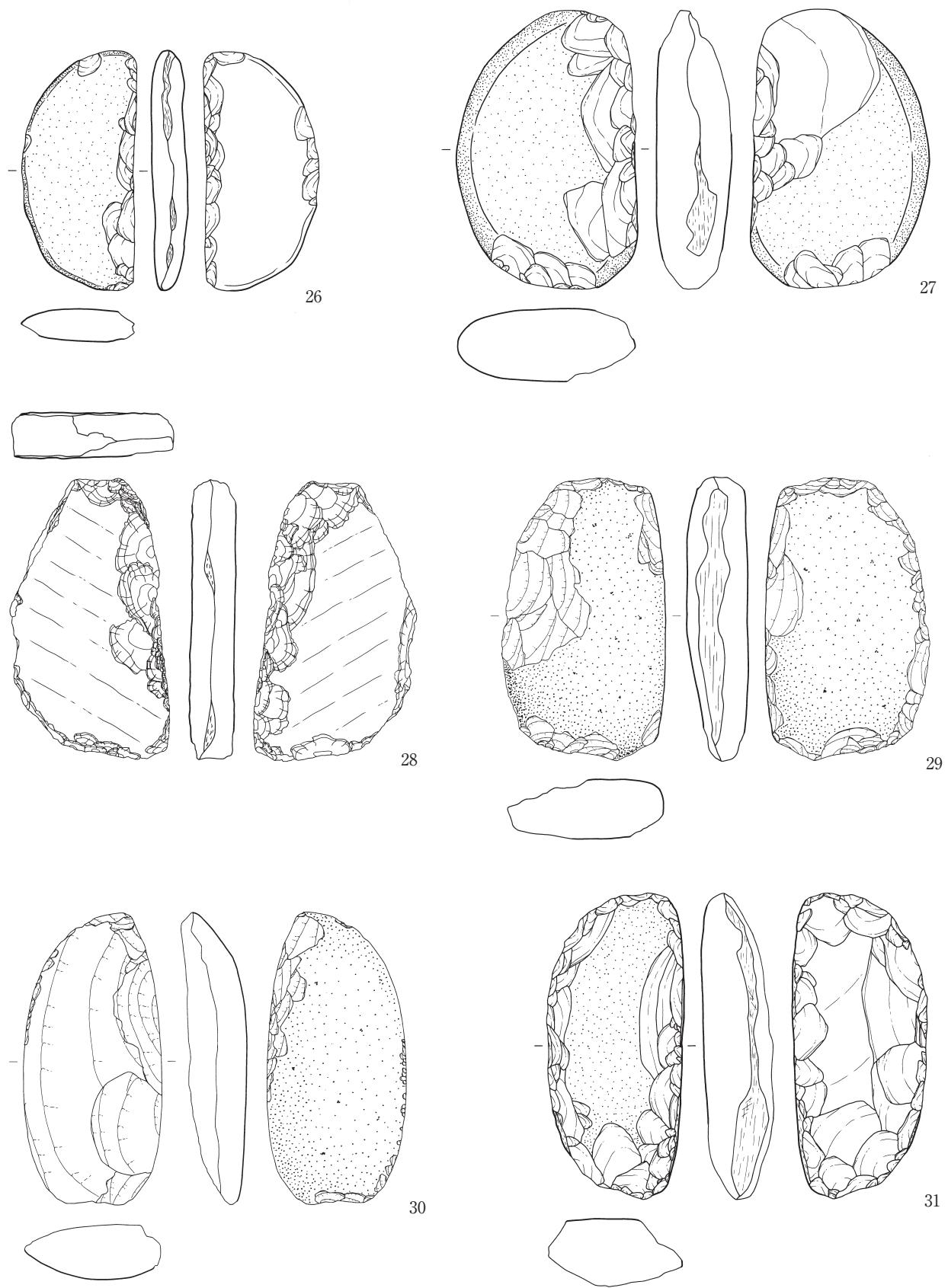


図132 第1号捨て場56